

CONTENTS

- 大学教育センター 運営委員会
- 大学教育総合センター
- 入試部門
- 全学共通教育企画・実施部門
- 教育評価・改善部門
- 専門教育関係連絡調整部門
- 学生生活支援部門
- 就職支援部門
- プロジェクト

岩手大学大学教育総合センター

年次報告

2005-2006

THE ANNUAL REPORT OF UNIVERSITY EDUCATION CENTER,
IWATE UNIVERSITY, 2005-2006



国立大学法人岩手大学
大学教育総合センター
Iwate University : University Education Center

はじめに

大学教育総合センター長
玉 真之介

『 試練 』

大学教育総合センター(平成17年度までは大学教育センター)は、平成16年4月の岩手大学法人化と共に誕生しました。当初、センターに期待されたのは、全学共通教育改革と組織的なFD推進の2つでした。

前者は、平成12年度から全学部担当体制として再出発した全学共通教育を、実施体制の面でも、カリキュラムの面でも、さらに実質化の方向へと前進させることでした。かつての学士課程教育には、教養教育と専門教育に「断絶」がありました。法人化の下で、本学の教育目標である「教養教育と専門教育の調和」を達成するためには、全学共通教育に対する「全学的に共通の関心と責任・協力」の体制が必要だったのです。

しかしそれは、専門教育のみに携わってきた多くの教員には、一方的に教育負担増を強いられるもののように受け取られた観があります。この結果、平成16年度末に提案された改革案(いわゆるVer.3)に対しては、人文社会科学部を除く学部から強い反発が示されました。こうしてセンターは、発足2年目にして大きな試練に直面したのです。

『 全学共通教育改革 』

「教養教育と専門教育の有機的連携」とは、専門教育中心のこれまでの学士課程教育を大学院教育の充実とワンセットで、全学共通教育の比重を高めるものです。これに対して、研究室や卒業研究での専門教育に自負を持つ多くの教員には、そのような改革の必要性があまり感じられなかったのだと思われます。

しかし、それはやはり専門化、細分化が進む研究を優先した発想であり、「学士という学位」に相応しい教育プログラムの提供が課題となる法人化後の大学教育を理解したものとは言えません。学位の質を保証するためには、入学時から一貫した教育カリキュラムが大学全体として有機的に編成される必要があります。

センター運営委員会では、全学共通教育改革案をめぐる議論がほぼ1年半にわたって続けられました。それは、岩手大学において学士課程教育を組み直すための歴史的な改革の過程でした。この年次報告は、それを記録として残すために、平成17年度と18年度を分けずに、運営委員会を中心として重要と思われる文書や議事録を収録しました。

『 組織的なFD 』

FDは、これまで「授業改善」と狭く捉えられているところがありました。センターではこの2年間、法人化後の岩手大学の教育は何を目指すかをテーマに、参加者が小グループに



別れて学部を越えて議論することを中心にFD合宿を実施しました。それは、ワークショップという参加型授業スタイルを体験するという意味も持っていました。

学生アンケートを全学共通教育の授業改善に活かす取組も、教育評価・改善部門によってシステムとして確立され、優秀授業の表彰も定着しました。これからは、学生アンケートの結果を組織的な授業改善に活かす方法の開発が課題となっています。

『大学教育センターの総合化』

平成18年度から大学教育センターは大学教育総合センターへと拡充されました。入試部門、学生生活支援部門、就職支援部門が新たに加わり、6部門の大組織へと生まれ変わりました。縦割りの連携を欠いた委員会方式ではなく、学士課程教育を入口から出口まで有機的に結びついた一貫したものに再構築するという理念に基づいた改組です。

東北大学、山口大学、愛媛大学など先行する大学はありますが、それでも全国的に見れば新しい試みです。入試の情報を教育へ、就職支援の情報を教育へ、学生支援の情報を教育へ。「教育、教育、教育」という大学作りに向けて、センターの3年目の挑戦ははじまりました。ボランティア活動の単位化などは、その最初の成果です。

『センターへの風圧』

運営費交付金が減る、教職員が減る、受験生が減る、という縮小社会の大学にあって、大学教育総合センターは、組織を拡大し、人員を増やしてきました。それに対する風当たりは、かつて概算要求によって設置された留学生センターなどとは比べものにならないほど強いものでした。時にその風圧は専任教員や学務部の職員に直接向かうこともありました。

それに対して、4人の専任教員、副センター長、教育評価・改善部門長、そして学務部職員は、法人化後のセンターに課せられた大きな使命に応えるべく結束して課題に取り組んできました。様々な課題の準備は深夜や土日にまで及ぶこともしばしばでした。センター長として、風圧の壁になり、その辛苦と努力に報いることがどれほどできたか、心許ない限りです。

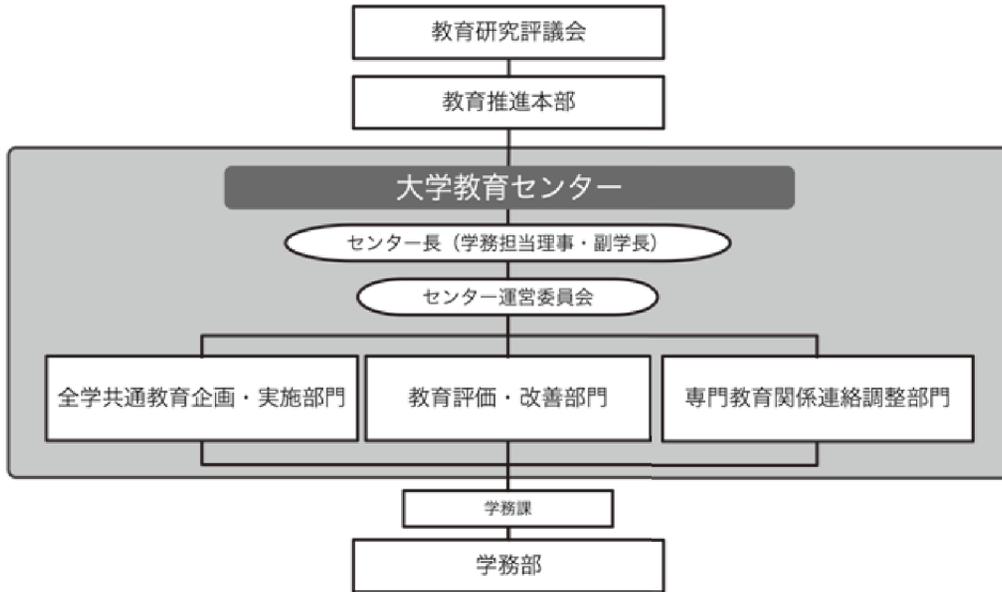
『ESD「学びの銀河」の旗印のもとに』

岩手大学は、ESD「学びの銀河」という旗印を立てました。この評価は、随分先になって定まるものと思います。おそらくその意義は、思春期にある学生が直感的に理解するものと思います。ともかく、この旗印によって、教育という分野における地域連携に岩手大学は取り組むと共に、世界の大学とも積極的に連携を図ることができます。

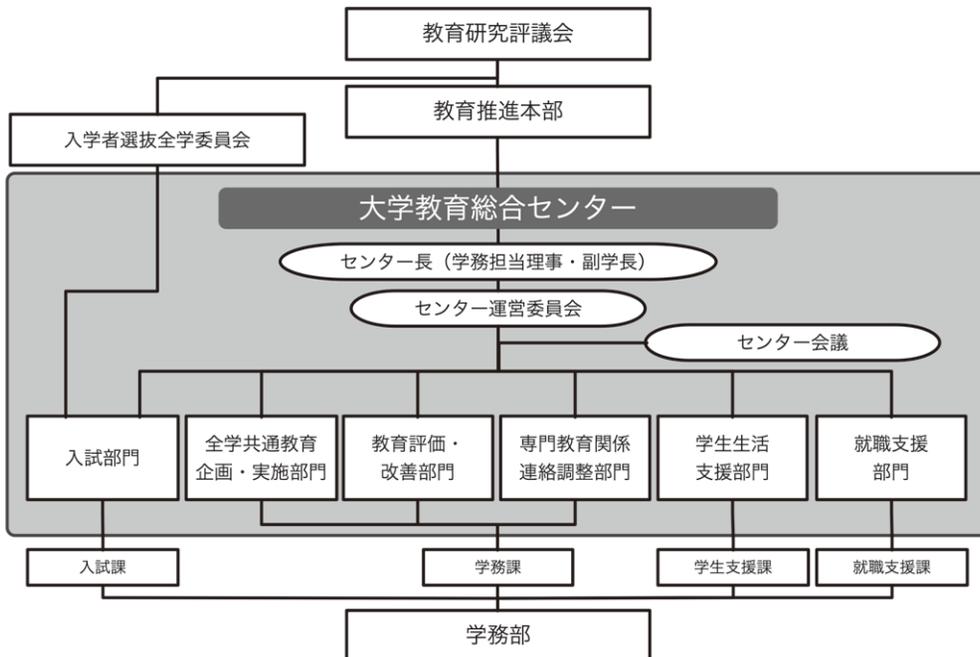
地域に、世界に発信を強め、また中身を作っていく取組に、全力を注ぎたいと思います。

大学教育センターから大学教育総合センターへ

大学教育センター 組織図 (平成16年4月設置)



大学教育総合センター 組織図 (平成18年4月改組)



平成17年度 大学教育センター スタッフ

	氏名	所属
センター長（～6月）	進藤 浩一	理事（学務担当）・副学長
センター長（6月～）	玉 真之介	理事（学務担当）・副学長
副センター長	岡田 仁	人文社会科学部
センター専任教員	江本 理恵	大学教育センター
センター専任教員（10月～）	山崎 憲治	大学教育センター
センター専任教員（10月～）	福永 良浩	大学教育センター
センター専任教員（併）	後藤 尚人	人文社会科学部
	中村 一基	教育学部
	石川 明彦	人文社会科学部

平成17年度 大学教育センター運営委員会

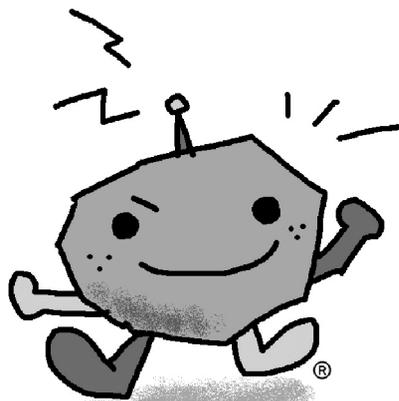
	氏名	所属
センター長（～6月）	進藤 浩一	大学教育センター
センター長（6月～）	玉 真之介	大学教育センター
副センター長	岡田 仁	大学教育センター
部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
	中村 一基	教育評価・改善部門
センター専任教員	江本 理恵	大学教育センター
センター専任教員（10月～）	山崎 憲治	大学教育センター
センター専任教員（10月～）	福永 良浩	大学教育センター
センター専任教員（併）	後藤 尚人	大学教育センター
副学部長	高塚 龍之	人文社会科学部
	村上 祐	教育学部
	長谷川 正之	工学部
	木村 伸男	農学部
教務関係委員長	吉村 泰樹	人文社会科学部
	長澤 由喜子	教育学部
	渡邊 孝志	工学部
	谷口 和之	農学部
全学共通教育企画・実施部門選出教員	小林 睦	
教育評価・改善部門選出教員	高橋 壽太郎	
学務部長	畑中 文穂	
（オブザーバー）	石川 明彦	大学教育センター

平成18年度 大学教育総合センター スタッフ

	氏名	所属
センター長	玉 真之介	理事(学務担当)・副学長
副センター長・ 全学共通教育企画・実施部門部門長	岡田 仁	人文社会科学部
教育評価・改善部門部門長	後藤 尚人	人文社会科学部
センター専任教員	山崎 憲治	全学共通教育企画・実施部門
	永野 拓矢	入試部門
	江本 理恵	教育評価・改善部門
	福永 良浩	教育評価・改善部門

平成18年度 大学教育総合センター 運営委員会

	氏名	所属
センター長	玉 真之介	大学教育総合センター
副センター長	岡田 仁	大学教育総合センター
部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
	後藤 尚人	教育評価・改善部門
副学部長	井上 博夫	人文社会科学部
	村上 祐	教育学部
	長谷川 正之	工学部
	高畑 義人	農学部
教務関係委員長	吉村 泰樹	人文社会科学部
	押切 源一	教育学部
	成田 榮一	工学部
	谷口 和之	農学部
学務部長	畑中 文穂	学務部
(オブザーバー)	山崎 憲治	大学教育総合センター
	永野 拓矢	大学教育総合センター
	江本 理恵	大学教育総合センター
	福永 良浩	大学教育総合センター



がんちゃん

目次

□はじめに	
□大学教育センター	
大学教育総合センター 運営委員会	001
全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案 (v.3)	003
全学共通教育に関する現状打開に向けた基本方針	024
岩手大学における全学共通教育の理念と特色 (1次案)	025
学士課程教育に関する考え方のメモ	029
大学総合教育センター構想 (案)	031
転換教育科目の教育目標と区分・位置づけについて	033
転換教育の区分変更について (メモ)	034
教育の個性化、教育力向上のためのアクションプラン作成について	035
「全学共通教育の更なる発展に向けて：改革骨子案 (v.3)」の審議経過と合意事項 (メモ)	037
全学共通教育の充実・発展に向けて：改革実施案	040
高大連携に基づく「自主的な学び」を応援する学習支援講座 (案)	058
国際的人材育成に向けた外国語教育の総合的充実について (案)	059
ボランティア活動の単位化について (案)	060
□資料 運営委員会 会議録	061
□入試部門	123
平成 18 年度活動報告	125
□全学共通教育企画・実施部門	131
平成 17・18 年度活動報告	134
新分科会登録における Q & A	138
新分科会の任務	146
分科会教育目標及び成績評価基準のガイドライン	147
「オムニバス方式の学際的な授業科目における講義間の密接な連携」について (案)	160
転換教育実施にあたってのガイドライン	161
□教育評価・改善部門	163
教育目標等の整備と成績評価基準のガイドライン作成	165
全学共通教育科目学生による授業アンケート	176
FD 合宿研修会	223
全学共通教育授業科目授業公開	239

講演会・講習会・研究会の実施	243
東北地区大学教育支援施設等交流会議	245
□ 専門教育関係連絡調整部門	247
平成 17・18 年度活動報告	249
成績評価への「秀」の導入について(提案)	251
履修科目登録上限単位の見直しについて	253
成績評価基準のガイドライン作成について	254
一般(共通)教育等担当教員数の推移について(案)	257
□ 学生生活支援部門	265
平成 18 年度活動報告	267
平成 18 年度「Let's びぎん プロジェクト」採択一覧	268
岩手大学学生表彰被表彰候補者推薦名簿	271
□ 就職支援部門	275
平成 18 年度活動報告	277
□ プロジェクト	281
岩手大学と放送大学との間における単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト	283
I ⁿ Assistant / アイアシスタント	290
入学前教育の実施 / プレ・アイアシスタント	304



**大学教育センター
大学教育総合センター
運営委員会**

全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案 (v.3)

本学では、どの学部の学生にも、岩手大学の学生として共通に必要な学識と教養を養うために、全学共通教育を設けています。

この全学共通教育の実施に当たっては、これまででも担当教員の不断の努力により、堅実なる成果が挙げられてきたことは言うまでもありません。しかしながら、現行の教育体制・プログラムには少なからず問題点が見受けられるのも事実です。例えば、平成 12 年度的全学共通教育改革の趣旨からみた問題点として、また大学評価・学位授与機構による『「教養教育」評価報告書』に基づく課題として、教養教育の理念と目標への認知不足や、科目別授業担当登録教員による組織の編成、教養教育の高年次履修の強化などがあげられています。さらに、来るべき全入時代への対応等を視野に入れば、キャリアアップ関連科目の補充なども重要な課題となるでしょう。

それらの問題点の解消と、中期計画に定められた目標を達成するための措置を実行するため、大学教育センターでは、平成 18 年度から新たな体制での全学共通教育の運営をめざし、全学共通教育企画・実施部門を中心に（センタースタッフ&兼務教員で）対応策を検討してきました。

このたび、以下のような改革骨子案をまとめましたので、各学部においてご検討いただき、ご意見を承りたく存じます。

全学共通教育をより充実させるため、教員各位のご理解とご協力をお願いいたします。

改革骨子案

【問題点と課題】

- A 平成 12 年度全学共通教育改革の趣旨からみた問題点
- B 大学評価・学位授与機構『「教養教育」評価報告書』に基づく課題
- C グローバル化・ユニバーサル化時代に向けた対応
- D 中期計画における全学共通教育

【改革のポイント】

- 0 全学共通教育とその問題点
- 1 岩手大学全学共通教育の区分
- 2 岩手大学全学共通教育の意義と特色
- 3 全学共通教育の実施体制
- 4 分科会の構成および役割の変更
- 5 自己啓発プログラム（仮称）の新設
- 6 学士課程を貫く自由単位
- 7 外国語教育の強化
- 8 健康・スポーツ科目の授業内容と教育目標
- 9 情報科目における単位の早期認定
- 10 環境教育科目の区分変更
- 11 オムニバス方式を採用する科目の留意点
- 12 教養教育と専門教育の位置づけ
- 13 教養科目の純化と指針
- 14 教養科目の補強と拡充
- 15 全学共通教育科目の開講年次
- 16 時間割

【問題点と課題】

A 平成12年度全学共通教育改革の趣旨からみた問題点

◇平成12年度的全学共通教育改革の趣旨は、「全学の関心と責任・協力のもとに[全学]共通教育が展開されるような体制を作り上げていくこと」にあった。そして、「全学の関心と責任・協力」のために、「教養教育の理念と教育目標に基づくカリキュラム改編」と「全学出動体制の確立」が要請され、改革はこの両面において行なわれた。

*しかしながら、以下のような問題が生じている。

[教養教育の理念と目標の明示化に基づくカリキュラム再編に関する問題点]

*教養教育の理念と目標が明示されたにもかかわらず、その認知状況が学生のみならず教員においても芳しくない。

*授業目標がカリキュラム再編の趣旨を踏まえずに設定されているケースが極めて多い。

*教養教育に対する軽視の風潮の払拭の一助として期待される、高年次履修用の教養教育の授業科目が開設されていない。

[全学出動体制の確立の面における問題点]

*全学共通教育の全学実施体制としてスタートした「責任 / 補完 / 協力部局制」が、「全学の関心と責任・協力」の観点に照らして見る限り、必ずしも所期の目標を達成していない。

*教養教育に対する軽視の風潮が依然として払拭されておらず、教養教育に対する「全学の関心」が教員および学生の双方において低調である。

B 大学評価・学位授与機構『「教養教育」評価報告書』に基づく課題

◇平成15年3月の大学評価・授与機構による『「教養教育」評価報告書』（平成12年度着手継続分 全学テーマ別評価）に基づく今後の主な（全学共通教育企画・実施部門に関する）課題として、以下の項目が挙げられる。

[実施体制等に関する課題]

*教養教育の実施組織に関しては、大学教育センターの新設を契機に、「全学の共通の関心・責任・協力」に基づく教養教育にふさわしい全学実施体制の発展をめざして、科目別授業担当登録教員による組織を編成し、その実質化を図る。

*また、「全学の共通の関心・責任・協力」に基づく教養教育の実施のための方途の一つとして、本学の教員の採用時の調書に「教養教育担当科目」を記載する。

*さらに、教養教育の目的および目標の周知・公表に関しては、入学時における教養教育の全体的説明に加え、各授業ごとに教養教育の目的・目標とそれぞれの授業科目の目標等の関係を十分に説明すると共に、大学教育センターの全学共通教育企画・実施部門の専任教員を中心とした「広報編集兼HP作成室」が積極的に教養教育の目的および目標の周知・公表に取り組む。

[教育課程の編成に関する課題]

*教育課程の編成に関しては、本学における教養教育の高年次履修の意義を再確認した上で、その意義にふさわしい授業科目を開設し、高年次履修のための開講コマ数の増強を図る。

[教育方法に関する課題]

- * 授業形態および学習指導方等に関しては、オムニバス方式による授業科目（総合科目、環境教育科目）における授業担当教員間の一層密接な連携を図る。

[教養教育に対する考えに関する課題]

- * 大学の教養教育に対する軽視の風潮そのものが衰退しない限り、教養教育の意義や理念がいかに制度的に明確になっても、大学における教養教育のための各種改革の取組みは成果が上がらないだけに、そのような風潮への対処はなによりも重要な課題である。

C グローバル化・ユニバーサル化時代に向けた対応

◇大学審議会ならびに中央教育審議会における近年の各答申〔「21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）－競争的環境の中で個性が輝く大学－」（1998：H10.10.26）、「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について（答申）」（2000：H12.11.22）、「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」（2002：H14.2.21）〕や、社会から求められている大学での人材育成の在り方等を勘案すれば、以下の対応が不可欠である。

[課題探究能力の育成と大学教育の個性化への対応]

- * 課題探究能力（主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力）の育成を重視したカリキュラムの工夫・改善を行なう必要がある。
- * 教養教育と専門教育との有機的連携を図りつつ、全学共通教育の編成を通して岩手大学の特色を打ち出す必要がある。

[グローバル化時代への対応]

- * 国際的視野に立ち、グローバル・スタンダードの環境下で活躍する人材育成の観点から、外国語によるコミュニケーション能力（外国語を聞く力や話す力の一層の向上を図るとともに、外国語で討論したりプレゼンテーションを行ったりできる能力）の強化が求められている。

[現代的諸問題への対応]

- * 新しい時代に求められる教養という観点から、個人と社会との関わり、情報化や環境問題への対応、自己アイデンティティの確立などを重視する。
- * 現代社会の「激しい変化にも対応し得る統合された知の基盤」を与える教育、「専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養」といった現代的教養教育を実施するため、教養教育に携わる教員には高い力量が求められているという認識を共有する必要がある。

[社会から求められる人材像への対応]

- * 社会から求められているのは、概ね、自己責任の下に主体的に行動し、豊かな人間性と創造力を備え、リーダーシップが発揮できる、コミュニケーション能力に優れた人材であり、全学共通教育においては、そうした人材の育成に対応する必要がある。
- * また、職業に対する意識、プロ意識（「しっかりとした職業観、自己責任の観念、アカウントビリティ、高い倫理観」）を養うため、キャリアアップに関する対応も、ユニバーサル化時代に向けた取組として、今後はさらに重要になる。

D 中期計画における全学共通教育（全学共通教育企画・実施部門関連のみ転記）

I 中期計画の期間および教育研究上の基本組織（…）

II 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 教育に関する目標を達成するための措置

幅広く深い教養と基礎学力を有し高い専門性を備えた人材育成が本学の最大の責務であることを構成員に周知徹底する。

（1）教育の成果に関する目標を達成するための措置

[学士課程]

1) 教養教育と基礎教育の成果に関する具体的目標の設定

- ①全学共通教育（教養教育及び共通基礎教育）の理念・目標を周知徹底する。
- ②広範な学問諸分野の授業科目及び学際的・総合的な授業科目を開設するとともに、放送大学を積極的に活用することにより、多様な授業の選択肢を提供する。
- ③基礎ゼミ等の転換教育を全学的に実施する。
- ④「国際的コミュニケーション能力」充実のため TOEFL 等の外部評価テストを利用する。
- ⑤高年次教養教育にも配慮しながら授業科目の履修年次を適切に配当する。
- ⑥新学習指導要領による教育を受けた学生に合う情報リテラシー教育の体制を検討し整備する。
- ⑦（…）
- ⑧上記の計画を効率よく進め継続的に教養教育の質を維持するための中心的役割を大学教育センターが担う。

2) ～ 3) （…）

[大学院課程] （…）

（2）教育内容等に関する目標を達成するための措置

[学士課程]

1) （…）

2) 教育理念等に応じた教育課程を編成するための具体的方策

- ①教育目標に見合った教育課程と授業科目の内容的な一貫性の実現に努める。
- ②転換教育、教養教育、基礎教育及び専門教育の特質を踏まえて教育課程を有機的に編成する。

③ Semester制を導入する。

④ (...)

3) 授業形態、学習指導法等に関する具体的方策

① ～ ③ (...)

④ オムニバス方式の学際的な授業科目における講義間の密接な連携を図る。

⑤ 適正規模の講義クラスを実現するとともに、双方向的な授業を工夫する。

⑥ 実験・実習・演習等でTAを積極的に活用する。

4) 適切な成績評価等の実施に関する具体的方策

① ～ ③ (...)

④ ボランティア等課外活動の単位化を検討する。

⑤ (...)

[大学院課程] (...)

(3) 教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置

① 教養教育と共通基礎教育は全学共通教育として全教員担当体制の下に実施し、専門基礎教育と専門教育は各学部開設科目で実施する。

② 大学教育センターに教職員を配置し、全学共通教育企画・実施部門、教育評価・改善部門及び専門教育関係連絡調整部門を設ける。

1) ～ 6) (...)

(4) (...)

2 研究に関する目標を達成するための措置 (...)

3 その他の目標を達成するための措置

(1) 社会との連携、国際交流等に関する目標を達成するための措置

1) 地域社会等との連携・協力、社会サービス等に係る具体的方策

① ～ ③ (...)

④ 高大連携事業の一環として高校生を受け入れるための授業科目を開設する。

⑤ ～ ⑦ (...)

2) ～ 7) (...)

(2) (...)

III ～ XI (...)

【改革のポイント】

0 全学共通教育とその問題点

[主な問題点：上掲A B C Dから]

- *教養教育の理念と目標の認知と周知
- *教養教育の高年次開講
- *教養教育軽視の風潮
- *科目別授業担当教員による組織作り
- *課題探究能力の育成
- *個性が輝く大学教育
- *外国語能力の強化
- *現代的教養のあり方
- *人間力、社会力の養成
- *転換教育、教養教育、基礎教育及び専門教育の有機的編成
- *オムニバス方式による授業科目担当者間の連携
- *講義クラスの適正規模の実現
- *全教員体制の確立

[対応]

- ❖ 上記の問題点を全教員が認識・理解し、共通の関心・責任・協力のもとに全学共通教育を実施する必要がある。
- * 大学設置基準の大綱化（平成3年）以降、その趣旨に則した一貫教育という観点や、全学的に共通の関心と責任・協力のもとで教養教育を実施するという観点から見れば、平成12年度の本学全学共通教育の改革は全国的には出遅れた「後発」ケースであった。
- * それゆえ、平成12年度の改組によって、全学共通教育が整備され、教育内容の充実、教養教育の理念や教育目標の明文化、全学担当体制が形成されたことは大きな成果であったものの、上述のような問題が残されているのも事実であり、それらの問題を解消すべく、今後とも改革を続けて行く必要がある。
- * とりわけ平成12年度の改組以降にクローズアップされてきた諸課題（参照：p.3「C グローバル化・ユニバーサル化時代に向けた対応」）に対応するには、学士課程教育における全学共通教育の比重がさらに重みを増すことになり、こうした状況を認識した上で、全学レベルでの合意形成がなされる必要がある。
- * 全学の合意により平成16年4月に発足した大学教育センターは、非力ながらも全学的観点から、全学共通教育の充実と発展を担う責任母体として、全学に向けて改革案を提示し、改革を実行して行く任務を負っている。
- * その際、大学教育センターからの提案は、トップダウン的性格を有するものではなく、様々な意見の調整と合意形成をなしつつ、岩手大学の教育力の向上と人材育成に寄与し得るものであらねばならない。
- * 平成3年の大学審議会の答申は、「一般教育の理念・目標はきわめて重要であるとの認識に立ち、それぞれの大学において、(...)、この理念・目標の実現のための真剣な努力・工夫がなされることを期待すると共に、この点について大学人の見識を信ずるものである」と述べ、大学設置基準の大綱化を提案した。
- * われわれの提案も、大学人の見識に基づいた議論を経て、合意が形成されてゆくものと信じている。

1 岩手大学全学共通教育の区分

[現行の問題点]

- *中期計画には教育目的別観点から見た学士課程における教育区分がカテゴライズされているが、それらを実施体制という観点から見るとどのようになるのか、また、全学共通教育との関係はどのようになるのか、授業担当者においても、教育区分が共通に理解されているとは限らない。
- *また、「全学共通教育」と「教養教育」は、一般的に同義語として用いられる場合もあるが、本学における「教養教育」は、全学共通教育の一部であり、全学共通教育の他の教育区分とは明確に区別されねばならないにも関わらず、それらの使い分けには混乱も生じている。

[対応]

- ❖ 岩手大学における教育科目の区分、名称や概念を整理する必要がある。
- *もとより本学の全学共通教育は、大学教育においては不可欠であるという全学合意によって設置され、岩手大学の学生であれば、どの学部にも所属していても、必ず修得しておかねばならない学識と教養を養うために、「全学共通の関心、責任、協力のもとに、全学部の教員による全学担当体制を組織して」、実施されている。
- *その内訳は、
 - 教育目的別観点から、「基礎教育」と「教養教育」とに大別され、
 - 実施体制別観点からは、「共通基礎科目」と「教養科目」と呼ばれている。
- *したがって、狭義における「教養教育」とは全学共通教育の一部を示す用法であり、「全学共通教育」と同等の意味で用いられる広義の用法とは区別される。
- *また、「共通基礎科目」とは、それが専門教育にも教養教育にも資する基礎科目であることを示している。
- *それらを岩手大学の教育全体の枠内に位置づければ、以下のように区分される。

【岩手大学教育科目区分表：太字枠内が全学共通教育】

教育目的別 実施体制別		転換教育	基礎教育	教養教育	専門教育
		全学共通教育科目	∅	共通基礎科目	教養科目
各学部 開設科目	人文社会科学部	基礎ゼミ	コース基礎科目	∅	【省略】
	教育学部	初期ゼミ	専門基礎科目	∅	【省略】
	工学部	(H 18 年度から 開設予定)	専門基礎科目	∅	【省略】
	農学部	(H 18 年度から 開設予定)	専門基礎科目	∅	【省略】

- * 上の表の黒枠太線で囲まれた部分が全学共通教育科目であり、具体的には、全学共通で行われている共通基礎科目（外国語科目、健康・スポーツ科目、情報科目）と教養科目（「人間と文化」「人間と社会」「人間と自然」「総合科目」「環境教育科目」）を示す。
- * 共通基礎科目と教養科目以外の科目、例えば、転換教育として行われる「基礎ゼミ」または「初期ゼミ」や、基礎教育として学部別に行われる「専門基礎科目」（←平成12年度の改組以降、学部専門科目として位置づけられている）、および専門教育の各種科目等は、全学共通教育科目ではない。
- * ところで、全学共通教育における「共通」という概念は、
 - 教育上の用法として、岩手大学の全学部の学生に「共通」に必要な学識と教養を養うという意味で用いられ、
 - また同時に
 - 実施体制上の用法として、全学の「共通」の関心、責任、協力のもとに実施するという意味でも用いられている。
- * 後述するように、平成18年度から、実施体制上の用法に関しては一部修正し、
 - 全教員の「共通」の関心、責任、協力のもとに実施するという意味で理解したい。

2 岩手大学全学共通教育の意義と特色

[現行の問題点]

- * 本学においては、教養教育の理念、教養科目の教育目標、共通基礎科目の教育目標は整備されているものの、全学共通教育レベルに関しては明文化されたものがない。
- * そのため、教養教育の理念が、時に全学共通教育の理念として代用されるなど、教養教育と全学共通教育との混同が少なからず生じている。
- * 全学共通教育をどのように実施しているかによって、その大学の個性や見識が浮き彫りにされると言われているが、本学においては、全方位的な教養教育の理念が前面に出ているため、岩手大学としての全学共通教育の特色や意義が意識されないままになっている。

[対応]

- ❖ **岩手大学全学共通教育の特色と意義を明確にする必要がある。**
- * 岩手大学の教養教育の理念は、平成12年度の大学改組の折りに、「大学設置基準第19条第2項」（1991）を引用して、
 - 幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養すること、と定められている。
- * この定義は、日本の大学すべての教養教育に関する共通理念であるため、どの分野にも隔たりのない全方位的性格を持っている。
- * この理念自体に問題があるわけではないが、その教養教育の理念が、岩手大学の全学共通教育の理念と混同されると、全学共通教育を実施するに際しても、全方位的性格が強調され、結果として、岩手大学らしさは現れない。
- * そこで、教養教育の理念とは別に、本学における全学共通教育の意義を明確にし、岩手大学らしさを強調することが、平成10年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）— 競争的環境の中で個性が輝く大学 —」でも強く求められ

ているように、大学の個性・特色を示す上で重要になる。

- * ここで全学共通教育の「理念」ではなく「意義」としたのは、全学共通教育とは、あくまで全学部の学生への共通教育という実施体制からみた概念であり、教育内容そのものを規定する概念ではないため、理念という用語はなじまないと判断したことによる。
- * ところで総合大学の個性は全学共通教育の取り組みにおいて浮き彫りにされる。学部ごとの専門教育に見られる特色ではなく、全学を貫く教育への姿勢・見識が問われるからである。
- * 例えば、北海道大学における《開拓精神》や、広島大学での《平和教育》は、それぞれの大学にとっていわば理想に関わる要素として不可欠となっている。
- * そうした要素を岩手大学に見出すとすれば、キーワードになるのは《イーハトーブ》であり、そこからは「人間と自然が共生する豊かな世界」というイメージが浮かんでくる。
- * こうした《理想郷》が描かれるのは、厳しい東北の自然に人々が苦しめられてきたという背景のもと、農業改革等の技術的側面と、文学という心的側面から、現実を乗り越え、より豊かな来るべき未来の構築を宮沢賢治が目指していたからであろう。
- * これらの要素を岩手大学の全学共通教育に取り入れるとするなら、現行の教養教育で強調されている人間と文化、社会、自然に加えて、われわれをとりまく自然環境、テクノロジー、人間性と知的活動という概念が重要になり、それらを勘案しつつ岩手大学における全学共通教育の方向性を定めていくことが妥当だと思われる。
- * その際、特色とされる部分を全学共通教育のどの教育科目が担うかについては、個別の教育・教育科目分野に限定されるということではなく、科目内容や、科目の実施形態をはじめ、育成すべき人材のイメージ等において、全体として岩手大学らしさが浮き彫りにできれば十分であろう。
- * つまり、全学共通教育のプログラムレベル全体で岩手大学における全学共通教育の特色が示されればよく、個々の授業科目ごとに岩手大学らしさを要求するわけではない。
- * そのような考えに立脚し、本学の全学共通教育を「来るべき未来の住人となる健全な人間の育成（イーハトーブ教育）」として捉え、
 - ✻ 人類の知的遺産の継承
 - ✻ 豊かな自然と共生するテクノロジーへの理解
 - ✻ 批判的精神と健全な心身に根ざした主体的自己の確立
 - ✻ 社会に参画し貢献するための諸能力の修得
 - ✻ 現実を直視しつつ理想を追求する知的柔軟性の確保などを重視されるべき項目と考える。
- * これらを項目を教育の主要な特色として岩手大学の全学共通教育を構成してゆくことが、岩手大学の学生として共通に必要な学識と教養を養う上でも意義あるものと思われる。

3 全学共通教育の実施体制

[現行の問題点]

- * 平成12年度改組によって全学共通教育の運営は全学担当体制に移行しているが、現時点で全く全学共通教育に携わらない教員もあり、それらの教員を中心に全学共通教育への軽視・無関心が見受けられる。

[対応]

❖ **全学共通教育は、全学担当体制から全教員担当体制へと移行する必要がある。**

* 全学的関心を高め、全学担当体制をより実質化するためにも、中期計画に記されているように、「教養教育と共通基礎教育は全学共通教育として全教員担当体制の下に実施」しなければならない。

◆ 大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）— 競争的環境の中で個性が輝く大学 —」（平成10年）では、以下のように指摘されている。

「教養教育の実施に当たっては、教養教育は従来の専門教育の教員を含め全教員が責任を持って担うべきものであるという認識のもと、その実施・運営の責任を持つ組織を明確にすると共に、一部の教員に過度の負担が集中したり、全学的な視点からの調整や学部・学科間の連絡が希薄なために教養教育の実施に支障を来したりすることのないように全学的な実施・運営体制を整備する必要がある。」

* もっとも、岩手大学の全教員がすぐさま同じ数の全学共通教育科目を担当するという考えは、各学部の教員配置や専門性などを勘案すれば現実的ではない。

* また、実際に、全教員が同等の負担率で全学共通教育を担当しなければならないという必然性もない。仮に、全教員が教養教育の授業を1年間で半期1コマ担当したとすると、半期の開講数は200科目を超えるが、現在開講している教養科目数（共通基礎科目を除く）は半期で約70科目なので、約3倍の開講数となり、授業科目が余ってしまう...

* とはいえ、各教員が学部や研究科のみに所属するのではなく、岩手大学に所属する教員であるとの自覚を持ち、専門教育のみならず、全学共通教育においても岩手大学の学生に対する責任を果たしてゆくことが重要である。

* それゆえ、これまで全学共通教育を担当してこなかった教員も、今後は全学共通教育に何らかの形で関わる事が要請される。

* 例えば、これまで全学共通教育を担当してこなかった教員が新たに全学共通教育を担当するというのが最も歓迎される形態であり、その場合、既存の科目を受け持つという可能性のみならず、担当し得る（共通基礎教育または教養教育の範囲内の）科目を新設して全学共通教育に携わるということも、受講生の視野を広げ、新たな選択の幅を広げるという観点から奨励されるべきであろう。

* また、全学共通教育のいずれかの科目を担当するという関わり方のみならず、それらの科目の授業計画の立案やFD活動等に携わることで、全学共通教育への責任を果たすという方法も考えられる。

* いずれにせよ、全教員がどのような科目を担当し得るのか、また、どのような科目にどのように関わるができるのかを把握し、それをもとに全教員登録制による分野ごとの教育ユニット、すなわち授業担当可能者による実質的分科会を構成することが喫緊の課題である。

* ただし、助手や採用任期が定められている教員においては、本人の希望により、分科会への登録免除も考慮すべきであろう。

* さらに、ユニバーサル化（全入）時代にむけて、今後、全学共通教育の充実に加え、各学部においては専門基礎科目やキャリアアップ関連科目等の充実が不可避となると予想されることから、それらの科目の担当をもって全学共通教育の担当に代えるという措置も必要になろう。（これは全学共通教育への関わり方の変更ではなく、各教員の負担を配慮した措置であり、全教員はいずれかの分科会へ登録し、全学共通教育への責任を果たすという全教員担当体制の原則を変更するものではない。）

4 分科会の構成および役割の変更

[現行の問題点]

- *現在の分科会は各学部から1名と、担当責任部局（いずれかの学部）から1名の計5名によって構成されており、（5名で構成される）分科会と、その分科会ごとの領域で実際に授業を担当している教員との関係は明確ではなく、大学教育センターと授業担当者とは直接結びついていない。
- *また、現行の分科会は、全学部の委員が関わるという面において、また、責任部局を明示しているという面において、チェック機能等の役割は果たしてきた。
- *しかしながら、各分科会の委員の中には、その分科会の授業のみならず全学共通教育のどの科目も担当していない教員もいるため、授業内容に関わる分科会での審議が、授業担当者の見解から遊離することもあり、分科会として十分機能していない。

[対応]

- ❖ **授業担当者から構成され、FD活動をも担う実質的分科会を組織する必要がある。**
- *分科会の構成を、授業担当可能者（潜在的担当者も含む）で構成される組織に改編する。
- *改編された新たな分科会の構成員は、これまでのような学部選出の委員ではなく、全学共通教育の担当者として、全学組織に《所属》するという考え方で授業を担当する。
- *各教員は専門教育を担当するという意味においては学部や研究科に所属しているが、全学共通教育を担当するという意味においては分科会に《所属》することになる。
- *各教員が学部や研究科の区分によらずに分科会に入るため、これまでのように、分科会ごとに担当責任部局を指定するという考え方はなくなり、新たな分科会そのものが《責任部局》となって、全学共通教育において重要な役割（FD活動のユニットなど）と責任を負うことになる。
- *一方、これまでの分科会に与えられていたチェック機能等の役割は、大学教育センターの全学共通教育企画・実施部門会議が負い、学部からの要望等に対応することになる。

5 自己啓発プログラム（仮称）の新設

[現行の問題点]

- *教養教育と専門教育は、しばしば学士課程教育における車の両輪として位置づけられる。
- *とはいえ、それらは排他的関係にあるのではなく、《くさび形》とも言われるように、重なり合い、入れ子状にもなり、それゆえ学士課程教育は教養教育と専門教育との《一貫教育》とも表現されている。
- *しかしながら、一貫教育とは言えども、具体的に、どの部分が重なり合い、入れ子になっている科目なのかは明確ではなく、曖昧なままである。
- *また、入口から出口までの一貫教育という観点、すなわち転換教育からキャリアアップ教育までの一貫性も、同様に曖昧なままである。

[対応]

- ❖ **学士課程の一貫教育を具現化したプログラムを構想する必要がある。**
- *学士課程における一貫教育を実質化し、「教養ある専門人」の育成から、「専門性に立つ新しい教養人」の育成へ（寺崎昌男『大学教育の創造 — 歴史・システム・カリキュラム』1999、他）という観点も視野に入れ、社会との接点を重視した教育プログラムと

して「自己啓発プログラム」(仮称)を新設する。

* このプログラムは専門教育と教養教育とを繋ぎ、学士課程教育をより一体化させる機能を持つ科目群からなる総称である。

* 換言すれば、「自己啓発プログラム」は、大学生として自覚を持ち、研鑽を積みながら自らを磨き、社会へ参画し貢献するための諸能力を獲得するために、転換教育からキャリアアップ教育（含：ボランティア活動等）までを連続的に捉えた科目群で構成されるプログラムである。

* 具体的には、次の科目群から成る。

※ 基礎ゼミ・初期ゼミ [転換教育：学部開設科目：1年次前期：必修]

→ 高校教育から大学教育への移行

：課題を学ぶだけでなく、自ら問題点を見出し調査・分析・考察する

→ 大学生として学ぶための基本スキルの修得

：図書館の利用（文献検索、相互貸借など）、各種調査、実験

：レポートの書き方（問題設定、仮説立案、調査・分析、証明、結論）

※ 自己探索科目 (仮称) [基礎教育：共通基礎科目：1年前期～1年次後期：選択]

→ 自分探しの知的探索（ゼミ形式）

：自己を深く掘り下げることで、思考能力、分析能力、問題発見能力等を養う

→ 岩手大学アイデンティティの探索

：「岩手大学ミュージアム学」(★)を通して、岩手大学の学内施設を積極的に活用し、岩手大学への認識を深める。（講義）

：「岩手大学論」(★)を通して、自らの居場所・所属意識を明確にする。（講義）

※ 社会力育成科目 (仮称) [教養教育：教養科目：2～3年次：選択]

→ コミュニケーション能力、健全な批判精神の開発（ゼミ形式）

：ディスカッション、ディベートなど

→ プレゼンテーション技術の修得と認知能力の学習（ゼミ形式）

：PowerPoint等を用いた提示・発表とその効果の検証

※ キャリアアップ科目 [専門教育：学部開設科目：3年次開講：選択]

→ 職業意識の確立、職業人としてのマナーの修得（講義）

→ インターンシップ

：企業等の現場で研修を受けることにより、職業への認識を深め、社会人としての自覚を養う

→ ボランティア活動等

：社会奉仕活動等を通して社会人としての意識を高める

(★)「岩手大学ミュージアム学」および「岩手大学論」については別紙参照。

* このように「自己啓発プログラム」は、その教育区分や実施体制が全学共通教育の枠を越えていく（転換教育、基礎教育、教養教育、専門教育に関わり、それゆえ科目開設形態も全学共通教育科目と各学部開設科目とに関係する）が、それがこのプログラムの特色であって、専門教育と《教養教育》(広義)を繋ぐ所以である。

* なお、上記新設科目の全学共通教育に関わる科目担当者としては、全教員担当体制への移行に際し、これまで全学共通教育に携わってこなかった教員の新たな参入が（下記の教養科目への補強と共に）期待される。

6 学士課程を貫く自由単位

[現行の問題点]

*上記「自己啓発プログラム」を新設するに際しては、新たに必要となる単位をどのように処理するかが問題である。

[対応]

- ❖ 「自己啓発プログラム」に必要な単位は、一貫教育の観点から確保される必要がある。
- * 自己啓発プログラムを実施するには、担当者のみならず、新たな単位枠の確保が必要となる。
- * その際、現行の卒業単位数を増やすのではなく、現在の総単位の枠内で自己啓発プログラム分の単位を確保するのが現実的である。
- * もっとも、転換教育や専門教育（キャリアアップ）に関する科目は、すでに各学部における専門教育の履修制度で単位が保証されているため、全学共通教育においては、自己啓発プログラムの「自己探索科目」（共通基礎科目）と「社会力育成科目」（教養科目）の単位枠が新たに必要となる。
- * ただし、新たな単位枠が必要とはいえ、「自己探索科目」も「社会力育成科目」も、必修科目ではなく、選択科目として開講するため、問題となるのは、それらの科目を選択履修した学生が、修得した単位をどの枠内で処理するのかということであり、全学共通教育の必要単位の総数を増やすということではない。
- * 例えば、「自己探索科目」として、「岩手大学ミュージアム学」と「岩手大学論」を履修修得した場合、計4単位の認定は、現行の共通基礎科目では、外国語科目、健康・スポーツ科目、情報科目の枠しかないため、そこに自己探索科目としての枠を新設する必要が生じる。
- * 専門教育におけるキャリアアップ科目においても同様で、職業関連の科目やインターシップを共に履修する学生が増えれば、それに見合う単位枠の確保が必要（すでに単位化を行なっている学部もある）になる。
- * これらの点を勘案しつつ、卒業単位の総数を増やすことなく現実的に対応すれば、学生の関心に応じて、全学共通教育としても専門教育としても自由に扱うことのできる柔軟なカテゴリーの単位枠を設けることが、一貫教育の観点からも望ましい。
- * そのためには、現行の全学共通教育の枠内での自由選択単位と、専門教育内での自由選択単位（または、選択科目の枠内での特例措置）を統合し、学士課程全体での自由単位枠を設けるのが妥当である。
- * 自己啓発プログラムの各科目を学生が多く履修した場合、それらの修得単位を学士課程を貫く自由単位枠内に吸収すれば、現行の全学共通教育ならびに専門教育の単位構成に支障は生じない。
- * また逆に、学士課程を貫く自由単位という考え方は、その枠を全学共通教育科目で埋めるかわりに、専門科目の修得単位で埋めることも可能となる。
- * とはいえ、このような自由単位枠を設置するにあたっては、学務管理システムの変更等にも関係することから、全学共通教育科目としては自己啓発プログラムに関わる科目に、また専門科目としては転換教育科目や専門基礎科目を除いた選択科目に限定して、一定

の範囲内で自由単位枠の移動を工夫する必要がある。

7 外国語教育の強化

[現行の問題点]

- *現在の岩手大学全学共通教育における外国語教育は、2カ国語必修という点では多言語教育を実践しているものの、それぞれの外国語教育が、どれほどの成果を挙げているかという点においては楽観視できるものではない。
- *外国語教育は全学共通基礎科目であり、教養教育にも専門教育にも役立つ語学力の修得が求められているが、現在の「英語以外の外国語教育」においては、担当教員が違えば授業内容や到達目標も一律ではないため、学生間にかなりの学力差が生じていると思われる。
- *また、「英語」においては、すでに習熟度別クラス編成を行い、各レベルごとの到達目標の大筋は定めてあるが、到達度の検証、学習効果、成績評価の点で曖昧さが残っており、また、一部のクラスサイズが標準サイズを越えていることも問題である。

[対応]

- ❖ **国際化、グローバル化時代に対応し得る外国語教育がなされなければならない。**
- *多様な言語と価値観が混在し、国際化がますます現実味を帯びてくるグローバル化した現代社会において、外国語の習得は極めて重要であり、修得した外国語の数と、価値観や視点の多様性とは学習者個人のうちで連動していると言っても過言ではない。
- *それゆえ、身につく外国語教育、多言語教育が必要である。
- *とはいえ、現在の外国語教育は上述のような問題点を孕んでおり、この状況を改善するには、スタッフの増員と、授業科目の質・量における充実が必要になる。
- *しかしながら、岩手大学がおかれている厳しい現実からすれば、スタッフや授業科目の増員増設は、極めて困難といえる。
- *したがって、現状の教育環境のもとで、よりよい外国語教育を実施できる可能性を見出す道を選ばねばならない。
- *現在、外国語科目は共通基礎教育として位置づけられており、教養教育にも専門教育にも役立つ語学力の修得が求められている。
- *これまでも外国語教育は、クラスサイズの縮小化や集中方式を取り入れるなど、そのつど可能な限りさまざまな状況に対応してきたが、現行の履修方法では、これ以上望ましい学習効果を上げることが困難でもあるため、この際、1言語を集中的に学習するという考え方も取り入れたい。
- *もっとも、2カ国語（英語と英語以外の外国語）を学びたいという学生の希望をも考慮し、以下のようなプログラムを提案する。
 - a) 「英語」を8単位履修する
 - b) 「英語以外の外国語」を8単位履修する
 - c) 「英語」4単位、「英語以外の外国語」を4単位履修する
- *上記 a) を選択した学生には、結果として中学校以来英語以外の外国語に触れる機会がないため、多言語教育の観点から、「教養外国語」（英語以外の外国語：半期2単位：教養科目）として新規開設される科目の履修を要望する。
- *学習効果を高め、外国語の運用能力（口頭&文書によるコミュニケーション能力）を強化するために、1年次にインテンシブ（短期集中）方式を採用し、週4回の履修とする。

- *なお、「英語」と「英語以外の外国語」の受講者数が過度にアンバランスになる場合は、学生の希望に基づき、上記 a) ～ c) の中で調整する。
- *担当教員のチーム化をはかるなど、共通基礎科目として効果的かつ均一な授業内容を確保するための措置を講ずる。
- *英語教育では、習熟度別クラス編成として、入学時の語学力をさらに高めるため各レベルごとに適した教育方法・手段を用い、週4回行われる授業を効率化するため各レベルごとのシラバスに統一性を持たせたり、授業間の連動性に工夫を凝らす。
- *各レベルごとの到達目標はさらに明確化し、客観的な学習達成度に応じた評価を行なうために、例えば TOEFL の点数を成績に加味するなどの措置を講じる。
- *また、授業の一部にコールシステムや e-learning を取り入れ、教育効果の向上を図ると共に、クラスサイズの縮小にも役立てる。
- *英語以外の外国語教育においては、達成目標（例えば、各種検定試験の級数など）を統一し、統一試験を実施することなどで、教育内容の質の維持に努め、担当者ごとに教育目標や評価が異なるといった問題を解消する必要がある。
- *英語であれ、英語以外の外国語であれ、共通基礎教育として学ぶ時間は限られており、さらに語学力を伸ばすには、専門教育においても外国語教育が引き継がれる必要がある。
→ 専門教育では、外国語を用いた授業（英語による授業や、外書講読など）を増やすなど、外国語教育のジョイントが必要である。

8 健康・スポーツ科目の授業内容と教育目標

[現行の問題点]

- *学生アンケートによれば、「健康・スポーツ科目」の満足度は高い。しかし、学生の満足度（運動不足の解消、仲間と接する機会、etc.）は、必ずしもこの科目の教育目標に合致したものとは言えない。

[対応]

- ❖ 教育目標が達成できるような授業内容にする必要がある。
- *「健康・スポーツ科目」で学生が満足している項目と、この科目の教育目標との関連が必ずしも合致していないことは、従来から問題となっており、今後とも授業内容を改善してゆく努力が必要であろう。
- *また、本学の専任教員が顧問を務めている体育会系運動部所属の学生達には、何らかの受講免除の方策が導入できないかも検討する余地がある。

9 情報科目における単位の早期認定

[現行の問題点]

- *平成18年度からの新入生は原則的には高校で情報教育を受けた学生になる。そうした学生に、共通基礎科目としてどのような教育を行なうべきなのか、またその必要があるのかが課題となる。

[対応]

- ❖ 「情報基礎」レベルをすでに満たしていると判断される学生については、単位の早期認

定等の方策が必要となる。

- * 情報科目分科会の調査によれば、平成 18 年の入学生となる高校生に対し、必ずしもすべての高校で十分な情報教育がなされているわけではないため、当面は情報基礎科目をこれまでどおり全学必修体制で行なう必要があるとされている。
- * しかしながら、高校で十分な情報教育を受けてくる学生や、すでに十分なレベルに達している学生が、そうでない学生と一緒に基礎的な授業を受けた場合、習熟している学生が不満を持つなどの問題が生じることも予想される。
- * したがって、十分能力のある学生については、担当教員が数週間後には検定を行ない、その結果次第で、早期の単位認定を行なうなどの制度を確立する必要があるだろう。

10 環境教育科目の区分変更

[現行の問題点]

- * 現在の環境教育科目の実施状況等にとりわけ問題があるわけではないが、環境教育科目は教養科目に位置づけられているものの、その教育目標には、「本学における環境教育の出発点として位置づけられる」とされている。
- * また、岩手大学は環境教育を重視しており、それゆえ、工学部の 5 学科を除き、必修科目に指定されている。
- * それらを勘案すれば、必ずしも教養科目としての位置づけでよいのかどうか、疑問が残る。

[対応]

- ❖ 環境教育科目は、教養科目としての区分から、共通基礎科目へ区分を変更することが望ましい。
- * 環境教育科目は 1 年次後期向けにほぼ必修科目として、本学における環境教育の出発点として開講されており、教養科目としての位置づけよりも、共通基礎科目としての位置づけの方が望ましい。
- * また、全学的に必修科目として開講する方が、岩手大学の環境重視の方針がより明確になるため、可能であるなら、すでに岩手大学の 9 割程度の学部生がこの科目を履修しているという現実に鑑み、全学必修化も検討されたい。

11 オムニバス方式を採用する科目の留意点

[現行の問題点]

- * オムニバス方式（ある授業を当該学期中に複数の教員が交代で担当する）による授業は、複数の教員が担当することで、複数の視点や専門領域をカバーできるといったメリットがある反面、時に教員間の連絡や連携不足から、授業の統一性に欠けていたり、質の不均衡が生じるなどの問題点を孕んでいる。

[対応]

- ❖ オムニバス方式を採用する際の指針を明示する必要がある。
- * 総合科目や環境教育科目を中心に、オムニバス方式が採用されており、今後ともこの方式を採用する授業数は増大するものと思われる。
- * オムニバス方式は、通常の科目よりも教員の負担減となるように思われているが、授業

- 担当者間での入念な準備（研究会方式によるものが多い）が必要であり、簡単ではない。
- * オムニバス方式による授業科目の担当教員間の密接な連携を図るためには、どのような点に注意しなければならないかを、早急にまとめて行く必要がある。

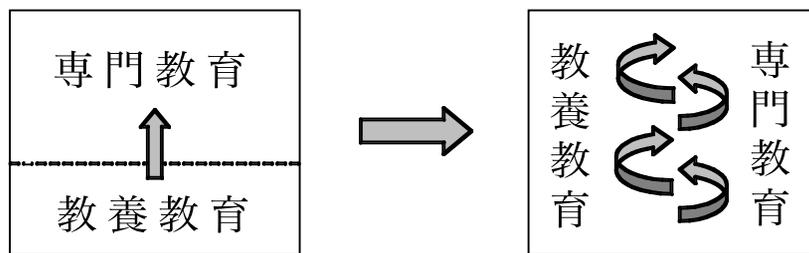
12 教養教育と専門教育の位置づけ

[現行の問題点]

- * 大学が教育・研究機関であるにもかかわらず、教員の意識はややもすれば教育よりも研究重視となり、その結果、教育を論じるに際しても、各自の研究に直結する専門教育が重視され、教養教育は軽視される傾向がある。
- * そのため、教養教育は専門教育への準備段階と見なされ、専門基礎的な教育と位置づけられたりしている。
- * 教養科目が、《～論概論》であったり、《～論入門》とされたりするのはこのためである。

[対応]

- ❖ 教養教育との専門教育と位置づけ、研究と教育との関係を再認識する必要がある。
- * 教養教育は、専門教育と並ぶ大学教育の大きな柱とされつつも、学部教育においては、大学設置基準の大綱化以降も、専門教育への《準備段階》と見なされてきた嫌いがある。
- * とりわけ履修年次の観点からみれば、専門教育より低年次に位置づけられることから、教養教育は専門教育より低次レベルの教育であるというイメージが蔓延している。
- * 教養教育の高年次化が求められるのもこうした状況を改善するためでもある。
- * 今後は、学士課程における車の両輪としての教養教育と専門教育との位置づけを再確認し、両者が密接に関連しつつ4年間の一貫教育を形成するという大綱化以降謳われてきた関係を取り戻して、以下のイメージを実現する必要がある。



- * その際、性格の異なる教養教育と専門教育とを繋ぎ、両者の車軸となる教育プログラム（自己啓発プログラム）を考案することは、一貫教育という観点からも重要である。
- * また、大学運営においては今後ますます教育の重要性が増すことから、教員の意識において研究重視への傾向が強いとすれば、それが教育軽視へと直結しないような意識改革や、制度面での対応（教育業績への正当な評価など）が必要になると思われる。

13 教養科目の純化と指針

[現行の問題点]

- * 教養科目は専門科目からは独立した教育プログラムであるにもかかわらず、往々にして専門への入門的科目や専門基礎的な科目として、また概論的科目として扱われている場合がある。

[対応]

- ❖ 教養科目の内容に関する指針を明示し、混乱を生じさせないようにする必要がある。
- * 教養教育と専門教育とでは教育理念（教養教育の理念 → 「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」）も異なることから、教養科目はそれ自体で自立した《純化された》科目でなければならない。
- * それゆえ、
 - 教養科目は専門基礎ではないし、
 - 教養科目と専門科目の関係は、概論と各論や、入門と発展というものでもないということを再確認することが重要である。
- * その上で、教養科目担当に際しては、以下の項目を《教養科目担当の指針》として留意する必要がある。
 - 教養科目では、当該科目が人間にどのように関わり、どのような影響力を持っているのか（意義と役割、重要性）などを明らかにする。
 - 教養科目では、根源的問題の問い直し、掘り下げを行うことで、当該事象の理解を深める。
 - 教養科目では、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成が重要であるという観点に立つ。
 - 教養科目では、学問内容を学生に教授するというよりは、学生が自ら学び・考えることを支援するという立場を重視する。
 - 教養科目では、多様な関心を持った学生が受講者であるので、専門的概念を既知のものとして扱うことは避ける。
 - 教養科目では、多様な関心を持った学生が受講者であるので、受講者の関心を引きつける教育力が強く求められる。
- * なお、専門分野への入門的科目や概論的科目が必要であるなら、そうした科目は専門基礎科目として位置づけ直さなければならない。

14 教養科目の補強と拡充

[現行の問題点]

- * 受講者数が300名を超える（すなわち教室での収容が不可能な）クラスが複数あり、教育環境が劣悪である。
- * 上記の現象が生じるのは、当該科目が人気科目であったり、時間割上の科目配置が偏っているなど、複合的な要因があるとはいえ、教養科目の開講数不足がそもその原因であろうと思われる。
- * また、教養科目の純化に伴い、専門基礎へ移動する科目が生じれば、教養科目数が減少することも予想される。
- * さらに、教養科目の固定化も問題であり、既存の人文、社会、自然分野の学問領域に依拠したもののだけ（いわゆる従来のリベラルアーツのみ）が教養科目だというわけではなく、人類的課題を扱う現代的な教養にフィットした科目や、人間力・社会力を養うための科目の新設もなされるべきであろう。

[対応]

- ❖ 教養科目を補強し、現代的観点から拡充させる必要がある。

- * 全学共通教育の全教員担当体制に向けて、教養教育への新たな参入者（共通基礎科目への参入も可）が見込まれることから、どのような科目が開講され得るのが問題となる。
- * 新規参入者が現行の開設科目の担い手として既存のグループに合流すれば、現行科目の増設となり、その際には、受講者の関心や素養に応じて同一科目に複数クラス開講の可能性が生まれる。
- * また各教員の研究専門分野が現行の開設科目の領域に収斂しない場合、人間をとりまく普遍的問題を扱った従来の主題別科目枠（「人間と文化」「人間と社会」「人間と自然」）以外に、上述の教養科目担当の指針をふまえた上で、現代における人類的課題を扱う新たな（主題別）科目（例えば、環境、人権、生命、宇宙、情報などか中心となる科目）を新設することも可能である。
- * 専門教育と教養教育と分けているのは、対象とする学問領域の違いというよりは、教育方針の違いによるものが大きい。
- * とするならば、各専門教育で行われている学術領域を、出張講義等で培われている経験をふまえ、視点や方法論を変えて（教養科目担当の指針に準拠して）教養教育に持ち込むことは困難ではないし、むしろ好ましいことである。
- * 特に、全学共通教育の意義と特色で示した「豊かな自然環境と共生するテクノロジーと知的創造」に関しては、総合科目の「環境教育科目」のみならず、知的財産関連科目の新設等も視野に入れ、地域から知域への貢献に資する取り組みが望まれる。

15 全学共通教育科目の開講年次

[現行の問題点]

- * 教養科目が低学年次にのみ開講されていることから、教養教育が専門教育の前段階の教育と見なされており、教養教育の高年次履修が実現していない。

[対応]

- ❖ 全学共通教育科目（含：自己啓発プログラム）の開講年次は、教養科目の高年次開講を実現し、以下のように開講する。

専門科目（自己啓発プロ：キャリアアップ科目：学部開設）	：3年前・後期
教養科目（総合科目）	：3～4年前・後期
教養科目（自己啓発プロ：社会力育成科目）	：2～3年前・後期
教養科目（主題・分野別科目：現代的教養分野）	：3年前・後期
教養科目（主題・分野別科目：文化・社会・自然）	：2年前・後期
教養科目（高大連携指定科目）	：1年前・後期
共通基礎科目（環境教育科目）	：1年後期
共通基礎科目（自己啓発プロ：自己探索科目：岩手大学論）	：1年後期
共通基礎科目（自己啓発プロ：自己探索科目：ミュージアム）	：1年前期
共通基礎科目（外国語、健康・スポーツ、情報科目）	：1年前・後期
転換教育科目（自己啓発プロ：基礎ゼミ・初期ゼミ：学部開設）	：1年前期

- * 教養科目の高年次開講に伴い、専門教育における研究室配属の要件として、全学共通教育科目の履修単位数を指定している場合は、一貫教育の観点から見直す必要がある。

【全学共通教育科目等開講年次一覧：太字枠内が全学共通教育】

専門科目	(自己啓発プログラム) キャリアアップ科目			←→	
教養科目	総合科目			←→	→
	(自己啓発プログラム) 社会力育成科目 「プレゼンテーション」など		←→		
	[主題・分野別] 現代的教養分野		←→		
	[主題・分野別] 文化、社会、自然		←→		
	[主題・分野別] の (高大連携指定科目)	←→			
共通基礎 科目	環境教育科目	↔			
	(自己啓発プログラム) 自己探索科目 「ミュージアム」など	↔ ↔			
	情報科目	↔ ↔			
	健康・スポーツ科目	←→			
	外国語科目	←→			
転換教育 科目	(自己啓発プログラム) 基礎ゼミ・初期ゼミ	↔			
		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次

* 1 年次に全学共通教育で履修できる単位は、概ね

- ・環境：2 単位（工一部 0～2）
- ・岩手大学論 or 高大連携科目「後期」：2（工）～4 単位
- ・岩手ミュージアム学 or 高大連携科目「前期」：2（工）～4 単位
- ・情報基礎：2 単位
- ・健康・スポーツ：2（工1）単位
- ・外国語：8 単位

計 22～17 単位となり、

キャップ制半期 22 単位 × 2 = 44 - 22 (17) = 22 (27) 単位 = 11 (14) 科目相当分
が一年次に専門科目として必要になる。（成績優秀者用にはさらに後期 6 単位追加）

16 時間割

[現行の問題点]

- * 現行の時間割は、長年にわたる微調整等の積み重ねにより、それなりに機能しているが、その反面、非常に入り組んでおり、どの時間帯がどの学部どの科目に影響するかという点では、まさに迷路と化している。
- * 現在、教養科目は総枠で10時間枠を使い、それらを各学部の1年生向けと2年生向けなどに配分しており、例えば、人社では1年向けが6時間枠と2年生向けが5時間枠あり、そのうち共通枠が2時間枠であるが、工学部用には1年向けが4枠、2年向けが2枠で、共通枠が1枠である。
- * こうした枠数の違いは、各学部が教養科目に課している修得単位（人社26、教育18、工10、農16）に連動していると考えられ、この点では、現行の時間割はそれなりに合理的である。
- * しかしながら、各学部の教養科目修得単位ごとに学生が選択できる科目数（枠時間内での開講科目の総計÷単位数）は、単位数が少ない学部ほど多くなり、アンバランスになっている。

[対応]

- ❖ 開講科目の変動に伴う調整が必要である。
- * 外国語の集中開講や教養科目の高年次開講に伴い、現行の時間割枠ならびに年次指定等を変更する必要がある。
- * さらに、長期的展望としては、全学共通教育枠と専門教育枠との明示的な区分等の検討が望まれる。

【改革のまとめ】

今回の改革をあえて手短かに言えば、

実施体制を整え、
(全教員登録分科会)

学士課程における一貫教育を具現化し、
(イーハトーブ教育&自己啓発プログラム)

全学共通教育の充実を図る
(外国語の強化&現代的教養科目等の新設)

改革となります。

全学共通教育に関する現状打開に向けた基本方針

学務担当理事・副学長 玉真之介

1. 学務担当理事の立場について

これまで取り組んできた全学共通教育の改革では、大学教育センターを中心として共通教育の教育内容について検討を進めてきた。本学が目標とする人材像を実現するためには、教養教育と専門教育のあり方を総合的に見直して、「教養教育と専門教育の調和を基本」とした「学士課程」教育を再構築する必要がある。

学務担当理事は、大学教育センター長を兼務しているが、全学共通教育と専門教育の両方に責任を負っており、今後は以下のように、これら両方を踏まえて、とりまとめにあたりたい。

2. 改革案の問題点

大学教育センター全学共通教育企画・実施部門（以下、企画・実施部門）が作成した全学共通教育の改革案は、全教員担当制が専門教育に与える影響についての検討とその対応策の提案を欠いており、各学部との間で建設的な議論を難しくしている。

3. 各学部への要請

学士課程教育の再構築のためには、学生のニーズ（入口）、社会のニーズ（出口）を踏まえて、全学共通教育の位置づけ、専門教育とのバランス及び学年配置などについての積極的提案が、各学部からも示される必要がある。

4. 検討の手順

今後、全学共通教育の改革案は引き続き企画・実施部門で検討するが、「教養教育と専門教育との調和」という課題については、大学教育センター運営委員会に先立って、同センター専門教育関係連絡調整部門で検討を行う。本学における教養教育の理念並びにその特色については、本学の戦略に関わる重要課題であるので、学務担当理事室で原案を検討し、岩手大学教育推進本部で審議し策定する。

岩手大学における全学共通教育の理念と特色（1 次案）

<注：理事室会議に提出した理事私案を、理事室会議での議論を踏まえて手直したもの>

学務担当理事・副学長 玉真之介

0 必要なのは岩手大学の旗印

全学共通教育にも明確な旗印が必要。「幅広く深い教養と総合的な判断力を合わせ持つ豊かな人間性」（大学設置基準 19 条 2 項）では、旗印にならない。中規模大学には「選択と集中」が必要。その際の観点。

- (1) 法人化第 1 期（～2010）の評価と第 2 期（2011～2017）を見越した戦略性
- (2) 岩手大学ならではの特色、他大学にない個性
- (3) 時代を見据え、先取りする先駆性
- (4) 世界的な広がりを持つ学問的な普遍性
- (5) 岩手の”大地”と”人”が浮かび上がる地域性
- (6) アジア、アフリカの貧困や紛争に対する慈しみ
- (7) わかりやすさ、シンプルなアピール力
- (8) 大学の人的、物的、文化的資源に照らした実行可能性
- (9) 岩手大学の教育目標との整合性

1 岩手大学が定めた教育目標

岩手大学は、教養教育と専門教育の調和を基本として、次のような資質を兼ね備えた人材の育成を目指す。

- (1) 幅広く深い教養と総合的な判断力を合わせ持つ豊かな人間性
- (2) 基礎的な学問的素養に裏打ちされた専門的能力
- (3) 環境問題をはじめとする複合的な人類学的諸課題に対する基礎的な理解力
- (4) 地域に対する理解とグローバル化に見合う国際理解力
- (5) 柔軟な課題探求能力と高い倫理性

2 現状の問題点

全国の大学は、とりわけ 1991 年の大学設置基準の大綱化以降、教養教育は如何にあるべきかをめぐって試行錯誤を繰り返してきた。それがしばしば袋小路に入り込んだ 1 つの理由は、「教養とは何か」という理念の議論から抜け出せなかったことにある。

教養とは、かつて大学がエリート養成機関であった頃、エリートたる証、つまりエリートと大衆を差別化する機能を果たすものだった。大学が大衆化した今日、学生が大学に求めるのは、「現実社会を生きる力」である。教育目標の最初にある「幅広く深い教養と総合的な判断力を合わせ持つ豊かな人間性」は、人生という長いスパンの中で身につけていく生涯教育の課題であって、学生が教養教育科目を選択して得られるのは、そのほんの一部でしかない。

3 岩手大学が育てたい人材

大学の現実がエリート養成でないとするれば、岩手大学はどのような人材を育てたいのか？ 全学共通教育の理念と特色も、「大学が育てたい人材は何か」から発想する必要がある。すでに、岩手大学の卒業生は「派手さはないが、辛抱強くコツコツと努力する頑張りや」（がんちゃんキャラクターそのもの）という評価を得ている。

では、教育目標の中で「岩手大学らしさ」が出ている項目は何か。それは特に（3）の「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題に対する基礎的理解力」である（参考のように、「環境問題」を教育や人材養成で謳っている大学は東北にはない）。この教育目標が目指す人材とは、どのような専門分野に進んでも、環境問題などの人類的な課題を自らの課題と生涯意識し続け、地域や職場、家庭でできることをコツコツと取り組むような人材である。

（参考）北海道大学：フロンティア精神、弘前大学：21世紀を生き抜く活力ある人材、秋田大学：地域の振興と地球規模の課題の解決、東北大学：研究中心大学、新たな社会・学問を創造する指導的人材、山形大学：地域に根ざし、世界を目指す、福島大学：自由・自治・自立、文理融合。

4 「持続可能な開発(sustainable development)」

岩手大学の教育目標にある「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題」は、いま「持続可能な開発(sustainable development)」という概念にまとめられている。しかも、それは「地域に対する理解とグローバル化に見合う国際理解力」や「柔軟な課題探求能力と高い倫理性」といった岩手大学の教育目標も包含した内容となっている。

そして今年1月からは、「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」が開始された。これは日本政府がNGOと一緒に提唱し、国連総会で決議されたものであり、このESDの推進は提唱国として日本が世界に責任を負っているものである。

5 ESDの推進を岩手大学の全学共通教育の旗印に

このESDを冒頭に掲げた9つの観点：戦略性、個性、先駆性、普遍性、地域性、慈しみ、アピール力、実行可能性、に照らしたて考えると、以下の（参考：宣言案）のように、岩手大学の旗印になり得る。

（参考）宣言案

「岩手大学は、本年1月から開始された「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」が持つ人類史的意義に深く共鳴し、この推進に大学を挙げて取り組むことを宣言するとともに、全学共通教育のすべてのカリキュラムにESDを横糸として折り込む努力を開始する。

岩手大学の1つの前身である盛岡高等農林学校に学んだ宮沢賢治は、「あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのたがひのきょうだいなのだから」と地球上の生きとし生けるものの命に対する尊重の思想を語った。こうした宮沢賢治の思想は、「共生」の思想として「イーハトーブ」の言葉とともに、ESDの思想的支柱の1つになるものと私たちは確信している。

宮沢賢治の思想は、多様で豊かであると同時に厳しくもある岩手の自然と風土によって

育まれたものである。しかし、その岩手の自然と風土、そしてそこに暮らす人たちの命と暮らしも、青森県境の日本最大の産業廃棄物投棄問題や、三陸沿岸、中山間地での過疎問題、農林業における後継者不足、全県的な少子高齢化など様々な形で持続性を脅かす問題に直面している。

昨年の法人化を期に、この岩手の大地にしっかりと根を下すことを改めて誓った岩手大学は、教育目標の1つに「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題に対する基礎的な理解力」を掲げた。岩手の豊かな自然と風土、そこに培われてきた人々の暮らしと思想のかけがえのない価値に深く思いをよせ、岩手大学は高等教育機関におけるESD推進の先駆けとなりたいと思う。

岩手大学は、ESDのリードエージェンシーであるUNESCOが示した「高等教育機関が果たすべき特別な役割」を1つ1つ誠実に履行してゆき、ESDの最終年である2014年までに、岩手の地におけるESDの中核となることはもちろん、世界の異なる地域の大学とESDにおけるパートナーシップ構築に積極的に取り組み、日本の高等教育におけるESDの先導者となることを目指す。」

6. ESDの特徴：「尊重の価値観」、「実践的姿勢」、「総合性、学際性」

UNESCOは、ESDを「現在及び将来の世代を含む他者の尊重」「相違と多様性の尊重」、「環境の尊重」、「我々が住む地球の資源の尊重」という「尊重の価値観」を問題にするものとしている。その上で、教育には、自分自身や他者についての理解、広範な自然環境や社会環境と自分のつながりの理解によって尊重の価値観を培うことに加え、正義、責任、探求及び対話によって行動と実践を身につける役割を求めている。

また、ESDの特徴として、①すべてのカリキュラムに盛り込まれるもので、個別の課題ではないこと、②価値観の共有、③批判的な試行と問題解決型の姿勢、④芸術や演劇などを含む様々な教育方法、⑤学習者自身が参加する意志決定、そして⑥地球規模の問題を地方の問題として扱うグローバルな姿勢、の6点を示している。

7. ESDの視点

ESDは、「社会・文化」、「環境」、「経済」の3つの領域を提示して、社会・文化の領域では人権、平和、男女間の平等、異文化理解、健康、エイズ、ガバナンスを、環境の領域では自然資源（水、エネルギー、農業、生物多様性）、気候変動、農村地域における変化、持続可能な都市、災害を、経済の領域では、貧困、企業の責任、市場経済を、視点として提示している。

その上で、高等教育機関に対しては、大学の研究・教育において「持続可能な開発」を中心的な関心事項として教育カリキュラムに「糸として織り込む」ことを求め、ESDを地域のみならず国際的なコミュニティーに届ける努力も求めている。また、その教育方法については、経験に基づき、探求を基本とし、問題解決型でかつ学際的システム型のアプローチと批判的思考に重点を置くことを提起している。

8. ESDの特徴と全学共通教育

人文、社会、自然の各授業科目群から学生が自由に選択するこれまでの教養教育は、そ

れぞれは優れた内容でも、科目間の関連性が示されず、結局、知識の断片を習得するに留まることが問題として指摘されてきた。それを克服する試みとして、コア・カリキュラムや副専攻、パッケージ科目などの検討がされてきた。

これに対して、E S Dを全学共通教育の理念とすることは、カリキュラム全体に「尊重の価値観」を核とした「持続可能な開発」という糸を織り込んでいく考え方であり、1つの普遍的なテーマへの多方面からの接近として教養教育全体を再編成していくことを意味している。教養教育のみならず、共通教育の語学教育も「異文化理解」という視点に、健康スポーツ科学も「健康」という視点からE S Dに結びついていく。

もちろん、それぞれの科目によってE S Dに近いものから遠いものまであり、スタート時点ではE S Dマークが付いている科目と、そうでない科目とがあってよい。中には、環境問題は嫌いだ、そういう科目は取りたくないという学生もいるかもしれないので、そうした科目も必要だろう。しかし、E S Dが岩手大学の看板となれば、受験生はE S Dを推進する大学であることを承知して、また期待して受験するようになり、一方、E S Dマークの科目も増え、内容も充実していくにしたがって、それが岩手大学の個性となり、「個性輝く大学」としての評価が向上することが期待される。

9. 日本にとってのE S Dの10年

京都議定書は、アメリカの批准拒否にもかかわらず、本年2月についに実行に移されることとなった。日本が世界の中で、アメリカとは異なる形で名誉ある地位を得ようとするれば、それは環境と核兵器廃絶の分野以外にないだろう。政府としても、今後全省庁が連携してE S Dの推進に取り組むことになる。テーマが教育である以上、文部科学省も中心的な役割を担うことは言うまでもない。まだ、その体制が整っていない今こそ、大学の姿勢を明確にするチャンスである。

間違いなく21世紀の人類にとって最大の課題となる地球環境問題に積極的に取り組むことは、E S D10年に責任を負う日本政府から運営費交付金を得ている国立大学法人として当然のことである。日本の高等教育機関としても日本が世界の中で名誉ある地位を得るための一翼を担うことを課題として真剣に受け止め、自分たちにできる最大の努力を払うべきである。

10. 実施に向けた具体的取り組み

現在、教養教育の中心を担っている人文社会科学部教員の賛同を前提として、教育推進本部で審議を行い、結論を出す。それに先だって、E S Dの日本における民間推進母体であるE S D-J代表の阿部治氏を招いての学習会も必要である。もし、教育推進本部で結論が得られれば、直ちに社会に向かって宣言を發し、学内での連続的な学習会、教育カリキュラムの見直し、などを大学教育センターが中心となって進め、2006年度を移行期、2007年度を本格実施年として、この理念に基づいた全学共通教育を実施に移す。

同時に、法人化第1期の終了年2009年までの3カ年計画、2014年の終了年までの5カ年計画を検討するプロジェクトチームを立ち上げ、計画立案を進め、法人化第2期の中期計画に反映させる。合わせて、大学環境憲章の策定やI S O14001の取得など、学内における環境への取り組みを一体的に進め、岩手大学のI D戦略を強化する。

学士課程教育に関する考え方のメモ

専門教育関係連絡調整部門

部門長 玉 真之介

1. 大学を取り巻く環境

- 1-1. **学生の大衆化・多様化**：いわゆる全入時代へ向かって、学生の学力、勉学態度、進路意識は、同一学部内だけでなく、学科やコース内でも分化、多様化を免れない。
- 1-2. **大学間競争の激化**：入学定員の確保が大学評価の最重要指標となり、大学は不可避免的に「教育の質の向上」と「学生の進路の保証」を迫られる。
- 1-3. 「教える」から「学ぶ」へ：大学教育は、「何を教えたか」という教員側の視点ではなく、「学生が何を学んだか」という学生側の視点から評価されるようになる。
- 1-4. **人件費削減**：運営費交付金の定率削減により、教員組織は段階的縮小を余儀なくされ、学部・学科・コース内で閉じた教育体制は維持困難となる。
- 1-5. **タイムリミット**：法人化 4 年目までに、将来を見越した学士課程教育の全学的体制がビジョンとして確立され、それに向かって明確な歩みを始めないと、法人化第 1 期の評価によって劣等校に選別されてしまう可能性がある。

2. 現状と問題点

- 2-1. **教室・研究室・ゼミ中心の教育体制**：1、2 年時教育は「教える」講義中心で、学生が自ら主体的に「学ぶ」教育は、3、4 年時に教室・研究室・ゼミなどへ所属した後の専門教育や卒業研究などに委ねられている。
- 2-2. **留年者・退学者の増加**：校則と受験という目標が明確であった高校生活から、大学の「自由放任」的な環境に適応できず、自ら主体的に「学ぶ」習慣が作られないまま、留年や退学に至る学生が増加している。
- 2-3. **不完全燃焼状態での就職活動**：入学後、自ら主体的に「学んだ」という充足感や自信を持ってないまま、3 年後期からの長い就職活動に向かうため、ガイドブックに頼ったマニュアル的対応やフリーター覚悟の投げやりな対応となりやすい。
- 2-4. **打ち込めない卒業研究**：5 次試験にまで及ぶ場合のある長期の就職活動に、3 年後期から 4 年夏にかけて忙殺されるため、教室・研究室・ゼミなどの場で卒業研究に打ち込むことが出来なくなっている。
- 2-5. **産業界、実社会とのミスマッチ**：日経連の民間企業調査(2004 年)では、新卒採用における最重要視点は、「コミュニケーション能力」75%、「チャレンジ精神」57%、「主体性」50%などで、「専門性」は 16%、「学業成績」は 7%に過ぎない。

3. 打開の方向

- 3-1. **学士課程と修士課程の種別化**：専門教育の重点を大学院課程に移し、学士課程は初年時から専門の「学ぶ喜び」が感じられるカリキュラムを準備する。
- 3-3. **学部間の連携**：学部・学科の壁を低くして相互に連携し、学士課程における専門教育をスリム化して、その分を共通教育並びに大学院教育の充実に振り向ける。
- 3-3. **全学協力体制の構築**：共通教育を学部を越えた全学協力による教育体制作りの場と位置づけ、分科会を新たな全学教育組織として整備し、共通教育の充実を図る。
- 3-4. **進路に合わせたプログラム**：学生の「自由放任」扱いを改め、入学時からオリエンテーション、カウンセリングを徹底する体制の整備に努め、学生のキャリア設計に合わせた教育プログラムの充実を大学教育センターと各学部との協力の下に進める。
- 3-5. **教育方法の改善**：大学を「学びの共同体」と再定義し、内的な動機付けのための教育方法の改善、情報ネットワークの活用や学習支援を特に1、2年次教育に集中する。

4. 全学共通教育について

- 4-1. **岩手大学の特色について**：各学部はそれぞれの専門による特色を持っているが、いま問われているのは、学部を超えた岩手大学として特色であることから、全学共通教育が明確な旗印を持つことが必要である。その検討は、大学運営に責任を負っている理事を構成員とする教育推進本部が責任を持って説得力ある案を提示する。
- 4-2. **転換教育の充実**：1年次教育がその後4年間の学生生活に決定的な意味を持っていることを重視し、高校時代の受け身の姿勢から自ら学ぶ姿勢へと転換するための教育に全力を挙げる。その際、低年次であるから基礎教育という発想を捨て、ミニ卒研のような問題解決型、プロジェクト型のスタイルを重視する。
- 4-3. **全員担当制**：専門教育のスリム化なしは、学部教員の抵抗も大きく、充実した講義も期待しがたい。学士課程の専門教育を一部修士課程へ移し、他学部の科目を積極的に活用し、学部教員の専門教育エフォートを軽減した上で、かつ分科会所属も強制ではなく意欲ある教員を先行させて、段階的に全教員担当制へと移行していく。
- 4-4. **外国語科目**：特に英語については、各学部の教員が専門分野の初歩的英語文献を講読する科目を多数開講して、専門基礎の役割と英語読解力の向上を図る。
- 4-5. **社会への接合科目**：経済や法律、政治情勢、国際情勢などの教養科目は、就職活動の観点からも、また学生の社会との接合の観点からも高年次開講を行う。

以上。

大学総合教育センター構想 (案)

17.6.16 学務担当理事室

入口 (入試、入学) から出口 (卒業、進学、就職) までの一貫したシステム (組織) の構築について

1 総合化の必要性

1. 1 現状

現在、入学試験に関しては入学者選抜全学委員会、教育に関しては主として大学教育センター運営委員会、学生生活全般を全学学生委員会、就職に関しては全学就職委員会が中心となり対応している。しかし、各委員会の横のつながりが無く、委員会の委員も一部は毎年変わっていくため、相互に有機的に連携がとれていない。

1. 2 背景

かつて学士課程の教育は、入学から卒業まで学部という単位で完結していた。学生に関するすべての情報は学部教授会に集約され、そこで対処されていた。しかし、定員削減に対応する事務一元化が端的に示すように、財政的な制約、人的制約から学務関係はもちろん、入試や教育についても、学部で完結するシステムは維持できなくなっている。

1. 3 改革の基本方向

この間の学生の不祥事や入試ミスは、学部の完結性が崩れ、全学的システムは未整備という現状が背景の 1 つとなっている。そのため、問題が生じるたびに対策が検討され、少しずつ全学システムが整備されてきているが、後手にまわり、将来を見越した「攻めの運営」となっていない。今後、大学としての一体的取り組みが評価の指標となることから、一貫システムの構築に一刻の猶予も残されていない。

2 大学総合教育センターの目標と各部門の役割

2. 1 入口に対する一体的取り組み

受験生向けの取り組みは、各学部バラバラではなく、大学として相互に連携する必要がある。入試体制の構築・運営も各学部単位では人員の確保が難しく、問題をチェックする体制の整備とも合わせて大胆に大学一本のシステムへ向かっていく必要がある。各学部の入試結果を経年的に分析する入試のエキスパート (専任教員) を中心に、AO 入試の導入や高校とのネットワーク作りなどを一体的に進める必要がある (→入試部門)

2. 2 教育カリキュラムの柔構造化

全入時代の到来とともに、学生の学力や進路意識の多様化は避けられず、学士課程教育を学部・学科で完結することは難しくなる。全学的な協力による全学共通教育の充実 (→

全学共通教育企画・実施部門）や学生に合わせた教育内容の継続的な点検と見直し（→教育評価改善部門）、さらに他学部・他学科のカリキュラムの利用や学生の転学部など、各学部相互の連携を強めていく必要がある（→専門教育関係連絡調整部門）。

2. 3 休学・退学を減らすための一体的取り組み

休学・退学を減らすためにも、担任制度の充実やピアサポート制度などを早急に整備し、その企画・運営に一貫性を持たせる必要である（→学生支援部門）。それに加えて、1年次の「転換教育」の内容や、上級生による学習助言制度（メンター制度）の検討など、学生支援の視点から教育カリキュラムを見直していく必要がある。課外活動支援も強化する。

2. 4 学生のキャリアデザインと就職支援

学生が早い段階から自分自身の適性を見極め、自らの力を発揮できる分野を見出すキャリアデザインを大学として支援する企画が必要である。企業のニーズを的確に把握し、学生に知らせるサービスや就職に関わる相談などの就職支援体制を一体的に整備する（→就職支援部門）。教員試験や国家資格、公務員試験などの情報収集と分析、企業の人事部門や同窓生とのネットワークの構築などを担える人材の確保と養成が求められる（今後の課題）。

3 大学総合教育センターと各学部との有機的連携

3. 1 センター内の意思決定と執行体制

大学総合教育センターは、6部門とする（組織図参照）。その際、組織の拡大に伴って意志決定や執行体制が重層化しないように、センター長は専門教育関係連絡調整部門長を兼ね、副センター長は全学共通教育企画・実施部門長とする。部門間の連絡調整並びに意志決定はセンター会議が担う。

3. 2 大学総合教育センターと各学部との連携

センターと各学部との連携は、センター運営委員会が大局的な点について調整を行うほか、入試については入学者選抜全学委員会を引き続き存続させて万全の体制を取る。学生支援は、センターの学生支援部門が各学部の学生委員会と連絡を密にして連携を図る。就職支援部門も専任が確保されるまでは、学生支援と同様とする。

3. 3 理事室と教育推進本部

理事室は、常に戦略的な視点からセンターの進む方向について教育推進本部に議題を提起する。そこでの審議で了承された結果は、センター長がセンター会議、センター運営委員会に諮ってセンターの運営に反映させる。

以上

転換教育科目の教育目標と区分・位置づけについて

大学教育センター長 玉真之介

1. 転換教育科目の教育目標

1 年次前期に開講される転換教育科目は、高校教育と大学教育との接続を主な役割として、以下のような複数の教育目標を持つものと考えられる。

- ① 高校までの受動的な学びから、大学における能動的な学びへと意識の転換を図ること。
- ② 所属する学部における学習の特性やスタイルに触れること。
- ③ リポートや討論、発表などの大学における学習形態になれること。
- ④ 学生と教員及び学生相互が身近に接し、コミュニケーションを図ること。
- ⑤ 進路意識の醸成・啓発を図ること。

2. 転換教育科目の担当について

転換教育科目の教育目標は、学部を越えた共通の性格と内容を持っているが、その実施については学部の特性と切り離すことができない。また、クラスの作り方にも学部によって独自の単位や方式が考えられる。

このことから、転換教育科目の担当については、各学部の責任において担当者を決めることが適当と考えられる。

3. 転換教育科目の区分と全学共通教育との関係

担当は学部の責任で行うとしても、教育目標の全学共通的な性格から、実施については岩手大学として統一的であることが望ましい。その意味で、教育方法や教育内容については、全学共通の指標を示した上で、各学部や担当者がその指標を尊重しつつ、実際の授業をそれぞれ工夫しながら実施することが有効と考えられる。

そこで転換教育科目の区分は、これまで通り専門教育とした上で、位置づけとしては共通教育との中間領域として、全学共通教育の分担に準ずるものと扱って実施することが適当と考えられる。

4. 転換教育科目の実施上の指標について (参考案)

- ① クラスサイズ：1 クラス 10 人程度を目標に、最大でも 20 人以内とする。
- ② 資料検索等：図書館やインターネットなどを利用した資料検索や文献レビューなどを取り入れる。
- ③ 課題探求のグループワーク：具体的な問題についてクラスを 2～3 グループに分けて、問題解決について討議、発表するなどの授業形態をできる限り取り入れる。
- ④ ホームワーク：ホームワークを与え、次の授業で報告させるなどして、自ら学ぶ習慣の形成を促す。
- ⑤ 実地調査等：教室の外へ出て、視察や見学を行う機会をできる限り取り入れる。
- ⑥ 成績評価：授業態度やリポート、ホームワーク、発表などを総合して評価する。

以上

転換教育の区分変更について (メモ)

大学教育センター長 玉真之介

これまでの運営委員会での議論を踏まえて論点を整理し、今後の検討にあたっての課題を示す。

1. 確認すべき点

- 1) 「転換教育」は、学士課程教育の 2 本柱である「教養教育」と「専門教育」のそれぞれへの導入としての意味をもっており、決して一方だけに限定されるものではない。
- 2) 「転換教育」の区分変更は、教務手続き上、平成 19 年度からであり、平成 18 年度については、「専門教育」として実施される。

2. 区分変更を行う積極面

- 1) 「全教員担当体制」の達成がほぼ見込めることになり、入口での議論の膠着状態を打破して全学共通教育の充実に向けた具体的な議論に進むことができる。
- 2) 初年次教育重視の方針を大学として打ち出すことができる。
- 3) 1 年生に対して、全学共通教育の理念や目標について、これまで以上に徹底することができる。

3. 区分変更を行う際の条件

- 1) 全学共通教育の充実の観点から、「転換教育」の区分変更による 2 単位は、各学部で新たに全学共通教育単位を増やすものとする (言い換えると、専門教育単位を振り替えるか、総単位数を増やす)。
- 2) 実施にあたっては、15 回の授業の中で共通教育と専門教育とのある程度の仕分けを行い、全学共通教育にかかわる部分については、到達目標や内容について分科会に相当する全学組織で検討し、その検討による指針を尊重する。
- 3) 全学共通教育で実施している「学生による授業評価」の対象とする。

4. 区分変更を行う際の検討課題

- 1) すでに「転換教育」を実施している人文社会科学部、教育学部で、実施内容の一部変更を含め、合意が得られるかどうか検討が必要である。
- 2) 「全教員担当体制」の議論を終わったものとせず、引き続き検討する合意とその方策について検討が必要である。
- 3) 「専門基礎科目」の取り扱いにも共通する側面があるので、合わせて検討する必要がある。

以上

<2006. 3. 16 の教育推進本部会議の審議を踏まえて修正した案>

教育の個性化、教育力向上のためのアクションプラン作成について

学務担当 玉 真之介

趣旨

法人化2年を経過した現時点で、取り巻く環境に変化が生じてきていることから、これまでのビジョンを踏まえながらも変化に対応した工夫や手直しを行って「教育の個性化、教育力向上のためのアクションプラン」を作成したい。その際、新たな環境変化として重要なものは、以下のような点である。

1. 「全入時代」を本格的に迎え、入学者の確保のための教育の個性化、教育力の向上についていっそう明確な方針が求められている。また、入学者選抜のあり方も見直す必要がある。
2. 平成17年1月に中央教育審議会より『我が国の高等教育の将来像』が答申され、それに対する岩手大学としての方針を検討する必要がある。とりわけ答申が示した機能別分化について、岩手大学としてどの機能にウエイトを置くのか検討されねばならない。
3. 人件費5%減、教員20人減という新たな事態に対して、教育の質を落とすことなく対応するための教育カリキュラムの見直しが検討される必要がある。
4. 中央教育審議会が検討している「教員養成・免許制度の在り方」に対して、岩手大学として組織的に対応できるように準備する必要がある。

以上から、新たな環境に対する岩手大学としての対応をアクションプランとして策定し、大学が一体となって着実に実行していくことが重要であると考えられる。教育は研究よりも効果や成果が出るのに時間がかかることを考えると、法人化の第2期に確実に成果が得られるように、当面はしっかり基礎固めを行う覚悟をする必要がある。

◆基本的な検討課題◆

1. 入試のあり方
2. カリキュラムのあり方(全学共通教育・専門教育、大学院との機能分担)
3. 教職課程のあり方
4. 教育の特色・個性化
5. 教育力向上のための方策
6. その他

◆課題別の検討項目◆

1. 入試のあり方 (→入試部門)
 - 入試戦略の確立とアドミッションポリシーの充実
 - 推薦、前期、後期の役割・位置づけの明確化と総体としての入学者確保
 - AO入試導入の検討

- 入学者選抜方法の簡素化
- 広報宣伝体制の強化
- その他

2. カリキュラムのあり方（→全学共通教育企画・実施部門、専門教育連絡調整部門及び各学部・各研究科）

- 学士課程について部局・学科・課程ごとの機能の明確化（中教審答申への対応）
- 中教審答申に応えるカリキュラムの見直し（特に学士課程）
- E S Dの位置づけと具体化
- コア・カリキュラムやディプロマ・ポリシーの検討
- 大学内、学部内での重複・類似科目の洗い出しと整理
- 学士課程と修士課程との機能分担の明確化（専門科目の見直し）
- 教養教育及び大学院教育の充実
- その他

3. 教職課程のあり方（→教員養成機構）

- 教員養成に関する基本方針の策定
- 教員養成に関する全学組織の立ち上げ
- カリキュラム及び非常勤講師のあり方の検討
- 「教職実践演習」の準備
- その他

4. 教育の特色・個性化（→学務担当理事室）

- 中教審答申の検討（機能別分化、比重の置き方、政策課題への取組）
- 教育目的に基づく養成する人材像の明確化
- E S Dの位置づけと具体化
- G P等の競争的資金の戦略的獲得
- 初等中等教育、生涯学習との連携
- 教育の国際化への戦略
- その他

5. 教育力向上のための方策（→教育評価・改善部門）

- 大学教育総合センターを中心とするFD活動の充実
- 学生の自主的な学びを喚起する多様な方策
- キャリア教育や社会との相互交流の充実
- 学生の国語力、コミュニケーション能力向上のための方策
- e-Learning への戦略
- その他

平成 18 年 4 月 11 日

「全学共通教育の更なる発展に向けて:改革骨子案(v.3)」の審議経過と合意事項(メモ)

大学教育総合センター長 玉 真之介

このメモは、4月6日開催の平成18年度第1回大学教育総合センター運営委員会において、「改革骨子案」の審議経過と合意事項が学部教員に良く伝わっていないというご意見を受けて、運営委員会の記録に基づいて作成したものです。

平成 17 年 3 月 22 日:平成16年度第 7 回運営委員会

→「改革骨子案(v.3)」について説明があり、「全教員担当体制の実施に当たっては、現在の教員配置を前提として検討を進める。」(記録) こととして、各学部で審議することが了承された。

平成 17 年 4 月 26 日:平成17年度第 2 回運営委員会

→人文社会科学部からは口頭で、他の学部からは書面で意見が提出され、それをもとに意見交換がなされた。その結果、多岐にわたる意見を項目毎に整理し、それに対するセンターの考えや回答を纏めた上で、次回に審議をすることとした。

平成 17 年 6 月 2 日:第 3 回運営委員会

→平成 18 年度実施に向けた「改革スケジュール(案)」について意見が交わされ、「新分科会の提案」の部分だけが了承された。

→前回の議論を受けた資料「改革骨子案に対する意見のまとめ」について説明の後、「全体的事項」「1 岩手大学全学共通教育の区分」「2 岩手大学全学共通教育の意義と特色」「3 全学共通教育の実施体制」「7 外国語教育の強化」「10 環境教育科目の区分変更」「15 全学共通教育の開講年次」「その他:全学共通教育の修得単位について」について意見交換が行われ、「7 外国語教育の強化」部分について、以下の了解のもとに合意された。

* 『履修形態を統一して実施する必要はありません。』は、4 学部が、統一する必要はないということで、学部毎の履修制限を付けることは出来る。

工学部は、英語とそれ以外の外国語の履修単位数を 8 と 0 または 4 と 4 の選択とする。よって、全学的に、6 と 2 の組み合わせは行わない。」(記録)

平成 17 年 7 月 13 日:第 4 回運営委員会

→「改革骨子案(v.3)」の平成 18 年度実施を断念し、平成 19 年度実施に向けて検討する提案が了承された。

→委員長から「全学共通教育の理念と特色」について、「改革骨子案(v.3)」と別に、学務担当理事室と教育推進本部で検討したい旨の報告があり、引き続いて国連が提起した

「持続可能な開発（ESD）」を全学共通教育に織り込む理事室案について意見が交わされ、もう少し内容を詰めた上で全教員に通知し、教員から意見を聞くこととした。

→「改革骨子案(v.3)」の内、①「9情報科目における単位の早期認定」について、高校における新指導要領に対応するため、平成18年度から実施できるように情報分科会で検討すること、②中期計画にある「オムニバス方式の学際的な授業科目における講義間の密接な連携を図る。」に対応するため、総合科目分科会、環境教育科目分科会で検討し、可能なものは後期から実施すること、の2つについて了承された。

平成17年7月28日:第5回運営委員会

→全学共通教育企画・実施部門長から新分科会の構想と基準の説明があり、各学部で意見収集の依頼があった。これに対して、工学部委員から「改革骨子案(v.3)」の分科会と並行して議論を進めることが求められ、関連して初期ゼミ等の転換教育を全学共通教育の区分に変えてほしいとの意見が出され、次回以降に審議することとした。

平成17年9月14日:第6回運営委員会

→「改革骨子案(v.3)」の問題となる項目を順次議論して確定していく必要があるとの工学部委員からの意見により、意義と特色の議論は棚上げにして、他の項目を1つ1つ検討することとなった。「1岩手大学全学共通教育の区分」では、前回に引き続いて転換教育を専門教育に含めるのか、全学共通教育に含めるのかで意見が交わされた。「2全学共通教育の実施体制」では、教育の担当・責任の問題、学部のバックアップ体制などについて、意見交換し継続審議とした。

平成17年10月19日:第7回運営委員会

→委員長から、前回の審議を踏まえて、転換教育を全学共通教育と専門教育との重複部分と位置づけ、それを持点制という方式で考慮して全教員担当体制に結びつける案が提案された。しかし、転換教育を全学共通教育に区分変更して、全教員担当体制を達成する方がよいとの意見が多く出され、次回再度検討することとなった。

平成17年11月18日:第8回運営委員会

→委員長から、前回の審議を踏まえて、転換教育は教養教育への転換と専門教育への転換の両方を含むという理解に立って、持ち点制は取り下げ、転換教育を全学共通教育に区分変更し、教養教育への転換の部分については全学的に共通の指針にそって進めることが提案され、了承された。なお、単位数については継続審議とした。

平成17年12月28日:臨時運営委員会

→「3全学共通教育の実施体制」は、全教員担当体制が転換教育の部分で実現できるこ

とになったが、受講学生の多い科目の解消のため、各学部から全学共通教育科目を増やすことへ協力の依頼があった。

→「4分科会の構成および役割の変更」では、新分科会への登録がすぐに科目の担当を意味するのではなく、実施する科目数は各学部及び大学教育センターで2科目程度増やし、現在より10科目程度増やす方向で検討することとした。開講科目は、分科会が責任を持って運営していくが、全学共通教育の責任部局が大学教育センターに移っても、学部の補助・援助が必要であること、及び授業科目の担当はオムニバス方式もあり得ることを了承した。

→新しい分科会の名称について検討し、全教員がどれかの分科会に登録することが了承された。現在の実施体制を維持するため、現在分科会に所属している教員は同種の新分科会に所属することを原則として、1月に予備登録手続きを開始することが了承された。

→「16時間割」について、学部の専門教育との調整に留意することが確認された。

平成18年1月25日:第10回運営委員会

→別途、学部で検討された「全学共通教育の理念と特色について」、大きな反対はなく具体化が求められているとの判断により、「改革骨子案(v.3)」に取り込んで、具体化することが了承された。

→前回の議論を踏まえた新分科会組織の提案があり、予備登録の開始が了承された。

→全学的な転換教育の指針づくりと時間割の調整のため、転換教育ワーキンググループと、時間割ワーキンググループの設置が了承された。

平成18年2月24日:第11回運営委員会

→予備登録の状況について報告があり、4月頃に正式の新分科会の提案を行うスケジュールが報告された。

→各学部に対し、外国語の履修方法について検討と報告の依頼がされた。

平成18年3月15日:第12回運営委員会

→まだ審議していない「5自己啓発プログラム(仮称)の新設」と「6学士課程を貫く自由単位」について議論し、前者についてはすでに開講されたものもあるので、「拡充」とすること、後者についてはわかりにくさ、煩雑さなどを考慮して、取り下げることで了承された。

→以上で、「改革骨子案(v.3)」のすべての項目についておおよその議論を終えたので、4月中にこれまでの議論と了解事項を踏まえた「改革骨子案(v.4)」を提案することについて了承された。

全学共通教育の充実・発展に向けて：改革実施案

大学教育総合センター運営委員会
委員長 玉 真之介

はじめに：高等教育に対する社会的要請

平成 10 年の大学審議会答申「21 世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性輝く大学－」以来、大学教育に対する各種の答申や意見が出されてきた。中でも平成 17 年 1 月の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」は、高等教育の「グランドデザイン」と言われる決定版である。

そこでは 21 世紀を「知識基盤社会」と捉え、大学・大学院ともに教育機能の充実が強く求められている。特に学士課程では、専門性のみならず、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ社会を改善していく人材（＝「21 世紀型市民」）の養成を共通の目標とすべきであるとして、教養教育の充実が提起されている。

ただし、その場合の教養教育とは、従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や単なる入門教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考方法を養い、人間としての在り方や生き方を問うもの、とされている。

この学士課程における教養重視は、大学院における専門教育の充実・発展、とりわけ「大学院教育の実質化」とワンセットの関係にある。本学の中期目標も、こうした要請に応じて、学士課程では、「専門教育中心のシステムから教養教育を中心とし専門分野の基礎教育を充実させるシステムへの移行を図る」、大学院課程では「研究開発能力及び課題探求・解決能力に優れ、独創的で倫理観のしっかりした研究者・高度専門技術者を養成するための課程編成を行う」としている。

しかし、教育は長期にわたって積み上げられた巨大な構築物であり、簡単に造りかえられるものではない。重要なことは、これまで培かれた土台をしっかりと踏まえて、方向性を間違えることなく、全学共通教育の改善と充実・発展に向けて着実な改革を持続的に進めていくことである。

【改革実施案の構成】

- 0 経過
- 1 岩手大学全学共通教育の区分と実施体制
- 2 岩手大学全学共通教育の目標と特色
- 3 分科会の構成および役割
- 4 教養教育の充実・発展
- 5 共通基礎科目の改善と充実
- 6 転換教育の全学的な実施
- 7 教養教育と専門教育との調和
- 8 合理的な時間割の工夫

0 経過

(1) 「全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案 (v.3)」の提案

全学共通教育の改革案作りは、平成 16 年 4 月大学教育センター発足と同時に開始され、全学共通教育企画・実施部門会議並びに兼務教員会議を経て、平成 17 年 1 月末に「全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案」がまとまり、その後、運営委員会において平成 18 年度実施に向けた議論が開始された。2 月には、全教員に対して「全教員担当体制に向けての事前アンケート」の依頼も行われた。

3 月 14 日、15 日には、4 つの学部で大学教育センター主催の説明会が開催され、内容を補強した「改革骨子案 (v.2)」と「Q & A」について説明と意見交換が行われた。そこで出された意見を踏まえて、3 月 22 日の大学教育センター運営委員会(以下、運営委員会)に修正提案されたのが、「全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案 (v.3)」(以下、「改革骨子案 (v.3)」)である。その内容は次の 17 項目で構成され、これに対する各学部での意見集約が運営委員会の場で要請された。

「全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案 (v.3)」の内容

- 0 全学共通教育とその問題点
- 1 岩手大学全学共通教育の区分
- 2 岩手大学全学共通教育の意義と特色
- 3 全学共通教育の実施体制
- 4 分科会の構成および役割の変更
- 5 自己啓発プログラム(仮称)の新設
- 6 学士課程を貫く自由単位
- 7 外国語教育の強化
- 8 健康・スポーツ科目の授業内容と教育目標
- 9 情報科目における単位の早期認定
- 10 環境教育科目の区分変更
- 11 オムニバス方式を採用する科目の留意点
- 12 教養教育と専門教育の位置づけ
- 13 教養科目の純化と指針
- 14 教養科目の補強と拡充
- 15 全学共通教育科目の開講年次
- 16 時間割

(2) 「改革骨子案 (v.3)」の審議

各学部からの意見は、平成 17 年度第 2 回運営委員会(4 月 26 日)で報告され、多岐にわたる意見を項目毎に整理した上で、次回以降審議することとなった。6 月 2 日開催の第 3 回運営委員会では、「改革スケジュール(案)」についての論議に加えて、「改革骨子案 (v.3)」の 0、1、2、3、7、15 の項目が審議され、「7 外国語教育の強化」が付帯条件付きで了承された。

センター長が交代して開催された第4回運営委員会では、平成18年度実施は断念し、平成19年度実施に向けて「改革骨子案(v.3)」の審議を続けること、「2全学共通教育の意義と特色」については理事室提案に基づき別途検討すること、「9情報科目における単位の早期認定」は平成18年度から実施することなどが了承された。

その後「改革骨子案(v.3)」の審議は、第5回(7月28日)、第6回(9月14日)、第7回(10月19日)、第8回(11月18日)、臨時運営委員会(12月28日)、第10回(1月25日)、第11回(2月24日)、第12回(3月15日)の各運営委員会で行われ、ほぼ全項目について審議を終えた。

(3) 重要合意事項

この間の重要な合意事項は、第5回～第8回運営委員会の4回にわたる論議の末に合意された転換教育の全学共通教育への区分変更である。これにより、中期計画に書き込まれ、「3全学共通教育の実施体制」でも提案されている「全教員担当体制」という目標は、全教員が転換教育に携わって達成されることになった。ただし、各学部は「14教養科目の補強と拡充」の趣旨にそって、授業科目の増加に協力することも合わせて合意された。

審議時間をかけたもう1つのテーマは、「4分科会の構成及び役割の変更」である。これは、臨時運営委員会、第10回運営委員会において、①全教員がいずれかの分科会に登録する、ただし、②教養教育に関わる教員配置と岩手大学における教員組織の現状に即して、登録が直ちに授業担当を意味するものではない、③分科会の役割は授業科目・担当者の設定とFDであるが、学部による組織的援助は継続する、④分科会の名称と区分は予備登録の後に再検討する、などが合意された。その際、全学的な協力により増やす授業科目数は、10科目程度を目安とすることも了承された。

この他では、「国連持続可能な開発のための教育の10年(ESD10年)」を積極的に受け止めて全学共通教育に織り込むという理事室の提案について、「2岩手大学全学共通教育の意義と特色」に具体化を図ること(第10回)、「5自己啓発プログラム(仮称)の新設」は自己啓発の名称にこだわることなく関連科目を「拡充」することとし、「6学士課程を貫く自由単位」は導入せず、教養科目と専門科目はESDという内容面でつなぐことを目指す(第12回)、などの合意も重要である。

転換教育のガイドライン作り、及び「16時間割」については、ワーキンググループにより検討が進められている。「10環境教育科目の区分変更」は行わないことになり、「15全学共通教育の開講年次」も外国語を1年次に集中して行う他は、現行を踏襲して大きな変更は行わず、高年次教養科目の開設は今後の検討課題となった。

以上ここまでは、4月27日開催の平成18年度第2回運営委員会で審議了承された内容である。以下の1～8は、その了承を踏まえて運営委員会委員長がとりまとめたものである。

1 岩手大学全学共通教育の区分と実施体制

(1) 学士課程における4つのカテゴリー

本学の中期目標では、「学士課程においては、教育目標を実現すべく転換教育、教養

教育、基礎教育及び専門教育にカテゴライズして、本学のいずれの学部学生にも必要な教養的基盤と基礎学力を備えさせる。さらに、学士課程における学習到達度を達成させるための厳格な成績評価に基づいて、学部毎の目標に沿った人材養成を目指す。」とされている。

全学共通教育は、この内の特に教養教育と共通基礎教育について、大学教育総合センターの全学共通教育企画・実施部門（以下、企画・実施部門）と4つの学部が「全学共通の関心、責任、協力のもとに」実施するものである。

4つのカテゴリに対応する科目と全学共通教育との関係、並びに実施主体との関係は、次の表のように合意された。この内、基礎教育は、全学共通教育に属する共通基礎科目と専門教育に属する専門基礎科目に分かれ、また、転換教育は全学共通教育に属するが、実施主体は4学部となる点が注意を要する点である。

【教育のカテゴリと実施責任主体との関係】

実施主体 \ 教育目的	全学共通教育	専門教育
大学教育総合センター全学共通教育企画・実施部門	教養科目（教養教育） 共通基礎科目（基礎教育）	
人文社会科学部、教育学部、工学部、農学部	基礎ゼミ等（転換教育）	専門科目（専門教育） 専門基礎科目（基礎教育）

（2）全学共通教育の科目と実施体制

1) 「教養科目」

企画・実施部門が実施主体となる「教養科目」は、「人間と文化」「人間と社会」「人間と自然」「総合科目」「環境教育科目」の科目区分を維持した上で、後に述べる分科会が、企画・実施部門のコーディネートの下で授業科目を開講する主体となる。

2) 「共通基礎科目」

「外国語科目」「健康・スポーツ科目」「情報科目」で構成される「共通基礎科目」は、やはり企画・実施部門のコーディネートの下で、それぞれに対応する分科会によって授業科目が開講される。

3) 「基礎ゼミ等」

「基礎ゼミ」や「初期ゼミ」等と呼ばれる「転換教育」の科目は、内容的には「教養教育への転換」と「専門教育への転換」の両方を含むもので、学部を実施主体として開講・実施されるが、区分としては全学共通教育として実施される。それ故に、単位数及びクラス規模の標準などは全学的に統一し、「教養教育への転換」については、ワーキンググループが作成するガイドラインを尊重して進めることが合意されている。

4) 「専門基礎科目」の扱い

平成12年度の改組以降、学部の専門教育に位置づけられた「専門基礎科目」は、引き続き区分としては専門教育として学部の責任で実施されるが、「転換教育」と類似した性格を考慮して、全学共通教育における全教員担当体制の一端を担うものと見なすこととした。

2 岩手大学全学共通教育の目標と特色

(1) 岩手大学の教育目標

岩手大学が4つの教育カテゴリーを通じて目指すのは、教育目標の実現である。その教育目標は、「教養教育と専門教育の調和を基本として、

- ① 幅広く深い教養と総合的な判断力を合わせ持つ豊かな人間性
- ② 基礎的な学問的素養に裏打ちされた専門的能力
- ③ 環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題に対する基礎的な理解力
- ④ 地域に対する理解とグローバル化に見合う国際理解力
- ⑤ 柔軟な課題探求能力と高い倫理性

を兼ね備えた人材の育成を目指す。」ことである。

大学間の競争が一段と厳しさを増す中で、各大学は教育について個性と特色を明確にすることが必要となっている。それは、この目標に基づいて、どのように特色ある人材を養成するのか、というビジョンを示すことである。全学共通教育についても、どのような特色ある教育で、どのような人材を養成するのか、明確にされる必要がある。

(2) 養成しようとする人材像

岩手大学の卒業生は一般に、「派手さはないが、辛抱強くコツコツと努力する頑張り屋」（イメージキャラクターのがんちゃんそのもの）という評価を得ている。それは気候も厳しく、それだけに苦難の歴史を歩んできた岩手の自然や風土と無関係ではない。「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と述べた宮沢賢治も、この土地の精神的風土の中から生まれ出たと見ることもできる。

翻って、岩手大学は「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題」を教育目標に掲げ、その具体化として各学部が独自性を活かした環境教育科目を開講し、工学部の5学科を除いて必修科目としてきた。これは他大学に見られない岩手大学の特色である。しかも、「複合的な人類的諸課題」という言葉には、環境や貧困、人権、ジェンダーなどの問題が別々ではなく、互いに関連しあっているという認識が示されている。

ゆえに、岩手大学が全学で共通に養成しようとする人材は、宮沢賢治のように人を「思いやる心」を持ち、「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題」を自らの課題と生涯意識し続け、地域や職場、家庭でコツコツと取り組むような人間像が1つのモデルとなるだろう。これこそ、岩手大学が提示する「21世紀型市民」である。

(3) 21世紀のキーコンセプト：「持続可能な開発 (Sustainable Development)」

グローバル化が進む世界にあって、「持続可能な開発」が21世紀に人類が目指すべき社会のキーコンセプトになりつつある。それは1987年の「環境と開発に関する世界委員会」の報告書『我ら共有の未来』で最初に定義され、1992年の地球サミット「アジェンダ21」を経て、2002年にはヨハネスブルクでの「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で改めて確認された。

そのヨハネスブルク・サミットで、日本政府が日本のNGOと共同提案したのが、

「持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」である。この提案は、国連総会で採択され、2005年～2014年までのESDの10年が開始された。

ESDは、教育の重要性とその力に改めて立脚して、未来の世代を含む他者の尊重や、相違・多様性の尊重、環境や資源の尊重などの「尊重の価値観」を子供たちはもとより広範な人たちに広げ、同時に、自らが自然や環境、経済、社会につながっているという認識と理解に基づいて、対話やパートナーシップを通じて地域から社会の変革を目指していくものである。

（４）「価値観の共有」「総合性」「実践性」

岩手大学が養成しようとする人材像と、日本が世界に提案したESDの意義を踏まえるならば、岩手大学の全学共通教育は、ESDを積極的に取り入れていくことによって、岩手大学の教育目標に叶うその特色の明確化を図れるのではないか。その際のキーワードは、「価値観の共有」「総合性」「実践性」である。

ESDは、環境・人権・平和・ジェンダー・多文化共生・福祉などの様々なテーマをつなげていく新しい教育の取組である。その際のポイントは、「尊重の価値観」を共有して互いのつながりを意識的に作り出していくところにある。この「尊重の価値観」を宮沢賢治に代表される岩手の大地と人に育まれてきた「思いやる心」と重ね合わせて、授業科目の間で「価値観の共有化」を図るならば、岩手大学の全学共通教育は地域に根ざした特色あるESDの取組となっていくだろう。

また、ESDは、自らと環境や社会、経済、文化とのつながりを総合的に理解することを重視している。このESDの「総合性」は、教養科目における「人間と文化」「人間と社会」「人間と自然」「環境教育科目」という区分を越えて授業科目が相互につながりあっていく方向性を教養教育にもたらす。

さらにESDは、「関心の喚起」から「理解の深化」、「学習者の参加」や「問題解決の実践」など、学びを実践にまでつなげていこうとする「実践性」を特色としている。この特色も、教員と学生や学生間の対話、あるいは地域の問題への関心と関与などを通じて、教育内容や教育方法の改善に新たな方向性を与えるものとなる。

（５）旗印としての「持続可能な未来のための教育」

ESDは、「価値観の共有」と「総合性」「実践性」によって、担当する教員の教育改善にコラボレーションとハーモニーを産み出し、岩手大学の教養教育が全体として人材養成という課題との関係を明確にしていくことが期待できる。それは、本学が掲げる教養教育の理念、すなわち「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」（大学設置基準第19条第2項）の具現化とすることができる。

また、ESDは教養教育のみに限らず、外国語などの共通基礎科目、基礎ゼミ等の転換教育にも織り込んでいくことが可能である。専門教育となればそれは尚更であり、全学共通教育と専門教育との間にもつながりを広げていくことが期待できる。つまりこれは、岩手大学として1つの旗印を建てて岩手大学が目指す人材養成について、教職員に対しても、学生に対しても、そして受験生や地域社会、さらには世界に向かって、より明確なメッセージを発信していくことを意味する。

この旗印を岩手大学として「持続可能な未来のための教育」と名付け、E S Dを内容として地域や全国、世界の様々な主体と連携や交流を深めながら着実に教育の充実・発展を進めていくなれば、岩手大学の評価は確実に高まっていくだろう。

3 分科会の構成および役割

(1) 分科会を改組する必要性

これまで分科会は、「人間と文化」「人間と社会」「人間と自然」「環境教育科目」「総合科目」「外国語科目」「健康・スポーツ科目」「情報科目」という8つの科目区分について、各学部から1名と責任部局（いずれかの学部）からさらに1名の計5名によって構成されてきた。しかし、この構成では、各学部選出委員が全学共通教育の授業を担当していないことも多く、今後重要となるカリキュラムの改善や成績評価の統一、授業方法の改善などに関して必ずしも実効的な機能を発揮できないでいた。

今後、全学共通教育の充実と発展は、持続的なF D活動の如何にかかっており、そのためには分科会も、授業担当者で構成され、授業改善に実効的な機能を果たす組織へと改組する必要がある。今回提案する新分科会の趣旨は、ここにある。したがって新分科会は、科目区分ではなく授業科目により近い主題別に建て、授業改善などについて意見交換が実効的に行える20～30名の教員で構成することを基本とする。さらに、「全学共通の関心・責任・協力」によって実施するという基本原則に則って、全教員がいずれかの分科会に所属することを大原則とする。

ただし、分科会への所属が直ちに授業担当を意味するわけではない。全学共通教育の担当者は、まずは現状を維持した上で、次に個々の教員の学部における転換教育や専門基礎教育の分担状況、さらには大学院における教育分担の状況、そして分科会に求められる授業科目数や授業内容を総合的に勘案して調整の上で決まることになる。その際には、学部における専門教育分担との調整などの組織的な対応も想定される。

(2) 新分科会の構成・役割・運営

以上の考え方を分科会の構成と役割、運営に分けてまとめれば、以下のようになる。

1) 分科会の構成

- * 分科会は、全学共通教育として開講される授業科目を勘案して主題別に設ける。
この趣旨から、総合科目分科会は設けない。
- * 分科会の区分と名称は、改組後に点検評価を行い、数年後に見直す。
- * 岩手大学の全ての教員は、いずれかの分科会に所属する。

2) 役割

- * 分科会は、授業科目の開講・実施（科目の設定、授業担当者の確定、カリキュラム編成上の連絡・調整など）に責任を持つ。
- * 分科会は、成績評価の在り方の検討、授業方法の改善などのF D活動の単位となる。
- * 分科会は、企画・実施部門に対して全学共通教育の実施と改善について提言を行う。

3) 運営

- *分科会の円滑な運営のために代表と副代表を置き、代表は企画・実施部門の兼務教員となる。
- *分科会は、学期毎に、また必要に応じて分科会会議を開催し、授業科目の開講や授業改善について審議する。
- *分科会代表による代表者会議を設け、全学共通教育実施のための連絡・調整に加えて、「総合科目」実施のために必要な措置について検討する。

(3) 新分科会の区分と名称

新分科会の原案は、平成17年7月に企画・実施部門会議で作成され、2回の運営委員会での集中審議で修正された案について、平成17年度末に最終案作成のための仮登録が実施された。今回提案する新分科会案は、この仮登録結果についての平成18年度第2回運営委員会(4月27日)での審議を踏まえ、仮登録時の分科会をいくつか統合して整理したものである(括弧内は、仮登録の際の分科会)。

共通基礎科目：①外国語(「英語」と「英語以外」を統合)、②健康・スポーツ
③情報基礎

教養科目：④思想と文化、⑤芸術と表象、⑥行動と心理、⑦公共社会、
⑧現代の諸問題(「情報社会」と統合)、⑨生命の世界、⑩生物の多様性、
⑪自然のしくみ(「自然と物質」、「自然と数理」と統合)、⑫科学技術

環境教育科目：⑬環境(「環境と自然」、「環境と人間」を統合)

教養科目の内、④⑤は「人間と文化」、⑦⑧は「人間と社会」、⑨⑩⑪⑫は「人間と自然」という科目区分に対応するが、⑥は開講科目によって「人間と文化」「人間と社会」の両方を含む。「総合科目」は、分科会を横断して開講される。

これから実施する予定の本登録では、現行の科目は継続する必要から、例えば、⑩生物の多様性、と⑬環境の両方に関わる科目を担当している教員には両方に登録していただいて、平成19年度をスタートすることとした。(注記：巻末付記参照)

4 教養教育の充実・発展

(1) 教養教育の再定義

かつて「一般教養」といわれた時代の教養教育は、専門化された科目を分野ごとに並列して、学生に自由に選択させるものであったため、1つ1つは優れた内容でも相互の関連がつかめず、結局は知識の断片を提供することにとどまる場合が多かった。大学教員の多くは、そうした教養教育の体験を持つために、教養教育を議論する際に2つの極論に引きずられやすい。

1つは、教養教育が専門的でないために「つまらなく」、学生のモチベーションを引き出せないといった考えであり、他の1つは、教養教育は教養教育の専門家に任せるべきだといった考えである。一方は、専門性のレベルから教養教育を浅薄なものとするのに対して、他方は教養学を1つの専門分野として自らの専門と峻別する。両極端

に見えるが、実は両者とも19世紀以来の専門化された科学を絶対視する点で共通の基盤に立っている。

ところが、「知識基盤社会」とは、知識の進展がパラダイムの転換を伴って日進月歩で進み、それ故に幅広い知識と柔軟な思考力が強く求められる社会である。また、いまや問題が複雑化し、複合化して、テクノロジーと経済、法律、倫理などの連携なしには問題解決のできない時代となっている。さらに、グローバル化が様々な社会的軌轍をもたらし、国際社会に信頼を築く上で、他者の歴史・文化・宗教・風俗習慣等の理解と尊重が一段と重要となっている。

教養教育は、こうした時代の要請に応える専門分野の枠を越えた知識や思考方法を扱う教育であり、これまで以上に現代的な諸問題を意識して、「人間としての生き方や現実社会との関わりから、学生の学ぶ意欲や目的意識を刺激するもの」として、その意義と役割、重要性が再定義される必要がある。

（２）教養教育のさらなる充実

岩手大学では、すでに平成12年の改組から、例えば、「人間と文化」では「国語学」→「日本の文学」、「心理学」→「心の科学」、「欧米史」→「欧米の歴史と文化」、「人間と社会」では「法学」→「市民社会と法」、「経済学」→「現代社会と経済」、「人間と自然」では「物理学」→「自然のしくみ」、「数学」→「数理のひろがり」などのように、教養科目の名称を変更した。

内容についても、単なる「概論」「入門」ではなく、教養教育の理念にある「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的判断力」との関連において、根源的問題の問い直しや批判的視点から、主体的に課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下す力を養うものに充実していく努力がなされている。今後は、E S Dの視点から、「価値観の共有」や授業科目間のつながりを意識して、さらに教養科目としての充実が求められる。

4つの学部がそれぞれの独自性を生かしながら開設した環境教育科目は、専門分野の枠を越えて現実社会と関わる教養教育の充実を意味しており、今後はE S Dにおけるコア・カリキュラムの位置を占めることになる。また、総合科目には、「科学技術と現代社会」や「これからの健康科学」など多彩な顔ぶれによるテーマ中心の学際的科目が開設されている。

しかし、こうしたテーマ中心の学際的科目は全体から見てまだまだ少ない。300名を越える受講生の科目が複数あるなど、教養科目の開講数が不足している現状からしても、もっと総合科目を増やす必要がある。例えば、宗教対立と国際紛争、巨大多国籍企業とハイテク技術、B S Eや鳥インフルエンザなどの人畜共通感染症、臓器移植と生命倫理など、学際的でE S Dに関わるテーマは多数考えられる。全教員担当体制を1つの契機として、再定義された教養教育の意義と役割にそって、専門知識を生かした魅力ある科目の積極的開設が望まれる。

(3) 新たな観点からの科目開設

1) 「岩手大学ミュージアム学」「岩手大学論」

平成 17 年度に開講したこの 2 つの科目は、学生が岩手大学自体を知り、岩手大学で学ぶことの意味を考えることで、自己形成につなげることを目的とするものである。役員や部局長がその立場から直接学生に語りかける場として、大学の名物科目となっていくことが期待される。

2) 「知的財産入門」「知財ワークショップ」

平成 17 年度の現代 G P に本学の「各学部の特性を生かした全学的知財教育」が採択され、平成 18 年度から教養教育としてこの 2 つが開講された。なお、放送大学を利用した「著作権法概論」も、学生は受講できる。知財教育は、知的創造活動を尊重する基本的ルールについて学ぶものであり、21 世紀の市民教育の 1 つの柱である。全学生を対象とする教養教育に知財科目を開講している大学は全国でも少なく、岩手大学の重要な特色である。

3) 「図書館への招待」

平成 19 年度から開講されるこの科目は、図書館が大学の教育研究に持つ機能や役割のみならず、地域の図書館が担っている役割についても視察などを織り込んで学ぶ科目である。平成 13 年制定の「子供の読書推進に関する法律」や全国の小中高校で展開されている「朝の読書」運動などにより、読書が初等中等教育に浸透しつつある。それを大学として引き継いで、大学生に相応しい読書活動を方向付けることもこの科目の意図に含まれている。

4) 「キャリアを考える」

「現代職業選択論」に続くキャリア科目であり、単なる就職活動の準備としてではなく、自らの適性を見極めて人生設計の一部として職業選択を考えることを支援する。授業の中では O B ・ O G による職種の紹介も含まれている。キャリア科目としては、岩手県の地場産業を紹介する科目も計画中である。

就職支援に関わって民間企業などから大学に強く要請されているのは、文章力・対話力などの言語力の強化である。平成 17 年制定の「文字・活字文化振興法」にも、若い世代の言語力の低下に対する危機感が示されている。読書活動の推進とも融合して、教養科目に文章力・対話力などの言語力を涵養する授業内容を取り入れる努力も必要である。

5) ボランティア活動の単位化

中期計画には、「ボランティア等課外活動の単位化を検討する。」とある。それに関わって、平成 17 年度に学生と大学が協力して、ピアサポートや図書館サポーターなどの学内ボランティアの活動が開始された。図書館サポーターが図書館業務の一端を担うようになれば、学内インターンシップという位置づけも可能となる。したがって、学部におけるインターンシップと同様の方法で、単位化も検討可能と思われる。

また、すでに 8 年の実績を持つ「Let' s びぎんプロジェクト」は、学生提案によるボランティア活動が多数実施されている。そうしたプロジェクトに参加した個々の学生について評価するシステムを考案し、単位化することも検討中である。

(4) オムニバス方式を採用する科目の留意点

今後、新たな学際的なテーマ科目の開設は、オムニバス方式（ある授業を当該学期中に複数の教員が交代で担当する）となることが予想される。その際、オムニバス方式の授業は、複数の担当者による複数の視点や専門領域をカバーできるといったメリットがある反面、時に教員間の連携不足から、授業の統一性を欠いたり、質の不均衡が生じたりするなどの問題点も指摘されている。また、成績評価という面からも厳格さを実現する方法の検討に着手することが求められている。

今後は、コーディネートする教員が果たすべき役割（科目の趣旨・目的、授業方法、評価とその手法と基準などの提示）や担当教員間の密接な連携を図るための注意点など、企画・実施部門で作成した「『オムニバス方式の学際的な授業科目における講義間の密接な連携』について」（平成 17 年 9 月 29 日）を活用して、授業改善に役立てていく必要がある。

5 共通基礎科目の改善と充実

(1) 外国語科目の強化

岩手大学における外国語教育は、共通基礎科目として「英語」及び「英語以外の外国語」の2外国語を必修としてきた。多様な言語と価値観が混在して国際化が進展する現代社会において、英語以外の外国語の学習はむしろ重要性を増しており、岩手大学でも英語以外の外国語を学ぶ機会を今後も十分提供する必要がある。

しかし、限られた単位数と教育環境の中で、外国語教育に求められる到達目標を考慮すると、1言語を集中的に学習するという選択肢も用意する必要がある。大学に入学してくる学生の関心や履修歴は多様性を増しており、本学の外国語教育もこのような状況に対応しながら十分効果を上げるシステムを作り上げる必要がある。これらの条件を考慮して、平成 19 年度から外国語科目は以下のように実施する。

(2) 外国語の新しい履修方式

1) 外国語選択の3パターン

- a) 「英語」を8単位履修する
- b) 「英語以外の外国語」を8単位履修する
- c) 「英語」4単位、「英語以外の外国語」を4単位履修する

*上記 a) ~ c) の選択は学生の希望によるが、教育の必要により学部（または学科・課程）が選択肢を二つに絞ることも可能とする。

*なお、「英語」と「英語以外の外国語」の受講者数が過度にアンバランスになる場合は、学生の希望に基づき、上記 a) ~ c) の中で調整する。

2) 履修方法

*学習効果を高め、外国語の運用能力（口頭&文書によるコミュニケーション能力）を強化するために、1年次にインテンシブ（短期集中）方式を採用し、前・後期とも週4回の履修とする。

*授業編成、授業内容、授業方法等については外国語分科会（18年度はこれに加えて外国語科目担当者会議）が実施案を作成し、所期の目的を達成するように努め

る。

*岩手大学における外国語教育の充実のためには、全学共通教育の外国語教育は専門教育科目や国際交流科目に引き継がれる必要があるため、全学的な連携を視野に入れた外国語教育プログラムを構築する。

(3) 健康・スポーツ科目の充実

学生アンケートによれば「健康・スポーツ科目」の満足度は高いが、学生が満足している項目と、この科目の教育目標とが必ずしも合致していない面もある。生涯にわたって体を動かせる能力や習慣を修得することは、高齢者社会に向う我が国において特に重視すべき課題であり、今後とも授業内容を改善してゆく努力が必要である。

同時に、生活習慣病やメンタルヘルス、HIV教育のような健康に係わる諸課題について、基本的な理解と知識の習得を目標とする教育カリキュラムも重要となっており、その意味から「講義」と「実技」を融合した科目を期待する声もある。今後、新しい分科会でESDの観点も含めた検討が期待される。

(4) 情報科目における単位の早期認定と教育内容の見直し

平成18年度から情報教育を高校で受けた学生が入ってくることに合わせて、情報基礎科目では授業の一定段階で習熟度を判定する試験を行い、それに合格したのものには単位を早期に認定するという制度を開始した。

高校における情報教育のレベルにはバラツキがあり、進学校で授業時間が少ない傾向なども見られることから、当面は現行の授業内容と早期認定を維持するとして、今後は入学してくる学生の習熟度に合わせた授業内容の見直しと拡充を新しい分科会で検討していくことが望まれる。

6 転換教育の全学的な実施

(1) 転換教育の意義と内容

小学校から塾に通い、与えられた問題に要領よく、正確に早く解答を出すという受験勉強に追われ、大学で何を学ぶのか明確な目標を持たないまま、入学さえすれば何か与えられると考える新生が増えている。その一方で、大学にこれまでの受験勉強とは異なる何かを期待し、新しいことに挑戦したいという意欲が最も強いのも新生の特徴である。この意欲の強い初年次に、大学の学びについてしっかりと方向付けをできるかどうかで、その後の卒業までの学習効果は大きく異なってくる。転換教育の意義はここにある。

その際の第1の課題は、**スタディ・スキル**の修得にある。高校までの教育は、受動的な学びが中心であるのに対して、大学での学習形態は講義を自分なりにメモしたり、自ら調べてレポートをまとめたり、グループでディスカッションや発表をしたりと多様である。ノートテイクや情報収集、レポート作成、プレゼンテーションなどのスタディ・スキルについて、基礎ゼミ等の転換教育で一通り指導し、その修得が大学における能動的学びに必要なことを自覚させる必要がある。

教員の中には、スタディ・スキルを指導教員や先輩院生から「見よう見まね」で身

につけてきた自己の体験から、そうしたものは教えるようなものではなく、自分で獲得していくものと見なしている人も多い。しかし、大学への進学率や学生の学習動機は、教員が学んだ時代と大きく変わっている。新入生の段階で、まずスタディ・スキルについて学習し、全学共通教育の授業の中で繰り返し応用していくことで定着させ、専門教育の段階では十分に身に付いているようにすべきである。

第2の課題は、**ソーシャル・スキル**の修得である。それは、大学での人間関係を円滑に進めるための技能である。幼少期から地域社会との関わりや実体験に乏しく、親に対する依存度が高い学生が増えている。その結果、人づきあいや人の噂に悩んで不登校となるような学生も多い。大学生としての毎日の時間管理、1週間の生活管理、食事などの健康管理から、自己の適性や将来の目標、困難や問題を抱えたときの解決の仕方などについて、新入生同士で互いに語り合うことが必要であり、重要である。

こうした「大学教育への転換」については、現在、「転換教育ワーキンググループ」で具体案を検討中であり、そこで示される指針にそって平成19年度から全学的に実施できるように、企画・実施部門と4つの学部とで準備を進めていく必要がある。

(2) 入学前教育の全学的な実施

推薦入学者は、全入学者の2割に達しており、今後もこの比率は高まる可能性がある。一般の受験生が1月のセンター試験、2月の個別試験に向け最後の努力を傾注するのに対し、推薦合格者は12月以降に勉強意欲が低下することから入学後に差が出ることも指摘されている。合格から入学までのブランクが入学後のスムーズな勉強への移行に支障を来さないように、適切な入学前教育を準備する必要がある。

当面、平成19年度入学者に対しては、大学教育総合センターが「教養教育への転換」という観点から、各学部と協議して入学前教育を試行的に実施する。合わせて、e-learningによる教材開発に取り組む。この試行実績を点検評価しつつ、将来的には、各学部・学科により独自の内容を付け加えて、より充実した入学前教育を行っていくことが望まれる。

(3) リメディアル(補習)教育の全学的な実施

入学しても、高校における学習指導要領の改訂や受験科目の関係から、数学、物理、英語などの基礎的学力が不足し、大学の授業について行けない学生が増えている。こうした学習支援を必要とする学生に対するリメディアル(補習)教育についても、全学的な体制を強化していく必要がある。平成18年度後期には、TAを活用する方法、高校退職教員を嘱託で雇う方法、e-learning教材を活用する方法などについて、試行的な取組を大学教育総合センターで行う。

その試行実績を点検評価することによって、来年度以降はより制度的な整備を行い、全学的な実施体制を構築していく必要がある。

7 教養教育と専門教育との調和と連携

(1) 教養教育と専門教育をつなぐ副専攻

これまで、大学教員の意識はややもすれば研究重視となり、その結果、教育を論

じるに際しても、各自の研究に直結する専門教育を重視し、教養教育は軽視する傾向があった。しかし、本学が教育目標に「教養教育と専門教育との調和」を掲げているように、教養教育と専門教育は学士課程における車の両輪であり、専門教育だけで学士課程が完成するかのような考え方は改める必要がある。

中教審答申「我が国の高等教育の将来像」が学士課程共通の目標を「21世紀型市民」の育成として、副専攻の導入を強く提案しているのも、学士課程の場合は特定の狭い専門分野にとどまらず、複眼的な視野の養成を重要視しているからである。このことは、専門教育の軽視ではなく、むしろ大学院修士課程における専門教育の充実とセットで提起されているものである。

副専攻については、人文社会科学部において制度として導入されており、他の3学部についても、メジャーのみならず他の専門分野についても一定程度学びたいという学生のニーズに応える副専攻制度の導入が検討される必要があるだろう。その一方で、本学の「教養教育と専門教育の調和」という教育目標を体現するような、教養教育と専門教育とをつなぐ全学的な副専攻の整備も検討すべきである。

(2) ESD副専攻の構想

ESDの特色が「価値観の共有化」によって分野や領域をつないでいくことであるならば、それは教養教育にとどまることなく専門教育にも広がっていく。むしろ専門教育には、地域の具体的な問題と関わるテーマや学生参加型の授業が多くある。そこで、教養教育におけるESD科目と各学部が専門科目において認定するESD科目の両方を一定単位数履修すれば、履修証明が与えられるような全学的なESD副専攻を構想することもできる。

そのためには、次のような授業科目のタイプ分けが有効である。

- * **タイプ1「関心の喚起」**：授業計画にあたってESDを意識し、授業の中で関心を喚起する。
- * **タイプ2「理解の広がりと深化」**：ESDの中の課題を取り上げ、他の領域とのつながりや問題理解を深める授業を組み込む。
- * **タイプ3「学生参加型」**：問題の理解に加えて、グループディスカッションや発表などインタラクティブな教育方法を組み込む。
- * **タイプ4「問題解決の体験」**：地域の具体的問題の解決や改善を授業目標に含み、学生が主体的に参画して問題解決を実体験する。

この4つのタイプ分けは、教養科目のみならず専門科目でも可能である。教養科目と同様に専門科目についてもシラバスにタイプを明記し、例えば教養教育ではタイプ2以上の科目を6～8単位、専門科目ではタイプ3以上の科目を6～10単位、合計12～18単位以上(学部によって独自に単位数を設定)履修したものに対して、各学部で履修証明を出すESD副専攻が構想できる。

(3) 高年次教養科目の開設

中期計画には、「高年次教養教育にも配慮しながら授業科目の履修年次を適切に配当する。」とあるが、高年次教養科目はまだ具体化されていない。ESD副専攻を構想した場合、タイプ4「問題解決の体験」の授業科目を高年次教養科目として開設することを検討すべきである。

具体的には、3年次、4年次を対象とした集中講義形式で、津波対策や岩手山噴火対策などで培ってきた「地域防災」、県境の産業廃棄物対策の実績に立つ「環境再生」、北上川清流化対策以来の「流域連携」、学内ミュージアム化などの「教育エコキャンパス」などの岩手県や岩手大学独自のテーマを選び、地域における実践活動と相互交流を図るとともに、地域の小中高校とも積極的に連携する高年次教養科目の開設などが考えられる。

この科目の授業では、NPOや行政などから外部講師を迎え、現場でのワークショップやグループワークとプレゼンテーション、さらにファシリテーター養成演習などを盛り込むのが有効だろう。専門性を習得しつつある高年次の学生が地域の具体的問題について学部を越えて一緒に学ぶ授業は、現実社会との交流という実践性にとどまらず、専門分野による観点や方法の違いを理解し、互いを尊重しながら協力するコーディネート能力を養成する科目としての可能性を秘めている。

8 合理的な時間割の工夫

現行の時間割は、長年にわたる微調整等の積み重ねにより、それなりに機能しているが、反面で非常に入り組んでいる。ただし、現在設定されている時間割枠は、各学部が教養科目に課している修得単位（人社26、教育18、工10、農16）に連動したものであり、それなりに合理性を持っており、大きく変更するとむしろ混乱につながる。

しかし、平成19年度からは外国語の履修方法・形態が変更になることから、これに対応する時間割編成を検討する必要がある。この趣旨から、平成17年度第10回運営委員会（1月25日）において時間割ワーキンググループ（時間割WG）を設置して、合理的な時間割について検討することが決まった。

時間割WGでの検討は、平成18年3月に3回開催され、ほぼ結論が得られて、以下のような内容で企画・実施部門に報告されている。

1) WGの検討課題

- *平成19年度から外国語の履修方法・形態が変わることへの対応
- *平成19年度から転換教育が全学共通教育で実施されることへの対応
- *平成19年度以降に高年次教養科目を増やすことへの対応

2) 時間割編成の基本的考え方

- *時間割の変更に際しては、法人化以前に作成された全学共通教育運営委員会「全学共通教育時間割の作成について」（平成15年7月）を遵守する。
- *現行の時間割をもとに、必要最小限の変更で上記課題を解決する。

3) 外国語の時間割について

*1年次の前期に4コマ、後期に4コマを、前後期同じ時間枠で確保する。

*英語、英語以外の外国語の区別はせず、各学期4コマを確保する。

→人社及び教育枠：月5・6、水5・6、木5・6、金3・4

→工及び農枠：月7・8、火1・2、水3・4、金1・2

4) 転換教育及び高年次教養の時間割について

*転換教育は全学部とも1年次前期に開講する。

*人社及び教育は、現在専門教育として開講している時間枠を引き続き利用する。

*工及び農については、概ね6月までに開講時間枠を設定する。

*高年次教養の時間枠は、月1・2、木3・4の開放する案が有力であるが、どのような科目が開設されるか明確でないこともあり、今後さらに検討する。

<以上>

(参考)

【平成17年度大学教育センター運営委員名簿】

センター長	進藤 浩一／玉 真之介	大学教育センター
副センター長	岡田 仁	大学教育センター
部門長	中村 一基	教育評価・改善部門
センター専任教員	後藤 尚人／山崎 憲治	全学共通教育企画・実施部門
	江本 理恵	教育評価・改善部門
	福永 良浩	教育評価・改善部門
副学部長	高塚 龍之	人文社会科学部
	村上 祐	教育学部
	長谷川正之	工学部
	木村 伸男	農学部
教務関係委員長	吉村 泰樹	人文社会科学部
	長澤由喜子	教育学部
	渡邊 孝志	工学部
	谷口 和之	農学部
企画・実施部門選出	小林 睦	
評価・改善部門選出	高橋壽太郎	
学務課長	畑中 文穂	

【平成18年度大学教育総合センター運営委員名簿】

センター長	玉 真之介	大学教育総合センター
副センター長	岡田 仁	大学教育総合センター
部門長	後藤 尚人	教育評価・改善部門
副学部長	井上 博夫	人文社会科学部
	村上 祐	教育学部
	長谷川正之	工学部
	高畑 義人	農学部
教務関係委員長	吉村 泰樹	人文社会科学部

	押切 源一	教育学部
	成田 榮一	工学部
	谷口 和之	農学部
学務部長	畑中 文穂	

付記（平成18年9月4日）

上記8ページ「新分科会の区分と名称」については、その後若干の修正があり、平成18年7月の分科会登録時の区分と分科会名称は下記の通りである。

記

区 分	分 科 会 名
外国語科目	①外国語
健康・スポーツ科目	②健康・スポーツ
情報科目	③情報基礎
人間と文化	④思想と文化 ⑤心と表象
人間と社会	⑥公共社会 ⑦現代の諸問題
人間と自然	⑧生物の世界 ⑨自然と数理の世界 ⑩科学技術
環境教育科目	⑪環境
総合科目	

分科会登録の留意点（登録にあたっては次の点にご留意下さい。）

- 1 現在、全学共通教育を担当している教員は担当科目に対応する分科会に登録してください。二つ以上にまたがる場合（例えば、「生物の世界」と「環境」）はそれぞれに登録してください。（複数の分科会に所属する教員の「負担」については公平を期して、分科会及び大学教育総合センターで検討します。）
- 2 現在、全学共通教育を担当していない教員は、関心のある分野に最も近い分科会に登録してください。なお、外国語等の共通基礎科目については、当該の授業科目担当が可能な教員は、必ず該当する分科会を優先して登録して下さい。複数の分科会に登録することも可能です。
- 3 総合科目は、各分科会に所属する教員が横断的に協力して担当することになりますので、特定の分科会は設けず、各分科会代表による「分科会代表者会議」が実施に必要な連絡調整を行います。
- 4 新分科会名は、分科会発足後に必要に応じて変更することも可能です。
- 5 「全学共通教育の充実・発展に向けて：改革実施案」及び「寄せられた質問に答えて」もご参照下さい。その他不明な点があれば、大学教育総合センター専任教員山崎(yamaken@iwate-u.ac.jp 内線6925)までお問い合わせ下さい。

新分科会と現在の授業科目の対応表

区分	新分科会	対応現科目名	キーワード、備考等	現分科会	現授業科目
共通基礎科目	① 外国語	英語A 英語B 中級英語 初級ドイツ語(入門) 初級ドイツ語(発展) 中級ドイツ語 初級フランス語(入門) 初級フランス語(発展) 中級フランス語 初級ロシア語(入門) 初級ロシア語(発展) 中級ロシア語 初級中国語(入門) 初級中国語(発展) 中級中国語 初級韓国語(入門) 初級韓国語(発展) 中級韓国語 上級日本語A 上級日本語B 上級日本語C 上級日本語D 上級日本語E 上級日本語F	原書講読	外国語科目	英語A 英語B 中級英語 初級ドイツ語(入門) 初級ドイツ語(発展) 中級ドイツ語 初級フランス語(入門) 初級フランス語(発展) 中級フランス語 初級ロシア語(入門) 初級ロシア語(発展) 中級ロシア語 初級中国語(入門) 初級中国語(発展) 中級中国語 初級韓国語(入門) 初級韓国語(発展) 中級韓国語 上級日本語A 上級日本語B 上級日本語C 上級日本語D 上級日本語E 上級日本語F
	健康・スポーツ科目	② 健康・スポーツ	健康・スポーツA 健康・スポーツB 健康・スポーツC(シーズン)	健康・スポーツ科目	健康・スポーツA 健康・スポーツB 健康・スポーツC(シーズン)
	情報科目	③ 情報基礎	情報基礎	情報科目	情報基礎
教養科目	④ 思想と文化	哲学の世界 倫理学の世界 日本の思想と文化 アジアの思想と文化 欧米の思想と文化 日本の歴史と文化 アジアの歴史と文化 欧米の歴史と文化 ジェンダーの歴史と文化 岩手大学ミュージアム学	哲学、倫理、歴史、 文化人類学、文化論など	人間と文化	哲学の世界 倫理学の世界 日本の思想と文化 アジアの思想と文化 欧米の思想と文化 心の科学 適応の理解 日本の文学 言葉の世界 中国の文学 欧米の文学 芸術の世界 日本の歴史と文化 アジアの歴史と文化 欧米の歴史と文化 ジェンダーの歴史と文化 日本事情A 日本事情B 岩手大学ミュージアム学
	⑤ 心と表象	心の科学 適応の理解 日本の文学 言葉の世界 中国の文学 欧米の文学 芸術の世界	心理学、文学、芸術、美術、 音楽、演劇、映画など	人間と社会	市民生活と法 憲法 経済のしくみ 現代社会と経済 市民と政治 現代政治を見る眼 社会的人間論 地域と生活 地域と社会 社会統計学 対人関係の心理学 知的財産入門 著作権法概論 知財ワークショップ
教養科目	⑥ 公共社会	市民生活と法 憲法 経済のしくみ 現代社会と経済 市民と政治 現代政治を見る眼 社会的人間論 地域と生活 地域と社会 社会統計学 対人関係の心理学 知的財産入門 著作権法概論 知財ワークショップ	法律、政治、経済、社会、地理 社会心理学、地域など	人間と社会	市民生活と法 憲法 経済のしくみ 現代社会と経済 市民と政治 現代政治を見る眼 社会的人間論 現代社会の社会学 地域と生活 地域と社会 社会統計学 対人関係の心理学 知的財産入門 著作権法概論 知財ワークショップ キャリアを考える(19)
	⑦ 現代の諸問題	現代社会の社会学 日本事情A 日本事情B キャリアを考える(19)	人権、ジェンダー、国際理解、 健康問題、福祉、教育など	人間と自然	科学と技術の歴史 自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 生命のしくみ 生物の生態と進化 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則
	⑧ 生物の世界	生命のしくみ 生物の生態と進化	遺伝子、タンパク質、細胞など 植物、動物、進化、生態、 病気など	人間と自然	科学と技術の歴史 自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 生命のしくみ 生物の生態と進化 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則
教養科目	⑨ 自然と数理の世界	自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則		人間と自然	科学と技術の歴史 自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 生命のしくみ 生物の生態と進化 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則
	⑩ 科学技術	科学と技術の歴史		人間と自然	科学と技術の歴史 自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 生命のしくみ 生物の生態と進化 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則
	⑪ 環境	「環境」を考える 生活と環境 都市と環境 農業・生命と環境		環境教育科目	「環境」を考える 生活と環境 都市と環境 農業・生命と環境
総合科目		文化の伝統と現在 コミュニケーションの現在 現代社会をみる視角 岩手の研究 これからの健康科学 科学技術と現代社会 現代職業選択論 岩手大学論 図書館への招待(19)		総合科目	文化の伝統と現在 コミュニケーションの現在 現代社会をみる視角 岩手の研究 これからの健康科学 科学技術と現代社会 現代職業選択論 岩手大学論 図書館への招待(19)

高大連携に基づく「自主的な学び」を応援する学習支援講座 (案)

06.09.12 大学教育総合センター長 玉真之介

(趣旨)

- 高校での学習履歴から入学後の学習に困難を感じている学生に対して、「自主的な学び」の重要性を伝え、「自主的な学び」の意欲を喚起して、高校段階の基礎に立ち返って学び直すための学習支援講座を、杜陵高校との高大連携に基づいて開講する。
- 基本コンセプトは、授業についていけない学生に対する補修 (リメディアル) 教育というよりも、「自主的な学び」の面白さに気づく学生を少数でも確実に作っていくこと、その学生の「学び」が周辺の学生に影響を与え、「自主的な学び」が学内に広がること、である。
- それを踏まえて、TA を活用した「自主的な学び」のニーズに応える学習支援のプログラムを開発していくことが、次の段階のテーマとなる。これはかつて多くの大学で見られた教員や院生をチューターとする「自主ゼミ」を組織的に再建していく取組と言い換えることもできる。
- そのためにこの講座では、テーマ別に講義は行っても、講義は時間の半分程度にとどめ、残りの時間は、「わからない」ところを考えさせ、質問をできるようにするための学生個々に対する指導に使う。講師となつていただく杜陵高校の教員には、この趣旨を十分に伝え、ご理解いただいてご協力をいただく。
- 本学の教員にもこの趣旨を伝え、学生の自尊心を傷つけるような言動やそぶりは絶対にすることなく、基礎的な学力と「自主的な学び」の重要性を繰り返し伝え、この講座を活用することの意義を学生に伝えるように徹底する必要がある。

(概要)

(1) 開講科目

「数学」「物理」「化学」

(2) 開講期間

- ・10 月下旬から、毎週 1 回 9・10 校時に、10 回程度連続で学習支援講座を開講する。
- ・各回の小テーマを予め提示する。
- ・後期試験前の 2 週間程度を個別相談機関とし、受講者に限って受け付ける。

(3) 講義担当教員

杜陵高校からの派遣教員 3 名 (数学、物理、化学)

(4) 受講対象者

原則として 1 年生。学部は問わない。

(5) 単位認定等

単位認定の対象とはしない。

(6) 評価・改善

高大連携に基づく学習支援研究会を作り、開始後 5 週程度の段階で中間評価を行い、改善点について検討する。後期試験後に受講生を集め、自由な意見交換を行う。それらを踏まえて、来年度に向け改善点を協議する。

(7) その他

国際的人材育成に向けた外国語教育の総合的充実について(案)

06.09.13 学務担当理事室

趣旨

「国際的な通用性・共通性の向上と国際競争力等の強化を目指した改革を進めることが求められる。」とした平成 12 年の大学審議会答申「グローバル化に求められる高等教育のあり方について」以来、わが国の大学改革の 1 つのテーマは、国際的に活躍できる人材の育成である。

先頃開催された中央教育審議会第 56 回大学分科会（平成 18 年 7 月 24 日）でも、「我が国の大学の競争力強化と国際展開について」が議題となっている。「大学分科会・各部会等を踏まえた主な意見の整理」では、「2 国際的人材の育成」として「機能別分化を踏まえつつも、グローバルな社会を生きる『21 世紀型市民』の育成に向け、教養教育の役割が各大学にとって益々重要な課題に。」とされるとともに、「グローバル化の中で、英語の国際標準語化も進行。」として「大学の英語教育は、単に一般的技能ではなく、アカデミックな英語（English for Academic Purpose）の力量形成を目指すべき。」と指摘されている。

岩手県は、日本を代表する国際人・新渡戸稲造を生んだ地でもあり、本学としても国際的人材育成に向けた外国語教育の総合的な充実を図ることによって、本学の教育の特色としてより鮮明に打ち出すことが求められている。

具体的方策(案)

1. 全学共通教育改革案に基づく外国語教育の充実(学生の選択制、インテンシブ方式)
→平成 19 年度から実施（平成 19 年度については、旧システムと新システムが併存）
2. 統一試験(TOEFL)による能力の判定を現状の1回から2回に増やす
→現状の学生自己負担に加えて、1 回分を大学で負担することを検討
3. マルチメディア教室を増やし、Call システムの活用並びに自習環境を整備する
→50 名の部屋（3000 万円）平成 18 年度補正予算で 1 室、平成 19 年度予算で 1 室
4. 英語環境に慣れるための「イングリッシュ・カフェ」の開設
→国際交流センターと連携し、留学生や院生を活用する
5. ネイティブを嘱託講師として採用する
→1 コマ単位の非常勤雇用ではなく、1 週 8 コマ程度を担当する包括契約の講師を公募
6. 国際交流センターと連携して、海外留学を促進する
→国際交流センターのスーパーイングリッシュ・プログラムなどを充実する。
7. 外国大学と連携してESLプログラムを日本で開講する
→カナダやオーストラリアの大学と日本での出張開講を交渉する
8. その他

ボランティア活動の単位化について (案)

06.12.06 学務担当理事室

1. 経緯 (1)

中期計画にある「ボランティア活動の単位化」及び「課外活動、インターンシップ、ボランティア活動を奨励する」を念頭に、平成 17 年 1 月 12 日の平成 16 年度第 5 回大学教育センター運営委員会で、ボランティア・サークル活動を成績表に表記する提案がなされ、3 月 1 日の第 6 回運営委員会で「実施する旨を了承した。」(委員会記録)。

平成 17 年 7 月 13 日の平成 17 年度第 4 回大学教育センター運営委員会で、「昨年度の本委員会の了承を受けて実施にあたり実施方法の説明があり、今年度後期から導入」することとなった。その際、「中期計画にある『ボランティア等課外活動の単位化』の検討については、これから別途検討することとし、現段階では、記録簿に載せるところまでとする。」(委員会記録) こととなった。

2. 経緯 (2)

平成 17 年 1 月の学生不祥事に対して組織された調査委員会が、「学生による学生相談」(ピアサポート) の提案を行ったことを受けて、学内ボランティア活動としてピアサポーターを平成 17 年 7 月から募集し、早坂浩志教員の指導のもとで 9 月に合宿を含む 3 日間の研修を実施して、後期から「ピアサポート」活動を開始し、継続されている。

また、ガンチョンタイムでの意見交換の中から、図書館業務をサポートする図書館サポーターズの企画が生まれ、平成 18 年 3 月に募集を行い、大学教育総合センターの山崎憲治教員並びに図書館職員による研修の後、平成 18 年 4 月から活動を開始した。9 月には、県立図書館の訪問などの研修も行った。

3. 「コミュニティーサポート実習」の開設

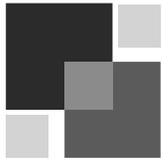
ボランティア活動は、「本来、代償を求めない行為」という理解から、単位化は馴染まないという意見がある。その一方で、学生の人間形成やキャリア形成の観点からボランティア活動への参加者を増やし、大学としても公式に推奨していることを示す方法として、単位認定は 1 つの有力な方策であるという意見もある。

以上から、大学が責任持って研修を行い活動時間数も記録しているピアサポートと図書館サポーターズをボランティア活動の単位化の意味と効果を検証するパイロットケースとして、「コミュニティーサポート実習」という科目の開設により単位認定に道を開く。ただし、枠外として卒業要件単位とはしない。

4. 単位認定の方法

- ①一定の時間数以上の研修への参加を単位認定の要件とする。
- ②保健管理センター及び図書館で活動時間を記録し、証明する。
- ③単位認定の希望者には、①②の必要時間数をクリアした段階で活動への提言などを内容とするレポートを提出し、早坂教員、山崎教員が評価する。
- ④自学自習時間(研修及びレポート作成)を考慮して、45 時間 1 単位を認める。ただし、ボランティア活動の趣旨から、当面は「認定」のみとして、成績評価は行わない。
- ⑤卒業要件単位には含めない。

以上



資料

運営委員会 会議録

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 1 回)記録

日時：平成 17 年 4 月 8 日(火) 14:05～15:15

場所：教育学部会議室

出席者：進藤、岡田、中村、石川、後藤、江本、高塚、村上、長谷川、木村、吉村、長澤、渡邊、谷口、高橋、畑中

欠席者：小林

審議に先立ち、平成 17 年度第 1 回の委員会開催にあたり、進藤委員長から挨拶があった後、各委員の自己紹介があった。続いて、前年度第 7 回委員会の記録(案)を確認し、了承した。

議題

1 大学教育センター専任教員の採用について

委員長から、資料 2-1 及び 2-2 に基づき、大学教育センター専任教員(教授または助教授)1 名及び平成 17 年度概算要求事項に係る教員 1 名を採用するため、1 つの教員選考委員会を設置したい旨の説明があった。委員会のメンバーには、岡田副センター長、吉村、村上、長谷川、谷口委員を選出し、採用任期の明示方法など選考委員会で検討願ひ、公募要項(案)を次回の本委員会に提案願ひすることとした。概算要求事項に係る教員の選考については、当該プロジェクトの当事者と随時相談しながら進めることを了承し、「職務内容」については、もう少し具体的に表現するよう求められた。

2 概算要求事項に係る仕様策定委員会の設置について

委員長から、委員会の設置については、後藤委員を中心に検討願ひたい旨が述べられ、後藤委員から資料 4 に基づき、事業計画の概要について説明があった。

次いで、委員長から当該仕様策定委員会の委員として大学教育センターから、後藤、江本教員を、情報処理センターから中西教員及び加治技術職員、学務部から畑中学務部長及び福山教務情報係長を候補者とする提案があり、これを了承した。

3 「特色 GP」の応募について

委員長から、資料 4 に基づき、人文社会科学部から提出のあった「総合化を目指した教育システムの重層的展開」を、大学として応募した旨の説明の後、高塚委員から山崎教員の退職により取組担当者になった旨が述べられ、加えて、後藤委員からプログラムの概要説明があった。

人文社会科学部単独の取組は、大学改革の方向に逆行することにならないかとの意見が述べられたが、本取組の考え方は、1 学部に限らずに学内に拡張できるシステムであるとの回答があった。

また、役員会等で全学的に確認するよう求められたほか、今回の取組は、財政的な支援は期待できないなどの意見が述べられた後、応募を追認した。

4 その他

(1) 成績評価「保留」について

渡邊委員から「保留」の取扱についての検討状況について質問があり、委員長からもう少し先で検討したい旨の意向が述べられた。

報告

1 平成 17 年度の転学科・転課程報告

委員長から、資料 4 に基づき、農学部の転学科結果が報告され、農学部委員からは、転科希望者が 7 名あり、学士編入学試験程度の個別試験を課して選考した旨の補足説明があった。

また、工学研究科で実施した転専攻については、工学部委員から「大学院学則で定めていない事項は、大学学則を準用する。」との規定を受けて、工学研究科独自で規則を制定し、実施した旨の説明があった。

2 その他

(1) 「全学共通教育の更なる発展に向けて：改革骨子案」説明会報告

委員長から、資料6に基づき、各学部で行った説明会において述べられた意見・要望等の報告があった。

資料中の文字（特認教授を特任教授に）訂正をした後、各学部での検討資料として利用願いたいこと。また、骨子案については、次回の委員会で検討したい旨の付言があった。

(2) 教育評価・改善部門報告

中村部門長から、16年度前期授業の学生による授業評価アンケート結果に基づき、5月9日から13日までの間、各分科会毎の優秀授業を公開すること及び6月6日から9日までの間は、授業改善の一環として、全ての全学共通教育の授業を学生の保護者等に一般公開することとした旨の報告があった。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 2 回)記録

日時：平成 17 年 4 月 26 日(火)13:15～15:19

場所：人文社会科学部第 2 会議室

出席者：進藤、岡田、中村、石川、後藤、江本、高塚、村上、長谷川、木村、長澤、渡邊、谷口、横山(小林代理)、高橋、畑中

欠席者：吉村

陪席：玉(次期大学教育センター長予定)

審議に先立ち、教育評価・改善部門の委員が確定したこと及び委員の交替に伴う第 1 回委員会資料 1 の修正版を配付した後に、第 1 回委員会記録案を確認し、了承した。

議題

1 大学教育センター専任教員等の採用について

岡田副センター長から、資料 1-1 に基づき、大学教育センター専任教員(教授)1 名の採用に係る募集要項案の説明があり、男女の区別なく、外国人の採用も考慮することを確認した上で、要項案を了承した。

さらに、岡田副センター長から資料 1-2 に基づき、平成 17 年度概算要求事業に係る教員(助教授または講師)1 名を採用するための募集要項案について、説明があり、要項案を了承した。

なお、委員長から、大学教育センターの助手定員を絡めて採用の任期を 5 年とするが、このためには助手分の定員を使わないこと及び了承後は、学内、各国立大学及び科学技術振興機構を通じ募集することの付言があった。

2 「全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案」について

委員長から、資料 2 に基づき、前年度の第 7 回本委員会で、4 月下旬に学部の意見を持ち寄り検討することとしていた旨の説明があり、人文社会科学部からは口頭で、その他の学部からはそれぞれ書面に基いて学部の意見が述べられた。

委員長から、部門会議では、各分科会を通じて意見の遣り取りを行っているが、急いで結論を出す必要があるため、出された意見は、項目毎に意見を纏めて整理し、大学教育センターとしての考え方や回答を付して纏めた旨が述べられ、継続して審議することとした。

3 成績評価「保留」について

委員長から、前年度の第 6 回本委員会で、来年度に検討することとしていた旨の説明があり、資料 3 に基づき、事務部から提案のあった取扱案について検討し、これを了承した。

また、保留は、学生が別の授業を履修申告できないことに繋がるので、本来は「保留」は好ましいことではないこと及び保留の措置は教員が行うことを確認した。

さらに、定期試験等の答案は、学生に返さなくとも要求がある場合は、閲覧させなければならないので、5 年間は答案を管理する必要がある旨を確認した。

4 「現代 GP」について

委員長から、資料 4-1 及び 4-2 に基づき、今年度の「現代的教育ニーズ教育支援プログラム」に応募しようとする「知的財産関連教育の推進」及び「地域活性化への貢献(広域展開型)」の 2 つのテーマに係るプロジェクトについて説明があり、原案を了承した。

報告

1 教育評価・改善部門報告

中村部門長から、資料5-1に基づき、平成17年度当初に教育評価・改善部門で計画している事業について報告があり、資料5-2で、5月9日(月)から13日(木)まで行われる平成16年度前期優秀授業科目の授業公開について報告があった。

2 その他

(1) 高大連携公開講座報告

委員長から、資料6に基づき、前期の5科目の授業に3つの高校から12名の高校生が参加している旨の報告があった。

(2) ボランティア、課外活動等の取扱について

委員長から、前年度の第6回本委員会で、成績原簿に記載することについて了承されていることから、17年度後期から実施できるように、次回の本委員会に提案したい旨が述べられた。

(3) 次回の委員会開催

委員長から、今回は、「全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案」についての各学部の意見等を整理してから開催したい旨が述べられた。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 3 回)記録

日時：平成 17 年 6 月 2 日(木)16:30～19:00

場所：学生センター会議室

出席者：進藤、岡田、中村、石川、後藤、江本、高塚、村上、長谷川、木村、吉村、長澤、渡邊、谷口、高橋、畑中

欠席者：小林

審議に先立ち、第 2 回委員会記録案について、委員長から、議題 4 の記録のうち、「地域活性化への貢献(広域展開型)」は、申請を計画している「教員養成 GP」のものに類似しているため取り下げること及び報告 2(2)については、提案を次回に延期する旨の説明があり、記録を確認した。

また、長谷川委員から、議題 3 について、「保留」に限定し、誤解のないような成績報告の注意書きを記述して、各教員に書面で周知願いたいとの希望が述べられ、これを了解した。

議題

1 岩手大学共通教育規則の一部改正について

委員長から、資料 1 に基づき、平成 17 年からの自由選択科目、高年次科目の開設に伴う改正の提案があり、事務局からは、別表二では 3 科目とも一括の取扱に受けとられるが、「現代社会と著作権(放送大学プロジェクト科目)」は、高年次科目としているので、さかのぼって適用できるよう提案する旨の補足説明があった。

また、別表二では科目を書ききれないので、今後は別紙「自由選択科目等特別科目の学生の適用入学年度一覧」により、本委員会で決定する方法で取扱いたい旨の提案があり、これを了承した。

2 「全学共通教育の更なる発展へ向けて：改革骨子案」について

委員長から、改革骨子案の方向性について、資料「岩手大学の中期目標・中期計画(素案)」との関連が述べられ、実施に向けての具体的な作業と並行して全教員担当体制を議論したい旨の説明があり、併せて、改革スケジュール(案)の説明があった。委員からは、次のような意見が述べられた。

- ・改革骨子案に対する学部の意見が取り入れられていないことが、具体的体制の検討に入っても反映されないのではないかという不信に繋がっている。
- ・新分科会設置の前に行わなければならない議論を十分に行う必要があるため、18 年度からの改革は、時間的に難しい。
- ・問題があるので、是非とも 18 年度から体制を導入したい。
- ・18 年度からの実施予定では、審議を急がなければならないので、課題をできるものとできないものを整理して検討を進める方がよい。
- ・「全教員担当体制」は、分科会への登録がないと議論を進められない。
- ・学部の存続のために現状では、学部の専門教育を魅力あるものにすることが急務で、担当について、優先順位を付けるなど学部毎に調整してもらいたい。
- ・検討方法は、学部からの意見に対し、大学教育センターが応えるという方法ではなく、論点を抽出して検討するものではなかったか。
- ・体制について議論する具体的なものは、大学教育センターからも提案するが、学部からも提案願ひ、全教員が関心を持ってもらうことから始めたい。

上記のような議論の後、改革スケジュール(案)のうち「新分科会の提案」事項のみが、了承された。

次に、資料「改革骨子案に対する意見のまとめ」について、注意して見て欲しい部分の説明があった後、改革骨子案(V.3)は過渡的な意見であることを確認したうえで、項目毎に検討した。

「全体的事項」

クラスサイズの縮小は、担当する教員の増員に繋がり教員の負担になる。

「1 岩手大学共通教育の区分」

工学部から、「初期ゼミ」を全学共通教育科目に位置付けて欲しい旨の提案があり、今後検討することとした。

「2 岩手大学共通教育の意義と特色」

「イーハトーブ教育」は、一部の意見で、知名度が低い …… 学部 (人文社会科学部、工学部、農学部) の教務委員会を通じて出てきた意見

「3 全学共通教育の実施体制」

「実施体制」を「登録体制」と誤解されている可能性がある。

学部によっては、一部の分科会に集中し所属しても会議に出席しないなど無責任体制になる恐れがある。

「7 外国語教育の強化」

「履修形態を統一して実施する必要はありません。」は、4 学部が、統一する必要はないということで、学部毎の履修制限を付けることが出来る。

工学部は、英語とそれ以外の外国語の履修単位数を 8 と 0 または 4 と 4 の選択とする。よって、全学的に、6 と 2 の組み合わせは行わない。

「10 環境教育科目の区分変更」

工学部から、「環境教育科目」を本学が重視しているからとの理由で、他の語学などと同様の共通基礎科目に位置付けるのは無理があり、これまでのように教養科目としたい旨の意見があった。

「15 全学共通教育科目の開講年次」

工学部では、これ以上専門科目を 1 年次に履修させるのは無理で、それ以外の科目は、積み上げ式の科目しかなく無理をすれば、教育が歪んでしまう。

「その他: 全学共通教育の修得単位について」

現在の教育カリキュラムの中で、どこまでやれるのか工夫して実施する。

今後は、これらの意見を基に、更に内容を詰めることとした。

報告

1 教育評価・改善部門会議報告

中村部門長から、「全学統一拡張 Web シラバス」のフォーマットについて、検討中であり、次回の本委員会に提案したい旨の報告があった。

2 その他

(1) 次回の委員会開催について

委員長から、日程調整のうえ、開催日を決めることが述べられた。

(2) その他

委員長から、退任に伴う挨拶があり、大学教育センター運営についての謝辞と引き続きの協力依頼が述べられた。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 4 回)記録

日時：平成 17 年 7 月 13 日(水)16:30～18:38

場所：学生センター会議室

出席者：玉、岡田、中村、石川、後藤、江本、高塚、長谷川、木村、吉村、長澤、渡邊、谷口、小林、畑中

欠席者：村上、高橋

審議に先立ち、第 3 回委員会記録案について確認した。

議題

1 全学共通教育改革の進め方について

委員長から、資料 1 に基づき、全学共通教育改革について大学教育センターが中心になって検討してきたが、18 年度から実施するには、議論する時間が足りないので、できることの検討を進めていくが、18 年度実施は断念し、19 年度実施に向けて検討して行きたいとの提案があり、これを了承した。

工学部委員から、改革骨子案は、この委員会で十分に議論されていない旨の意見があり、委員長からは、次回の本委員会で新分科会案を提案し検討をお願いしたい旨が述べられた。

また、大学の教養教育の理念と特色については、学務担当理事室で原案を検討し、岩手大学教育推進本部で審議し策定する旨の付言があった。

2 岩手大学における全学共通教育の理念と特色について

委員長から、資料 2-1 に基づき、全学共通教育については、「持続可能な開発のための教育」(ESD) を柱に据えて、社会との関係を意識したものに変えて、今後中味を検討して行きたい旨の説明があった。

については、多くの機会をとらえて意見を求め多面的な議論を踏まえて、10 月頃に教育推進本部で決めたい旨が述べられ、意見交換があった。

- ・国連の掲げるテーマを理念とすることで政治に関わりを持つものにならないかとの意見については、日本政府のみならず日本 NGO も提唱したことであり、積極的に受けとめて推進していくことに問題はないとの見解が示された。
- ・伝統を踏まえて大学の個性を出すことはよいが、人材養成の強調は、当たり前のことで個性になるのか、ESD の「社会・文化」、「環境」、「経済」の 3 分野に分けると、ESD の理念からはずれないだろうかとの意見には、地域の中で総合して社会を変えて行くような、実践に結びつく教育を志向しているとの説明があった。
- ・ESD という既成のものを横糸として岩手大学の理念に取り込むのは、縦糸となる大学独自の理念が必要であるとの意見には、今後、論点として議論していくとの説明があった。
- ・岩手大学の教育目標の 5 点を抑えた上で、教育する側の考え方が必要である。全学共通教育企画・実施部門で議論していく中で、大学の教育目標の 5 点にフィルター的なものを加味する必要があるとの意見が述べられた。

また、委員長から、もう少し内容を詰めた上で全教員に通知し、教員からの意見を求めるとの説明があった。

3 「全学共通教育の更なる発展に向けて：改革骨子案(V.3)」に基づく平成 18 年度一部実施項目について

岡田全学共通教育企画・検討部門長から、資料 3 に基づき、具体的な提案説明があった。

(1) 高校の新指導要領により入学してくる 18 年度入学生について、情報科目の早期の単位認定が必要で、具体的には情報分科会で検討してもらうとの説明があった。

議論の後、18 年度の早期認定は、応急的な措置であり、19 年度から本格的に対応する。また、工学部委員からは、毎年度に提案するよう求められた。

(2) 中期計画にある「オムニバス方式の学際的な授業科目における講義間の密接な連携を図る。」について、総合科目分科会、環境科目分科会で検討して整ったもので可能なものは後期から実施する。

2つの提案について、これを了承した。

4 拡張 Web シラバスの実施要項案について

教育評価・改善部門江本委員から、資料4に基づき、要項案について具体的な説明があった後、幾つかの質疑応答があり、以下のことを確認した。

- ・教員が入力するのは、平成19年度からのシラバス、授業記録であり、強制ではないこと。
- ・実質的に教員が使えるように環境整備、人的な配慮が必要で、学習会の実施や使いやすい機能への改良などを予定していること。

委員長からは、実施要項の提案のとおり実施したい旨の提案があり、要項案を学部を持ち帰り、次回の本委員会に学部で出された意見・質問等提供願うこととした。

5 その他

(1) ボランティア活動及び課外活動等の取扱いについて

委員長から、資料5に基づき、昨年度の本委員会の了承を受けて、実施するに当たり実施方法の説明があり、今年度の後期から導入したい旨の提案があった。

以下の点を確認し原案を了承した。

- ・具体の実施では、課外活動は、サークルの主将等にも確認すること。
- ・ボランティア活動については、45時間以上のものを取り上げること。
- ・中期計画にある「ボランティア等課外活動の単位化」の検討については、これから別途検討することとし、現段階では、記録簿に載せるところまでとする。

(2) 大学教育センター運営費の平成16年度決算及び17年度予算案について

事務局から、資料6-1及び6-2に基づき決算報告及び予算案の説明があり、原案どおり了承した。

(3) 学生の自習室等の整備について

委員長から、資料7に基づき、平成17年度の岩手大学中期計画の「IT教室を開放するとともに、図書館、自習室等を整備し、自主学習を支援する。」について、本委員会の審議事項ではなかったが、検討する適当な審議機関がないことから本委員会に検討の依頼があった旨の説明があり、本委員会の検討事項とすること及び達成の目標時期を第3四半期とすることを了承した。

(4) 運営委員会の決定事項の確認について

学部委員から、学部の教授会で報告する際に、本委員会での決定事項なのか、更に全学的な機関で承認等の手続きが必要とするのか不明なので、整理して欲しい旨の意見が述べられ、委員長から、本委員会の権限で決められるものについては、最終決定である旨をその都度確認して取り扱う意向が示された。

報告

1 全学共通教育企画・実施部門報告

岡田部門長から、本委員会で認められた新分科会の提案について、部門の拡大スタッフ会議で検討中であり、次回の本委員会に提案したいこと。カリキュラムの国際化の検討について、国際交流センターと協同で両センターのワーキンググループで検討すること及び高大連携講座において、授業担当教員に参加高校生の成績評価の報告を依頼した旨の報告があった。

工学部委員から、この度作成された「大学教育センター年次報告2004」の編集方針が、本委員会に諮られていないとの指摘があり、次回からは本委員会での検討を経て作成することが確認された。

2 教育評価・改善部門会議報告

中村部門長から、資料8-1及び8-2に基づき、全学共通教育科目に係る学生による授業改善アンケートに基づく平成16年度後期優秀授業の表彰を7月19日(火)に行うこと及び今年度の前期授業についてもアンケート

調査を行うこと。また、9月に実施のFD研修について、参加者の推薦を依頼した旨の報告があった。

3 専門教育関係連絡調整部門会議報告

玉部門長から、資料9に基づき、6月23日(木)に意見交換を行ったこと。専門教育関係連絡調整部門の任務については、これまでの連絡調整に加えて、見直しや企画提案についても扱っていくことが報告された。

また、部門会議では22単位の履修制限等について7月下旬に審議を予定し、全学共通教育科目の非常勤講師手当の削減分は、運営委員会で検討願いたい旨の報告があった。

4 その他

(1) 委員長報告

委員長から、資料10-1及び10-2に基づき、基礎教育センターの設置などで学生の取組支援に熱心な金沢工業大学の視察について報告があった。また、資料11に基づき、理事室で検討している3学期60分授業の導入について報告があった。

(2) 次回の委員会の開催について

第5回の本委員会の開催日程を、7月28日(木)午後3時30分から開催することとした。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 5 回)記録

日時：平成 17 年 7 月 28 日(木)16:03～18:18

場所：学生センター会議室

出席者：玉、岡田、中村、石川、後藤、江本、高塚、村上、長谷川、吉村、長澤、渡邊、谷口、高橋

欠席者：木村、小林、畑中

審議に先立ち、第 4 回委員会記録案について確認した。

先に事務局から 7 月 27 日に配付した記録(案)の一部を修正し確認をお願いする旨の説明があった後、議題 2 の意見交換の内容のうち、2 行目「日本政府の提唱したことであり、…」を「日本政府のみならず日本 NGO も提唱したことであり、…」と修正したほか字句の訂正があり了承した。

議題

1 大学教育センター専任教員人事について

岡田教員選考委員会代表から資料 1、1-1 及び 1-2 に基づき、大学教育センターの専任教員 2 名を採用するための選考委員会における選考経過及び最終候補者について説明があった後、最終候補者に係る質疑応答を行った。

委員会にオブザーバーとして出席している石川明彦委員をのぞいた出席者数の 3 分の 2 以上の承認を条件とする旨を確認し、投票の結果、山崎憲治氏、講師として福永良浩氏を承認した。また、面接時に教授は任期 5 年で再任はないこと、講師には再任はない旨及び両方とも採用は 10 月 1 日とする旨を申し渡したとの付言があった。

2 英語教育に対する全学協力体制について

委員長から、非常勤講師手当の削減及び平成 19 年度から新カリキュラムに移行した場合の英語履修単位の増加に対応する必要から、全学共通科目の全学教員担当体制に向けての対策として、平成 18 年度から英語の授業で全学体制を導入したい旨の提案があった。

岡田全学共通教育企画・実施部門長から資料 2-1 及び 2-2 に基づき、英語授業について明らかにクラス担当教員が不足するため、原書講読的なものを共通教育に活用し、週 1 回程度担当して欲しい旨の説明があった。

委員からは次のような意見が述べられた。

- ・ 共通教育とは別に専門分野の原書講読をほとんどの学部教員が担当し単位化しているので共通教育との統合性は難しい。(工)
- ・ 学科においてだいぶ状況は異なるが、教員の英語力として英語は担当できるが時間の確保が難しい。(農)
- ・ 教員負担の問題があり、英語だけ取り上げて検討するのは難しい。(農)
- ・ 専門教育科目として卒業研究論文作成のため週 2 時間程度 15 回以上ボランティアで実施している。(農)
- ・ 卒業論文と共通教育で求める英語は異なると思われる。(教)
- ・ 全学共通教育改革を含めて英語教育担当を考えて欲しい。(教)
- ・ 専門教育科目のものを共通教育科目にそのまま単位を振替えるわけにはいかない。(人)

委員長からは全学部の意見を踏まえて、改めて提案する旨が述べられ、学部では授業の一部で英語を扱う科目を含めて、英語教育の現状を調査いただくよう付言があった。委員からは非常勤講師手当の削減について非常勤講師の効率的採用により、教育の質の維持を求める意見が出された。

3 拡張 Web シラバスの実施要項案について

委員長から前回の委員会で依頼していた実施要領案について、学部からの意見の収集を求めていたことについて意見の開陳があった後、仕様策定委員会で具体的に内容を練り上げて発注することとして要項案を了承した。

- ・ 人文社会科学部：教授会で、学内向けホームページで公表し、意見は直接大学教育センターに述べるよう紹介した。

- ・教育学部：特に意見は寄せられなかった。
- ・工学部：無駄な機能を付けて費用が高くなるのは好ましくないこと及び仕様策定委員会で専門的(詳しい)知識をもった教員を通じて述べるかも知れない。
- ・農学部：学内向けホームページに掲載するので、意見は直接大学教育センターに寄せてもらうように周知した。

4 卒業見込証明書の交付時期の早期化について

委員長から、全学就職委員会より学生の就職活動支援のために本委員会に検討の依頼があった旨の説明の後、全学就職委員会委員である渡邊委員から補足説明があった。

全学一括発行とするために事務局から提案された資料3による諸条件について、工・農学部は対応可能としたが、その他の学部は持ち帰り検討したいとして、継続審議とした。

5 その他

(1) 新分科会の提案について

岡田全学共通教育部門長から、資料4に基づき、全学部でたたき台として検討していただくために新分科会の構想の基準を本委員会に提案する旨の説明があった。委員長から提案について学部の教員の意見を収集してほしい旨の依頼があった。工学部委員会から転換教育として初期ゼミなどを共通教育に含めてほしい旨の意見が述べられたが、委員長からどこでやるかは定まっていないので全教員担当体制の議論をからめて今後検討したいとの回答があり、さらに全学教員が分科会に入る必要があるものを作り上げるために今回提案した旨の付言があった。

(2) 転学部の検討について

委員長から、今回の議題から取り下げる旨が述べられた。

(3) 高大連携「ウインターセッション」の計画について

委員長から「平成16年度第5回大学教育センター運営委員会」の記録により、本年度の同事業については工・農学部が中心となって企画願いたい旨が述べられたが、農学部委員から申し送られていないとの疑義が述べられ、委員長から、事実の確認等を踏まえて学部で計画願いたいとの依頼があった。

(4) 「全学共通教育の更なる発展に向けて：改革骨子案(v.3)」の議論について

工学部委員から新分科会の提案について、学部に諮るけれど、先に提案のある「全学共通教育の更なる発展を目指して：改革骨子案(v.3)」の議論を進めながら分科会についても議論を進めることについて確認が求められ、次回以降そのように進めることとなった。

報告

1 全学共通教育企画・実施部門報告

岡田部門長から、資料5に基づき、「岩手大学高大連携講座」の協定締結高校について、新たに7月6日に盛岡市立高校及び市内の私立5高校と締結し、後期の全学共通教育科目の授業から参加する旨の報告があった。

前回の本委員会です承された「情報科目の早期単位認定」については、情報分科会で検討を進めていること及び「オムニバス授業科目の講義間の密接な連携を図ること」について、該当する科目の分科会で検討を始めた旨の報告があった。

2 教育評価・改善部門会議報告

中村部門長から、資料6に基づき、9月1・2日に開催するFD研修実施要項(案)について説明があった。

3 その他

(1) 現代GPについて

委員長から本学から申請したプログラムについて7月21日に面接審査が行われた旨の報告があった。

(2) 次回の委員会の開催について

委員長から9月中旬に開催したい旨が述べられた。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 6 回)記録

日時：平成 17 年 9 月 14 日(水)15:02～18:12

場所：学生センター会議室

出席者：玉、岡田、中村、後藤、江本、高塚、長谷川、吉村、長澤、渡邊、谷口、小林、高橋、畑中

欠席者：石川、村上、木村

審議に先立ち、第 5 回委員会記録案を確認し、了承した。

議題

1. 岩手大学学則等の一部を改正する学則(案)について

委員長から資料 1-1～5 に基づき、大学設置基準等の一部改正に伴う学則及び学内規則等の一部改正案について提案があり、事務局から具体的な対象外国大学日本校の紹介と大学院学則については、入学資格(第 24 条及び第 25 条)に項目を追加する旨の補足説明があった。

原案を了承した後、委員長から 10 月の教育研究評議会に諮る旨の付言があった。

2. 全学共通教育の更なる発展に向けて：改革骨子案(v.3)について

—新分科会について—

委員長から、改革骨子案の検討を再開する旨の提案があり、後藤委員からは資料 2-2 に基づき、改革骨子案に対する学部の意見に対する大学教育センターの見解のまとめが説明された。

工学部委員から、問題となる項目を順次洗い出し、本委員会で議論して確定してはどうかとの提案を受けて、理念の議論は棚上げしておき、具体的項目を検討することとした。

「1. 岩手大学全学共通教育の区分」

委員から以下のような意見が出された。

- ・ 転換教育の共通部分の検討が必要である。
- ・ 全学共通教育の方向によって教育内容が変わってくるので、担当はそれぞれの学部で行うが、位置づけは全学共通教育としてはどうか。
- ・ 委員長から当日配付資料に基づき、愛媛大学の例を掲げ、スタディースキルなどの共通する教育は全学共通教育としているとの紹介があった。

委員長から、転換教育を専門教育とするか全学共通教育とするかを、次回以降に提案検討したい旨が述べられた。

「2. 全学共通教育の実施体制」

委員から以下のような意見があった。

- ・ 教育の担当・責任の部分が不明確なままで、なし崩しの議論はできない。
- ・ 今までの共通教育のかなりの部分を人文社会科学部に依存している経緯を踏まえて議論する必要がある。
- ・ 共通教育の責任・負担体制を明確にしてほしい。学部のバックアップ無しには共通教育の担当はできない。
- ・ 委員長から、授業の負担について数値的資料を提出して次回以降に議論するが、全教員が共通教育に関心を持つというコンセンサスを得たい旨が述べられた。

新分科会の提案について本委員会での議論を優先すべきで、ただちに教員個々に意見を求めるような方式には疑問があるとの意見に対し、岡田副センター長から、全学の教員に大学教育センターで考えている案を見てもらうことが趣旨であり、本委員会の議論が優先されるとの経過説明があった。

その他の項目についても、次回以降の継続審議とした。

3. 転学部について

委員長から、資料 3-2 に基づき、今年度の中期計画事項であり、また監事からの意見もあったもので、実施

に向けた検討をしたい旨の提案があり、転学部についての考え方、実施のスケジュールの試案が説明され、意見交換があった。

- ・転学部希望者はごく稀だろうが、制度を作っておくこと自体はあっても良い。
- ・転学部の資格は各学部で検討し、受け入れの基準・条件は、学部、学科によって違って来るはずである。
- ・転学部前の修得単位を各学部の履修単位にどこまで認めるか検討する必要がある。

継続審議として、試案を学部を持ち帰り、その下の規則を検討して結果を次回以降に報告願うこととした。

4. 成績評価の適正化について

委員長から、資料3-1に基づき、中期目標では本年度で達成しなければならない事項としているが、教育評価・改善部門で問題を整理し、次回以降に原案を提案して検討したい旨の説明があった。

工学部からは、授業の現状を分析・把握する目的で15年度後期、16年度分について授業実施回数、成績評価を調査し授業実施報告書を作成した旨の報告があった。

委員長から、平成13年度の教育協会のワーキンググループにおける検討状況の説明があった後、全学統一拡張webシラバスの開発の進展状況に合わせて今年度実施できるものは実施したい旨の付言があった。

5. その他

(1) 英語教育に対する全学協力体制について

前回の委員会以降提供された学部の意見に加えて、

- ・転換教育の共通教育への導入はできないが、英語教育は良いという議論はおかしい。
- ・専門教育としている英語をそのまま教養科目にできるのか、両者は、同じものではないので、それを単位として共通教育に取り込めるものではない。

などの意見があった。

委員長から、継続審議として次回には具体的案を提案したい旨の発言があり、趣旨についても継続して検討することとした。

(2) 卒業見込証明書の早期交付について

委員長から前回の委員会で学部持ち帰り検討をお願いしていた旨の説明の後、教育学部から、3年次までの取得単位数と卒業研究の着手を条件にし、他の表記は人文社会学部と同様とする旨が提案された。

原案を了承し、成績提出の遅れが卒業見込証明書交付の遅れる原因になるので全学的協力が求められた。

(3) 高大連携「ウィンターセッション」の計画について

前回の委員会で工・農学部で、検討をお願いしていたもので、工学部からはワーキンググループで検討中である旨の説明があった。

(4) 後期全学共通教育科目の授業公開について

委員長から、資料5に基づき、後期の授業公開について提案の後、中村教育評価・改善部門長から実施計画、広報の仕方について補足説明があり、原案を了承した。

(5) 非常勤講師の削減計画について

委員長から資料6に基づき、組織検討委員会で非常勤講師手当を5,000万円削減する期間を、第1期中期目標・中期計画中の期間とし、18年度については10%削減することが了承された報告があり、18年度及び19～21年度に分けて採用計画の提出が求められる旨の説明があった。

- ・18年度の削減には非常勤講師旅費分も含まれる。
 - ・共通教育については18年度に改革が実施されないため10%削減は厳しい状況である。特に、英語のクラスは減らさないのに非常勤講師を減らすというのでは実施は難しい。
 - ・学部には3%の削減補助があるのに、共通教育にはない上に削減するというのは厳しいので組織検討委員会に再提案してほしい。
 - ・予算の効率の良い使い方を要望すべきである。
- などの意見があった。

報告

1. 東北・北海道地区一般教育研究会報告

岡田副センター長から、資料7に基づいて報告があった。

2. 全学共通教育企画・実施部門報告

(報告事項から取り下げられた。)

3. 共通教育評価・改善部門報告

中村部門長から資料8に基づき、9月1日(木)、2日(金)に実施したFD合宿研修会について、提出されたアンケートの集計結果も含めて報告があった。

4. 愛媛大学視察報告

委員長から、資料9及び当日配付資料に基づき、愛媛大学の教育活動の状況が報告された。

5. その他の報告

(1) 仕様策定委員会報告

後藤委員から当日配付資料に基づき、全学統一拡張webシラバス・システムの仕様策定作業の経過と今後の稼働までの予定が説明された。

(2) 現代GPについて

委員長から応募の事業が採択された旨の報告があり、プログラムの概要について説明があった。

また、地域連携推進センターの佐藤祐介教員が中心となって実施していく事業であるが、共通教育、専門教育の両方について協力が求められた。

畑中委員から、事業として開設する新しい授業科目の時間割への組み入れについて後期の間に検討して欲しい旨の発言があった。

(3) 第7回運営委員会の開催について

委員長から10月中旬に予定する旨が述べられた。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 7 回)記録

日時：平成 17 年 10 月 19 日(水)15:05～18:05

場所：学生センター会議室

出席者：玉、岡田、中村、山崎、後藤、江本、福永、長谷川、吉村、長澤、渡邊、谷口、小林、高橋、畑中

欠席者：石川、高塚、村上、木村

審議に先立ち、第 6 回委員会記録案を確認し、議題 2「1」委員からの意見中 4 行目「ステータススキル」を「スタディースキル」に、報告 5(1)「後藤委員会から」を「後藤委員から」にそれぞれ字句を訂正して了承した。

また、英語教育に対する全学協力体制について、人文社会科学部と教育学部の意見の提出を求められ、次回に提供することとした。

議題

1. 大学教育総合センター構想(案)について

委員長から資料 1 に基づき、大学教育の入口から出口まで全体の連携を図る必要があり、委員会形式から組織のスリム化を図ること、センター会議は学部長等連絡会的位置付けとすること及び各部門長は、当面センター長が兼ね、将来は別の者を選出する予定であるなどの説明があった後、構想(案)について種々意見が述べられた。

検討の結果、運営委員会には必要に応じて課長の出席を求めるほか、運営委員会の効率的審議や学部意見を反映させるために、副学部長の外に各学部選出委員 1 名の参加を求めるという修正を加えた上で、案を了承した。

続いて、入試部門に専任教員(教授職)1 名を採用するについて、現行の運営委員会規則を準用して、次回の入学者選抜全学委員会ので了承を条件に、教員選考委員会の設置や選考方法の進め方を了承した。

2. 全学共通教育改革骨子(V.3)について

委員長から、前回の委員会では、転換教育を共通教育に区分する提案について、各学部で異なった取扱いの意見も出されたが、資料 2 に基づき、転換教育を共通教育と専門教育の重複領域として全教員担当体制を実施する際は、持点制で考慮する提案が述べられた。

各学部からは

- ・山口大学や愛媛大学の例からも、全学共通教育に区分する方がよい。
- ・学部の専門性に継がるものだから、専門教育の方が好ましい。
- ・増える負担の割合は、既に実施している人文社会科学部もその他の学部も両方カウントすべきではないか。
- ・全教員担当体制を整えるためには、共通教育に入れた方がよい。
- ・学部で既に実施している転換教育は、議論の対象から除外して考えたい。
- ・転換教育は専門性を出さずに、一般的にした方がやり易い。
- ・中期計画と全教員担当体制は切り離して議論したい。
- ・学部では、共通教育を学部の適任者に担当してもらい、その分の教育負担を学部(組織)としてバックアップしているので、持点制とは合わない。

審議の結果、転換教育の内容と区分について、本日の議論を踏まえて大学教育センターとしてさらに検討することとし、継続審議とした。

また、委員長から、「英語教育モニター教員の募集」について、説明があったが、「モニター教員」の名称は適当でなく、募集の趣旨を含めて、再考するよう求められた。

3. 転学部について

前回の委員会で、学部持ち帰りとしていたもので、学部での検討結果を報告いただき、全学部で実施する旨を確認した。更に学部においては、転学科の規則を準用して実施に必要な規則を整備し、実施できる状態にしておくこととした。

また、全学的な転学部の規則(案)を、簡潔な内容のもので次回までに提案することとした。

4. 知的財産教育科目について

委員長から資料4に基づき、現代GPとして採択された事業補助金の交付決定があった旨の報告の後、知的財産教育の授業科目について検討したい旨の説明があり、急いで検討する必要があるが、共通教育科目分は人文社会科学部及び工学部と調整し、専門教育科目は地域連携センターと調整したうえで提案することとした。

5. 国連大学グローバルセミナー参加者の単位認定について

委員長から資料4に基づき、単位認定についての要望があったこと及び来年度以降も開催され、参加者を増やしたい意向が述べられ、科目名や単位認定(「合」の標号)について、環境分科会で検討してもらいたい旨の提案があった。

事前の認定基準の明確化及び手続きの整備が求められたが、分科会で時間数、レポート等を審査した上で、判定してもらうこととした。

報告

1. 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田部門長から資料5に基づき、9月29日(木)開催の第2回部門会議について、報告があった。

成績評価について、大教センターから指針を出してほしい旨の要望があり、専門教育関係連絡調整部門と連携しながら確定したい旨が述べられた。

2. 平成17年度中期計画の達成状況報告

中村教育評価・改善部門長から資料6に基づき、該当事項の進捗状況について、点検評価委員会に提出した旨の報告があった。

3. 現代GPの全学的取組状況報告

委員長から議題4で報告した旨が述べられ、ワーキンググループによる具体的運用計画の検討を始めた旨の付言があった。

4. その他

(1) ボランティア活動及び課外活動等の取扱いについて

委員長から第4回本委員会です承された取扱いについて、課外活動では活動学生名簿を顧問に確認してもらう時に併せて、対象学生に、記載について最終確認をする手続きを入れることが報告された。

また、ボランティア活動については、学生個々に意向を確認しないことの付言があった。

なお、検討を重ねるのは、活動を単位化するステップに結びつけるための検討をする意向であることが確認され、ボランティアは単位化にそぐわないとの意見には、ボランティア活動を奨励する意向がある旨が述べられた。

(2) 誓約書、保証書について

委員長から資料7に基づき、留学生の保証人となる教員に授業料等の経費的負担を負わせられないという考えから、全学学生委員会の了承を得た上で文言を追加する旨の説明があった。

また、大学院生にも適用される旨の付言があった。

(3) 山口大学現代GP及び岩手大学論講義報告

委員長から資料8-1及び8-2に基づき報告があった。

次回の委員会開催

次回以降は、毎月第3水曜日の午後3時から開催する提案があったが、一部の学部委員の授業時間に重なることから、不可能として改めて日程調整することとした。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 8 回)記録

日時：平成 17 年 11 月 16 日(水)15:02～17:38

場所：学生センター会議室

出席者：玉、岡田、中村、山崎、後藤、江本、福永、高塚、村上、木村、吉村、長澤、渡邊、谷口、小林、高橋、畑中

(議題 3 に関連して)砂山人文社会科学部長

欠席者：石川、長谷川

審議に先立ち、第 7 回委員会記録案を確認し、議題 1 の 2 行目「し、」を削除、「スリム化を図ること。」を「スリム化を図ること、」に訂正及び議題 2 の議題「改革骨子 (Vol.3)」を「改革骨子案 (V.3)」に訂正して了承した。

議題

1 国立大学法人岩手大学学則の一部を改正する学則(案)等について

委員長から資料 1-1、-2 及び 1-3 に基づき、国立大学法人岩手大学学則の一部を改正する学則(案)、岩手大学専攻科規則の一部を改正する規則(案)及び岩手大学編入学取扱規則の一部を改正する規則(案)について提案があり、事務局から専攻科規則の一部を改正する規則(案)は、既に教育学部で検討して了承しているなどの改正(案)毎に補足説明があり、審議の結果、原案を了承した。

また、委員長から、本案については、次回の教育研究評議会に提案する旨の付言があった。

2 岩手大学大学教育センター規則の一部を改正する規則(案)について

委員長から、資料 2-1、-2 及び 2-3 に基づき、岩手大学大学教育センター規則の一部を改正する規則(案)、岩手大学大学教育センター運営委員会規則の一部を改正する規則(案)及び岩手大学大学教育総合センターセンター会議規則(案)について提案があり、事務局から補足説明があった。

岩手大学大学教育センター規則の一部を改正する規則(案)については、第 2 条を具体的に目的内容を表現する「... 主要施策を調査、研究を含め総合的に ...」に変更すること。第 12 条、13 条及び 15 条の「センター長が定める」については、センター運営委員会に諮って定めることで、「別に定める」とは、当該組織の上位組織で定めることの解釈の違いを確認した。

また、第 3 条六の「教育評価・改善」には、「大学教育センターの業務は、授業を改善していくために支援する」意味で、教員の評価の部分は含まないことを確認した。入学者選抜全学委員会と大学教育センター運営委員会との審議事項の分担を整理することを求める意見があった。

なお、第 2 条及び 4 条の「入試」は、誤解を招くので「入学者選抜」と明示する方がよいとの意見については、入学者選抜全学委員会の意見も聴いた上で継続審議することとした。

岩手大学大学教育センター運営委員会規則の一部を改正する規則(案)については、第 2 条で、入試関係の事項を運営委員会の所管事項とすることは、責任の所在が不明になり、入学者選抜全学委員会との検討事項の分担を整理し、一定の歯止めが必要である旨の意見があり、委員長から、入学者選抜部門については、従来どおり入学者選抜全学委員会が責任を持ち、運営委員会は、調査・研究及び資料作成を担当するとの説明があった。

第 3 条五「各学部選出教員 1 名」では、教務関係か入試関係の適任者なのか解るよう業務の割り振りの明確化を求める意見があった。

岩手大学大学教育総合センターセンター会議規則(案)については、第 4 条の「委員長」、「副委員長」は、「議長」、「副議長」の方がふさわしいと意見があり、継続審議とした。

3 岩手大学転学部に関する規則(案)について

委員長から、資料3に基づき、前回の委員会です承された転学部について、新たに設ける規則(案)について説明があり、編入学制度との違いを確認したほか、第2条の一項は、不要とし、第7条は、転入した学部の卒業にかかわる単位以外の修得単位も、消えることはないこと、転出する学部での意志確認の必要性及び希望学部を受け入れられない場合の取扱等について議論した。

検討結果を踏まえて、次回の委員会に提案することとした。

また、委員長から、17年度から適用し18年度から受け入れることができるよう各学部では取扱を定めてもらい、問題があれば提出願う旨の付言があった。

4. 科目等履修生の履修単位数について

委員長から資料4に基づき、人文社会科学部からの提案を受けて、教育協議会の申し合わせについての改正案なので、本委員会に検討願う旨の説明があった。

砂山人文社会科学部長から、大学院修士(博士前期)課程の1年制コースの運用のために、現在、半期4単位の上限を、できれば12単位まで拡大する全学的な取扱の検討を依頼する旨の提案説明があり、大学院入学生の増加方策としての有効性及び修得単数の拡大の必要性について意見交換があり、先行大学の状況の調査が求められた。

本委員会としては、修得単位数の合理性などについて大学院委員会での議論を経たうえで、結論を尊重して追認する形を取ることにした。

5. 全学共通教育の更なる発展に向けて:改革骨子案(V.3)について

委員長から、前回の委員会に、転換教育を専門教育に位置付けた場合の考え方に立って、持ち点制を提案したが、全学一律の取扱いは難しいので、取り下げる旨の説明があった後、資料5-1に基づき、転換教育の区分変更について提案があり、定義付けを変更することで全教員担当体制を成立させ、大学教育センターで、教養教育への転換教育としてのいくつかの指針を作り取り組んでいくことにした。

なお、提案の「単位数」及び「4.区分変更を行う際の検討課題」については、継続審議とした。

6. その他

(1) 英語教育・協力教員の募集について

委員長から、資料6に基づき、外国語の分科会代表と協議し理解を得たので、平成18年度から実施したい旨の提案があった。

全学で4名の教員により、積極的に英語を使う正規の授業として単位を認定し、柔軟な英語教育としてモニターしてもらうことを了承した。

(2) 知的財産教育科目について

本議題については、次回に提案することとした。

報告

1.17年度高大連携「ウインターセッション」の実施について

岡田全学共通教育企画・実施部門長から、資料7に基づき、12月25日(日)から27日(火)まで開催される工学・農学部で企画したプログラムの報告があった。

実施に係る事務取扱いは、大学教育センターが担当することを確認した。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会(第 9 回)記録

日時：平成 17 年 12 月 14 日(水)15:03～18:09

場所：学生センター会議室

出席者：玉、岡田、中村、山崎、後藤、江本、福永、高塚、長谷川、吉村、長澤、渡邊、谷口、高橋、畑中

欠席者：石川、村上、木村、小林

審議に先立ち、第 8 回委員会記録案を確認し、了承した。

議題

1 岩手大学転学部に関する規則(案)について

委員長から資料 1 に基づき、前回の審議結果を踏まえて規則(案)の変更した部分の説明があり、併せて、各学部の取扱要項(案)が紹介され、規則(案)の文言との比較、検討を行い、第 2 条一項「履修していること。」を「修得した者であること。」に修正し、同二項を「一般選抜試験(前期日程または後期日程)により入学した者であること。」に改め、第 7 条「必要な所属学部長」の「必要な」を削除する修正を加え、原案を了承した。

人文社会科学部から提案の、転課程取扱要項にならない「転学部を行う理由・意義」を規則(案)に盛りこむことについては、実施の趣旨を確認した上で、適切な表現が難しいことも考慮して特に明記しないこととした。

また、本案については、12 月 15 日(木)の教育研究評議会に提案する旨の付言があり、平成 17 年度の日程は、特例として規則(案)によらないで実施し、各学部の取扱要項はそれぞれ決めていただくことを確認した。

なお、各学部の取扱要項(案)については、各学部で差異があっても良いが、項目の順番は、教育学部のものにならない大学教育センターで統一する表現に修正したものを、もう 1 度各学部で確認してもらうこととした。

(出願資格)については、学生が混乱しないように規則(案)にならない揃えることとした。

関連して、教育学部委員から、資料に基づき「教育学部転課程等取扱要項」を一部改正した旨の報告があった。

(委員会の最後に、本委員会の検討結果を踏まえて、教育研究評議会に提案する事務局で検討した規則(案)が示され、第 2 条一項については、「修得した者であること。」と修正したことに伴い、文言の整合を図り前段の「転学部を志願することのできる者は、」を「転学部できる者は、」に修正する旨の説明があったほか、「一般選抜試験(前期日程・・・)」は「一般選抜(前期日程・・・)」で充分区別がつくとの理由で修正した旨の説明があった。)

2 岩手大学大学教育センター規則の一部を改正する規則(案)について

委員長から資料 2-1 に基づき、前回の審議結果を踏まえて規則(案)の修正した部分について、説明があった。

・第 2 条に文言を加えたこと。

・第 3 条第二項は、入学者選抜全学委員会との関連で、大学教育センター運営委員会の業務を種分けしたこと。

・第 4 条第一項の「入試部門」の表現は、入試関係の各種委員会を経ており大学学則でも同じ表現で使用されていること。

・第 14 条は、本委員会と各学部の委員会との連携を定める条項がなかったので、明確にするために新たに加えたこと及び「入試」に関しては除いてあること。

審議の結果、原案を了承した。

なお、第 2 条及び第 14 条の「教育課程」の表現は、「カリキュラム」に限定した狭い意味に誤解されないかとの意見が出されたが、原案のままとした。

委員長から資料 2-2 に基づき、岩手大学大学教育センター運営委員会規則の一部を改正する規則(案)についても、前回の審議結果を踏まえて規則(案)の修正した部分について説明があり、第 2 条は、「入試」に関連して入学者選抜全学委員会と調整したことが述べられた。

第2条第九項については、当該委員会の所掌範囲とすることは好ましくないとして、学生募集要項再チェックに留めて、第八項の中に含め第九項を削除することで、原案を了承した。

委員長から資料2-3に基づき、岩手大学大学教育総合センターセンター会議規則(案)についても、前回の審議結果を踏まえて規則(案)の修正した部分について説明があり、原案を了承した。

委員長から岩手大学大学教育センター規則の一部を改正する規則(案)及び岩手大学大学教育センター運営委員会規則の一部を改正する規則(案)については、内容を更に吟味する時間を設け、1月の教育研究評議会に提案する旨の付言があった。

3 岩手大学大学教育総合センター入試部門会議規則(案)について

岩手大学大学教育総合センター全学共通教育企画・実施部門会議規則の一部を改正する規則(案)について

岩手大学大学教育総合センター教育評価・改善部門会議規則の一部を改正する規則(案)について

岩手大学大学教育総合センター専門教育関係連絡調整部門会議規則の一部を改正する規則(案)について

岩手大学大学教育総合センター学生支援部門会議規則(案)について

岩手大学大学教育総合センター就職支援部門会議規則(案)について

委員長から資料3-1~6に基づき、それぞれ前回の審議結果を踏まえて規則(案)の修正した部分について説明があった後、事務局から、全学共通教育企画・実施部門会議規則の一部を改正する規則(案)について、第4条として任期に関わる条項を加え、規則(案)の第4条以降を順送りする旨の修正提案があった。

各部門会議での「兼務教員」について、学部の関係委員会との関係を議論し、教育方法評価・改善部門会議規則(案)、専門教育関係連絡調整部門会議規則(案)及び就職支援部門会議規則(案)において、(組織)「兼務教員」の運用は、各学部から選出された教員と解釈する旨を確認した。

また、全ての部門会議の規則(案)(一部を改正する規則(案)を含む。)の第2条(審議事項等)の「、」の表記方法について、調整するよう求められ、次回の本委員会最終確認することとした。

4 全学共通教育の更なる発展に向けて:改革骨子案(V.3)について

委員長から12月28日(水)に臨時に開催する本委員会で検討するので、割愛する旨の説明があり、議題から削除した。

5 知的財産教育科目について

委員長から資料4に基づき、全学共通教育及び専門教育に導入する科目案について説明があり、授業形態を含めて次回以降に議論をお願いしたい旨の付言があった。

6 その他

(1) 全学共通教育の理念と特色について

委員長から資料5に基づき、本委員会での審議経過及び修正案について説明があった。

- ・ 共通教育の理念は、従来のものを堅持し、その具現化するものとして現行の全学共通教育科目担当者の判断で「ESD」を織り込んでいくこと。

- ・ 環境教育を重視している岩手大学らしさを、更に「ESD」に拡張することで特色を明確にすること。

提案について議論の後、各学部を持ち帰り1月の教授会で検討願いたい旨の付言があった。

報告

1 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田全学共通教育企画・実施部門長から、資料6に基づき、11月25日及び12月8日に開催した部門会議で検討した非常勤講師手当の削減計画について報告があった。

2 平成18年度非常勤講師手当の改定について

委員長から、資料7に基づき、講師手当額の改定及び平成17年3月11日に設置された「特任教授」について、非常勤講師手当の削減をお願いする旨の報告があった。

委員からは、特任教授は限定的なもので、法人岩手大学としての全学的イメージができあがっていないため、共通教育部分に限らず委嘱対象の見直しが必要であり、今までは散発的議論だけであったが、集中的議論が必要である旨の意見があり、本学を退職した非常勤講師を特任教授に依頼することは問題があるという意見が出された。

3 平成 18 年度履修の手引きの作成について

委員長から資料 8 に基づき、全学の共通的事項の修正部分の報告があった。

4 その他

委員長から資料に基づき、平成 18 年 1 月 11 日(水)に開催する大学教育センター企画の研究会及び 1 月 13 日(金)開催の「現代 GP シンポジウム」について、紹介があった。

平成 17 年度臨時大学教育センター運営委員会記録

日時:平成 17 年 12 月 28 日(水) 9:33 ~ 12:40

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、山崎、後藤、石川、江本、福永、村上、長谷川、木村、吉村、長澤、渡邊、谷口、小林、高橋、畑中

欠席者:中村、高塚

議題

1 全学共通教育の更なる発展に向けて:改革骨子案(V.3)について

委員長から議論を急いでいる理由について、平成 19 年度から新しい教務情報システムに移行するためには、平成 18 年 6 月頃までに全学共通教育・専門教育の両方で、新たな枠組みを固める必要があるためとの説明があった。

その上で、委員長から、資料 1-1 に基づき、各項目の検討結果を確認した。

「1 岩手大学全学共通教育の区分」

転換教育は、共通教育と専門教育への導入に繋がる両面性を持っていることを踏まえ、全教員担当体制との関連で、平成 19 年度からは、単位数は未定だが全学共通教育科目に位置付ける合意が得られていること。また、工・農学部委員から、混乱を避けるために、転換教育科目を 18 年度の専門教育科目に開設することは見送る旨の報告があった。

「2 岩手大学全学共通教育の意義と特色」

既に学務担当理事室から、理念を「ESD」で具現化する案が提案済で、学部で検討中であること。

「3 全学共通教育の実施体制」

平成 19 年度から、転換教育の部分で全教員担当体制が実現することが述べられ、更に受講学生数の多い科目の解消のためにも、各学部から全学共通教育科目を増やすことに協力を得たい旨の付言があった。

「4 分科会の構成および役割の変更」

委員長から資料 1-4 に基づき、各分科会は、全教員の登録を前提に 20 ~ 30 人の教員で組織する考えに立って提案されている旨が述べられた。また、組織検討委員会の学系という教員組織とは切り離して検討することとした。

「ESD」を教育に取り込む方法は、現在の教育科目の中でできる部分で具現化し、更に、中心となるような科目を設けたい旨の付言があった。

委員長から、新分科会組織に登録することは、直ぐに科目を担当することではなく、実施する科目数は各学部で 2 コマぐらいずつ増やしてもらい、現在より 10 コマぐらい増やす方向で検討したい旨の付言があった。

「自然」関係の具体的分科会の名称は、専門基礎科目との調整が難しくなるが、新しい分科会で実質的なものを検討することとした。

授業担当者は、所属の学部内で共通教育科目を担当することに援助を受けて担当するため、科目数・授業内容は学部の意向を尊重しながら行うことを求める発言があった。

(急用で委員長が退席し、代わって岡田副委員長が議事を進行)

全学共通教育は、分科会がリードして運営していく方が理想であるが、全学共通教育の責任部局(学部)体制が、大学教育センター主導に移っても、学部の補助・援助が必要であること。及び授業科目の担当は、オムニバス方式のものも当然あり得ることを了承した。

分科会は、登録した担当者全員による運営を建前とするが、人数の多い分科会は代表的担当者による運営になることなどが確認された。

また、岩手大学がどこに重点を置いた教育をするかの調整、分科会の名称及び人数については、参加する教員の中で議論・調整することとした。

現在の科目名を分科会名に使うことは誤解を招くとして、提案の「自然」の分野では、「生命[構造・機能]」は「生命のしくみ」に、「生命[生態・多様性]」は「生物の多様性」に改めることとした。また、自然[化学]、自然[物理]及び自然[数理]は、それぞれ、[自然のしくみ]、[自然と物質]及び[自然と数理]に改め、「テクノロジー」は、「科学技術」に改めることが議論されたが、大学教育センターで整理して提案することとした。

「岩手学」は、分科会に含める必要がないとして、登録から外すこととした。

(委員長が戻り議事を進行)

全教員がどれかの分科会に登録することが了承され、現状の8分科会の時間割枠を維持した上で、新しく分科会を構成する旨を明示し、1月に予備登録手続きを行うこととした。

「16時間割」

「16時間割」については、委員から平成19年度の教育改革における全学共通教育と学部専門教育との連動・調整の重要性が述べられた。

2 その他

(1) 岩手大学大学教育総合センター設置に伴う関係規則の整備のための規則(案)について

委員長から資料2に基づき、現在の大学教育センターが大学教育総合センターに改組されることに伴い関係する組織等の規則等の文言上の一部改正である旨の説明があり、原案を1月開催の教育研究評議会に提案することを了承した。

(2) 科目等履修生の履修科目担当教員の事前了承について

人文社会科学部委員から、科目等履修生が受講前に、担当教員の手前了承を必要とするものとして指定している者のうち、交流大学からの外国人留学生については省略したい旨の提案があり、記入を求める理由が教員側の都合で設けた経緯があり、調査して不要であるならば対象から除くこととした。

(3) 次回の委員会開催について

1月25日(水)15時から開催することとした。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会 (第 10 回) 記録

日時:平成 18 年 1 月 25 日(水)15:00～18:13

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、中村、山崎、江本、福永、後藤、高塚、長谷川、吉村、長澤、渡辺、谷口、小林、高橋、畑中

欠席者:村上、木村

審議に先立ち、第 9 回及び臨時の運営委員会記録案を確認し、了承した。

議題

1 全学共通教育の理念と特色について

先の本委員会での提案に対する各学部の検討結果について報告があった。

人文社会科学部:提供された資料が具体的でなかったので、意見は少なかったが、以前のものは学生にとっては分かりにくいところがあった。考え方の理解に差があるので、柔軟に対応して欲しい。

教育学部:代議員会及び教授会でも特に意見はなかった。

工学部:教務委員会及び教授会でも特に意見はなく、提案がもっと具体的であったら意見も出たと思われる。

農学部:特に意見は出なかった。

委員長から、大きな反対はなく、より具体的な提案が求められていると判断されるので、全学共通教育の改革骨子案に ESD を取り込んで具体化したい旨の提案があり、了承された。

2 岩手大学大学教育総合センター運営委員会の学部選出教員等の選出について

委員長から資料 1 に基づき、第 9 回本委員会です承され、1 月の教育研究評議会で「岩手大学大学教育総合センター運営委員会規則」等が了承されたことから、各学部において平成 18 年度の学部選出の教員を選出いただくについて、選出の母体として基本的な考え方を示しておきたい旨の説明があり、任期は 2 年ですべての兼務教員が該当し、選出された教員を 3 月の本委員会で報告したい旨の付言があった。

畑中(学務部長)委員からは、大学教育センター長から各学部長宛に文書で推薦を依頼する事務手続きを行うとの補足説明があった後、意見交換があり、現在の委員を一部を追記する修正の後、以下の意見が述べられ提案を了承した。

- ・教育評価・改善部門において、「・」は教務(学務)委員会または FD 委員会委員の意味であり、どちらであってもよい。
- ・全学共通教育企画・実施部門の新分科会が、平成 19 年度から増える予定であり、兼務教員については、組織が大きすぎる懸念があるので、似通った分科会からは、その代表者として欲しい。
- ・学部によっては、4 月に入ってから決まる委員がある。
- ・運営委員会の学部選出の教員には、教務(学務)委員長を想定し、それを含めて各学部に推薦いただくよう依頼する。

3 知的財産教育科目について

委員長から資料 2 に基づき、開講予定科目について説明があった。

- ・「知的財産入門 A・B」を月曜日の 3・4 校時及び 9・10 校時に開講する。
- ・「著作権法概論」は、月に 1 度程度は弁理士に解説をお願いする。
- ・「知的ワークショップ」は、30 名程度の受講生を予定している。
- ・「知的財産教育論」は、教育学部で、「知的財産権概論」は、農学部でそして「特許法特講」は、工・農学部でそれぞれ単位化する議論をして授業科目に取り入れて欲しい。
- ・「ベンチャー企業論」は、工学研究科の科目を単位化できないか農学研究科で検討して欲しい。

・「知的財産法(1)」は、特許法的な内容で、「知的財産法(2)」は、法律学特講Cで商標等を扱う。

・「環境教育科目」は、科目名としてふさわしくないので、現行の環境科目名称を表記する。

委員長から知財と環境教育の両方のマインドを履修できるという特色をアピールしたい旨が述べられた。

地域連携推進センター内部で、同センターの教員の教育への関与の仕方について意見が出されたとの発言に対しては、委員長から学長特命課題プロジェクトとして学内的に了承されている旨の説明があった。

全学共通教育科目の「知的財産入門」、「著作権法概論」及び「知財ワークショップ」は、「人間と社会」に入れる旨の説明があった。

4 全学共通教育の更なる発展に向けて：改革骨子案(V.3)について

委員長から資料3に基づき、新分科会組織の提案があり、2月から予備登録の手続きを行いたい旨の説明があった。

教養教育を専門性で分担させることが適当かとの意見や、ガイドラインの提示を求める意見が述べられ、委員長からは、既存のものを確保した上で、学内的に分科会のバランスを考えて議論したい旨が述べられた。

委員長から、実施について、各学部で2コマずつ増やすのは、時間割数を増やすのではなく、学生の選択肢を増やすことが目的であるとの説明があった。

また、分科会登録が即授業担当ではないことが述べられ、所属の学部をベースにして実施してもらい、予備登録してみ分科会・統合など人員を調整することもあり、分科会を確立するための目安としたい旨の説明があった。

新分科会の資料を作るための予備登録は、組織検討委員会の学系アンケートとは別のものであることを明示し、2月1日以降に実施することを了承した。

続いて、委員長から、全学的に転換教育を実現するためのワーキンググループと平成19年度以降の時間割を検討するためのワーキンググループを設置したい旨の提案があった。

転換教育のワーキンググループは、全学共通教育企画・実施部門の兼務教員から選出し、大学教育センターからは山崎委員が参加して、転換教育の単位数や内容についてガイドラインを全学的な議論をするもので、また、時間割を検討するワーキンググループは、同じく全学共通教育企画・実施部門の学部の兼務教員から選出し、大学教育センターからは後藤委員が参加することが説明された。

委員の選出について、新年度から委員が交代するので、4月以降にできないかとの意見あったが、3月に検討の前段階として集中的に検討願いたい旨の説明があり、設置を了承した。

また、岡田委員から、改革骨子案(V.3)に想定している全学共通教育の修得すべき単位数は、現行規則の「別表2」である旨の説明があった。

5 平成18年度学年暦について

委員長から資料4に基づき、既に学長・副学長会議及び学部長等連絡会で了承された「6月1日の開学記念日の午後も全学休講として、記念講演会を開催すること。」を、本委員会から教育研究評議会に提案したい旨の説明があり、これを了承した。

6 キャリア教育科目について

委員長から資料5に基づき、17年度の履修単位にはなかったが後期授業の月曜日の3・4校時に開講したのを、18年度は、試行的に開講した上で、平成19年度からは単位化し、2年生の前期の科目として開講したい旨の提案があり、これを了承した。

7 その他

(1) 平成18年度の実質的授業時間の確保について

工学部の委員から、期末試験後の授業は効果がないので、18年度は対策を講じるよう求められ、全学共通教育企画・実施部門会議で検討した学年暦案が示された。この案では平成17年度と同様に全学共通教育科目の試験後に専門科目の授業となっているため、検討の結果、学則の一部を改正し冬季休業期間の終期を短縮して、単位の実質化を図る方針が了承された。

学則の一部改正については、次回の教育研究評議会に提案することとした。また、学生への周知に努めるよう求められた。

報告

1 全学共通教育企画・実施部門会議報告

山崎委員から資料6に基づき、平成17年度の高大連携「ウインターセッション」の実施状況について報告があった。
委員長からは、平成18年度は、学部のローテーションによらず全学部で対応して欲しい旨の付言があった。

2 教育評価・改善部門会議報告

中村部門長から、以下のとおり報告があった。

- ・中期目標でもある成績評価基準のガイドラインを検討し、3月の中旬には指標として提案したい。
- ・昨日の部門会議では、17年度前期の学生授業評価アンケートに基づく全学共通教育優秀授業の選出方法を確認し、結果については、後日本委員会に提案する。
- ・後期の授業についても、学生授業評価アンケートを実施する。
- ・教育評価・改善部門について、大学教育センターと学部担当する部分の棲み分けを検討したい。

3 その他

(1) 放送大学活用プロジェクトについて

後藤委員から資料7に基づき、以下のとおり報告があった。

- ・語学の単位について、放送大学の単位数をそのまま岩手大学の単位数に読み替えることとし名目単位の等価交換をして単位数を増やしたこと。
- ・コンテンツ利用科目をなくし、全て科目等履修生の形としたこと。
- ・合計で200名の受講生を受け入れる予定であること。

(2) 次回の委員会開催について

2月24日(金)9:30から正午までの予定で開催することとした。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会 (第 11 回) 記録

日時:平成 18 年 2 月 24 日 (金)9:30 ~ 11:35

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、中村、山崎、江本、後藤、高塚、村上、長谷川、木村、吉村、長澤、渡辺、谷口、小林、高橋、
畑中

欠席者:福永、石川

審議に先立ち、第 10 回運営委員会記録案を確認し、議題 3(知的財産教育科目について)において、教育学部委員から、学部の非常勤講師経費以外の経費負担で手当てすることの確認が求められ、その旨を確認した。

また、議題 7 その他(平成 18 年度の実質的授業時間の確保について)について、検討が不充分である旨の意見や教育学部から冬季休業期間を 1 月 7 日までとした場合、スポーツ C の実施期間の確保が難しいため、対策を講じて欲しい旨の意見が述べられ、冬季休業期間終了後の曜日回数の多い日を補講期間とするなど運用で対応する余地がある旨の説明があった。

さらに、報告 3(1)の部分について、「単数に読み替える」を「単位数に読み替える」と訂正し、記録案を了承した。

議題

1 大学教育総合センター専任教育(入試部門)の推薦について

委員長から資料 1 に基づき、大学教育総合センター入試部門専任教員の選考委員会報告、推薦理由及び最終候補者の紹介説明があった。

委員からは、研究業績や論文発表のない者の職位の決め方について、基準を設けることが求められたほか、教員職は、研究能力が求められるので、従来の教員職と異なる経歴者を最終候補者とした理由や、候補者に研究面で求める項目についても評価基準の設定が求められた。

さらに、採用者の業務や求める人材について本運営委員会で十分に検討した上で、入学者選抜全学委員会の了承を経て本委員会で選考すべきであることが述べられたが、第 7 回の本委員会で「入試部門が、大学教育総合センター運営委員会組織に入ることから、専任教員の選考は本運営委員会で決定することが妥当」として入学者選抜全学委員会に一任した経過の説明があった。なお、今後の入試業務の取扱いについて、入学者選抜全学委員会と本運営委員会の明確な区分が求められた。

選考方法は、大学教育センター専任教員が採用されたため、専任的兼務教員の後藤委員を除く投票により、投票数の 3 分の 2 以上の賛成票を条件とすることとして、投票の結果、永野拓矢氏を専任教員(入試部門)の助教授として推薦することを了承した。

なお、「推薦理由書」の本文の 1 行目「平成元年」を「平成 5 年」に訂正した。

2 全学共通教育規則の改正(案)について

委員長から資料 2 に基づき、平成 18 年度に関わる授業科目の変更に伴う全学共通教育規則の改正(案)について改正内容の説明があり、原案を了承した。併せて別表 1 の新規科目の挿入区分を確認し、委員長からは、次回の教育研究評議会に提案する旨の付言があった。

さらに、平成 19 年度のカリキュラム改正に向けて、3 月までに各学部で検討いただく事項について資料「平成 19 年度カリキュラム(教育課程)の検討メモ」により説明があった。

委員からは、全学共通教育科目が決まらなると連動する専門教育科目が決められないので、6 月には全ての作業が終わるよう求められた。

また、転換教育科目は、全学共通教育科目に置くが、転換教育ワーキンググループで、理念と単位数を検討し、3 月から 19 年度以降の全学共通教育の枠組みや中味を検討し、学部に提案して検討願うこととした。

なお、工学部からは、「別表2」の平成19年度の改正案を次回の運営委員会に提出願うこととした。

3 全学共通教育の更なる発展に向けて：改革骨子案 (V.3) について

今後の検討スケジュールについて、岡田全学共通教育企画・実施部門長から口頭で、新分科会への仮登録状況を本委員会に報告し、4月には新分科会を提案したい旨の説明があった。

工学部委員からは、新分科会への仮登録アンケート調査について、学部内に補足説明した旨の報告があった。

引き続き、岡田委員から、平成19年度からの外国語の履修方法について各学部で検討願いたいこと。及び時間割については、ワーキンググループで3月から原案を検討して、4月にはたたき台を提案したい旨のスケジュールが述べられ、提案を了承した。

また、転換教育ワーキンググループ及び時間割検討ワーキンググループのメンバーの紹介があった。

4 国連大学グローバル・セミナー修了者の単位認定について

委員長から資料3に基づき、今後の取扱いを定めて、履修の手引きに載せたい旨が述べられ、認定単位は、卒業単位として数えられ、科目名を特定することなく、各年度のテーマに添って分野を決めて全学共通教育科目として認定する旨の説明があり、平成18年度履修の手引きの記載内容と併せて原案を了承した。

また、事務局から、成績表等には、「○付きの評価(優・良・可)」として大学の授業科目履修と区別して表記する旨の補足説明があった。

5 その他

(1) 履修科目登録上限単位の見直しについて

工学部委員から、履修科目登録上限単位の見直しに係る検討について確認があり、委員長からは、18年度からの導入は間に合わないので、19年度から改正する必要性の議論を含めて、専門教育関係連絡・調整部門会議で原案を作成したい旨の説明があった。

報告

1 教育研究評議会報告

委員長から資料4に基づき、本委員会の持ち回り委員会です承された学則の一部改正(案)に係る、2月16日開催の教育研究評議会の報告については、第10回の本委員会記録(案)の確認のところで述べた旨の説明があった。

2 科目等履修生について

委員長から資料5に基づき、第8回運営委員会で人文社会科学部から提案のあった「大学院研究科の科目等履修生に係る履修可能上限単位数の取扱い」について、大学院科目等履修生の履修単位は半期6単位以内と改めることとした旨の大学院委員会の検討結果の報告があり、申し合わせを了承した。

また、12月の臨時運営委員会で人文社会科学部委員から提案のあった「海外交流大学からの外国人留学生の科目担当教員の事前了承」の取扱いについては、一般の外国人留学生と区別する必要がなければ、事務的には差し支えない旨が述べられた。

現在実施している人文社会科学部及び教育学部からは学部検討内容を書面で欲しい旨の要望があった。

3 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田委員から議題2に関連して報告した旨が述べられたほか、資料6に基づき報告があり、特に議題21)について説明があった。

4 教育評価・改善部門会議報告

中村部門長から資料7に基づき、平成17年度前期全学共通教育科目の優秀授業表彰を行った旨の報告とその選出方針が示された。

5 その他

(1) その他(本運営委員会と大学院委員会との関係について)

農学部委員から、本運営委員会と大学院委員会の審議事項について説明が求められ、委員長から大学院委員会は、大学院に関わる教育・規則改正を中心に審議する旨の説明があった。

(2) 次回の委員会開催について

3月15日(水)15:00から開催することとした。

平成 17 年度大学教育センター運営委員会 (第 12 回) 記録

日時:平成 18 年 3 月 15 日 (金)15:03 ~ 17:56

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、中村、山崎、江本、福永、後藤、高塚、村上、長谷川、木村、吉村、長澤、渡辺、谷口、小林、高橋、畑中

欠席者:石川

審議に先立ち、第 11 回運営委員会記録案を確認し、記録案を了承した。

議題

1 大学教育総合センター専任教員の学内兼担について

委員長から資料 1 に基づき、大学教育総合センター専任教員の教育学研究科の担当の依頼があり、専任教員の本務に影響ないので、本委員会で承認したい旨の説明があった。

教育学部委員からは、認証評価を受ける準備の中で大学院の教員不足が判明し、組織検討委員会にも相談しているが、大学院発足当時は教員数が揃っていたものの、その後退職教員の補充が出来ないでいて、現在は 9 名不足していることに対して学部内で 4 名を補充できたが、残りを地域連携推進センターから 2 名と、大学教育センターから 3 名を手当することにより補充する計画であることや、設置基準の教員定員不足問題を解消するよう改組計画を検討しているが、18 年度の 1 年間で解消するという約束は出来ないとの状況説明があった。

委員からは、以下のような意見があった。

- ・学内の教育研究支援施設の専任教員は、全学的に教員定員を出し合って設置したものであるため、一部の学部からの個別的な急場の救済を理由に、措置すべきでない。
- ・大学教育センターの専任教員は、任務として授業を担当することが認められている。
- ・専任教員の大学院担当が 1 年で済まない可能性があるのに、担当することを了解することは出来ない。
- ・組織検討委員会で検討すべき問題ながら、認証評価という全学的な問題が控えている以上放置できない。

検討の結果、担当が 2 年以上にずれ込むことのないように組織検討委員会で議論してもらった旨の付帯条件付きで、1 年間の期間に限ってやむを得ないこととした。

なお、委員からは、4 月以降の専任教員の明確な業務内容のリストが求められた。

2 全学共通教育の更なる発展に向けて:改革骨子案 (V.3) について

委員長から資料 2 に基づき、V.3 については、今までの議論で残されている自己啓発プログラム (仮称) の新設及び学士課程を貫く自由単位について検討し、一区切りをつけて、今後は「V.4」にこれまでの合意を具体化し、改めて提案したい旨の説明があった。

「自己啓発プログラム (仮称) の新設」については、既に相当する授業があり、改めて科目にする必要はない旨の意見のほか、「新設」よりも「拡充」と表現する方が良いとの意見があり、「ゼミ形式」は現実的でないと意見については、テーマによっては少人数による学生の参加の方が教育改善につながる旨の説明があった。

また、ボランティア活動等を単位化することについては、十分な検討が求められた。

「学士課程を貫く自由単位」については、全学共通教育と専門教育科目を分離した方が学生は解りやすいとの意見があり、委員長からは、今後は ESD を通じて内容面での融合を目指すこととして、単位認定において学務システム上煩雑になるので、全学共通教育と専門教育を貫いて設けることは、取り下げる旨の説明があった。

委員長から、「V.3」についての議論を踏まえて、4 月中旬に「V.4」を提案したい旨が述べられた。

続いて教育学部委員から、資料「平成 19 年度カリキュラム (教育課程) に関する教育学部検討結果の報告」に基づく説明があった。

教育学部の外国語の履修形態を4-4で課す方針に関しては、委員長から「英語と英語以外の外国語」の履修形態は、原則として学生の自由選択であるが、学部で制限を付けることは可能であるとして、第3回運営委員会記録「『履修形態を統一して実施する必要はありません。』は、4学部が、統一する必要はないということで、学部毎の履修制限を付けることは出来る。」が示された。

また、外国語が、1年次で完結することで外国語の授業の増加が専門教育を圧迫しないかとの懸念や担当教員の配置の不安については、外国語担当者会議で検討している旨の説明があった。

3 平成18年度特色GP、現代GPへの応募について

委員長から資料3に基づき、大学教育センターで計画している平成18年度に応募予定のプログラムの概要説明があった。

現代GPについては、募集されるテーマに合わせてタイトルを本学が既に提唱してきた「持続可能な未来へ・・・」を「持続可能な社会に・・・」としたこと。及び「ESDの副専攻設置」は、専門教育と関連させて履修するプログラムを準備するように検討し、大学改革につなげたい旨の説明があった。これに対しては、専門科目に影響する計画は各学部の了解を得て進めることが要望された。

4 大学教育総合センター運営委員会の開催日について

委員長から、18年度の運営委員会は、毎月開催して月例化したい旨の提案があり、授業時間割を考慮し、第1週の木曜日午後3時とすることを了承した。

5 その他

(1) 各部門会議規則(案)の確認について

委員長から資料4に基づき、第9回の本委員会で審議し、意見を踏まえて一部修正した旨の説明があり、最終案として確認了承した。

また、委員の任期に関連して、部門会議の任期が2年に対し、学部教務(学務)委員会委員の任期がずれるために1年で交替することは、本来学部の任期を変更すべきだが、急に対応できないので、学部運営上やむを得ない場合は認めることとした。

報告

1 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田部門長から資料5に基づき、教員の分科会の仮登録について、各委員から学部教授会等の機会を捉えて推進するよう要望があった。

また、1分科会が、20名から30名程度の所属になるように、ある程度統合するよう分析すること。及び4月以降に本格的な登録をしてもらう予定が述べられた。

分科会の登録人数によって担当科目数が決まるものではなく、登録人数の多い分科会は、登録者数と担当科目数にアンバランスが出る危険があり、登録人数の分割は、登録者の意志を尊重して行うが、分科会代表者の責任及び分科会と学部の責任が過重になるため、次回の本委員会に具体的科目と分科会について提案したい旨の付言があった。

2 教育評価・改善部門会議報告

中村部門長から、成績評価基準のガイドラインの策定に係る進捗状況報告があった後、来年度も5月から6月にかけて授業公開を計画し、学生の保護者を対象に授業改善のためのボランティアのモニターを募集する計画が述べられた。

また、教育目標を基に教養教育に係る到達目標の設定については、分科会で検討願うこととし、学部における学科、課程の教育目標の明確化については、専門教育関係連絡調整部門で検討する旨の説明があった。委員からは、部局で検討すべき事項を明確にするような資料を作成して欲しいとの要望があった。

3 その他

(1) 全学統一拡張 Web シラバス・システムのモニター依頼と試行運用説明会の開催について

後藤委員から資料6に基づき、システムのモニターの募集及び運用説明会について、各学部内の周知と参加について依頼があった。

(2) 大学教育総合センター開設記念講演会の開催について

委員長から資料7に基づき、4月10日(月)の開設記念講演会の開催について説明があり、併せて各学部内における周知依頼があった。

(3) 次回の委員会開催について

議題4で調整したとおり4月6日(木)15:00から開催することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 1 回)記録

日時:平成 18 年 4 月 6 日(金)15:03～16:40

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、井上、村上、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、谷口、畑中

陪席者:永野、江本、福永

審議に先立ち、委員長から、大学教育総合センター運営委員会規則第 7 条により本委員会に議決権のない委員会メンバーとして、大学教育総合センターの専任教員を出席させたい旨の提案があり、了承された。

今年度最初の委員会であり、委員長から挨拶の後資料 1-1 に基づき委員の自己紹介があった。

平成 17 年度第 12 回運営委員会記録案を確認し、委員長から議題 1 の最終行「4 月以降の専任教員の明確な業務内容のリスト」については、次回の委員会までに準備する旨の説明があった。

また、議題 2 の記録中第 3 回運営委員会記録分の「・・・、学部毎の履修制限をつけることは出来る。」の解釈については、「原則は学生の意志に任せるが、学部内で学科及び課程毎の制限を課すことは可能である。」旨を確認し、「外国語担当者のワーキング・グループで・・・」を「外国語担当者会議で・・・」に修正して了承した。

議題

1 大学教育総合センター副センター長、部門長の指名及び兼務教員の推薦について

委員長から資料 1-2 に基づき、「岩手大学大学教育総合センター規則」第 7 条の副センター長に人文社会科学部の岡田仁教員、教育評価・改善部門長に人文社会科学部の後藤尚人教員を、人文社会科学部長の同意を得て指名した旨の説明があった。

また、第 9 条により各部門の学部からの選出された兼務教員(案)及び空白のものは、学部等からの選出報告を追認することとし、本委員会として推薦することを了承した。

なお、次回の委員会に整った委員名簿を提出することとした。

2 大学教育総合センター運営委員会の任務について

委員長から資料 2-3 に基づき、本委員会の審議事項について説明があり、各部門会議は月例で開催し継続性のある会議として運営し、各部門で決定するものは各部門で進め、各部門間で調整の必要なものを本委員会で検討することで、学生を支援する組織としたい旨が述べられた。

第 3 条 5 項の「学部選出教員」について、規則に学部からの選出母体を明記するよう要望が出され、今後の経過を見た上で検討することとした。また、委員の任期については、移行期間は必要としても、学部の委員任期を本委員会の任期に併せた 2 年間継続にするよう各学部で努力することが求められた。

センター長が兼ねている 3 つの部門は、将来個々の部門長を配置したい旨が述べられた。

運営委員会の開催日程については、新年度のメンバーで調整した結果、毎月第 1 木曜日の午後 3 時から開催することを了承した。

3 平成 18 年度の年度計画について

委員長から資料 3 に基づき、大学教育総合センターで対応すべき事項を確認した。

19 年度の教育改善に向けて決定した部分について明示するよう求められ、次回の委員会に合意した内容に基づき、V.3 を修正して V.4 として提出することとした。

関連して、V.3 の個々の事項の合意内容について、学部の教員に周知されていないとの意見について、委員長から議論した結果を整理したものをまとめるという意向と共に、各委員に対しても学部への審議経過の報告を十分に行うよう依頼があった。

4 その他

(なし)

報告

1 教育推進会議報告

委員長から資料4に基づき、「教育の個性化、教育力向上のためのアクションプラン」作成のための5つの検討課題について、社会変化に対応した方向を明確にするため、大学教育総合センターの各部門で検討する旨の報告があった。

また、配付資料の「中央教育審議会答申(抜粋)」を全教員に配布し、大学の機能別分化や高等教育の質を保障するための教育改善について、学内教員の理解を深めたい旨が述べられた。

2 平成17年度の転学部、転学科・課程報告

委員長から資料5に基づき、転学部等の実績が報告され、転学部に伴う「初期ゼミ」のような学部毎に履修単位数の異なる授業科目の取扱いについては、今後の検討が求められた。

3 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田部門長から口頭で、3月20日開催の報告があった後、時間割ワーキング・グループの後藤委員長から、全学共通教育として外国語を週4コマ実施することが決まったことへの対応、工・農学部と人文社会科学・教育学部との転換教育の扱い及び高年次教養教育の係る時間割編成について検討している旨が述べられた。

転換教育ワーキング・グループについては、岡田部門長から検討状況について中間報告があった。

4 教育評価・改善部門会議報告

後藤部門長から資料6に基づき、全学統一拡張Webシラバスの導入に係る説明会を開催した旨の報告があり、関連した質問に対して、学生による授業評価アンケートをシステムに組み込む可能性については、難しいとの説明があった。また、19年度から本格的稼働する場合でも、今までのシステムは残して置いた方が良いとの意見があった。

5 その他

(1) 大学教育総合センター長報告

委員長から資料7に基づき、「IDE 高等教育研究フォーラム」の参加報告があった。

(2) その他

江本教員から大学教育研究フォーラムの参加報告があった。

(3) 次回の委員会開催について

議題2で調整したとおり4月27日(木)13:00から開催することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 2 回)記録

日時:平成 18 年 4 月 27 日(木)13:00～15:00

場所:人文社会科学部第 2 会議室

出席者:玉、岡田、後藤、井上、村上、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、谷口、畑中

陪席者:山崎、江本、福永

審議に先立ち、委員長から第 1 回委員会記録案について、各委員あて配付後に修正箇所があった旨が述べられ、岡田副センター長から修正箇所の説明があり、了承された。

議題

1 全学共通教育の改革骨子案 (V.4) について

委員長から資料 1 に基づき、改革骨子案 (V.3) の審議を踏まえて合意できたものを再度整理し、その一部を (V.4) として作成した旨の説明があり、残りの部分は更に大学教育総合センターで検討して 5 月の連休明けに各学部配付し、検討願いたいとの付言があった。

委員長からは、新しく委員になった方の理解を得ることも含めて、資料の「0 経過」の部分について説明があった後、議論を行った。

「学部による組織的援助」とは、「全学共通教育を担当する教員の授業の負担分は、所属学部の組織的バックアップがあつて担当するもの」という説明があった。

「10 科目程度」については、教養教育科目を増やさないと多人数教育クラスの解消にならないことを踏まえた目安である旨の説明があった。また、科目の増やし方についての検討は、全学共通教育企画・実施部門が担当し、新分科会が成立した後に検討してもらう旨の付言があった。

転換教育の実施方法は、全学共通教育の要素を取り込んで単位数の統一化も含めてワーキンググループで検討願うこととした。

審議の結果、「0 経過」の部分について内容を了承した。

2 新分科会(案)について

岡田全学共通教育企画・実施部門長から資料 2 に基づき、仮登録の集計結果について説明があり、「資料 1 の別紙」による提案については、出来るだけ提供された意見や要望を取り入れたいとの付言があった。

委員からは、分科会によってはもっと大括りにしても良いのではないか、環境の 2 つの分科会は、内容から統一しても良いのではないかなどの意見があった。

審議の結果、委員長から現在の分科会を再度見直して、V.4 と一緒に提案し、教員に分科会に登録してもらう作業もあるので、学部での検討も踏まえ 5 月中に成案を得たい旨が述べられた。

3 各部門会議の専決事項について

委員長から、学生生活支援部門会議は一部の委員が選出されていないので、審議が出来ないため次回の本委員会に提案したいこと。また、就職支援部門会議は、キャリア教育科目の開設や FD 等、他の部門と調整が必要な事項を本委員会に提案し、それ以外は専決事項としたい旨の説明があった。

なお、全学共通教育企画・実施部門、教育評価・改善部門及び専門教育関係連絡調整部門についても、現状を考慮して改めて提案する旨が述べられた。

4 新学務情報システム委員会の設置について

委員長から資料4に基づき、19年度からのカリキュラム改正に対応する新システムを構築するために、仕様を策定するための委員会を設ける旨の提案があり、審議の結果了承した。

なお、委員の任期は、システムが完全に運用するまでとし、委員の選出について、別途各学部長に書面で依頼することとした。

5 その他

(1) 成績評価「秀」の取扱いについて

委員長から、19年度からの新成績管理システムの導入に併せて、「秀」を含めたきめ細かい成績評価を、専門教育関係連絡調整部門会議で原案を検討し、次回の本委員会に提案したい旨の提案があり、これを了承した。

(2) 科目等履修生出願案内(案)について

畑中委員から資料5に基づき、提案に至った経緯について説明の後、委員長から従来外国人留学生のビザ取得のための門戸を広げていたが、本来の修学目的に制限するよう出願案内を修正したい旨の提案があった。

平成18年度後期分については、一部の文言を訂正して了承し、平成19年度以降の出願案内(案)は、学部を持ち帰り検討することとした。

また、入学資格としている日本語能力試験成績点数の設定値については、別途検討するよう求められた。

報告

1 教育推進会議報告

委員長から資料6に基づき、「教育の個性化、教育力向上のためのアクションプラン」作成に係る説明があった。

2 各部門会議報告

(1) 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田部門長から資料7に基づき、全学共通教育企画・実施部門会議(第1回)について報告があった。転換教育WGについては、山崎委員長から検討状況の報告があり、時間割WGについても後藤委員長から、平成19年度以降の外国語科目時間割について報告があった。

(2) 教育評価・改善部門会議報告

後藤部門長から資料8に基づき、全学共通教育科目の授業公開の案内及び授業モニター登録の募集について報告があった。

3 大学教育総合センター専任教員の兼担状況について

委員長から資料9に基づき、資料の一部について説明があり、表の見方が誤解を招きやすいので取扱いについては注意するよう付言があった。

4 その他

(1) 現代GP、特色GPの応募状況報告

委員長から資料(現代GP、特色GPの申請書写し)に基づき、平成18年度に応募状況について報告があった。

(2) 次回の委員会開催について

委員長から5月末の時期で、開催日程の調整をする旨の説明があった。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 3 回)記録

日時:平成 18 年 6 月 2 日(金)10:30～12:32

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、井上、村上、長谷川、高畑、吉村、成田、谷口、畑中

陪席者:山崎、江本、福永

欠席者:押切

審議に先立ち、第 2 回委員会記録案について、記録(案)を確認し、了承した。

議題

1 全学共通教育の改革実施案について

委員長から資料 1 に基づき、改革実施案が示され、それに対する学部から出された意見には、当初の議論に戻ったような意見もあり、昨年来段階を追って検討してきた内容と意見に食い違いがある旨の感想が述べられ、学部の意見に対する回答をまとめたので、この回答を踏まえ改めて学部で検討いただきたい旨の依頼があった。

また、新分科会については来年度の科目開設に向けた準備もあるので、改革実施案から切り離して、議題で審議したい旨が提案され、了承された。

2 新分科会(案)について

岡田全学共通教育企画・実施部門長から資料 2 に基づき、原案を整理した後の新分科会(案)及び分科会登録の留意点(原則事項)について説明があった。

- ・19 年度は、現行の開設科目を原則としてそのまま開設し、教員は担当可能な科目の分科会に必ず登録すること。
- ・総合科目は、新分科会設置後に大学教育総合センターと現総合科目分科会で検討して、編集形成すること。
- ・科目名、分科会の名称及びその組み替えについては、新分科会発足後に変更できること。

委員からは、以下の意見があった。

- ・類似科目間の調整が必要であり、学生には選択科目の指導が必要である。
- ・新分科会名の工夫が必要である。

審議の結果、以下のとおり了承した。

- ・新分科会名の「生命の世界」と「生物の多様性」は、「生物の世界」として統一し、「自然のしくみ」は、「自然と数理の世界」とする。
- ・全教員の登録については了承されているので、登録について各学部の教授会で周知し、登録期間を 6 月 21 日(水)から 30 日(金)までとして、7 月中には立ち上げる。

なお、未登録の教員がないように、大学教育総合センターで徹底を図ることとした。

3 各部門会議の専決事項について

委員長から、前回の本委員会で就職支援部門会議については、口頭で説明し了承を得ている旨が述べられ、資料 3 に基づき、5 月 23 日(火)の学生生活支援部門会議を経たものを提案する旨が述べられ、原案を了承した。

なお、全学共通教育企画・実施部門、教育評価・改善部門及び専門教育関係連絡調整部門についても、各部門会議の審議を経た上で改めて提案する旨が付言された。

4 大学教育総合センター運営委員会関連規則の制定について

委員長から資料 4-1～10 に基づき、学生生活支援部門に係る規則等のうち、全学学生委員会から大学教育総合センター学生生活支援部門組織に改編されたことに伴い、規則等の内容は変更しないが、決定機関を変更する事務上の整理を行い、4 月 1 日に遡及して適用したい旨の説明があり、これを了承した。

5 平成 18 年度学年暦の運用について

委員長から資料 5 に基づき、18 年度から後期の授業機会の確保のために冬季休業期間を 1 週間短縮する措置を講じたところ、集中講義などを実施する期間を設ける必要があることから、平成 19 年 1 月 9 日(火)、10 日(水)の両日は全学共通教育科目等の授業は行わないで、集中講義等に当てる日としたい旨の提案があり、原案を了承した。

また、専門教育については該当期間の対応を学部運用に任せることとした。

6 その他

(1) 平成 19 年度科目等履修生出願案内(案)について

委員長から前回の本委員会で学部の検討を依頼していた結果について、各学部の報告が求められた。

人文社会科学部及び教育学部からは書面で意見が述べられ、工学部及び農学部からは異論がなかった旨の報告があった。

出願案内(案)の文字訂正の後、履修単位数の制限について意見交換を行った。

- ・ 本学の国際交流方針に影響を与えるので、大学の留学生の受け入れ方針について関係委員会の意向を踏まえるべきである。
 - ・ 入学希望留学生の日本語能力や留学生の前期の学業成績等で制限するためには、入学後の留学生の実態調査が必要である。
 - ・ 学部の正規入学の留学生については、日本語能力試験成績等を実施機関に照会・確認しているが、科目等履修希望の留学生についても、確認してはどうか。また、本国での学歴の確認は、時間的に難しい要因がある。
 - ・ 年間 10 名程度科目等履修生として入学した留学生の中には、授業に出席しない者も少なくない現状がある。
- 審議の結果、継続審議とし、併せて国際交流委員会でも留学生の受入について検討願うこととした。
また、外国人留学生の履修状況等の根拠データを提供し、更に検討願うこととした。

報告

1 新学務情報システム委員会の設置について

委員長から資料 7 に基づき、学部から選出の委員等が報告された。

2 各部門会議報告

(1) 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田部門長から配布資料に基づき、第 2 回の部門会議について報告があった。

(2) 教育評価・改善部門会議報告

後藤部門長から配布資料に基づき、第 1 回の部門会議について一部字句の修正と併せて報告があった。

(3) 専門教育関係連絡調整部門会議報告

玉部門長から成績評価「秀」の導入について、学部を持ち帰り検討を依頼した旨の報告があった。

3 その他

(1) 全学共通教育改革実施案説明会の開催日程について

委員から、学部内の意見の集約のためにも、教授会の前に開催して欲しかったこと。また、大学教育総合センター主催の学内説明会等は、学部教授会の日程を考慮して開催して欲しい旨の要望が述べられた。

(2) 転学科制度について

委員から、農学部では 1 割近い 1 年生から転学科の希望があり、本来の制度のねらいと異なって、転学科を前提に入学して来る学生がいることについて、対応に苦慮している旨の話題が提供された。

(3) 次回の委員会開催について

今回は、7 月 6 日(木)午後 3 時から開催することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 4 回)記録

日時:平成 18 年 7 月 6 日(木)15:02 ~ 18:20

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、村上、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、谷口、畑中

陪席者:山崎、江本、福永、永野

欠席者:井上

審議に先立ち、第 3 回委員会記録案について、記録(案)を確認し、了承した。

議題

1 全学共通教育の改革実施案について

委員長から資料(番号なし)に基づき、改革実施案に対する教育学部英語教育講座からの意見に対する回答が示され、教育学部委員からは回答を英語教育講座に持ち帰り、実施改革案と重ね合わせて検討する旨が述べられた。

農学部委員からも外国語の履修形態の決め方について、学部では良く理解されていないので唐突に決まったというイメージがある旨の感想が述べられた。

1 年生に語学の学習負担が大きくなるとの意見については、現在の学習時間とほぼ変わらないことが説明されたほか、1 年生で集中的に履修する移行期には、特別措置として非常勤講師は増えることが見込まれるとの付言があった。

語学に係る検討の経緯や時間割まで検討を終えた段階で、振り出しに戻る議論は出来ないことが確認され、各学部の語学の履修形態が確認された。

人文社会科学部は、8:0、4:4 または 0:8、教育学部は、学校教育教員養成課程は 4:4、その他の課程も近く(この 14 日まで)に決定する。工学部・農学部は、8:0 または 4:4 で、学生が選択する。

そのほか改革案についての意見が述べられた。

人文社会科学部:(特になし)

教育学部:

- ・今後細かい意見は出てくることが予想されるが、特になし。

工学部:

- ・抽象的な表現は避けた方がよい。
- ・ESD 及びその副専攻構想を実施案に盛り込むことや押しつけることは好ましくない。
- ・農学部の「専門基礎科目の担当を教養科目の担当と見なす」ことは適当でない。
- ・新設 10 コマの開設は、現在の担当割合に応じて授業の負担割合を考える必要がある。
- ・各学部の単位数の決定は、19 年度から改革するために転換教育の単位数を含めて、急がないと間に合わなくなる。
- ・転換教育の単位数は、現行の他の科目と中味を比較して決めるべきである。
- ・教育学部で情報の課程認定を受けているにもかかわらず情報基礎科目を学部単独の教員で出来ないと言うのは問題がある。情報基礎科目は、各学部で責任をもつべきである。
- ・オムニバス方式の授業を増やすのは、教育効果を十分に議論すべきである。

農学部:

- ・19 年度に改組を計画しているので、転換教育の単位数を早く決定して欲しい。
- ・履修可能上限単位数を 22 単位から 24 単位にして欲しい。

委員長から・共通教育科目の負担割合は、現在の学部教員配置に基づき考える。

・各学部の単位数は、19年度は現行のままとして検討してきたが、共通教育と専門教育の区分変更もあり、各学部で検討して欲しい。

・ESDの導入については、今後も学内での関心を高める努力を行いながら導入したい旨が述べられた。

続いて山崎大学教育総合センター教員から資料1に基づき、教員の新分科会登録手続きの状況が説明され、回収資料により未手続き者のリストが示されたが、運営委員の責任で、学部に持ち帰り活用することを認めた。今後の進め方は、新分科会への未登録者については個別に登録を促し、7月中旬に第1回の会議を開催し、分科会を立ち上げ夏休み前には代表者を選出願いたいこと。及び現在の分科会代表者は、最低限18年度の代表になってもらうことが要望された。

また、19年度の授業科目の確定は、18年度の科目を基に新科目を加える方法とすることとした。

以上の議論を踏まえて、工学部の意見による一部修正を加えた改革実施案について諮った結果、新しい実施体制が動き出してから必要に応じて修正することもあるとの確認の下にこれを了承し、今後これを原案として改革を進めることが合意された。

2 岩手大学学則の一部改正について

委員長から資料2に基づき、学生の復学手続きについて、事務の簡素化を図るために学生生活支援部門会議の審議を経て、学則の一部の改正を提案する旨の説明があり、原案を了承した。

また、当該改正案は、次回の教育研究評議会に提案する旨の付言があった。

3 岩手大学課外活動施設規則の一部改正について

委員長から資料3に基づき、自動車部車庫の設置に係る規則の一部を改正する案について、学生生活支援部門会議の審議を経て提案する旨の説明があり、原案を了承した。

また、当該改正案は、次回の教育研究評議会に提案する旨の付言があった。

4 部門会議の専決事項について

委員長から全学共通教育企画・実施部門会議、教育評価・改善部門会議及び専門教育関係連絡調整部門会議を一括で提案したいが、一部の部門会議で審議が不十分のため今回の議題から取り下げる旨の説明があった。

5 成績評価基準のガイドラインについて

委員長から、19年度改革に間に合うように各分科会の教育目標を定めて、全学共通教育科目から取りかかってもらい、秋頃までに教育目標及び成績評価基準のガイドラインをまとめて欲しい旨が述べられた。

後藤教育評価・改善部門長から資料4に基づき、説明があった。

検討の結果、分科会レベルでは個々の授業科目の到達目標を設定する必要はないが、同じ科目名で複数クラスを開講している場合は、授業の目的が同じであるなら担当者間で到達目標が同一になるよう配慮する必要があること、授業の目的が異なるのであればむしろ授業科目名を変更する方が良いことなどを確認し、了承した。

6 成績評価「秀」の導入について

委員長から資料5に基づき、専門教育関係連絡調整部門会議と全学共通教育企画・実施部門会議との了承を踏まえて、現行の成績評価をよりきめ細かく評価し、学生の学習意欲を喚起するため、「秀」を導入したい旨の説明があった。

審議の結果、19年度から導入することが了承された。また、教育評議会に提案すること及び次回の運営委員会には導入の理由書と学則の改正案を提案する旨が付言された。

なお、18年度以前入学生の成績は、上限を「優」として評価することを確認した。

7FD 合宿研修会の開催について

後藤教育評価・改善部門長から資料6に基づき、会場は全施設を貸し切ることができ、かつ研修の運営に時間的制約が少ないというメリットから「なかやま荘」で開催すること。今回の研修は、1日目は大学教育総合センターの総合化に伴い部門相互の連携を主旨とし、2日目の研修は教育カリキュラムについて検討する旨の説明があり、原案を了承した。

また、参加者に経費の一部負担を願うこと及び各学部長に参加者の推薦を依頼する旨の説明があった。

8 その他

(1) 平成19年度科目等履修生出願案内(案)について

委員長から資料7に基づき、前回の本委員会です承された18年度後期の出願案内の項目7について、外国人留学生に限定する旨の説明があり、修正を了承した。

続いて、19年度の出願案内の項目1の「日本語能力試験成績点」については国際交流センターに検討を依頼中であるが、項目5、9について修正したい旨の提案があり、原案を了承した。

なお、前回、人文社会科学部委員から出された「本学の留学生受け入れ方針について関係委員会の意向を踏まえるべき」との意見については、国際交流センターから「統一意見は出せないが、受け入れ制限は必要である」旨の意見が出されている旨の説明があった。

(2) 平成19年度授業時間割枠について

委員長から資料(番号なし)に基づき、平成19年度の授業時間割枠について提案があり、学務課から補足説明があった後原案を了承した。

(3) 工学部の環境教育科目について

工学部委員から、工学部の全学科で環境教育科目を必修とした場合には、200名ほど受講生が増えることになり、全学科の学生が履修するならば3・4クラス分の対応が必要となり、教員の担当が増加する旨の説明があった。

報告

1 東北地区大学教育支援施設等交流会議(仮称)の開催について

委員長から資料8に基づき、会議開催の目的と日程について報告があった。

2 各部門会議報告

(1) 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田部門長から口頭で第3回の部門会議について報告があり、時間割WGの後藤委員長からは、転換教育については、学部共通でやる必要はないが、全学共通教育枠で開講する旨の説明があった。

(2) 教育評価・改善部門会議報告

後藤部門長から資料9に基づき、第2回の部門会議について報告があった。

(3) 専門教育関係連絡調整部門会議報告

玉部門長から、成績評価「秀」の導入について検討し、次回は履修可能上限単位数について検討する旨の報告があった。

(4) 学生生活支援部門会議報告

玉部門長から資料9に基づき、第2回の部門会議について報告があった。

(5) 就職支援部門会議報告

玉部門長から、「キャリアを考える」の授業で卒業生5人に講演をしてもらっている旨の報告があった。

3 平成18年度学年暦の運用について

平成19年1月9日(火)、10日(水)に係る専門教育授業については、学部の運用に任せることとしていたところ、各学部とも授業を休講とする旨が報告された。

4 その他

(1) 入試戦略研究会報告

永野大学教育総合センター教員から資料10に基づき、入試戦略研究会の概略が報告された。

(2) ESD 会議報告

山崎大学教育総合センター教員から資料11に基づき、6月14日に外務省主催で開催されたESD会議について報告された。

(3) 次回の委員会開催について

8月3日(木)午後3時から開催することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 5 回)記録

日時:平成 18 年 8 月 3 日(木)15:00～17:45

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、井上、村上、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、谷口、畑中

陪席者:山崎、江本

審議に先立ち、第 4 回委員会記録(案)を確認し、了承した。

なお、教育学部委員から、「議題 8(2)平成 19 年度授業時間割枠について」は、外国語の開講形態までを含めた提案であったかとの照会があり、岡田委員から、時間割枠は改革案を基に作成されていること。また、平成 19 年度の外国語の開講形態は検討中である旨の説明があった。

議題

1 新分科会の立ち上げについて

山崎大学教育総合センター教員から資料 1 に基づき、学内教員の登録状況が説明され、未登録教員の所属する学部から補足説明があった。

新分科会の代表者の選出及び第 1 回分科会の開催について検討した結果、現在の分科会代表者には引き続き登録分科会の代表者になってもらい、該当者のいない 4 つの分科会の「心と表象」は人文社会科学部、「現代の諸問題」は教育学部、「科学技術」は工学部、「生物の世界」は農学部それぞれ分科会代表者を割り当てて、8 月末日までに推薦願うこととした。

なお、9 月上旬に分科会の代表者会議を開催し、その後に各分科会で任期、任務及び平成 19 年度開設科目等を検討する予定を確認した。また、検討事項は、8 月 4 日(金)に開催する全学共通教育企画・実施部門会議で検討願うこととした。

2 部門会議の専決事項について

全学共通教育企画・実施部門会議については、岡田部門長から資料 2-1 に基づき説明があり、審議事項等の(1)に「・単位互換の基本方針に関すること。」を追加し、部門会議及び運営委員会の取り扱いは、(1)の他の項目と同様とすることとした。また、(4)の「・放送大学との単位互換」と「・いわて 5 大学との単位互換」をそれぞれ「・放送大学との単位の認定」と「・いわて 5 大学との単位の認定」に修正して原案を了承した。

教育評価・改善部門会議については、後藤部門長から資料 2-2 に基づき説明があり、原案を了承した。

専門教育関係連絡調整部門会議については、玉部門長から資料 2-3 に基づき説明があり、審議事項等の(1)の「・3 学期(60 分授業)制」を削除した。(2)に「・専門基礎科目の実施及び調整」を加え、部門会議及び運営委員会の取り扱いは、(2)の別の項目と同様とすることとした。また、(3)は、新たに学内に「教員養成機構」が設置され、当該機構での検討事項となることから削除して、原案を了承した。

3 平成 18 年度大学教育総合センター経費(全学共通教育経費)の予算等について

委員長から資料 3-1 に基づき、平成 17 年度決算額が報告され、資料 3-2 に基づき、平成 18 年度所要額が提案された。

人文社会科学部委員から、今年度の所要額について、全学共通教育科目授業担当教員分の基礎配分は、後期の履修者数の確定前でも配分するよう要望があった。

また、専門基礎科目授業担当分及び教職科目授業担当分の経費は、全学共通教育の全教員担当体制の導入等により、支給を開始した時期と状況が変化しているため、平成 19 年度からの取扱いを、今年度中に検討することを附帯して原案を了承した。

4 「学びの銀河」プロジェクトについて

委員長から資料4に基づき、18年度の現代GP事業に本学から応募したプロジェクトが、採択された旨の報告があり、プロジェクトの内容及び計画が説明された。

また、分科会の教育目標を検討するときにESDを含めた領域のデザインを検討すること及び全学で一体感をもって作り上げたい旨の付言があり、今後、運営委員会並びに学部の上承を得ながら進めていくことが上承された。

5 その他

(1) 転換教育について

山崎転換教育WG委員長から資料5に基づき、全学部で1単位の科目とすること及び開設する授業のコマは全学で統一しないで、学部の都合により編成する旨の審議結果の報告があった。

委員長から、平成19年度の授業内容については、大学教育総合センターで共通教育の部分についてのガイドラインを、WGでまとめる方向で進める旨の説明があった。

農学部委員から、資料「新入生の学習生活調査報告」の学部別データの提供依頼があった。

報告

1 全学共通教育の改革実施案の一部修正について

委員長から資料6に基づき、前回の本委員会述べられた意見を参考にして、修正した部分の説明があった。

教育学部の外国語の履修形態に係る学生の選択制限について確認する意見があり、委員長からは、学生の学習意欲を重視するために語学履修の選択枠を設けた旨の説明があった。

岡田委員からは、外国語担当教員会議の授業開設形態の検討状況が説明された。

工学部委員からは、情報基礎科目の担当は、各学部が責任をもつ約束で開設した経緯と一部の学部の状況を問題視する発言があり、委員長からは、当該分科会で授業内容・担当者を検討してもらう旨の付言があった。

また、工学部から出された全学共通教育の改革の確認事項の「共通教育の履修する量的な問題の検討」については、委員長から9月以降に検討したいので、具体的な提案を希望する旨の回答があった。

大学の綱化以来の問題として、岩手大学の共通教育に対して共通の理解がないという意見については、委員長から改革案の議論は終えて次の段階の議論を開始するが、今後とも共通理解を求めていく旨の説明があった。

2 授業料免除等に関する学業成績基準の取扱いについて

委員長から資料7に基づき、第3回学生生活支援部門会議で「岩手大学入学料免除及び授業料免除に関する学業成績基準の取扱要領」を制定し、休学していた学生の取扱いについて平成18年度後期授業料免除申請分から適用することとした旨の報告があった。

3 東北地区大学教育支援施設等交流会議設立準備懇談会について

委員長から資料8に基づき、7月14、15日に、本学を会場に開催した設立準備懇談会について、参加者及び記録(案)について、報告があった。

4 各部門会議報告

(1) 全学共通教育企画・実施部門会議報告

岡田部門長から資料9に基づき、第3回の部門会議の報告があった。

(2) 教育評価・改善部門会議報告

後藤部門長から資料9に基づき、第3回の部門会議の報告があった。

(3) 専門教育関係連絡調整部門会議報告

玉部門長から資料9に基づき、第3回の部門会議の報告があった。

(4) 学生生活支援部門会議報告

玉部門長から資料9に基づき、第3回の部門会議の報告があった。

5 その他

(1)2006年ウインターセッションに向けて

山崎大学教育総合センター教員から資料10に基づき、8月2日開催の高大連携推進会議の報告があり、委員長から、今年度の開講は、大学全体で講座を構成するので、授業内容は文系理系を問わずに、各学部から2名を目安として推薦願いたい旨の依頼があり、講師の特定及びテーマについては継続審議とした。

(2)学部長等連絡会の位置付けについて

長谷川委員から、学部への連絡・依頼等については、学部長等連絡会はあくまでも連絡調整を行う機関であり、承認するという機関とは位置付けられていないので、区分けて運用して欲しい旨の要望が述べられた。

(3)次回の委員会開催について

9月11日(月)午前10時から開催することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 6 回)記録

日時:平成 18 年 9 月 11 日(月)10:30～12:10

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、村上、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、谷口

欠席者:井上、畑中

陪席者:山崎、永野、江本、福永

審議に先立ち、第 5 回委員会記録(案)を確認し、了承した。

なお、工学部委員から、「報告 5(1)2006 年ウインターセッションに向けて」は、9 月の教授会で実施形態を了承してもらったうえで、人選の依頼があるという進め方のよう理解していた旨の照会があり、委員長から本日の議題 3 で審議願う予定が説明された。

議題

1 岩手大学学則等の一部改正について

委員長から資料 1-1 に基づき、平成 19 年度からよりきめ細かい成績評価と学生の勉学意欲の向上を理由に、成績評価に「秀」を導入することについて、大学学則の一部を改正する旨の説明があり、原案を了承した。

なお、大学院の取扱いについては、大学院規則に記載のない事項は、大学学則を準用することとしているが、運営委員会では大学院への「秀」の導入を含めて検討していなかったため、大学院委員会の了承を得ることとした。

また、関連する以下の提案についても了承されたが、教育研究評議会への提案は、大学院委員会での審議・了承を経た後に、行うこととした。

岩手大学における授業科目の履修登録単位数の上限に関する規則の一部を改正する規則(案):資料 1-2

岩手大学における在学期間の特例に関する規則の一部を改正する規則(案):資料 1-3

岩手大学全学共通教育規則の一部を改正する規則(案):資料 1-4

岩手大学における国際交流科目に関する要項の一部改正(案):資料 1-5

平成 19 年度「履修の手引き」の記載内容の一部改訂(案):資料 1-6

2 全学共通教育科目の履修単位数について

委員長から資料 2 に基づき、学部毎の大学大綱化前後の共通教育科目の修得単位数の状況が説明され、共通教育の共通認識と実施面及び単位数を揃えることについて議論が求められた。

工学部から、全学共通教育を重視する観点から教養科目の単位を 2 単位増やすことにした旨の報告があり、実施面で他学部との調整も考慮の上、了承された。

工・農学部は教員免許の課程認定申請手続きを控え、平成 19 年度からの編成が了承された。

また、各学部の卒業必要単位数について確認し、人文社会科学部は 1 単位減じ、工学部は変更なし、農学部は転換教育科目 1 単位分を加え、教育学部は確認の上報告願うこととした。

3 平成 18 年度ウインターセッションの実施について

委員長から、高大連携の本事業の目的について説明があり、今までの学部毎の企画から全学で構成する講義を開講するように計画し、大学教育総合センターで調整する旨が述べられ、開講プログラムの提出時期を考慮して、各学部からは 9 月 20 日までに、ESD に特定しないが、関係する(環境関連)講義になるよう担当者を推薦願うこととした。

4 その他

(1) 全学共通教育企画・実施部門会議規則の一部改正について

委員長から資料3に基づき、新分科会の設置に伴い、当該部門会議における改正案の検討を省略して運営委員会に提案する旨の説明があり、原案を了承した。

(2) 平成19年度外国語の開講形態案について

岡田全学共通教育企画・実施部門長から資料4に基づき、一部資料の文言訂正の後、実施体制とのすりあわせの結果について説明があり、提案を了承した。

・工・農学部の学生で英語4単位、その他の外国語4単位を選択した場合は、英語4単位その他の外国語4単位を半期ずつ履修する集中型の予定だったが、平成19年度については、移行期の措置として英語2単位及びその他の外国語2単位を、前・後期にわたって履修する通年型で実施し、集中型については、平成20年度以降の実施を検討する。

・教育学部は、学部が希望する通常型(前・後期の通年型)で行うが、ロシア語受講者のみは、集中型で行う。

・学生への履修指導の程度やその是非については、今後改善していく。

委員長から、関連する非常勤講師の雇用形態について、再考したい旨の付言があった。

(3) 現代GP開設科目等の単位認定について

委員長から資料5に基づき、新たに開設する知財教育科目等の専門教育科目を含めて、入学時の「履修の手引き」に掲載の授業科目以外に、入学後に加わった授業科目の取扱いについて、現在、学部毎で取扱いに違いがあるが、今後、高年次教養科目の導入も控えているので、全学で統一的理解を図りたい旨の提案があった。

今までは、各学部教育課程規則の制約と履修の手引きの記述の関わりから、学部による取扱いに差異があったが、成績管理システムや学則の改正など履修単位の認定についての問題点などを調査の上、後日、資料を学部に届けるので、教務(学務)委員会で議論願ひ、次回の本委員会で審議したい旨の付言があった。

報告

1FD合宿研修会報告

江本大学教育総合センター教員から資料6に基づき、参加者のアンケートの集計結果も含めて実施状況について説明があり、年内に報告書を作成・配布し活用してもらう予定が述べられた。

2リメディアル教育の実施について

委員長から、高校で履修歴の十分でない学生に、個別指導的要素の教育を含めて18年度の後期から、数学・物理・化学を県立杜陵高校の教員に10週程度を実施する計画について、各学部に書面を配布し10月中旬を目途に、履修単位は認められないが学生の自発性を重視して受講者を募集する旨の報告があった。

委員からは、工学部で前期に実施している同じ科目の補習教育と整合性を取ることに要望に加え、学部によって必要とする履修の程度に差があるので、全学的な統一は難しいなどの意見があった。

3各部門会議報告

岡田部門長から資料7に基づき、全学共通教育企画・実施部門会議(第3回)の報告があった。

4 その他

(1) 全国大学教育研究センター等協議会報告

委員長から資料8に基づき、報告があった。

(2) 平成17年度大学センター年次報告書の作成について

江本大学教育総合センター教員から資料9に基づき、報告書の構成が報告された。

(3) 現代GP(学びの銀河)の事業計画について

委員長から資料10に基づき、採択されたプログラムについて、具体的な事業の推進について、全学的理解と協力依頼があった。

(4) 第10回ユネスコ/日本アジア・太平洋地域環境教育セミナーについて

委員長から資料11に基づき、セミナーの開催と大学教育総合センターから山崎教員が参加する旨の報告があった。

(5) その他

人文社会科学部委員から、平成 19 年度以降の非常勤講師削減方針を示すよう求められ、委員長から早期に提供したい旨の回答があった。

(6) 次回の委員会開催について

改めて 10 月 11 日(水)～13 日(金)の日程で開催日程の調整をすることとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 7 回)記録

日時:平成 18 年 10 月 12 日(木)13:00～15:38

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、井上、村上、長谷川、吉村、谷口、畑中

欠席者:押切、高畑、成田

陪席者:山崎、江本、福永

審議に先立ち、第 6 回委員会記録(案)を確認し、了承した。

議題

1 全学共通教育企画・実施部門会議規則の一部改正について

委員長から資料 1 に基づき、前回の本委員会で第 8 条の分科会を再編し、総合科目分科会は設けないこととしたが、19 年度に向けて検討をするために、平成 19 年 3 月まで存続させる旨を附則に規定する提案があった。分科会の機能は、そのまま新分科会に引き継ぎ、新年度を待たずに設置して検討を開始すること及び教育目標についても検討する必要がある旨の補足説明があった。

検討の結果、附則に関係事項を盛り込むことを了承した。

2 現代 GP 開設科目等の単位認定について

委員長から、現代 GP 関連科目は、今後、高年次の開講科目もあることから、入学年次にかかわらず、卒業要件単位に加えることについて提案された。その結果、学務情報システムの運用には、頻繁な変更は好ましくないが大きな支障がないこと、学生の利益になることから、現代 GP 関連新設科目に限って専門科目については学部で検討願うこととし、全学共通教育科目は、その都度本委員会で審議することを了承した。

また、一般の科目は学年進行で導入することを原則として運用してきた経緯が述べられ、具体策としては、新しい科目を履修科目に加えることになるので、学則の変更及び規則の改正が必要になることが説明された。

更に、委員長から、今後、新設科目に対応するための措置を検討する旨の付言があった。

3 平成 19 年度科目等履修生の出願案内について

委員長から資料 2 に基づき、以下の改正点の説明があり、原案を了承した。

- ・日本留学試験の日本語科目の点数を上げることについては、先に了解されており国際交流センターで検討した数値とした。
- ・「留学資格の取得が可能」は、在留資格認定証明書のある者を想定している。
- ・「※本学の科目等履修生制度を・・・」の表記は、本学に当該制度で在学することが、在留資格に該当しない旨を強調する注意書きである。

4 基礎ゼミナールの実施体制について

基礎ゼミワーキンググループ山崎委員長から資料 3 に基づき、実施に向けた検討結果により、開設コマ数・担当者等について、11 月末を目処に回答いただくよう依頼があり、了承された。

委員からは、短期間の履修手続きの必要及び人文社会科学部の手引書を工・農学部にも利用できるための調整が要望され、実施計画を了承した。

5 リメディアル教育(学習支援講座)について

委員長から資料 4 に基づき、前回の本委員会で求められた書面による提案について、以下の説明があった。

- ・推薦入学者を含めて、基礎的科目を受験科目としなかった学生のための補習的教育である。
- ・学生の個別の質問に答えるような学生の自主的学習を尊重する。
- ・学生の学習を補完する姿勢で取組み、大学入学生の学習の現状について高校への情報提供になるので高大連携

- 事業とし、指導する高校の教諭は勤務時間内に来ることになる。
- ・専門基礎科目担当教員以外の教員からも学生に広報してもらう。
 - ・18年度は試験的取組で、後期の導入だが、19年度は前期の5・6月頃からの開設を検討する。
- 審議の結果了承されたが、希望学生の募集に懸念が述べられ、大学教育総合センターで広報用のチラシ等を作成することとした。

6 その他

(1) 平成19年度非常勤講師の削減について

委員長から、19年度は外国語で経費の増加が見込まれるが、平成21年度までに5千万円を削減する必要があるため、昨年度の方針に従って講師旅費分を含めて前年度比10%減額を目処に、分科会と各学部での削減努力が求められた。

関連して工学部委員から、大学教育センターに専任として学部から教員を選出した場合は、教員を補充できないところを弾力的に運用し、全学支援的にその授業を担当してもらう非常勤講師手当を支給することになっていて、専任的兼務教員の取扱いが不明瞭であった。その後、センターに専任教員が採用されても非常勤講師手当の特別枠が支給され、一部に弾力的な措置が継続されているので、明確にするよう求められた。

委員長からは、センターの円滑な運用のために必要最低限の運用を認めて欲しい旨が述べられたが、組織検討委員会で検討するなど削減努力が求められた。

(2) 大学教育総合センター教員の兼業(後期)について

委員長から資料5に基づき、新たに後期の授業に係る兼業が説明され、了承された。

なお、教職科目については、教員養成機構で検討してもらう旨の付言があった。

(3) 岩手大学日本学生支援機構学部学生奨学生推薦に関する選考基準の一部改正基準(案)について

委員長から資料6に基づき、学生支援機構の通達に基づく一部改正であり、学生生活支援部門会議の審議を経て提案する旨の説明があり、原案を了承した。

(4) 国語力向上のための方策について

委員長から参考資料に基づき、学務担当理事室で検討したものを、今後、各分科会や学部の検討資料として活用したい旨の説明があった。

(5) キャップ制の考え方について

委員長から参考資料に基づき、専門教育関係連絡調整部門会議を通じて、学部に検討を依頼している履修上限単位数の改訂に係る資料である旨の説明があった。

平成19年度から上限単位数を24単位に引き上げる提案については、適用学年や一部の学科で必修となる最低履修単位数の設定などの条件を確定した上で検討するよう意見が出された。

(6) 水曜日の時間割枠の利用について

人文社会科学部委員から、19年度水曜日の全学共通教育科目の時間帯で空いている時間を、専門教育科目で利用したい旨の照会があり、授業が重複していなければ支障のないこととした。

報告

1 大学院委員会報告

委員長から、大学院委員会(9月28日開催)において、大学院における「秀」の導入を、19年度入学生から適用することが了承された旨の報告があり、10月の教育研究評議会に学則の一部改正を提案する予定が述べられた。

2 平成18年度ウインターセッションの実施について

大学教育総合センター山崎教員から資料7に基づき、各学部から推薦された教員が報告され、今回の統一テーマはこれから検討する旨が述べられた。

3 各部門会議報告

委員長から資料8に基づき、専門教育関係連絡調整部門会議(第4回)及び学生生活支援部門会議(第4回)の報告があった。

就職支援部門会議(第4回)では、キャリア教育を検討している旨の報告があった。

4 その他

(1) 新分科会代表者会議報告

岡田全学共通教育企画・実施部門長から資料 9 に基づき、報告があった。

19 年度の分科会代表者の扱いは、18 年度と同じ取扱いで実施するなどの説明があった。「科学と技術」分科会のような多人数の組織は、教員個人の集合体のままでは運営が難しい旨の懸念については、主体は分科会として運用する中で工夫する意向が述べられた。

(2) 東北・北海道地区大学一般教育研究会報告

大学教育総合センター山崎教員から資料 10 に基づき、報告があった。

(3) 第 10 回ユネスコ / 日本アジア・太平洋地域環境教育セミナー報告

大学教育総合センター山崎教員から資料 11 に基づき、報告があった。

(4) 平成 18 年度後期全学共通教育授業公開について

後藤教育評価・改善部門長から資料 12 に基づき、10 月 23 日(月)から 27 日(金)の授業公開について、説明があった。

なお、今回の授業公開より、全教員にも参加を促す案内を出し、前年度同期(今回は後期)の学生アンケートによる優秀授業の公開も兼ねることとした。

(5) 全国国立大学学生指導担当副学長協議会報告

委員長から資料 13 に基づき、報告があり、工学部委員から「協議題 1 山形大学の取組例」と同様の措置が本学でも導入されることを懸念する意見が述べられた。

(6) 第 1 回 ESD「学びの銀河」セミナー等について

委員長から配布資料に基づき、現代 GP 採択の開催事業について、参加案内があった。

(7) 次回の委員会開催について

11 月 2 日(木)15 時から開催することとした。(後日、11 月 1 日の開催に変更)

平成18年度大学教育総合センター運営委員会(第8回)記録

日時：平成18年11月1日(水) 15:00～18:18

場所：学生センター会議室

出席者：玉、岡田、後藤、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、谷口、畑中

欠席者：井上、村上

陪席者：山崎、江本、福永

審議に先立ち、第7回委員会記録(案)を確認し、了承した。

なお、教育学部から、「議題5 リメディアル教育(学習支援講座)について」において、生物が対象科目に入っていない理由が求められ、委員長より、今回は試行的な取組なので、生物の取り込みを含めて要望等を検討していく旨の説明があった。

議題

1 入学前教育について

委員長から資料1に基づき、岩手県教育委員会の了解を得て、全学部の推薦入学合格者を対象に、試行的取組として大学教育総合センターが主導で、入学前教育を導入したい旨の説明があった。

対象者には一連の合格通知に合わせて通知し、運用の実施経費は、教育研究施設経費(戦略経費)を活用する旨の付言があった。

本委員会と提案内容の関係について確認する議論の後、了承されたが、入学前の対象者に強制は出来ないこと及び高校側の教育に配慮し、理解を得る必要がある旨の意見があった。

2 マルチメディア教室の整備について

委員長から資料2に基づき、外国語の授業及び学生の自学自習を支援する学習環境の整備充実のために、今年度中の整備を目指し、準備として仕様策定委員会を設置したい旨の提案があった。

教室の設置は、マルチメディアとして活用できる端末室を増やすことになり、全学で利用する施設とすることが説明された。

システム導入後の維持管理について意見が出された後、委員会の設置及び委員構成について了承され、各学部選出委員については、大学教育総合センター長から学部長宛に推薦を依頼することとした。

3 アイアシスタントの本格稼働について

委員長から担当教員に提案説明が求められ、後藤委員から資料3に基づき、運用スケジュールが説明された。

運用スケジュールに添ってアイアシスタントのシステム調整が続けられており、機能追加等についてはシステム管理者から通知し、シラバスの入力依頼等は、従来どおり学務課から通知することとした。

説明事項の確認が行われた後、委員長から本格稼働に向けての協力依頼があった。

4 カリキュラムの国際化の整備について

委員長から資料4に基づき、大学の年度計画の項目について大学教育総合センターと国際交流センターで協議し、検討した事項について説明があった。

学部で Semester制やクォーター制の科目を認定する場合の時間数は、学部の判断によることとし、導入の可否及び学部の教育課程規則、履修の手引きの表記については、次回の本委員会までに検討願いたい旨の依頼があった。

5 新入生の英語力判定試験の実施について

委員長から、新入生の学力に合わせた英語教育と入学後の教育成果を検証し、教育効果を上げるために、入学式前の4月6日にプレ TOEFL-ITP(レベルII)を実施する旨の提案があった。

実施に伴う当日の専門教育科目の授業休講措置について協力依頼があり、了承された。

なお、実施経費については、英語のクラス分けのために、学部新生全員に大学が課すものであり、当該分の経費は、大学側で負担する方向で次回の委員会に提案する旨の付言があった。

6 入学科免除及び徴収猶予並びに授業料免除実施方法の改正について

委員長から資料5に基づき、学生生活支援部門会議の議を経て、免除適格者でありながら免除者と出来ない矛盾を解消するために、基準を改定する旨の説明があり了承された。

また、実施方法についても説明内容を現行のものから解りやすい表現に改めた旨の説明があり、併せて了承した。

7 岩手大学奨学金返還免除候補者選考委員会規則の廃止について

委員長から資料6に基づき、学生生活支援部門会議で、学内の主要会議の再編に伴い、当該委員会の機能を新設の「部局長会議」に含めることが了承されたことから、本委員会で確認する趣旨で提案する旨の説明があり、了承された。

8 その他

(1) 新学務情報システムについて

委員長から担当教員に提案説明が求められ、後藤委員から資料7に基づき、現行の学務情報システム上の問題点を改善するために、履修方法等の工夫や改善を要望する事項が説明された。

説明に対し、報告された事項の中には本来教育システムとして改善すべき内容が含まれているなどの指摘があり、当該事項が続けられてきたことへ強い危惧の念が示された。

(2) 環境再生医の資格認定について

委員長から資料8に基づき、NPO 法人「自然環境復元協会」で認定している資格について、人文社会科学部環境科学課程及び農学部農林環境科学科から、認定校として申請する希望があり、大学として申請したい旨の説明があった。

該当の両学部委員から、学部内では合意されていないとの説明があり、慎重に検討するために両学部に差し戻して検討願うこととした。

(3) 成績評価についての申立について

委員長から資料9に基づき、大学の年度計画事項である「学生からの成績評価に対する苦情・意見を受ける窓口を整備する。」措置の1つとして、成績評価に限定し、学務部を経由し申し立てる方法を整備したい旨の提案があり、学部を持ち帰り検討することとした。

報告

1 平成18年度ウインターセッションの実施について

委員長から資料10に基づき、学部選出の教員と検討し作成したプログラムの概要が報告された。

2 各部門会議報告

委員長から資料11に基づき、専門教育関係連絡調整部門会議（第5回）及び学生生活支援部門会議（第5回）の報告があった。

就職支援部門会議（第5回）については、口頭で報告があった。

3 その他

(1) 分科会代表者会議報告

岡田全学共通教育企画・実施部門長から資料12に基づき、第2回分科会代表者会議開催の報告があった。

(2) みちのく GP 交流シンポジウムの開催について

委員長から資料13に基づき、11月27日に山形大学で開催される旨の報告があった。

(3) 次回の委員会開催について

12月7日（木）15時から開催することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 9 回)記録

日時:平成 18 年 12 月 7 日(木)15:00～17:07

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、井上、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、畑中

欠席者:後藤、村上、谷口

陪席者:山崎

審議に先立ち、第 8 回委員会記録(案)を確認し、工学部委員から「議題 8 の記録」に文言を追加する意見については、同議題の審議では他にも意見があったので、本文 3 行目の一部を、「報告された事項の中には本来教育システムとして改善すべき内容が含まれているなどの指摘があり、」と修正し、了承した。

議題

1 履修科目登録上限単位数について

委員長から資料 1 に基づき、専門教育関係連絡調整部門会議の議論を経て、現行の 22 単位を 24 単位とする提案説明があり、審議の結果、了承され、次回の教育研究評議会に報告する旨の付言があった。

なお、国際交流センターからの交換留学生について上限単位数の制限を緩和して欲しい旨の要望については、全学統一の取扱いになるので難しいが、具体的理由を聞いて対応したい旨の付言があった。

また、成績評価の「放棄」の存続については、設定の経緯等を調査し検討することとした。

2 カリキュラムの国際化について

委員長から、前回の本委員会で継続審議としていたもので、中期計画事項に該当する「海外の大学で取得した授業科目のうち、本学の授業科目に振り替えできないものを、他学部他大学で取得した科目と同じ扱いとし、10 単位の範囲で自由選択科目として認める。」取扱い提案について、各学部の検討結果の報告が求められた。

全ての学部から提案を容認する旨の報告があり、了承された。

平成 19 年度版の履修の手引きで、表現方法を確認することとした。

3 大学教育総合センター教員の教育研究科担当について

委員長から資料 2 に基づき、教育学研究科長から平成 19 年度の研究科担当の依頼があり、別途、学長からももう 1 年限りの措置として協力依頼がある旨の説明があった。

委員からは、19 年度 1 年限りの措置でその後改善されることに疑義が述べられたが、本委員会で阻む余地はないとして、1 年という期限で担当の延長を了承した。

4 平成 19 年度放送大学単位互換科目について

委員長から資料 3 に基づき、中期計画事項でもある放送大学活用研究プロジェクト科目の利用について、教員の不補充及び非常勤講師手当の削減に対処する方法として、積極的な利用を検討するよう依頼があった。

18 年度は授業にチューターを付けるなどの改善をしたことや 19 年度は学生に放送大学の受講料を負担させないこと及び放送大学を本学の授業科目に読み替えて単位を認定する旨の説明があった。

5 入学科免除及び徴収猶予並びに授業料免除実施方法の一部改正について

委員長から資料 4 に基づき、前回の本委員会では了承された免除に係る取扱いのうち、留学生について、自宅外通学生として扱うことが適当であるとの結論を得た旨の説明があり、審議の結果了承された。

6 成績評価についての申立について

委員長から資料 5 に基づき、前回に継続審議として学部の検討を依頼し、寄せられた意見を盛り込んだ修正案が説明され、一部の文言を修正し了承した。

また、学生からの申立を教員に正確に伝えるために、口頭ではなく書面で出させる「単なる成績に対する申立

システムとしての問い合わせ」と位置付けて、18年度後期の成績評価分から導入し、学生が成績評価に納得のいかない場合の措置として、学務課で必ず書かせることとした。

7 ボランティア活動の単位化について

委員長から資料6に基づき、既に所定の活動は「その他」として成績記録に載せることについて取扱いを実行しているが、学務担当理事室で検討した単位化案について、19年度から導入したい旨の説明があり、大枠について意見が述べられ、なお、継続審議とした。

- ・工学部の「インターンシップ」は、社会体験活動として卒業要件単位に含める単位認定をしている。
- ・人文社会科学部は、単位化、課外科目としての方向で検討中であるが、学内だけの活動だけを対象にするのは範囲が狭い。
- ・導入については、事前研修、活動時間数及びレポートの提出などの要件を設定する必要がある。

8 その他

(1) 次回の審議事項について

委員長から、19年度から全学共通教育科目等の担当者に支給している手当を削減し、入学生のプレ TOEFL-ITP 試験実施経費に充てる案及び現代 GP プロジェクト等の高年次学生を対象とした教養教育科目の開講について検討したい旨の説明があった。

報告

1 マルチメディア教室仕様策定委員会委員の選出報告

委員長から資料7に基づき、学部選出の教員及び委員長に大学教育総合センター福永教員を選出した旨の報告があった。

2 理系基礎充実支援講座実施状況報告

山崎大学教育総合センター教員から資料8に基づき、学生を個別に指導できるようになったこと及び重ねて学生に周知する旨の報告があり、資料12-1に基づき、12月13日(水)の「専門基礎教育に関する懇談会」について案内があった。

3 平成18年度前期授業評価アンケートによる優秀授業表彰報告

委員長から資料9に基づき、12月1日(金)に学生による授業評価アンケートで総合的に評価の高い全学共通教育科目の担当教員を表彰した旨の報告があった。

4 学部教育システムの改善計画報告

委員長から、前回の委員会で学務情報システムの円滑な運用のために、学部で検討を依頼していた結果について報告を求めたが、特に意見はなかった。

5 各部門会議報告

岡田全学共通教育企画・改善部門長から、12月5日(火)に分科会を一斉に開催した旨の報告があった。
教育評価・改善部門会議、専門教育関係連絡調整部門会議及び学生生活支援部門会議については、それぞれ資料10-1、10-2及び10-3により報告があった。
また、就職支援部門会議については、玉部門長から今年度の合同企業説明会の開催について検討中である旨の報告があった。

6 大学改革合同フォーラム報告

山崎大学教育総合センター教員から資料11に基づき、報告の後、委員長からは他の大学では学部レベルの取り組みもあり、教育推進本部会議で応援する旨の付言があった。

7 専門基礎科目に係る懇談会、FD研究会について

山崎大学教育総合センター教員から資料12-1、12-2及び12-3に基づき、専門基礎科目に係る懇談会、FD研究会及びシラバス入力説明会・講習会の案内があった。

8 その他

(1) 大学機関認証評価の訪問調査報告

委員長から、11月27日(月)から29日(水)まで行われた訪問調査では、概ね良好な評価であった旨の報告があった。

(2)1年生の英語力判定試験日程について

委員長から、1年生全員に課す TOEFL 試験を、2月20日(火)に他の行事に優先させて実施するために協力依頼があった。

(3)教養講座等の開催について

委員長から資料13に基づき、全学共通教育科目教養講座及びESDセミナーの開催案内があった。

(4)次回の委員会開催について

平成19年1月10日(水)15時からの開催予定とした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会 (第 10 回) 記録

日時:平成 19 年 1 月 10 日 (水)15:00 ~ 17:34

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、畑中

欠席者:井上、谷口

陪席者:山崎、江本、福永

審議に先立ち、第 9 回委員会記録(案)を確認し、了承した。

議題

1 プレ TOEFL - ITP の予算確保について

委員長から資料 1 に基づき、新入生にプレ TOEFL - ITP を実施するための約 400 万円の費用を大学側で負担する旨の提案があった。

具体的には、現在大学教育総合センターから全学共通教育科目担当教員に頭割りで配分している分を、19 年度からは、各分科会の FD 活動用経費を一定額控除した残額と、他の全学共通教育経費全体から配分経費を見直して捻出するものである。

委員からは、全学共通教育科目担当教員に配分している分が、教材印刷費分として使われている実態を考慮した何らかの措置が求められた。

また、健康・スポーツ科目授業運営費は、実情を調査し、上記と同様の見直しを検討することとした。

委員長から専門基礎科目授業担当教員分は、19 年度以降の専門教育関係連絡調整部門で検討すること及び教職科目授業担当教員分については、教員養成機構に委ねたい旨の補足説明があった。

2 高年次向け教養教育科目の開講について

委員長から資料 2 に基づき、全学共通教育企画・実施部門会議を経て、高年次課題科目を総合科目と同様の扱いで枠を設け、19 年度から ESD 科目の 2 科目を、開設する旨の説明があった。

開設について基本的に了承し、学部で確認いただくこととして、開講のための作業を進めることを了解した。

3 ボランティア活動の単位化について

各学部委員から資料 3 に基づき、前回から継続審議として学部で検討した結果の報告があった。

教育学部からは、(日)単位認定の主体が不明確であること、(月)履修単位は授業があつて認められるものであること、(火)授業に係る教室外学習の考え方に矛盾すること等の理由で、単位化に反対する意見があった。他の学部からは、特に卒業要件単位になっていないことや、既に同様の社会体験活動として導入していることを理由に反対はなかった。

委員長から、単位化は、(日)大学教育総合センターが責任主体となること、(月)研修及び活動時間の記録などインターンシップの単位化に準じた要件を明確にしていること、及び(火)教室外学習は単位認定の希望者が自ら時間配分を考えるものであることを説明し、改めて了承を求めた結果、了承された。

4 平成 19 年度学年暦について

委員長から資料 4 に基づき、前・後期とも授業日数の少ない月曜日の授業を補うために、1 回の水曜日の授業を月曜日の授業に変更して調整する提案が説明された。

月曜日が休日となり授業できない週を、水曜日に振り替えるという修正意見案は、学生への周知徹底で難しく本提案の方が適当であり、非常勤講師には、適当な日で補講願うこととした。

また、定期試験日程と大学院入試日程が、うまく調整されないので、授業日程を優先して検討するよう求められたほか、専門科目の試験日程は、卒業年次の成績確認や他学部の授業を履修している者、教員免許状申請の都

合で統一する必要がある旨を確認した。

検討の結果、卒業研究を含め成績報告を2月16日(金)より遅らせてほしいという要望については、卒業判定に間に合うよう電算処理する日程から、見直し可能かセンター長が学務部と検討して、事後に報告することとして原案を了承した。

なお、教務電算システムのために教育日程が窮屈になり、教育のためのシステムになっていないとの発言があった。

5 平成19年度新規授業科目について

岡田委員から資料5に基づき、平成19年度入学生の2年次履修科目とするために、20年度は具体的な科目名を使用するが、19年度は科目登録のため仮の科目名を充てる臨時的措置である旨の説明があった。

審議の結果、了承された。

6 平成19年度全学共通教育科目担当非常勤講師について

委員長から資料6に基づき、19年度から外国語教育を集中型の教育にするため、移行時期を補完する必要がある、19年度は単年度的に経費が増額するが、20年度は学年進行とマルチメディア教育が充実することによって改善できる見通しが説明され、財務委員会に提案することを了承した。

また、履修者の少ない科目を開講科目から削減する等は、削減方針を整えて検討することとした。

報告

1 高大連携ウインターセッションの実施報告

委員長から、12月25日(月)から27日(水)まで、高校生108名が参加して実施した旨が報告され、全学部の協力に対し謝辞が述べられた。

2 各部門会議報告

岡田委員から資料7-1に基づき、全学共通教育企画・実施部門会議報告があった。

委員長から資料7-2及び7-3に基づき、専門教育関係連絡調整部門会議報告と学生生活支援部門会議報告があった。

また、委員長から、就職支援部門会議報告の中で、アイーナにおいて本学と岩手県立大学でキャリア教育を行う計画がある旨の報告があった。

4 その他

次回の委員会開催について、委員長から平成19年2月1日(木)15時からの開催を提案されたが、日程調整することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 11 回)記録

日時:平成 19 年 2 月 1 日(木)15:00～16:35

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、井上、村上、長谷川、吉村、押切、成田、谷口、畑中

欠席者:高畑

陪席者:山崎、江本、福永、永野

審議に先立ち、第 10 回委員会記録(案)を確認し、了承した。

なお、教育学部から、「議題 4 平成 19 年度学年暦について」において、推薦入試の日程について確認があったが、委員長より、次回の入学者選抜全学委員会での検討を踏まえて確定になる旨の説明があった。

議題

1 岩手大学学則の一部改正について

委員長から資料 1 に基づき、(日)納付後の入学料、授業料免除相当額の返還及び中途退学者等の返還手続きに係る整備、(月)学生の修得すべき単位数の変更、(火)教育職員免許状名称変更に伴う免許状の種類・領域の変更、(水)工学部情報システム工学科において免許状の教科を情報から工学に変更のため、大学学則を一部改正する旨の説明があり、審議の結果、原案を了承し、教育研究評議会に提案することとした。

2 岩手大学大学院学則の一部改正について

委員長から資料 2 に基づき、学則を準用している入学料等の返還等についての学則一部改正に伴う規定整備及び教員免許状名称変更に伴う免許状の種類・領域の変更のため、大学院学則を一部改正する旨の説明があり、審議の結果、原案を了承したが、念のため障害児教育専攻の名称変更の有無について再度確認した上で、教育研究評議会に提案することとした。

3 全学共通教育規則の一部改正について

委員長から資料 3 に基づき、(日)転換教育科目及び高年次課題科目新設、(月)新規授業科目開設及び授業科目名変更、(火)修得すべき単位数の変更、(水)コミュニティーサポート実習の新設等により全学共通教育規則を一部改正する旨の説明があり、審議の結果、「別表 2 修得すべき単位数」の「注 2」の 2 単位の後ろに「を」を挿入し「・・・2 単位を含む」に、「注 3」の「・・・含まない。」を「・・・含めない。」に変更した上で、教育研究評議会に提案することとした。

4 岩手大学専攻科規則の一部改正について

委員長から資料 4 に基づき、専攻科名称変更の学則改正に合わせた自動改訂である旨の説明があり、原案を了承し、教育研究評議会に提案することとした。

5 岩手大学授業料免除等に関する規則の一部改正について

委員長から資料 5 に基づき、学生生活支援部門会議の審議を経て、授業料納付後であっても授業料を免除することができることを規定する改正案の説明があった。これは、4 月に一年分の授業料を一括納入した後に学資負担者が死亡した場合等にも対応するための改正であり、審議の結果、原案を了承し、教育研究評議会に報告することとした。

6 岩手大学授業料免除等に関する選考基準の一部改正について

委員長から資料 6 に基づき、学生生活支援部門会議の審議を経て、岩手大学授業料免除等に関する規則の一部改正に伴う規定整備のための改正案を説明し、審議の結果、原案を了承し、教育研究評議会に報告することとした。

7 平成 19 年度全学休講について

委員長から資料 7 に基づき、学生生活支援部門会議の審議を経て、新入生歓迎行事及び岩手大学不来方祭に伴

う休講措置の説明があり、審議の結果、原案を了承し、教育研究評議会に提案することとした。

8 環境再生医の資格認定について

委員長から資料8に基づき、第9回運営委員会で検討し該当学部にし戻していたところ、学部の了解を得たので再提案するものである旨の説明があった。これに対して工学部及び農学部から、学部単位での認定申請は自由であるが、大学として認定校の申請をする以上、慎重な対応を求める旨の意見があり、委員長から、十分に調査した上での提案ではあるが、念のため、次週の学長・副学長会議に報告し、了承を得て最終決定とする旨の発言があり、原案を了承した。

9 その他

(1) 放送大学活用研究プロジェクトについて

後藤委員から資料9に基づき、全学共通教育企画・実施部門会議の審議を経ての提案であり、平成19年度で最終年度の3年目を迎え、新たにコンテンツ利用の集中講義形式での開講を含め、活用方法を検証するものである旨の説明があった。審議の結果、原案を了承した。

(2) アイアシスタント上の教員情報について

後藤委員から、来年度のシラバス一般公開にあたり、学生の利便性の観点から、アイアシスタント上の担当教員情報として、大学情報データベースの「岩手大学研究者案内プロフィール」をリンク表示させることについての説明があり、審議の結果、大学情報データベース管理者の了解を得た上でリンクさせることとした。

報告

1 各部門会議報告

(1) 全学共通教育企画・実施部門会議

岡田部門長から、口頭で非常勤講師の資格審査、放送大学プロジェクト、高年次課題科目等について審議した旨の報告があった。

(2) 専門教育関係連絡調整部門会議

玉部門長から、口頭で専門基礎科目の来年度の実施については調整の上決定したが、今後の対応については引き続き検討する旨の報告があった。

(3) 学生生活支援部門会議

玉部門長から資料10-1に基づき、第8回の部門会議の報告があった。

(4) 就職支援部門会議

玉部門長から資料10-2に基づき、企業訪問実施報告会を開催した旨の報告があった。

2 その他

(1) 委員長から、ボランティアの単位化に関連して参考資料に基づき報告があった。

(2) 岡田部門長から、アイアシスタントには学生の履修申告の機能があり、来年度からOCR利用と併行して活用する旨の報告があった。

(3) 次回の委員会は、3月1日(木)10時から開催することとした。

平成 18 年度大学教育総合センター運営委員会(第 12 回)記録

日時:平成 19 年 3 月 1 日(木)10:00～11:53

場所:学生センター会議室

出席者:玉、岡田、後藤、井上、長谷川、高畑、吉村、押切、成田、谷口

欠席者:村上、畑中

陪席者:山崎、福永

審議に先立ち、第 11 回委員会記録(案)を確認し、了承した。

議題

1 平成 19 年度大学教育総合センター専任教員の兼務について

委員長から資料 1 に基づき、人文社会科学部と教育学部から 19 年度の学部の授業に、センター専任教員の兼務依頼がある旨の説明があった。

大学教育総合センターの設立の趣旨を勘案すると、一部の学部に偏ること及び「情報基礎科目」は、各学部で担当することとしているのに、専任教員の研究分野が合致することや担当教員の不足を理由に、兼務を認めるのは好ましくないとの意見が出されたが、審議の結果、兼務を了承した。

なお、専任教員の任用の条件としているが授業担当が過重にならないように、他の学内教育研究支援施設も同じ対応を考える必要があることから、今後検討することとした。

2 平成 19 年度大学教育総合センター兼務教員の推薦について

委員長から資料 2 に基づき、各部門の兼務教員の任期を 2 年ないし 3 年としているが、学部等の都合で 19 年度から交替する場合は、学部及び分科会で確認して報告願いたい旨の依頼があった。

3 専門基礎教育の現状と課題について

委員長から資料 3 に基づき、平成 19 年度の授業担当については対応できるが、専門基礎教育の担当をその都度人文社会科学部と専門学部の間で話し合いながら対処療法的に対応してきた状況と担当教員の配置の経緯について説明があり、専門教育関係連絡調整部門会議で検討している旨が述べられた。

全学的な現状の理解と教育推進本部での検討など全学的対策が必要である旨の付言があった。

提供の資料に基づき、担当教員の配置や教員の削減の経緯及び対策として授業内容の変更などの措置について意見交換を行った。

理系基礎教育について、全学的に状況認識を統一し対策を検討する必要があるとの理解が得られ、該当の部門で検討することとした。

4 再チャレンジ支援経費による授業料免除の実施について

委員長から資料 4 に基づき、導入の経緯が説明され、学生生活支援部門会議で検討した実施に関する申し合わせが提案された。

「独立生計者の定義」に疑義が述べられたが、平成 19 年度から導入し必要があれば改善を検討することとした。

また、農業別科の学生にも適用される旨が述べられた。

5 その他

(1) 平成 19 年度運営委員会引継事項について

委員長から各部門長に、次年度に向けた部門の引継事項を、新年度の検討事項と含めて 4 月の本委員会で報告できるよう項目の洗い出しについて依頼があった。

報告

1 平成 19 年度の年度計画案について

委員長から資料 5 に基づき、大学教育総合センターが対応すべき平成 19 年度の年度計画案が報告され、後藤委員から資料の見方について説明があった。

2 アイアシスタント登録状況報告

後藤委員から、学部ごとの 2 月 28 日現在の未登録状況が報告された。

- * 全学共通教育科目 :640 科目中 21 科目 (登録率 96.7%)
- * 専門科目人文社会科学部 :522 科目中 61 科目 (登録率 88.3%)
- * 専門科目教育学部 :801 科目中 393 科目 (登録率 50.9%)
- * 専門科目工学部 :447 科目中 62 科目 (登録率 86.1%)
- * 専門科目農学部 :799 科目中 387 科目 (登録率 51.6%)

農学部で未登録科目の多いのは、20 年度改組に伴う科目が影響している旨の原因が考えられること。また、今後工学研究科 (博士前期課程) から順次他の研究科の入力が可能になり、3 月末までには全てのシラバス入力終了する予定であることが述べられた。

3 各分科会報告

(1) 全学共通教育企画・実施部門会議

岡田部門長から資料 6-1 に基づき、前回口頭で説明された分の報告があった。

(2) 専門教育関係連絡調整部門会議

玉部門長から資料 6-2 に基づき、報告があった。

(3) 学生生活支援部門会議

玉部門長から資料 6-3 に基づき、報告があった。

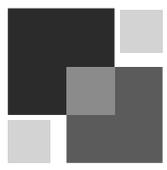
(4) 就職支援部門会議

玉部門長から資料 6-4 に基づき、報告があり、岩手県立大学との共同事業で、是非とも現代 GP を獲得したい旨の付言があった。

4 その他

(1) 新入生への全学共通教育の理念及び単位制度等について、大学教育総合センターから学部の専門教育オリエンテーションに参加して説明したい旨の依頼があった。

(2) 次回の委員会は、4 月 5 日 (木)15 時から開催することとした。



入試部門

平成 18 年度 入試部門会議

	氏 名	所 属
部門長	玉 真之介	大学教育総合センター
専任教員	永野 拓矢	入試部門
兼務教員 (学部選出)	尾臺 喜孝	人文社会科学部
	辻野 哲司	教育学部
	山口 明	工学部
	山岸 則夫	農学部
学部入試委員 正・副委員長	白倉 孝行	人文社会科学部
	海老澤 君夫	人文社会科学部
	栗林 徹	教育学部
	遠藤 匡俊	教育学部
	大塚 尚寛	工学部
	菅野 良弘	工学部
	小野 伴忠	農学部
	倉島 栄一	農学部
入試課長	土井 正人	学務部

平成 18 年度活動報告

入試部門 永野拓矢

「これからは生き残りの時代。国立大学とはいえ決して安泰ではない。売り込みの時代である。」4月から入試部門が開設され専任教員1名を配置、岩手大学としては初の全学的な視野で受験生の確保を担う部門として発足した。本学は全国国立大学の中では珍しく医学部を持たぬ学部形態であることと4学部の名称(人文社会、教育、工、農)が比較的「全国各地にある」ことから見過ごされがちであった。平成18年度の入学者は岩手県出身者が44.7%、東北圏内では86.9%を占めている。今後の少子化を鑑みれば地元志向の強さは磐石な体勢である見方がある一方で、他府県からの流入が少ないことは質の確保の面でも由々しき事態である(参考までに、1期校入試の頃は北海道からの入学者は30%を超えていたが、近年は5%を割っている)。

今年は初年度ながらも内外に積極的な活動を展開し、学内では入試だけに止まらず企画広報や就職などの各部門と連携を取りながら、岩手大学の入口(入試)と出口(進学・就職)について連携が円滑に行える“環境整備”に力点を置いた。さらに各学部の入試委員会にも随時出席し学部教員に対する入試への情報提供を行った。

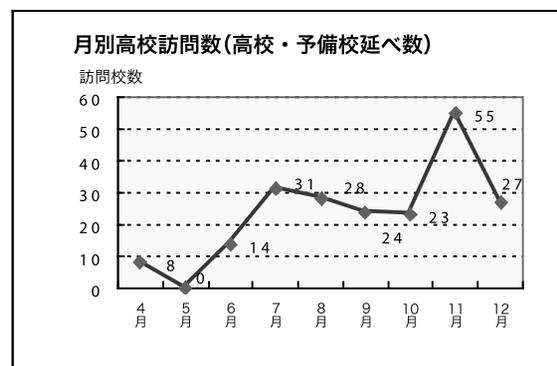
近い将来懸念されている少子化⁽¹⁾(=倍率の低下、学力の低下)の影響である学内二極化(上位はいるが、下位層が拡大し、授業運営に支障が生じる)を防ぐために直ちに行動せねばならない項目を選出し、「質(学力)量(出願者数)の確保からさらなる飛躍」を目指すために、中長期展望を見据えた上で以下4点の活動を行った。

- 1 高校・予備校への積極的なPR訪問
- 2 学内説明会の充実
- 3 戦略的な広報活動
- 4 高校生向けの大学説明会、相談会の実施

【1】高校・予備校訪問

4月から12月まで、特に推薦入試出願を控えた9月以降に集中的な高校訪問を行った。月別の訪問数は下記の通りである。

18年度は着任初年度ということもあり上半期の訪問活動は控えめだったが、次年度は人文社会科学部でAO入試が導入されることもあり、



早期のPR活動こそが重要である。

訪問先での本学への印象は「地域差がかなり存在する」ことであった⁽²⁾。入試資料からも入学者の割合等で地域差を感じていたが、高校の訪問後の印象もそのままあてはまる地域が多かった。東北以西で本学への関心がとりわけ強い地域は北関東エリアである。特に工、農学部への関心が高かった(就職実績や伝統、および私学との比較で学費の安さなど)。(人社・工学部の)東京会場試験場の開設は歓迎された。また近隣に規模の大きい湖沼等を抱える地域(茨城県など)は人文社会科学部の環境科学課程に関心を寄せている地域もあった(滋賀県も同様の感触を得られる可能性がある)。

関東地方以西でも理系学部を中心に本学への関心はさほど衰えず(文系担当の教員が対応されるとさすがに鈍かったが)岩手大学の“拡販”し甲斐のある地域が多かった。高校訪問は今後の最重要のPR戦略のひとつであるといえよう。

ところで、「(本学への)評価は高いが、何故出願に結びつかないのか?」・・・これは下記の理由が該当する。

1. (東北以外の受験生から見て)知名度が低い
2. 受験産業の発表するボーダーラインが高い(難易度はほとんどの学部学科で東北地区では東北大に次いでいる)

上記2点の理由は密接に結びついている。「(他府県から見れば)東北大以外の大学は特徴がつかめないで現役で確実に合格できる(岩手大より)難易ランク⁽³⁾の低い国公立大学へ出願させる」といった進路指導が多く的高校で行われている。

今回訪問して強く印象に残ったことは「岩手大学って大学院進学率も高いし就職も良好だし、結構良い大学なんですね」と感心していただいたことである。一見有難き評価とも取れるが、民間企業の観点から見れば明らかな告知不足である。本学の“真”の評価が浸透していれば近年の低倍率に苦慮することはなかったはずである。大学のこと、そして4学部のこと、それぞれの特徴をより先方に知らしめるよう努めなければならないと痛感した。

【2】学内説明会

全学入試委員会や各学部の入試委員会に出席し、最新の受験データの提供を行った。

受験産業各社(主にベネッセ、河合塾)の発表される受験データと実際に高校訪問を行い進路部教員の聞き取り調査を行った上で分析を行った。

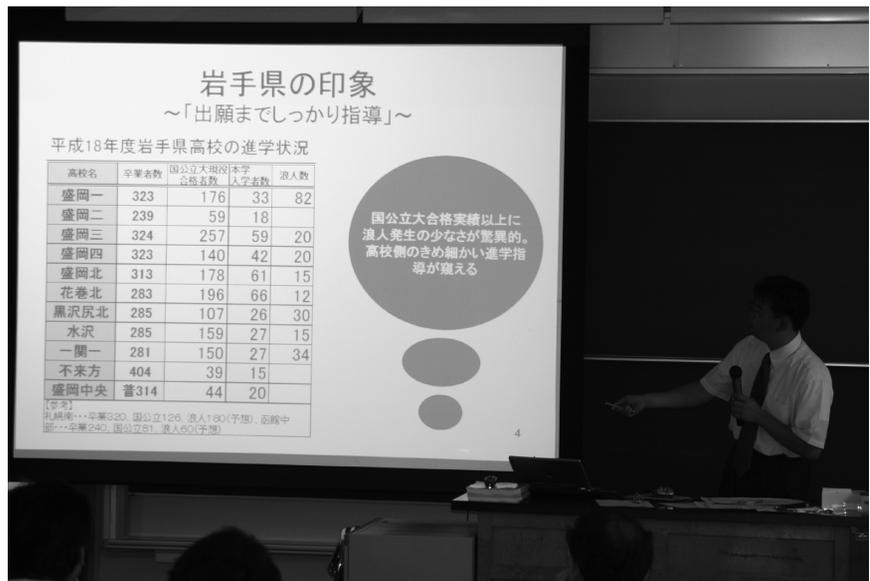
受験に対する指導は地域および学校間での違いは明白だが、現役志向の強い岩手県や東北各県にとってはそれが著しい。「人気学部学科の傾向は模擬試験で確認、実際の出願はセンター試験の出来と(受験産業が出す)合格可能性をつき合わせて出願させる・・・」本学教員などが過ごした受験生時代(=初志貫徹型?)と現在とでは根本的に受験方法が異なることを力説した。

平成19年のセンター試験は昨年と比べかなり難しくなり、(受験生にとって)出願校選びは難航した様子が伺える⁽⁴⁾。以前訪問したある進学校から「12月の面談ではセンター試験の出来具合に合わせた3パターンの出願先を話し合う」と聞いた。その意味では今回の出願

は「センター失敗の場合の出願は・・・」が該当したケースが多かったのではないかと。そういった高校側のきめ細やかな進路指導の実情などを学内教員が認識することにより、入試あるいは入試制度そのものに対する本学の考え方がより具体的に話し合われることが期待できる。

岩大の入試は良く出来て

いる、評価されるには入試に携わる教員が、入試のことに対して共通理解しておくことが必要である。(入試制度など)受験生に迎合する必要はないが、「(質の高い)受験生が出願しやすい」環境を作り出すことは重要である。そのための方策として、今後も“現代受験事情”を随時開催していきたいと考えている。



【3】戦略的な広報

- ・鉄道車内吊り広告への出稿
- ・「Hi こちら岩手大学」寄稿

本学のポスターを手頃なサイズにまとめ、一部は電車内への車内吊り広告として出展を行った。限られた予算の中でのやりくりのため掲載期間もごく短く(概ね1週間以内)直接的な効果の検証は行いにくいですが、後日手続き時のアンケート調査により分析していく予定である。

一方で学内機関紙である「Hi こちら岩手大学」において“受験特集”なるコーナーを設け(見開き2ページ)、受験生に「岩手大学合格への道標」の執筆を行った。発行日は10月下旬と大学祭の時期に間に合わせたこともあり多数の高校生や保護者に渡ったことと考えられる。この特集はのちの高校訪問や生徒対象の講演会にも役立つ結果となった。特に文中の「センター試験は(学力だけでなく)時間との戦いです」とあった先輩からのメッセージは高校教員からの共感が非常に高い印象を持った。



【4】高校生向けの大学説明会、相談会の実施など

★「北東北ガイダンスセミナー」の開催

北東北の3国立大学が交互に主催する当セミナーが平成18年8月に秋田大学で開催され、本学も教育学部入試委員長栗林教授、工学部入試委員大塚教授とともに入試部門としてパネラー参加を行った。「受験指導に望むこと」の題目に対し約15分の発表を行いその後参加者(主に秋田県内の高校教諭)から質疑応答を受け付けた。

★大学相談会の「参加」から「単独開催」へ

新聞社や広告代理店各社主催の大学説明会にも参加し直接受験生向けに本学のPRを行った。なお、平成19年度からは計画を一部変更し、県内およびその周辺は本学単独にて説明会を行うことが2月の入試部門会議で承認された。理由として「費用の割には効果が出ていない(手続き時のアンケート調査から)」ことと「学部の内容から入試や就職状況他、受験生に直接伝えたいことが増加している現在、どうしても十分な時間と場所が必要である」などの本学側の事情も背景にある。例年6月に実施していた公開説明会(次回からは「岩手大学オープンキャンパス」に改称)が8月に変更されることから5-6月に実施することを予定している。

★高校講演会

先方からの依頼を元に下記の高校、予備校にて講演を行った。

- ・岩手県立不来方高校(1年生約240名)
- ・岩手県立久慈東高校(3年生約30名)
- ・岩手県立一関第二高校(3年15名)
- ・北海道立稚内高校(2年約100名)
- ・北海道立八雲高校(保護者20名)
- ・代々木ゼミナール仙台校(受験生25名)
- ・アイエム学院(岐阜県高山市3年10名)

他大学や本学各学部が主催する「出前(出張)講義」とはかなり内容が異なっている。全学の説明と受験に関する情報提供のため、学部学科の概要に深く踏み込むことは行わずに(時間的に不可能)

あらゆる側面で岩手大学をPRする。また終了後は質問に来る生徒への対応を行う。北海道のとある高校では終了後に2時間を超す、10名以上の個別相談を行った。

【5】入試部門としてのESD(イギリス訪問)

★プリマス大学訪問、HEA(ハイアーエデュケーションアカデミー)取材

入試部門としては直接的なかかわりは少ないが2月15日~21日に山崎教授とイギリス国内を訪問し、ESDについての調査に同行した。詳細の報告は第1部門に譲るが別件として「イギリスの受験事情」について日本の状況と情報交換を行った。

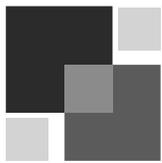
イギリスの大学受験は日本式の解釈としては「推薦入試」に近い形態とっており高校時代の成績で目的の大学に入れるとのこと。

一方で数年前からイギリス国内でも学費納入を義務付けした。当初負担増から受験者が減少することが懸念されていたが実際は増加に転じたとの由。日本の受験事情(少子化、大学の倒産)にはかなり驚かれていた。



- (1) 東北地区の18才人口は今後10年で20%程度減少することが予測されている(文部科学省「学校基本調査速報」より)。
- (2) 学内専用「高校訪問報告」より。機密保持の関係上、製本化は行っていない。1校1-2ページでまとめており、訪問校の概略や本学の印象(学部別、入試系統別)を簡潔にまとめている。
- (3) 難易度について・・・毎年6月と1月に受験産業各社が大学・学部・学科(課程)・日程別に「難易ランキング」を発表している。地元以外や受験履歴のない大学への進学を生徒に促すためにかなり重宝されている。
- (4) 手続き者のアンケート調査・・・個別入試合格者を対象に手続き書類にセンター試験や受験準備、および本学入試に対する意見などのアンケートを任意でお願いした。内容は「受験を振り返ってあつという間だったか?」「センター試験5教科7科目準備するのは大変だったか」「本学は第何希望か」「本学の出願は誰に相談したか」「本学について何を参考にしたか」など20項目程度のクエスチョンを用意して答える形式である。前期後期ともに実施したが約8割の回答が得られた。





全学共通教育企画・ 実施部門

平成 17 年度 全学共通教育企画・実施部門会議

	氏 名	所 属
部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
専任教員(併)(～10月)	後藤 尚人	全学共通教育企画・実施部門
専任教員(10月～)	山崎 憲治	全学共通教育企画・実施部門
分科会代表・兼務教員	小林 睦	人間と文化分科会
	横山 英信	人間と社会分科会
	北爪 英一	人間と自然分科会
	山口 春樹	総合科目分科会
	吉川 信幸	環境教育科目分科会
	齋藤 博次	外国語科目分科会
	黒川 國児	健康・スポーツ科目分科会
	西山 清	情報科目分科会
各学部教務委員選出教員	齋藤 博次	人文社会科学部
	押切 源一	教育学部
	小川 智	工学部
	古賀 潔	農学部
(オブザーバー)	江本 理恵	大学教育センター
	中村 一基	大学教育センター
	石川 明彦	大学教育センター

平成 18 年度 全学共通教育企画・実施部門会議 (平成 18 年 4 月 1 日)

	氏 名	所 属
部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
専任教員	山崎 憲治	全学共通教育企画・実施部門
分科会代表・兼務教員	小林 睦	人間と文化分科会
	横山 英信	人間と社会分科会
	西崎 滋	人間と自然分科会
	山口 春樹	総合科目分科会
	出口 善隆	環境教育科目分科会
	齋藤 博次	外国語科目分科会
	黒川 國児	健康・スポーツ科目分科会
	佐藤 拓己	情報科目分科会
各学部教務委員選出教員	藤原 千沙	人文社会科学部
	菅野 文夫	教育学部
	藤代 博之	工学部
	井良澤 道也	農学部
学務課長	古井 修子	学務部

平成 18 年度全学共通教育企画・実施部門会議 (平成 18 年 10 月 1 日)

	氏 名	所 属
部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
専任教員	山崎 憲治	全学共通教育企画・実施部門
兼務教員	齋藤 博次	外国語分科会
	黒川 國児	健康・スポーツ分科会
	佐藤 拓己	情報基礎分科会
	小林 睦	思想と文化分科会
	松岡 和生	心と表象分科会
	横山 英信	公共社会分科会
	今泉 芳邦	現代の諸問題分科会
	高橋 壽太郎	生物の世界分科会
	西崎 滋	自然と数理の世界分科会
	藤代 博之	科学技術分科会
	河合 成直	環境分科会
	山口 春樹	総合科目分科会
	各学部教務委員	藤原 千沙
菅野 文夫		教育学部
藤代 博之		工学部
井良澤 道也		農学部
学務課長	古井 修子	学務部

平成 17・18 年度活動報告

全学共通教育企画・実施部門 部門長 岡田 仁

平成 16 年 4 月に設置されて以来、大学教育総合センターは全学共通教育の改革に取り組んできました。この間、大学教育センター(当時)が提示した「全学共通教育の更なる発展に向けて:改革骨子案」(以下「骨子案」)は、全学的な検討により、Ver.3 まで改訂され、最終的には平成 18 年 7 月に「全学共通教育の充実・発展に向けて:改革実施案」(以下「実施案」)として全学的に合意されました。

全学共通教育企画・実施部門はカリキュラムの実施に必要な審議・業務等の他は、主に「骨子案」及び「実施案」の検討を行ってきました。以下は平成 17 年度及び 18 年度の活動の概要です。詳細については後掲の資料をご参照下さい。

<平成 17 年度>

・新分科会の提案について

拡大スタッフ会議(センター教員と兼務教員)が新分科会の構成について集中的に検討を行い、その後の審議のたたき台を作成した。(6月15、29日、7月7、15日)

・全学共通教育全教員担当体制

平成 17 年 12 月の大学教育総合センター運営委員会(臨時)において、岩手大学の全教員が全学共通教育を担当またはその充実に貢献することが合意された。

これを受けて、3 月には全教員の分科会所属仮登録を行った。

・科目の新設及び履修区分の見直し

平成 18 年度に向けて、本学の特色を示す科目である「岩手大学論」と「岩手大学ミュージアム学」を自由選択科目から選択必修科目に区分を変更すること、また、現代 GP(知財教育)に対応する科目を含め 4 科目を新たに開講することを決定した。さらに、平成 19 年度に向けて、2 科目を新設することを決定した。(第 3、4、5 回全学共通教育企画・実施部門会議)

・オムニバス方式授業の改善

授業代表者へのアンケート結果に基づいた改善案を作成した。(第 2 回全学共通教育企画・実施部門会議)

・情報科目の早期単位認定

高等学校での情報教育の普及を考慮し本学開校の「情報基礎」の一部の履修を免除する早

期単位認定制度を整備した。(第3回全学共通教育企画・実施部門会議)

・カリキュラムの国際化

国際交流センターとも協議し、外国人留学生向けの「日本事情」を日本人学生との共修科目とした。(第6回全学共通教育企画・実施部門会議)

・転換教育

高校教育から大学教育への移行を円滑にするための「転換教育」を全学共通教育の一環として1年生全員に必修科目として課すことが12月の大学教育総合センター運営委員会(臨時)で合意された。

具体的な実施案を検討するためのワーキンググループを全学共通教育企画・実施部門に設け、19年度から必修科目「基礎ゼミナール」として実施する体制作りをすすめた。また、授業で活用できる「大学における学びのはじめ」という冊子も作成した。

・時間割の検討

19年度実施の全学共通教育改革、特に外国語の履修方法の変更に対応するために現行時間割の変更を検討するワーキンググループを設置し、その検討結果による新時間割枠が平成18年度第4回大学教育総合センター運営委員会において了承された。

・高大連携事業

高大連携授業(高校生が岩手大学の授業を受ける)とウインターセッション(冬期休業期に高校生がいわて5大学の特別授業を受ける)を引き続き行い、これらの授業の現状と可能性を「岩手大学高大連携事業報告書」にまとめた。

<平成18年度>

・新分科会

第3回大学教育総合センター運営委員会(6月2日)で分科会構成案に修正が加えられ13分科会を11分科会に整理した。

これを受けて、7月に全教員の分科会所属本登録を行った。

また、第5回大学教育総合センター運営委員会(8月3日)において、旧分科会にはなかった新設分科会の代表選出については、以下のように学部の協力を仰ぐこととなった。

「心と表象」人文社会科学部

「現代の諸問題」教育学部

「生物の世界」農学部

「科学技術」工学部

第4回全学共通教育企画・実施部門会議(8月4日)において各分科会の登録者を確定すると共に分科会の役割を確認した。

第1回分科会代表者会議(9月19日)において分科会の基本的な活動方針を確認し、第2回分科会代表者会議(10月25日)において具体的課題の検討と分科会運営上の問題について意見交換をした。

また、全教員の出席を可能にするために分科会一斉開催日(12月5日)を設定した。

第1回総合科目企画・実施委員会を開催した。(12月26日)

・外国語教育の改革

「骨子案」に盛り込まれた1年次集中型の外国語教育の改革は「実施案」にも引き継がれたが、平成18年度になって履修形態について新たな検討が加えられ、学生による自由選択から各学部の履修方針を尊重する方向に変更された。

人文社会科学部: 英語8単位、または英語以外の外国語8単位、または英語4単位と英語以外の外国語4単位

教育学部: 英語4単位と英語以外の外国語4単位

工学部: 英語8単位、または英語4単位と英語以外の外国語4単位

農学部: 英語8単位、または英語4単位と英語以外の外国語4単位

・カリキュラムの国際化

国際交流センターとも協議し、外国の大学で取得した単位を本学の単位として認定する方法を拡大した。(第9回大学教育総合センター運営委員会)

・履修区分の新設

「全学共通教育の履修すべき単位数」(別表2)に新たに転換教育科目を追加するとともに、教養科目の中に「高年次課題科目」を新設することを決定した。(第4回、第5回全学共通教育企画・実施部門会議)

・成績評価のガイドライン作成

教育評価・改善部門と共同で各分科会に教育目標の確認とともに成績評価のガイドライン作成を依頼し、年度末までに全ての分科会から回答を得た。

・「持続可能な開発のための教育」(ESD)

「持続可能な社会のための教養教育の再構築:『学びの銀河』プロジェクト」が平成18年度の現代GPに採択されたことを受け、ESDを共通に意識することを本学の全学共通教育の教育目標の一部に組み込むことが合意された。(第5回全学共通教育企画・実施部門会議)

また、平成19年度からESD関連科目を明示することとなった。

・学習支援講座の開講

理系基礎の学習支援講座が11月から始まった。大学がユニバーサル化段階に至り、高等学校での「未履修問題」が表出する中で、基礎学力をどう実現するかという課題に対する一つの実践をこころみた。また、実践報告書「基礎教育の充実に向けて」を作成した。

分科会登録の留意点（登録にあたっては次の点にご留意下さい。）

- 1 現在、全学共通教育を担当している教員は担当科目に対応する分科会に登録してください。二つ以上にまたがる場合（例えば、「生物の世界」と「環境」）はそれぞれに登録してください。（複数の分科会に所属する教員の「負担」については公平を期して、分科会及び大学教育総合センターで検討します。）
- 2 現在、全学共通教育を担当していない教員は、関心のある分野に最も近い分科会に登録してください。なお、外国語等の共通基礎科目については、当該の授業科目担当が可能な教員は、必ず該当する分科会を優先して登録して下さい。複数の分科会に登録することも可能です。
- 3 総合科目は、各分科会に所属する教員が横断的に協力して担当することになりますので、特定の分科会は設けず、各分科会代表による「分科会代表者会議」が実施に必要な連絡調整を行います。
- 4 新分科会名は、分科会発足後に必要に応じて変更することも可能です。
- 5 「全学共通教育の充実・発展に向けて：改革実施案」及び「寄せられた質問に答えて」もご参照下さい。その他不明な点があれば、大学教育総合センター専任教員山崎(yamaken@iwate-u.ac.jp 内線6925)までお問い合わせ下さい。

新分科会と現在の授業科目の対応表

区分	新分科会	対応現科目名	キーワード、備考等	現分科会	現授業科目
共通基礎科目	①外国語	英語A 英語B 中級英語 初級ドイツ語(入門) 初級ドイツ語(発展) 中級ドイツ語 初級フランス語(入門) 初級フランス語(発展) 中級フランス語 初級ロシア語(入門) 初級ロシア語(発展) 中級ロシア語 初級中国語(入門) 初級中国語(発展) 中級中国語 初級韓国語(入門) 初級韓国語(発展) 中級韓国語 上級日本語A 上級日本語B 上級日本語C 上級日本語D 上級日本語E 上級日本語F	原書講読	外国語科目	英語A 英語B 中級英語 初級ドイツ語(入門) 初級ドイツ語(発展) 中級ドイツ語 初級フランス語(入門) 初級フランス語(発展) 中級フランス語 初級ロシア語(入門) 初級ロシア語(発展) 中級ロシア語 初級中国語(入門) 初級中国語(発展) 中級中国語 初級韓国語(入門) 初級韓国語(発展) 中級韓国語 上級日本語A 上級日本語B 上級日本語C 上級日本語D 上級日本語E 上級日本語F
	②健康・スポーツ	健康・スポーツA 健康・スポーツB 健康・スポーツC(シーズン)		健康・スポーツ科目	健康・スポーツA 健康・スポーツB 健康・スポーツC(シーズン)
	③情報基礎	情報基礎		情報科目	情報基礎
教養科目	④思想と文化	哲学の世界 倫理学の世界 日本の思想と文化 アジアの思想と文化 欧米の思想と文化 日本の歴史と文化 アジアの歴史と文化 欧米の歴史と文化 ジェンダーの歴史と文化 岩手大学ミュージアム学	哲学、倫理、歴史、 文化人類学、文化論など	人間と文化	哲学の世界 倫理学の世界 日本の思想と文化 アジアの思想と文化 欧米の思想と文化 心の科学 適応の理解 日本の文学 言葉の世界 中国の文学 欧米の文学 芸術の世界 日本の歴史と文化 アジアの歴史と文化 欧米の歴史と文化 ジェンダーの歴史と文化 日本事情A 日本事情B 岩手大学ミュージアム学
	⑤心と表象	心の科学 適応の理解 日本の文学 言葉の世界 中国の文学 欧米の文学 芸術の世界	心理学、文学、芸術、美術、 音楽、演劇、映画など		欧米の文学 芸術の世界 日本の歴史と文化 アジアの歴史と文化 欧米の歴史と文化 ジェンダーの歴史と文化 日本事情A 日本事情B 岩手大学ミュージアム学
	⑥公共社会	市民生活と憲法 経済のしくみ 現代社会と経済 市民と政治 現代政治を見る眼 社会的人間論 地域と生活 地域と社会 社会統計学 対人関係の心理学 知的財産入門 著作権法概論 知財ワークショップ	法律、政治、経済、社会、地理 社会心理学、地域など	人間と社会	市民生活と憲法 経済のしくみ 現代社会と経済 市民と政治 現代政治を見る眼 社会的人間論 現代社会の社会学 地域と生活 地域と社会 社会統計学 対人関係の心理学 知的財産入門 著作権法概論 知財ワークショップ キャリアを考える(19)
目	⑦現代の諸問題	現代社会の社会学 日本事情A 日本事情B キャリアを考える(19)	人権、ジェンダー、国際理解、 健康問題、福祉、教育など		キャリアを考える(19)
	⑧生物の世界	生命のしくみ 生物の生態と進化	遺伝子、タンパク質、細胞など 植物、動物、進化、生態、 病気など	人間と自然	科学と技術の歴史 自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 生命のしくみ 生物の生態と進化 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則
	⑨自然と数理の世界	自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則			科学と技術の歴史 自然のしくみ 自然と数理 数理のひろがり 生命のしくみ 生物の生態と進化 宇宙のしくみ 物質の世界 自然と法則
⑩科学技術	科学と技術の歴史				
環境教育科目	⑪環境	「環境」を考える 生活と環境 都市と環境 農業・生命と環境		環境教育科目	「環境」を考える 生活と環境 都市と環境 農業・生命と環境
総合科目		文化の伝統と現在 コミュニケーションの現在 現代社会をみる視角 岩手の研究 これからの健康科学 科学技術と現代社会 現代職業選択論 岩手大学論 図書館への招待(19)		総合科目	文化の伝統と現在 コミュニケーションの現在 現代社会をみる視角 岩手の研究 これからの健康科学 科学技術と現代社会 現代職業選択論 岩手大学論 図書館への招待(19)

□「新分科会仮登録への意見・要望など」を自由に記載してもらった。回答や分析を述べてみる。

- 第1希望は従来から担当しているので「情報基礎」としましたが、今後の、「情報社会」の方がより重要性をましてくると思います。というわけで、第1、第2の差はあまりありません。
- 回答 →情報社会への仮登録者は1名、という結果からも、ご指摘の通りだと思われます。情報社会の分科会は情報基礎と合体します。
- ESDはどこに入りますか？
- 回答→ESDはさまざまな課題を持っています。経済、文化、ジェンダー、開発教育・・・それぞれの分科会でESDの科目が立ち上がることを進めたいと思います。また、とりあげかたも「関心の喚起」、「理解の広がり」と深化、「学生参加」、「問題解決の体験」という4つのステージをもって、段階的に学力を伸張が実現できる構成を作っていきたいと考えております。
- 各教員の学部における専門教育の担当授業数を確認し、学部での負担の少ない教員に共通教育担当の比重を大きくするなど、全体としての授業負担の均等化を全学的に検討するのが第一条件ではないかと思えます。ぜひよろしくお願ひいたします。
- 回答→センター運営委員会臨時（平成17年12月28日）および10回委員会（平成18年1月25日）において、①全教員がいずれかの分科会に登録する。②登録が直ちに担当を意味するものではない。③分科会の役割は授業科目・担当者の設定とFDであるが、学部による組織的援助は継続する。等が決定されています。組織的支援の実質化を図ることが均等化につながると考えております。
- 地震関連ならなんとかなりそうです
- 回答→ありがとうございます。地震は、今日の大きな課題です。自然、社会・経済、人文からアプローチが出来ると思えます。
- 現在、情報基礎を担当しているので、新規に担当科目が割り当てられる場合は、負担を考慮して欲しい。実習系の科目は、講義時間外にも課題評価などに多くの労力を投入していることをご理解いただきたい。
- 回答→負担の均等化は大きな課題です。学部の組織的支援が確認されているわけですから、どのような実行プランを作るかによります。
- よろしくお願ひいたします
- 回答→ありがとうございます。
- 「思想と文化」の中に文学系、言語学系はないのでしょうか。
- 回答→所属する分科会はここにあたると思えます。
- 11.生命の世界については、「受容体とイオンチャネル」を考えています。17.環境と自然については、水俣病などの公害を考えています。
- 回答→「水俣病などの公害」はESD科目としても、またオムニバス方式でもっと広範あるいは深化させることも考えられます。分科会で提起されたり、分科会をブリッジさせたオムニバスの科目も考えられます。問題提起者になってください。コーディネイトのお手伝いは大学教育

総合センターあるいはオムニバス科目の集まり（分科会が作られるたあとにこの会もつくられます）のなかから調整と組み合わせが作られていきます。

- ・
- ・ 「岩手大学ミュージアム学」の一部を担当しています。適当な分科会がわかりませんので、とりあえず「提案」としました。
- ・ 回答→オムニバスに関しては、分科会が立ち上がった後に提起する機会をもうけます。分科会にまず登録してください。
- ・ 3.健康・スポーツの「健康」と、10.現代の諸問題の「健康科学」は内容がどのように異なるのでしょうか。「喫煙と健康」「メンタルヘルス」「生活習慣病予防」「健康増進」などはどちらの課題になるのでしょうか？
- ・ 回答→健康・スポーツの「健康」を「座学」と「運動実践」の融合科目を起こすことを考えました。車椅子の経験、着水泳などもこちらに入ります。ご指摘のように、「喫煙と健康」等の科目は現代の諸問題の分科会の方がすわりが良いように思えます。
- ・ 22単位の縛りについて、早急に再検討が必要である：複数免許の取得が困難→受験生に魅力が無い！採用試験に不利！！免許取得に学部間不均衡あり！・冬期休業期間を短縮するなど学年暦を安易に変更してはならない！→根本的議論必要&集中講義の期間を保障すべき！
- ・ 回答→教室外学習を学生に確実にさせることも必要です。現実には、学生に不利になる縛りは直ちに検討することが肝心です。学年暦に関して、もう少し調整する時間が必要と思われます。本年はセンター試験の日程に絡んで、授業日が確保できなかったという緊急対策でした。
- ・ この登録が終了した後は、新分科会の下の開設授業科目名を早急に決めていただきたいと思えます（各教員ごとに科目名を設定するのか、それとも授業科目名をいくつかに限定するのか）。
- ・ 回答→出来る限り早急に進めます。分科会を立ち上げないと、科目の設定も出来ません。
- ・ 学部の教員配置数に基本的な変更がない限り、全学共通教育の学部担当割合は現状を維持すべきである。特に、各分科会に実施策を丸投げして、学部負担割合の変更を図ることは認められない。その担保として、全ての分科会において学部の負担割合を明確にするとともに、最大負担割合の学部が実施上の責任を負う形にすべきである。
- ・ 回答→センター運営会議ではあらたに立ち上がる科目は10科目程度と想定しています。ですから、各分科会に丸投げして、各学部の負担を異常に高くするようなことにはならないと思えます。大きな教育効果を実現するために、少しの負担増になることは否定しません。
- ・ 分科会名称の変更提案 「自然と数理」を「数理科学」に変更今は登録手続きオンリーですが、学生の履修まで考えると、1分科会の中の科目名は、ばらばら？分枝の末端？学生の履修形態「1分科会1科目」限定ではないでしようが似た科目の履修にたいする対応考えておいて下さい。
- ・ 回答→13から15は、共通教育としてアプローチしやすい分科会の名称にしたつもりです。教育という側面からのアプローチです。学系とは異なる区分を進めました。正式登録に向けて、「似た科目の履修」への対応を考えることも必要と思えます。
- ・ (1) 13-15はまとめてひとつの分科会にした方がよい。分科会名は、例えば、「自然科学の世界」とする。(2) 分科会構成は、各分科会でどのような科目どれだけ開講できるかという

観点できめるべきで、登録者の人数を基本にきめるのは無意味である。登録者数が多い割に開講コマ数が極端に少ない、実質開店休業に近い分科会も出てくる可能性がある。例えば、「科学技術」のテクノロジーを想定した登録者数は数十人に達すると予想されるが、テクノロジーで開講できる科目は高々1科目程度に過ぎない。要は、共通教育の中身ではなく登録者（数）に焦点を当て過ぎていて、本末転倒である。

- 回答→仮登録の数では、13,14,15の分科会に所属しようとしている教員数は12名、10名、12名です。これをすべて一つにまとめると、FD活動や成績評価の検討等の教育力向上の活動が出来にくくなり、先生のご意見が分科会に反映できなくなる危惧も予想されます。1つか2つの科目の立ち上げでも、その科目に関わる多くの先生がおられ、共通教育のレベルアップに全教員が関わる体制の確立が求められています。
- 「17」と「18.環境と人間」の区分についてどうも明確にイメージできない。自分の専門領域（環境思想・環境倫理学）としては、17と18の両分野にまたがっており、いずれかに選択することはできない。科目については、キーワードからもう少し立ち入った内容説明がほしい。
- 回答→環境をこのように区分することは適切でない、というご指摘よく理解できます。ここでは50名を越える分科会が教育活動を進める上で、適切な規模かという点で、分割せざるを得なかったという、苦しい背景をご理解いただければ幸いです。
- 健康・スポーツ分科会は、これまでのようにスポーツ科目に偏るのではなく、学生の健康の自己管理能力や心の健康に関する知識やスキルの向上をねらいとした新科目について検討する会になることを期待する。「学生支援分科会」は、学生の大学への適応と充実した大学生活を促し、大学の支援体制を理解してもらうための科目について検討する会である。既存の科目でいえばキャリア教育をねらいとした「現代職業選択論」や岩手大学の理解を促す「岩手大学論」がそれにあたるだろうか。それらに加えるものとして例えば大学生活で出会う問題とその解決方法を紹介する「学生支援論」やボランティアに関心がある学生のための「ボランティア論」などが考えられる。
- 回答→仰せの通りです。旧分科会とのかかわりもありますから、新しい分科会を立ち上げることに少々遅れを感じます。現代の諸問題からこれらの科目をたちあげることが一番早道ではないでしょうか？岩手大学の学生にとって、先生のご指摘された学習課題は極めて肝心だと思います。
- 改組を控え、各種委員会への出席や広報活動など、さまざまな雑用があり、これ以上教員に負担になることはやめていただきたい
- 回答→学生に豊かな共通教育を実現する機会を作るには、多忙な先生にいま少しのご負担をお願いせざるを得ません。300人を越える授業が実際に行われているのですから、もう少し顔の見える授業をつくりたいというのがわれわれの希望です。
- 分科会の名称「自然と数理」は「数理科学」として欲しい。さもなくば「数理のひろがり」の方が望ましい。回答→13,14,15の
分科会を関連付ける名称で提起したのですが。
- 専門教育の負担等も加味して担当を決定して欲しい。
- 回答→全体で10科目程度の増を考えております。担当者に各学部の組織的援助も運営委員会です承されています(平成17年12月28日臨時運営委員会と平成18年1月25日第10回運営委員会)。

- ・ 私の記憶では、農学部では全学共通科目か専門基礎のどちらかを担当するように要請されていたと思います。全学共通科目担当の有無の質問の意図はわかりませんが、今後専門基礎の取扱い（授業担当数）があやふやのままです。学部内だけの問題かもしれませんが。
- ・ 回答→全体で10科目程度の増を考えております。担当者に各学部の組織的援助も運営委員会です承されています(平成17年12月28日臨時運営委員会と平成18年1月25日第10回運営委員会)。過度な負担増になることは避けねばならないと考えて折ります。

外国語・英語とそれ以外の言語に分ける必要性を理解できない。

- ・ 13と14の分類も曖昧である。
- ・ 11・12も「自然のしくみ」であり、分類の名称と内容が一致しない。
- ・ 15 数学をなぜ「自然と数理」という名称にしたのか？この新分科会に数学以外のものが属する可能性があるのか？・「情報基礎」がなぜ独立してあるのか。「自然と数理」にくりこむことができないのか？基礎に対する応用は？
- ・ 11と12を分ける理由？・17と18を分ける理由と必要性？
- ・ 5（歴史）と16（技術史・科学史）との関係 技術史・科学史の共通教育の観点からの意義？
- ・ 回答→本登録では外国語と英語をまとめて一つの分科会にする予定です。学系の分け方とは異なります。共通教育を進める上で、岩手大学の今までの共通教育の経緯をふまえての分科会の「提案」でありました。確かに、あいまいな部分が多くあります。これによって、共通教育が進まなくなるという場合は、直ちに変わる必要があると思われます。

- ・ 全学教員担当体制への全面的移行の流れはやむを得ないことかと思いますが、「オムニバス」形式が増え、教員は教育の請負意識が強くなり、受講する学生も気の毒に思います。
- ・ 回答→このような心配があります。ですから、分科会を立ち上げ、担当者に授業をまかせてしまうのではなく、FDや評価において、積極的な発言と支援が可能な体制を造ろうとしているのです。

- ・ 希望者のみ担当させるべきでしょう。特に工学部の教員は実験実習まで行い、博士論文の指導もするなど忙しい人もいます。それに対して、負担の少ない教員が他の学部になかなかいないようです。負担が均等になるよう配慮する必要があると思います。実施後、数年で学生の意見など聞いて新分科会の区分・名称等を見直すとういでしょう。
- ・ 回答→負担の片よりはまずいと思います。負担を軽減して効果を挙げることを目指していますが、大きな教育効果を実現するには、公平で最小限の負担増を願わざるを得ません。

- ・ 特にありません。この方向で結構と思います。
- ・ 回答→ありがとうございます。

- ・ コラボレーションを大切にしながら、常になさって下さいますよう、お願い致します。
- ・ 回答→共同の力で岩手大学の教育力を高めたいと考えております。

- ・ 新分科会の所属は「1つ」に限定されるのか？
- ・ 所属していない教員が「授業」担当するということはあるのか？
- ・ 特に2つの分科会に所属する希望はないが、環境教育科目（17になる？）について、必要があれば継続して担当することは可能である。（現在 政治学と環境教育科目の一部を担当）
- ・ 回答→分科会の仮登録の際、第二希望をとった理由は、先生のように多面的に共通教育にアプ

ローチしていただける方を期待したことも事実です。受講する学生にとっても課題に対する多面的なアプローチは極めて肝心だと思います。

- 5.にチェックしましたが、「思想と文化」はやめていただきたい。「文化」だけでけっこうなはず。「思想」は文化活動の一部のはずなので、それをとりだす意義がわかりません。
- 回答→この分科会の区分に「と」と「の」が連続しています。教育をするという面で出来るだけ間口をひろげようとした結果です。
- 共通基礎科目担当分科会「健康・スポーツ」（健康管理，HIV/AIDS など）と教養教育科目担当分科会＜社会＞10 現代の諸問題（健康科学）で扱う内容が不透明のため、この際しっかりとすみ分けしていく必要があるように思う。
- 回答→先にもお答えしましたが、健康・スポーツの「健康」を「座学」と「運動実践」の融合科目を起こすことを考えました。車椅子の経験、着服水泳などもこちらに入ります。ご指摘のように、{喫煙と健康}等の科目は現代の諸問題の分科会の方がすわりが良いように思えます。
- 「環境と自然」と「環境と人間」の違いがわかりにくい。そもそも「環境と自然」という名称は同じ言葉を並べているようで疑問である。
- 回答→環境を人間からのアプローチ、自然からのアプローチという二側面でもとらえました。環境という課題を全体としてとらえるなら相互の方向からのアプローチが必要です。分科会を構成する先生が多くなり、分科会の機能が落ちてしまうという判断から二分割をしました。
- 一覧には「地域」という視点が全く欠けていると思います。地域貢献や地域連携を唱えるのであれば、そもそも地域とはどういうものかということをお教える分科会があつて然るべきと考えます。従来の共通教育分野もしくは学問分野にとられすぎではないでしょうか。
- 回答→確かにかけています。現代の諸問題や文化、公共社会で、この概念を活かす科目を立ち上げていただければ幸いです。
- 留学生対象の上級日本語の内容を発展させ、日本人学生に対してもアカデミックリーディング・ライティングの基礎教育を行うことが可能です。ご検討ください。（分科会9に相当の内容です）
回回答→検討課題にいたします。
- 大学ではまずは教養をやってそれから専門を学ぶパターンにほぼなっています。これはこれで意味あることですが、専門を一定程度まで習得した後はさらに教養人としてもステップアップしてほしいと思っています。例えば卒業研究と一体化して関連の教養科目を履修する形は大いにありうるのではないのでしょうか。学部段階での教育目標は、専門教育により裏打ちされた教養人の養成と思っています。
- 回答→高年次教養という科目の立ち上げをはかっております。
- 講義内容のしぼりはせず、これまで通りできるだけ教員の個性と哲学にまかせてもらいたいと思います。
- 回答→仰せの通りです。講義内容に縛りをはかけることは一切ありませんし、そのようなことをはかれば、教育・研究はなくなると考えております。分科会活動においてもこの点は共通の課題にしていきたいと思っています。

- 第一希望を 18、環境と人間 にしました。それについて、環境省から全国の大学にある意味で義務付けられた「環境マネジメントシステム」の構築が急がれます（これから毎年、環境報告書の提出が義務付けられています）。岩手大学ではこれから「環境マネジメントシステム」の内容について議論することになります。ぜひ大学の「環境マネジメントシステム」を環境教育の中心において構築していただきたい、というのが要望です。
- 回答→分科会活動の中で中心課題にしていこうという意志が働けば可能だと思います。また、このような課題が文科省から出されているという「情報」を周知する努力ははかかっていきたいと考えております。
- “何をやるのか”と“何ができるのか”をコーディネートする機関が必要だし、いわゆる“教養”部分について我々が求める水準を学生にわかりやすく説明し、それ相応の努力が必要であることを具体的に明示しなければ、大学卒業というレベルに達する学生は極めて少なくなると思う。
- 回答→岩手大学の教育理念をきちんと示すことも必要です。何をやるか、何が出来るか、学生に夢と希望を与えるのは、あらゆる機会をとらえて進めなければならないと思います。全学共通教育に関しては、大学総合センターが企画・実施と評価・改善部門をもって、学生の持つ可能性の実現を図ろうとしています。
- 5 と 6 重複するような内容（絵本にかかわる作者や時代、社会の思想）が担当できたら、良いと考えています。
- 回答→授業内容に関して二つ三つの分科会分野にまたがることもあると思います。しかし、分科会いずれかに所属をお願いします。またがって分科会に所属されても結構です。
- 実技系教員としては実習あるいは演習という授業形態が開講できるように要望する。
- 回答→共通教育の形態が講義形式に限るとは決められていません。履修者の数を制限せざるを得ないこともあるでしょうが、このような取組みも実現を図りたいと思います。
- 専門基礎学力の充実と、一般教養や社会全体への関心を高めることの両方が大事だと思いますが、限られた時間とスタッフの中で、なかなか難しいと思います。全てを大学内の教育でまかなうことは不可能です。どちらかと言えば、一般教養の内容は、これだけいろんな情報や出版物が世の中にあふれているので、それに任せるのも一つの方向ではないかとも思います。専門の基礎科目（私たちの分野では、数物系になります）は、やはり直接講義や演習、実験をしないと身に付かず、手間暇がかかります。でも、今、そのような基礎学力の充実が社会に出てからの基本だと思っています。
- 回答→限られた予算内で、教育効果をあげる事が求められています。本学の中期目標では学士課程を「専門教育中心のシステムから教養教育を中心とし専門分野の基礎教育を充実させるシステムへの移行を図る」ことが示されています。基礎・基本を重視することが肝要なことと理解しております。
- 《社会》の区分・名称は愚劣！
- 回答→具体的なご批判を戴きたい。
- 現在専門基礎科目での講義負担をしている教員については、新たな共通教育科目の負担が軽減されるよう、ご配慮願います。
- 回答→過重な負担をかけないよう、運営委員会でも方向を明示しています。先にも述べました

が、全体で 10 科目程度の増を考えております。担当者に各学部の組織的援助も運営委員会です承されています(平成 17 年 12 月 28 日臨時運営委員会と平成 18 年 1 月 25 日第 10 回運営委員会)。過度な負担増になることは避けねばならないと考えております。

- ・ 現在担当している授業の内容からすると、分科会名称「自然と数理」はやや範囲が狭い印象を受けます。現在使用している科目名を用いるのならば、「自然と数理」より「数理のひろがり」の方が良いと思います。
- ・ 回答→ご担当されている科目内容から 分科会の枠組みを考える方法もあります。同時に、間口を広げ、今まで担当されていなかった先生が、新たに入りやすい分科会名を立ち上げることも、もう一つの課題だと思われます。
- ・ 分科会 15 の名称は悪くないが、この分科会の中で少なくとも 2 種類以上の講義が開講できるようにしてほしい。今までの既設科目でいえば、「自然と数理」および「数理のひろがり」など、したがって分科会名を自然と数理にするなら、旧授業科目名「自然と数理」を変更する必要がある。(もちろん、取得単位上限数による制約のために学生は 1 分科会内の複数科目のうち受講できるのは最大 1 科目までとなってもやむを得ない。)
- ・ 回答→科目名を立ち上げるのは新分科会の役割になります。新しい先生を迎えるべく間口を広げた分、多くの科目が立ち上がれば、ご指摘のような制限が必要になると思われます。
- ・ 私は、「英語教育」という分野に最も資格がありますが、現代諸問題という分野にも興味がある。
- ・ 回答→どうでしょう、二つの分科会に参加され、新機軸の科目に挑戦されてはいかがでしょうか。授業の基本は、学生とともに造るものだと考えております。
- ・ 人社会学部と他学部との負担割合について、全教員の理解できる形にまとめることがぜひとも必要である。
- ・ 回答→現行でも共通教育科目の 75%が人文社会科学部の教員によって担われております。中期目標にあるように「専門教育中心のシステムから教養教育を中心とし専門の基礎教育を従事させるシステムへの移行」が提示されています。全教員担当体制はそれに向かう一歩であります。
- ・ 例えば、医療・医学はどの分野に含まれるのでしょうか？獣医の臨床分野では、“動物の医療”を行う場であり、上記の新分科会のいずれとも合致しない感があります。
- ・ 回答→分科会でかけている部分です。健康科学という面で医療をとらえれば、現代の諸問題という分科会になります。
- ・ 「都市と環境」を希望します。
- ・ 回答→この新しい分科会に参加される先生がおられれば、立ち上がるのですが、当面は環境と人間の分科会に所属をお願いいたします。
- ・ 特になし。登録が遅れたことお詫びします。
- ・ 回答→ありがとうございます。
- ・ 全分野がはいると思うが、「岩手の研究」のようなものが必要だと思う。
- ・ 回答→「岩手の研究」オムニバス方式でいくつか立ち上がっていきます。当面は関心のある分科会に所属され、オムニバス立ち上げ時に、挙手をお願いいたします。

- ・ 現「環境教育科目」4科目が新「環境」2科目に再編されると考えればいいでしょうか。現「環境教育科目」においては、たとえば、オムニバスにおける講師間における連携の不足、及び、多人数教室などが問題になっていたと思います。新科目では大丈夫なのでしょうか。
- ・ 回答→コーディネートの手法、教室の確保、オムニバス方式科目の委員会(仮)の立ち上げと調整、などが対処法として考えられます。
- ・ アンケートのはずなのにもかかわらず、この結果を基に分科会形成を進めようとしているのは欺瞞です。アンケートに答えたからといってこの方向性に賛成しているわけでもないことは工学部教授会でも強く指摘されています。センターがコンセンサスをえないまま欺瞞によって施策を進めようとするその姿勢を改めない限り、アンケートに回答するつもりはありません。
- ・ 回答→センター運営委員会(臨時)(平成17年12月28日)および10回運営委員会(平成18年1月25日)において、①全教員がいずれかの分科会に登録する。②登録が担当を意味するものではない。③分科会の役割は授業科目・担当者の設定とFDであるが、学部による組織的援助は継続する。④分科会の名称と区分は予備登録の後に再検討する。等が決定されています。全学で確認された事項です。誤解を解きながら、学生にとって充実ある共通教育を皆さんの協力の下で作って生きたいと考えております。ご理解ください。
- ・ 私は教育学部に所属する教育学者です。人間の成長発達をめぐる原理や教育科学、教育運動などの文化遺産は、教養教育の部面においてもまた、その内容として重要な意味を持ちます。「教育」という営みは、「問題」として現出する現象的の局面から見のみでは適当ではありません。(「教育」に関する部分はなぜか「10. 現代の諸問題」の「教育問題」という位置付けです。これでは「教育」「教育学」というものについて極めて不見識だと言わざるを得ません。「8. 公共社会」の「消費者教育」についても然り。)現状では希望する該当分科会が見い出せません。上記の問題点につき反省と一考を願います。無論、「人間と教育」という枠組の中には、人権教育、国際理解教育、福祉教育、平和教育、開発教育などの教育領域の理念・実践も応用的な内容として含まれ得ます。
- ・ 回答→ご指摘ありがとうございます。現代の諸問題に教育を押し込むことは不適切である、というご主張です。再三述べてきましたが、分科会は学系区分とは異なります。岩手大学の共通教育を実践する上の組織です。だから、授業科目の立ち上げと担当者の決定、FD活動を進めることが課題になっています。新しい分科会を立ち上げることを拒否しておりません。この分科会を立ち上げれば、ご指摘のように多くの授業科目が学生に提供されるとのご提案と考えます。本登録の際、ご主旨を活かすものにさせていただきます。

新分科会の任務

- 1 授業科目の設定
 - ・カリキュラム上必要で開講可能な科目の検討
- 2 授業担当者の決定
 - ・担当者の特定
 - ・非常勤講師が必要な場合はその選考
- 3 時間割の調整
 - ・時間割枠内で合理的な授業科目の配分
- 4 分科会単位の教育目標の設定
 - ・岩手大学の教育目標，全学共通教育の教育目標，教養科目及び共通基礎科目の教・育目標との整合性をとつた教育目標の確認及び（または）再検討
- 5 分科会単位の成績評価基準の設定
 - ・厳格な成績評価の前提となる授業科目の到達目標について検討
 - ・各授業科目間，及び授業担当者間の了解事項の確認
- 6 単位認定
 - ・資格試験，振替科目等の単位認定
- 7 総合科目の開設
 - ・当該分科会が主として関わる総合科目についてはコーディネータ
 - ・他の分科会が担当する総合科目及び分科会横断型の総合科目については授業担当者を派遣
 - ・新たな総合科目の検討
- 8 具体的な改善策の提案
 - ・岩手大学のカリキュラム全般について
 - ・全学共通教育について
 - ・分科会について
- 9 大学教育総合センター及び学務課との連携
 - ・情報，意見交換，資料の作成と提供
- 10 その他

分科会教育目標及び成績評価基準のガイドライン

「外国語」分科会

(1) 教育目標

1) 英語

「英語」は、学生の習熟度に応じ、a) 十分な英語力を身につけていない学生に対しては、英文法や基礎的表現の復習を通して、読み書きの基礎的な能力、および簡単な日常会話ができるコミュニケーション能力を育成し、b) 基礎的な運用能力を身につけている学生に対しては、各学問分野の入門的な書物を十分に読みこなせる読解力、平易な英語を使って正しく書ける作文力、身近な話題について説明したり意見を述べたりすることができる能力を養い、c) 高度な学力を有する学生に対しては、各学問分野のより精緻な英文や時事英語を早く正しく読める読解力、様々なトピックについて、明確な英語を用いて自分の意見を書くことができる作文力、さらには自分の意思や意見を十分に表現できるスピーチ能力やプレゼンテーション能力の育成を図る。また、全ての授業を通して異文化理解の促進を図る。

2) 英語以外の外国語

「英語以外の外国語」は、

- a) 日常生活に必要な簡単な会話ができるようにすること
- b) 外国語の基礎的な文法を習得し、簡単な文章を読むことができるようにすること
- c) 日常生活で使う簡単な文章を書けるようにすること
- d) 外国語学習を通して、異文化理解の基礎的知識を獲得すること

の4点を身につけることを教育目標とする。具体的には、初級では「入門・発展」を修めることにより各語学検定試験の4級程度、また中級では3級程度をマスターしたと認められる程度のレベルをめざす。

3) 日本語

「日本語」は、受講学生（外国人留学生）が既に初中級レベルの日本語をマスターしていることを前提に、上級レベルの会話・読解・作文等の指導を行うこととしております。日本人学生や教師、一般市民等と十分な会話を交わすことができ、日本語の新聞・雑誌・教科書等を概ね読むことができ、作文やレポートも日本人学生にあまり劣らない程度に書くことができるという日本語力を修得させることを教育目標としてめざします。

(2) 授業科目の位置づけと到達目標

1) 英語

- ・英語総合Ⅰ（初級）、英語総合Ⅱ（初級）
→ 十分な英語力を身に付けていない学生を対象にして、「読むこと」と「書くこと」を中心にして英語力の向上を図る。
- ・英語コミュニケーションⅠ（初級）、英語コミュニケーションⅡ（初級）
→ 十分な英語力を身に付けていない学生を対象にして、「聞くこと」と「話すこと」を中心にして英語力の向上を図る。
- ・英語総合Ⅰ（中級）、英語総合Ⅱ（中級）
→ 基礎的な英語力を身に付けている学生を対象にして、「読むこと」と「書くこと」を中心にして英語力の更なる向上を図る。
- ・英語コミュニケーションⅠ（中級）、英語コミュニケーションⅡ（中級）
→ 基礎的な英語力を身に付けている学生を対象にして、「聞くこと」と「話すこと」を中心にして更なる英語力の向上を図る。
- ・英語総合Ⅰ（上級）、英語総合Ⅱ（上級）
→ 高度な英語力を身に付けている学生を対象にして、「読むこと」と「書くこと」を中心にして英語力の更なる向上を図る。
- ・英語コミュニケーションⅠ（上級）、英語コミュニケーションⅡ（上級）
→ 高度な英語力を身に付けている学生を対象にして、「聞くこと」と「話すこと」を中心にして更なる英語力の向上を図る。

2) 英語以外の外国語

- ・初級ドイツ語（入門）、初級フランス語（入門）、初級ロシア語（入門）、初級中国語（入門）、初級韓国語（入門）
→ それぞれの言語について、文法と発音、および「読む」「書く」「聞く」「話す」の基本的な力を養う。
- ・初級ドイツ語（発展）、初級フランス語（発展）、初級ロシア語（発展）、初級中国語（発展）、初級韓国語（発展）
→ それぞれの言語について、文法と発音、および「読む」「書く」「聞く」「話す」の基本的な力を発展させ、各語学検定試験の4級程度の力を養う。
- ・中級ドイツ語、中級フランス語、中級ロシア語、中級中国語、中級韓国語
→ それぞれの言語において基礎的な能力を身に付けた者に対して、文法と発音、および「読む」「書く」「聞く」「話す」の基本的な力を発展させ、各語学検定試験の3級程度の力を養う。

3) 日本語

- ・上級日本語 A, 上級日本語 E
→ 口頭表現（プレゼンテーション, 討論, 高度な会話）の能力を養う。
- ・上級日本語 B, 上級日本語 F
→ アカデミックリーディング（論文, 資料読解）の能力を養う。
- ・上級日本語 C, 上級日本語 G
→ 文系・理系別専門日本語（基礎専門用語）の能力を養う。
- ・上級日本語 D, 上級日本語 H
→ アカデミックライティング（論文, レポート作成）の能力を養う。
- ・各授業は技能別に編成され, それぞれ日本語能力試験 1 級合格以上の知識, 技能と基礎的なアカデミックジャパニーズ（専門日本語）の習得を到達目標とする。すなわち, 高度の文法・漢字（2,000 字以上）, 語彙（10,000 語以上）を習得し, 大学生活を送る上で必要な総合的な日本語の知識・技能を習得させることを到達目標とする。

(3) 成績評価基準のガイドライン

1) 英語

出席, 授業中の言語活動（積極的な参加）, 課題, 試験（ミニテストなども含む）の結果を総合的に判断し, 上級, 中級, 初級のレベルごとに設定された目標（下記参照）に照らし合わせて成績を付ける。

- ・英語総合 I（初級）, 英語総合 II（初級）
→ 英文法の知識や基礎的表現力が身に付き, 基礎的な読み書き能力が身に付く。
- ・英語コミュニケーション I（初級）, 英語コミュニケーション II（初級）
→ 英語を使って簡単な日常会話ができる程度のコミュニケーション能力が身に付く。
- ・英語総合 I（中級）, 英語総合 II（中級）
→ 各学問分野の入門的な書物など比較的レベルの高いテキストを読みこなせる読解力があり, また平易な英語を使って正しく書ける作文力がある。
- ・英語コミュニケーション I（中級）, 英語コミュニケーション II（中級）
→ 英語を使って, 身近な話題について説明したり意見を述べたできる能力がある。
- ・英語総合 I（上級）, 英語総合 II（上級）
→ 各学問分野のより精緻な英文や時事英語などのテキストを早く正しく読める読解力, 様々なトピックについて, 明確な英語を用いて自分の意見を書くことができる作文力が身に付く。
- ・英語コミュニケーション I（上級）, 英語コミュニケーション II（上級）
→ 英語を使って自分の意思や意見を十分に表現できるスピーチ能力やプレゼンテーション能力が身に付く。

2) 英語以外の外国語

それぞれの段階で、定期試験、小テスト、出席、それ以外の平常点などの中から2つ以上の基準をもって多角的に判断する。

3) 日本語

出席、授業参加態度、課題の3つの観点から総合的に評価する。教員の話を一方向的に聞くだけでなく、授業に積極的に参加し、課される課題に対して十分に取り組み、成果を示すことに対して評価を行う。

成績評価は以下のように行う。

「秀」：出席の基準を満たし、授業に積極的に関与し、課題に対して授業を通じて得た知識を生かして自らの知見を十分に表現した。

「優」：出席、授業態度が優秀で、授業中に得た知識を十分に活用して課題に取り組んだ。

「良」：出席、授業態度が良好で、授業内容を十分理解し、課題に取り組んだ。

「可」：出席、授業態度に問題がなく、授業内容をある程度理解し、課題に取り組んだ。

「健康・スポーツ」分科会

(1) 教育目標

健康・スポーツ科目は、スポーツの実践を通して、健康と体力の保持増進を図るとともにコミュニケーション能力を高め、スポーツの科学的方法やスポーツ文化についても理解を深め、生涯スポーツ社会の実現に対応できる実践力を育てることを教育目標とします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

評価方法	割合	評価の観点				評価の具体的な基準	
		関心・意欲・態度	知識・理解	技能・表現	志向・判断		
健康・スポーツA	平常点	60%	協力と実践		基礎的技術	60点:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に大いに取り組んでいる。 50点:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 40点:授業に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 30点:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みが少し不足している。 20点:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みがまったく不足している。	
	レポート	20%		講義内容		20点:講義内容に対する知識の理解度がかなり高い。 15点:講義内容に対する知識の理解度が高い。 10点:講義内容に対する知識の理解度が普通である。 05点:講義内容に対する知識の理解度が低い。	
	行動体力	20%			体力の改善	20点:行動体力が優れている。または著しく改善されている。 15点:行動体力がある。または改善されている。 10点:行動体力が少し改善されている。 05点:行動体力の改善が見られない。	
健康・スポーツB	平常点	60%	マナー	規則	発展的技術	戦術	60点:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に大いに取り組んでいる。 50点:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 40点:授業に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 30点:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みが少し不足している。 20点:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みがまったく不足している。
	レポート	20%		講義内容			20点:講義内容に対する知識の理解度がかなり高い。 15点:講義内容に対する知識の理解度が高い。 10点:講義内容に対する知識の理解度が普通である。 05点:講義内容に対する知識の理解度が低い。
	スキル点	20%			スキル		20点:技能が優れている。または著しく向上している。 15点:技能が備わっている。または向上している。 10点:技能が少し向上している。 05点:技能の向上は見られない。
健康・スポーツC	平常点	60%	実践力			地域性	60点:集中講義に積極的に参加し協力して冬季スポーツの実践に大いに取り組んでいる。 50点:集中講義に積極的に参加し協力して冬季スポーツの実践に取り組んでいる。 40点:集中講義に参加し協力して冬季スポーツの実践に取り組んでいる。 30点:集中講義に参加し協力して冬季スポーツを実践する取り組みが少し不足している。 20点:集中講義に参加し協力して冬季スポーツを実践する取り組みがまったく不足している。
	レポート	20%		スポーツライフ			20点:スポーツライフに対する知識の理解度がかなり高い。 15点:スポーツライフに対する知識の理解度が高い。 10点:スポーツライフに対する知識の理解度が普通である。 05点:スポーツライフに対する知識の理解度が低い。
	スキル点	20%			滑走		20点:滑走技能が優れている。または著しく向上している。 15点:滑走技能が備わっている。または向上している。 10点:滑走技能が少し向上している。 05点:滑走技能の向上は見られない。

「情報基礎」分科会

(1) 教育目標

「情報基礎」は、高度情報通信社会において主体的に学生生活、社会生活を送る上で必要とされる基礎・基本的な能力を育成するために開設された科目です。

この科目は、情報及び情報手段を活用できる基礎的な知識や技能を習得することを通して、情報や情報手段を適切に取捨選択し意思決定するために必要な見方や考え方を身につけること、さらには、情報化の進展が人間や社会に及ぼす影響を理解して今後の情報社会に参画する上で望ましい態度を身につけることを教育目標としています。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 授業の目的

授業の目的にあたっては、分科会の教育目標に従って、この授業科目を学ぶ目的を、授業を行う側の視点から明記する。

全学共通教育の基礎としての部分で、「情報及び情報手段を活用できる基礎的な知識や技能を習得すること」「情報や情報手段を適切に取捨選択し意思決定するために必要な科学的な見方や考え方を身につけること」「今後の情報社会を参画する上で望ましい能力と態度を身につけること」は共通する授業の目的であると考えられる。

しかし、同時に専門教育の基礎として、最終的にどのようなことができるようになって欲しいのか（「実験データを分析し、レポートを作成する」という場面において、エクセルやワード等を適切に選択し利用して、目的を達成できるようになって欲しいのか、「授業で用いる教材を作成する」という場面において、ワードやパワーポイント等を適切に選択し利用して目的を達成できるようになって欲しいのか、など）については、各学部、学科ごとに今後の専門教育との関連を明らかにし、検討した上で決定し、明記することとする。

2) 到達目標

授業の目的に沿って、今度は、具体的に「学生が何をできるようになるのかを自分自身で確認できるような形で」到達目標を記述する。授業の目的が、授業をする側（教員側）からの視点で書かれたものであれば、到達目標は、学生側の視点で書かれたものとなる。その意味では、学生自身の自主学習に対する指針ともなるべき部分である。

上記の「授業の目的」と関連して、「情報及び情報手段を活用できる基礎的な知識や技能を習得」でどの程度の知識や技能を習得しなければならないのか（ワード、エクセルが使える、UNIXの基本的なコマンドが使える、など）、「情報や情報手段を適切に取捨選択し意思決定するために必要な見方や考え方を身につける」ために、どのような題材を学習し、どこまでできるようにならなければいけないのか（「実験データを分析し、レポートを作成する」という課題において、エクセルやワード等を適切に選択し利用して時間内に目的を達成できる、「授業で用いる教材を作成する」という課題において、ワードやパワーポイント等を適切に選択し利用して時間内に目

的を達成できる, など), 「情報化の進展が人間や社会に及ぼす影響を理解」でどのような理解を求めるのか(開発者の立場から人間や社会に及ぼす影響を考えるのか, ユーザ(消費者)の立場から考えるのか, など)など, 具体的な到達点として何を要求するのかについては, 各学部, 学科ごとに今後の専門教育との関連を明らかにし, 検討した上で具体的に示すようにする。

情報基礎分科会においては, この「到達目標」を明確にすることが要求されている。少なくとも, 同じ学部もしくは学科内では, 一定の到達目標を持つ必要がある。

3) 成績評価の方法と基準

○成績評価方法

出席点(授業に出席したことによる点数)は不可だが, 平常点として, 授業中に実施した課題(指示されたことができたかどうか)による評価を加えることは十分に考えられる。また, 実践的な能力を身につけることを目指す意味より, 最終テストによる評価だけではなく, できる限り, 通常の授業及び授業時間以外に学生が行う課題を評価方法として加えるようにする。

○観点

- ・それぞれの評価方法に対して, 複数の観点からの評価を行うことを意識する。

(人間の身体を測定するのに, 身長(長さ)を測定したり, 体重(重さ)を測定したりするのように, できるだけ色々な観点で測定した方が実態に近づく, という考え方に基づく。)

- ・4つの観点(「関心・意欲」「知識・理解」「技能・表現」「思考・判断」)をバランス良く含むこと。
- ・「知識・理解」もしくは「技能・表現」だけに偏らないように配慮すること。
- ・情報基礎では, 特に「思考・判断」(自分で選択できる)の観点を取り入れ, そのような実習を行わせるようにする。

○基準

- ・それぞれの「方法」において, 具体的に何をどのように評価するのかを明記すること。
- ・それぞれの「方法」において, 全体(100%)に対して, どのぐらいの割合(例えば30%など)を占めるものなのかを明記すること。

○秀, 優, 良, 可

設定した到達目標に照らし合わせて, 「秀」「優」「良」「可」の基準を明記すること。例えば, 「秀:与えられた課題に対して, 使うソフトウェアを自分で選択して時間内に解決できる」, 「優:与えられた課題に対して, 使うソフトウェアの候補を指示すれば, その中から選択して, 時間内に解決できる」など, それぞれの「到達目標」に照らし合わせておおよその「像」を示すこと。

特に「可」の学生は最低限どの程度の能力が身につけているのかについては, できる限り明記すること。

情報基礎分科会では, 「到達目標への達成度を基準とした絶対評価」を行うことを基本とするが, 秀, 優, 良, 可のバランスが極端にならないよう(ほぼ全員が秀, ほぼ全員が不可など), 常に到達目標及び評価の基準を見直すこととする。

「思想と文化」分科会

(1) 教育目標

「思想と文化」は、人間と思想・文化との関係を主題とする教養科目です。

すなわち、これは、主として思想・文化・歴史の観点から、人間の生み出す思想と文化およびその歴史をめぐるさまざまな問題を主題として扱う科目です。この科目では、学生の皆さんが現代の思想や文化に特徴的な課題や、それを理解するために必要な歴史的な課題にふれるとともに、あわせて思想・歴史・文化にかかわる学問分野に特有の「ものの見方・考え方」にもふれることを通じて、教養科目全体としての教育目標〔特に①と②〕の達成をめざします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 到達目標

- ・学生の皆さんが、思想・文化・歴史にかかわる学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことができるようになる。
- ・学生の皆さんが、あらゆる学問分野の基盤になっている各種の常識・通念を根底的に深く問い直すための、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、思想・文化・歴史との関係において、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことができるようになる。

2) 成績評価基準

- ・現行のシラバス手引き等にある評価基準に準じたものを作成するが、個々の授業科目において評価方法の選択の余地が実質的に残されるよう配慮する。
- ・今後の分科会代表会議などの議論をふまえながら、出席・テスト・レポート・レスポンスカードなど共通の評価項目を確認していく。

「心と表象」分科会

(1) 教育目標

「心と表象」は、人間の心の世界とその具体的な表れ（表象）としての言葉・文学・芸術の世界を主題とする教養科目です。すなわち、これは心の世界、言葉と文学の世界、芸術の世界の諸相とその背景にある諸問題を主題として扱う科目です。

この科目では、学生の皆さんが、人間の心に関する諸問題と人間の表象（表現）活動としての言葉、文学および芸術の諸相を理解するとともに、あわせて心、言葉、文学、芸術にかかわる学問分野に特有の「ものの見方・考え方」にもふれることを通じて、教養科目全体としての教育目標〔特に①と②〕の達成をめざします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 到達目標

- a) 学生の皆さんが、心の世界、言葉と文学の世界、芸術の世界にかかわる学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことができるようにする。
- b) 学生の皆さんが、あらゆる学問分野の基盤となっている各種の常識・通念を根底的に深く問い直すための、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、心の世界、言葉と文学の世界、芸術の世界との関係において、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら養うことができるようにする。

2) 成績評価基準のガイドライン

- a) 科目間の不均衡をさけるため、各授業担当者は、成績評価が（ほぼ全員がAとかDなど）極端に偏らないよう配慮する（この点はシラバス等には記載しない）。
- b) 各授業担当者は、担当科目の成績評価の方法と基準をあらかじめシラバスに明示する。[シラバスに入力する成績評価の方法と基準は、基本的にアイアシスタントでのシラバス入力の枠組みに準拠する。]
- c) 評価方法の項目としては、①試験、②レポート、③講義への貢献度（出席回数、課題発表、質疑・討論等）、④その他講義内容に応じ各担当教官が指示した事項、が挙げられるが、これらの中から各授業担当者が授業の内容に応じて、できるだけ複数の評価方法を適宜選択し、シラバスに明示する。

「公共社会」分科会

(1) 教育目標

「公共社会」分科会は、個々人の単なる集合ではなく、人と人との関係を含んだ概念である「社会」を扱う授業科目を担当します。

「公共社会」分科会は、一見混沌としているように見える現代の複雑な社会現象について、その表層部分にのみ注目するのではなく、広い視野をもって個々の社会現象間の連関を認識することを通して、現代社会を科学的に把握するための知識や「ものの見方・考え方」を習得し、もって現代社会に適切に対応し、これからの社会を形成していく市民としての基礎的素養を身につけることを教育目標とします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 成績評価の方法

出席点（授業に出席したことによる点数）のみでの成績評価は行わないこととするが、最終試験・最終レポートだけではなく、出席状況やレスポンスカードの内容、中間試験・中間

レポートなども評価の対象とする。

2) 成績評価の基準

- ・秀 — 社会現象・社会問題に関する基礎知識や主要見解を十分に理解するとともに、自分なりの観点で社会現象・社会問題を分析する能力を身につけている。
- ・優 — 社会現象・社会問題に関する基本知識や主要見解を十分に理解するとともに、一定の観点から社会現象・社会問題を分析する能力を身につけている。
- ・良 — 社会現象・社会問題に関する基本知識や主要見解を十分に理解するとともに、社会現象・社会問題を論理立てて説明する能力を身につけている。
- ・可 — 社会現象・社会問題に関する基本知識や主要見解を理解するとともに、社会現象・社会問題の背景を一通り説明することができる。

「現代の諸問題」分科会

(1) 教育目標

「現代の諸問題」は現代社会に生起する様々な問題を主題とする教養科目です。

「日本事情 A・B」においては、留学生を主たる対象とする日本語教育をとおして日本の歴史・文化・風俗等を理解させるとともに、「現代社会の社会学」では、地域社会や現代家族の変容過程を社会的視点から把握することによって「現代をみる眼」の習得を教育目標とします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

「現代の諸問題」分科会は、以下のような成績評価基準と成績評価方法を作成します。

1) 成績評価基準

- 秀：到達目標（各教員が定める）のすべてにおいて特に高い水準にある。（90点）
- 優：到達目標のすべてにおいて高い水準に達している。（80点）
- 良：到達目標をある程度達成している。（70点）
- 可：到達目標の一部を達成しているが、学習成果が十分でない。（60点）

2) 成績評価方法

平常点	20%
レスポンスカードの内容	40%
期末試験	40%

なお、教員の判断により、レポートを課し、レスポンスカードの得点に含めても良い。

「生物の世界」分科会

(1) 教育目標

「生物の世界」は現代社会に生きている人、すなわちこれから社会にでて生きていこうとしてい

る理科系、文科系を問わず全ての学生に教養としての現代生物学あるいは生命科学を様々な角度から複眼的、鳥瞰的かつ総合概説することによって、学生が生命のしくみを日常生活と関連づけて理解し、いのちのあり方を見つめ、改めて自分を知ることができるような講義内容とし、科学的な生命観を養うことを目標とする。

(2) 成績評価基準のガイドライン

「生物の世界」の分科会は以下に示した成績評価基準と成績評価方法を採用。本分科会の教育目標に従い、生命のしくみに対する科学的な「ものの見方・考え方」の習得を測定するために多様な評価方法を採用。

1) ガイドライン

秀：生命のしくみについて十分に理解し、自分なりの観点で生命現象を科学的に分析し、十分に理解する能力を身につけていること。(90点)

優：生命のしくみについて十分に理解し、一定の観点で生命現象を科学的に分析し、理解する能力を身につけていること。(80点)

良：生命のしくみについて理解し、一定の観点で生命現象を科学的に分析し、理解する能力を身につけていること。(70点)

可：生命のしくみについて理解し、科学的に思考する能力を身につけていること。(60点)

不可：上記「可」の到達目標を達していない。

2) 成績評価法

平常点、小テスト、レポート、期末試験等により評価する。これらの成績評価の比重については、担当教員の総合判断による。

「自然と数理の世界」分科会

(1) 教育目標

「自然と数理の世界」分科会は、自然科学的な自然認識の到達点を踏まえつつ、自然科学における各学問分野、とりわけ、数学・物理学・化学の分野を中心として、それぞれの学問分野に特有な基礎的概念と「ものの見方・考え方」の理解を図り、論理的な思考力を養成することを目標とする。

(2) 成績評価基準のガイドライン

「自然と数理の世界」分科会は、以下に示した範囲内で成績評価基準と成績評価方法を作成する。本分科会の教育目標に照らし、基礎的概念と「ものの見方・考え方」の理解や論理的な思考力を測定するために多様な評価方法を採用のものとする。

※ 到達目標に対応した基準を設定する。どのような到達目標に到達すれば、「秀」、「優」、「良」、「可」なのかを明記する。

※ 成績評価の方法を示す。平常点、小テスト、レポート、期末試験など。

※ 複数の方法で評価する場合には、それぞれの方法でどのような基準で判定し、およそどのくらいの割合で集計するかを明示する。

「科学技術」分科会

(1) 教育目標

科学技術と人間社会の関わりをテーマに、現代社会の繁栄を担う様々な科学技術開発の歴史と現状そして将来を、社会や経済との関連も含めて理解し、幅広い教養とものの見方・考え方を習得することを目指します。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 到達目標・・・中世・近世以降の科学と技術の歴史と、先端科学技術（例えば、ロボット、コンピュータ、エレクトロニクス、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、新材料など）の現状を、講義と自宅学習を通じて理解する。さらに、人間社会との関わりの中から科学技術の将来のあるべき姿について、自らの考えをまとめることが出来る能力を習得する。

2) 成績評価の基準

本分科会では以下に示す評価基準で評価する。

- ・これまでの科学と技術の歴史と、先端科学技術のいくつかの分野の歴史と現状を理解出来るか。（「可」、「良」の評価基準とする）
- ・科学技術の歴史と現状の理解に基づき、将来のあるべき姿について自らの考えをまとめることが出来るか。（「優」、「秀」の評価基準とする）
- ・成績は平常点（レスポンスカードの提出や授業中の発言など）20％、レポートまたは期末テスト80％で総合評価する。
- ・関連する内容に関する書籍や論文を自ら読んでまとめるレポートを課し、評価に加える。

「環境」分科会

(1) 教育目標

「環境教育科目」は、本学における環境教育の出発点として位置づけられる教育科目です。

この科目では、教育科目全体としての上記の教育目標に沿い、環境に対する幅広い関心と深い認識を促し、環境についての多角的な「考え方」を養うことをめざします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) ガイドライン

秀：到達目標（各教官が定める）のほぼすべてにおいて特に高い水準に達している。（90点）

優：到達目標のほぼすべてにおいて高い水準に達している。（80点）

良：到達目標をある程度達成している。(70点)

可：到達目標の一部を達成しているが、学習成果が十分でない。(60点)

不可：到達目標を達成していない。

2) 成績評価方法

平常点 20%

レスポンスカード 40%

学期末試験 40%

なお、教員の判断により、レポートを課し、レスポンスカードの得点に含めても良い。

「オムニバス方式の学際的な授業科目における講義間の密接な連携」について（案）

大学教育センター第 1 部門

- ・平成 17 年 8 月に、「総合科目」及び「環境科目」の分科会と第 1 部門で各授業科目代表者に、オムニバス方式授業における講義間の密接な連携を図るための問題点、改善点等についてアンケート調査を行った。
- ・アンケート調査を集約した結果、授業改善のために今年度後期より次の 3 点を徹底することとする。
 - 1 少なくとも一度は授業担当者全員が集まり、それぞれの授業計画について周知し合うとともに、成績評価等について共通認識を持つ。
 - 2 各教員が学生に配付する資料を共有する。
 - 3 第 1 回目の授業で授業科目の全体像等についてオリエンテーションを行う。
- ・また、来年度以降については、次の点について検討する。
 - 1 各講義の概要をまとめて授業科目ごとのシラバス冊子を作成する。（従来、総合科目で作成していたものと同種のもの）
 - 2 コーディネーターの役割と担当（負担・責任）の明確化
 - 3 その他

転換教育 ワーキング・グループ 第7回報告

ー転換教育実施にあたってのガイドラインー

平成 18 年 8 月 2 日

ユニバーサル段階に突入した今、大学での初年次転換教育の果たすべき役割は重くなっている。この科目の課題には、共通教育や専門教育への導入ばかりか、学生に社会人としての自覚も喚起することがあげられる。文字どおり「転換」にふさわしい内容と教育方法が問われている。専門教育から共通教育に転じた学部もあり、その積極的意義を重視したい。この間、ワーキング・グループは、8 回の論議を経て、以下に示す報告を行う。

この報告は、新入生の 243 名にアンケートをとり、今日の岩手大学の 1 年生の学習実態を一部ではあるが把握した上で、出されたものである。予習・復習に時間を振り向けていない学生に、どう勉強の面白さを知らしめるか？かなり困難な課題だが、ここから大学の改革が進むと確信している。また、ハワード・ガードナーや山田礼子の著作、国立大学教養教育実施組織会議から得た情報も参考に、この科目の方向づけを行った。

1. 授業名：「基礎ゼミナール」

2. 学年・単位数：1 年次前期・1 単位

なお、この 1 単位を新規に共通教育に積み増すために、共通教育科目総単位数は 1 単位増加する。その結果、専門教育と合算した卒業総単位数を 1 単位増やすか否かについての判断は、各学部の判断に任せる。

3. 授業の目的：下記の 4 点を共通の目的とする。ただしどの点により大きな比重を置くかという判断は、個々の授業担当者に任せる。

- ・ 知的活動への動機付けを高める。
- ・ 科学的思考方法と学習，実験，のデザイン能力を涵養する。
- ・ 学問の自由にきちんと目を向けよう。
- ・ 学生生活とその後のキャリアのデザインを充実させる。
- ・ アカデミックスキルとともに、ソーシャルスキルを涵養する。

4. 実施形態：原則は下記の通り。ただしクラス編成等については、各学部の実情にあわせる。

- ・ 少人数（原則 10 数名程度，最大 20 名）のゼミ形式
- ・ TA の制度をできるだけ活用する。2～4 年生も必要に応じて、参加させる。
- ・ 統一の授業紹介を作る。（共通フォーマットを用意する。この課題は WG で検討が今行われている。）
- ・ 大教センターとして授業の参考となるような「手引き」を作成し、教員・学生に配布する。

5. 授業内容：アカデミックスキルとともに、ソーシャルスキルを涵養するために、下記のような授業を行う。

〈アカデミックスキル涵養に関わる事柄の例示〉

1) 学問への動機付け。受験勉強との違いは何か？

分析的、批判的思考（クリティカルシンキング）。

問題発見型（課題探求能力の涵養）の人になろう。

2) 本，人，実験，フィールドから学ぶ。

「基礎ゼミナール」が専門教育への導入という面を持つため、専門の「体験的学習」や「現地に学ぶ学習」あるいは「グローバルな教材」へのアプローチを積極的に取り入れたい。

3) 自発的に学ぶ習慣を付ける。

予習・復習があまりにもなされていない現状¹⁾から、強調する課題になった。

4) レポートと口頭によるプレゼンテーションとディスカッション。

5) キャンパス資源活用と施設のオリエンテーション。

図書館の利用方法（オリエンテーションが行われているが）がわからない、1年生（7月の段階）が少なくないという現状²⁾。また、キャンパス全体がミュージアムという資源を利用する。

〈ソーシャルスキル涵養に関わる事柄の例示〉

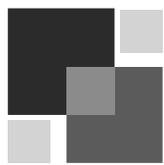
- ・ 話す、聞く、マナー、など相互のコミュニケーション能力を涵養する。
- ・ 学生と教員、学生相互のコミュニケーションを図る³⁾。
- ・ 社会に目を向け、社会の中で生きるには何が問われているかを知り⁴⁾、行動する
- ・ 将来の夢をかたり、その実現を図る青写真を引ける力⁵⁾（「あなたは卒業後の夢を語れますか、その夢を実現するために、どのような学生生活を過ごしたいと考えていますか」）。

6. 今後のスケジュール

9月の運営委員会には、実施形態を各学部で求める方針を出す。「基礎ゼミナール」開講の数を各学部で検討し、10月までに決定していただく。

注)

- 1) 6月末に全学部の1年生を対象にしたアンケート調査をおこなった。被検者数243名。これによると、予習復習等に費やしている時間はゼロが28.4%、30分未満が29.6%であった。
- 2) 上記アンケートで、図書館に行ったことがない新生24.7%。
- 3) 上記アンケートで、教員と話したことがない学生は18.5%に上る。
- 4) 上記アンケートで、新聞を毎日読んでいる学生の割合は12%にすぎなかった。
- 5) 上記アンケートで、将来の自己みすえ、それを実現化する青写真を作れているか、という質問に対して76%の学生が出来ていないと答えている。



教育評估・改善部門

平成17年度 教育評価・改善部門会議

	氏名	所属
部門長	中村 一基	教育評価・改善部門
全学共通教育企画・実施部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
専任教員	江本 理恵	教育評価・改善部門
専任教員(10月～)	福永 良浩	教育評価・改善部門
専任教員(併)(～10月)	石川 明彦	教育評価・改善部門
各学部選出兼務教員	砂山 稔	人文社会科学部
	菊地 良夫	人文社会科学部
	宇佐美 公生	教育学部
	上濱 龍也	教育学部
	野村 直之	工学部
	西谷 泰昭	工学部
	高橋 壽太郎	農学部
	塚本 知玄	農学部
(オブザーバー)	後藤 尚人	大学教育センター
(オブザーバー)(10月～)	山崎 憲治	大学教育センター

平成18年度 教育評価・改善部門会議

	氏名	所属
部門長	後藤 尚人	教育評価・改善部門
全学共通教育企画・実施部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
専任教員	江本 理恵	教育評価・改善部門
	福永 良浩	教育評価・改善部門
各学部選出兼務教員	砂山 稔	人文社会科学部
	小林 睦	人文社会科学部
	名古屋 恒彦	教育学部
	上濱 龍也	教育学部
	小川 智	工学部
	恒川 佳隆	工学部
	築城 幹典	農学部
	高橋 壽太郎	農学部
学務課長	古井 修子	学務部

教育目標等の整備と 成績評価基準のガイドライン作成

教育評価・改善部門 江本理恵

岩手大学中期計画における成績評価関連項目、及び、平成 18 年度の年度計画の達成に向け、各学部、各分科会における以下の事項を実現させることは、教育評価・改善部門に課せられた大きな課題でした。

- * 各学部の教育課程・カリキュラムにおける教育目標の整備
- * 全学共通教育科目および専門教育科目の授業内容とそれらのカリキュラム上の教育目標との関係の明確化
- * 成績評価基準のガイドラインの作成

教育評価・改善部門では、平成 17 年頃よりこの議論を開始し、平成 18 年 7 月には各分科会へ、11 月には各学部へ、「教育目標等の整備と成績評価基準のガイドラインの作成について」の依頼を出すことができました。また、この議論の過程において、「成績評価は到達目標の達成度に基づいた絶対評価とする」「教育目標に沿った授業の目的の設定, 到達目標の明確化を行う」「到達目標に沿った成績評価の方法と基準を設定すること」などが議論され、合意されていきました。平成 19 年 3 月には、分科会単位の「成績評価基準のガイドライン」が出来上がってきました。

平成 19 年度の課題としては、以下の 2 点が挙げられます。

- ① 専門教育における「成績評価基準のガイドライン」を作成すること。
- ② 分科会の「成績評価基準のガイドライン」の質を高めること。

教育評価・改善部門では、「教育目標」や「成績評価基準のガイドライン」は一朝一夕にできるものではないと考えています。また、時代の変化に伴い常に見直しが必要でしょう。これをきっかけに、分科会や学部等で教育に関する議論が行われることを期待しています。

平成 18 年 7 月 6 日

大学教育総合センター
運営委員会委員長 玉 真之介 様

大学教育総合センター
教育評価・改善部門部門長 後藤 尚人

教育目標等の整備と成績評価基準のガイドライン作成について

教育評価・改善部門では、岩手大学中期計画における成績評価関連項目 [1, (2), 4), ①～③] をもとに、本年度の年度計画において、

***各学部の教育課程・カリキュラムにおける教育目標の整備**

***全学共通教育科目および専門教育科目の授業内容とそれらのカリキュラム上の教育目標との関係の明確化**

***成績評価基準のガイドラインの作成**

を重点事項として取り組んでおります。

【中期計画】

1 教育に関する目標を達成するための措置

(2) 教育内容等に関する目標を達成するための措置

[学士課程]

4) 適切な成績評価等の実施に関する具体的方策

- ① 大学教育センターを中心に厳格な成績評価のための方法及び教室外学習の評価方法を構築する。
- ② 教育目標の徹底とそれに基づいた履修目標による成績評価基準を作成し、成績評価の一貫性を実現する。
- ③ 授業科目区分毎の成績評価結果のバランスに配慮した成績評価基準を作成し、適切かつ有効な成績評価を実施する。

【平成 18 年度計画】

1 教育に関する目標を達成するための措置

(2) 教育内容等に関する目標を達成するための措置

[学士課程]

4) 適切な成績評価等の実施に関する具体的方策

- ① 「全学統一拡張 Web シラバス」システムの試行運用に関連させて、成績評価や教室外学習の評価方法に関する研修会等を行なう。
- ② 教育目標の徹底とそれに基づいた履修目標による成績評価基準を作成し、成績評価の一貫性を実現する。
- ③ 授業科目区分毎の成績評価結果のバランスに配慮した成績評価のガイドラインを作成し、適切かつ有効な成績評価を実施する。

この度、当部門会議において、全学共通教育分科会へ依頼する内容がまとまりましたので、運営委員会でご審議頂けますようお願い申し上げます。（専門科目関連については改めて提案いたします。）

分科会への依頼事項（平成19年度からの実施に間に合うようにお願いします）

1 分科会ごとの教育目標の整備（→分科会代表へ）

- * とりわけ新分科会については、従来の分科会の教育目標を区分（人間と文化、人間と社会など）の教育目標として、その下位組織としての分科会における教育目標を整備して下さい。

2 分科会における各授業科目の位置づけの明確化（→分科会代表&授業担当者へ）

- * 分科会の教育目標に照らして、各授業科目が分科会内でどのような位置づけになるのかを明確にして下さい。

3 分科会における各授業科目の「授業の目的」と「到達目標」の整備

（→分科会代表&関連科目担当者へ）

- * とりわけ同一授業科目名で複数のクラスが開講されている場合には、
 - ・ 当該科目の（担当教員から見た）「授業の目的」について、また
 - ・ 授業を履修することで獲得される（学生に求める）「到達目標」について、担当者間での共通理解・指針を整備して下さい。

4 分科会ごとの「成績評価基準のガイドライン」の作成（→分科会代表へ）

* 成績評価基準のガイドラインとは？

→ 授業科担当者はシラバス作成時に到達目標をもとに成績評価の方法・観点や成績評価基準等を明確にすることになりますが、その際、よりどころとなる分科会構成員の共通の指針です。

→ 具体的には、到達目標に対応した成績評価方法・観点として、レスポンスカードやレポート、試験などをどのように用いるか、また、成績評価の基準として、なにがどれくらいできれば優や良などになるのか、などについて明示されている必要があります。

5 分科会単位でのFD活動の実施（→分科会代表へ）

- * 同じ問題意識を共有する分科会の教員間で、授業をより良くするための様々な工夫や実践例について意見交換等を行い、分科会全体の教育レベルの向上に取り組んで下さい。

*** *** ***

※ 絶対評価と相対評価

学生を評価する際に絶対評価か相対評価かということが問題としてよく取り上げられます。部門でもこの問題を議論した結果、重要なのは、あらかじめ設定された到達目標に照らし、その達成度を評価することだということになりました。この考え方は絶対評価だといえますが、基準が到達度という尺度であらかじめ明示できること、その到達目標は学生の学力等の実状を反映できること、などの利点があります。

平成 18 年 10 月 8 日

大学教育総合センター長
玉 真之介 様

大学教育総合センター
教育評価・改善部門部門長 後藤 尚人

教育目標等の整備と成績評価基準のガイドライン作成について

教育評価・改善部門では、岩手大学中期計画における成績評価関連項目 [1, (2), 4), ①～③] をもとに、本年度の年度計画において、

***各学部の教育課程・カリキュラムにおける教育目標の整備**

***全学共通教育科目および専門教育科目の授業内容とそれらのカリキュラム上の教育目標との関係の明確化**

***成績評価基準のガイドラインの作成**

を重点事項として取り組んでおります。

【中期計画】

1 教育に関する目標を達成するための措置

(2) 教育内容等に関する目標を達成するための措置

[学士課程]

4) 適切な成績評価等の実施に関する具体的方策

- ① 大学教育センターを中心に厳格な成績評価のための方法及び教室外学習の評価方法を構築する。
- ② 教育目標の徹底とそれに基づいた履修目標による成績評価基準を作成し、成績評価の一貫性を実現する。
- ③ 授業科目区分毎の成績評価結果のバランスに配慮した成績評価基準を作成し、適切かつ有効な成績評価を実施する。

【平成 18 年度計画】

1 教育に関する目標を達成するための措置

(2) 教育内容等に関する目標を達成するための措置

[学士課程]

4) 適切な成績評価等の実施に関する具体的方策

- ① 「全学統一拡張 Web シラバス」システムの試行運用に関連させて、成績評価や教室外学習の評価方法に関する研修会等を行なう。
- ② 教育目標の徹底とそれに基づいた履修目標による成績評価基準を作成し、成績評価の一貫性を実現する。
- ③ 授業科目区分毎の成績評価結果のバランスに配慮した成績評価のガイドラインを作成し、適切かつ有効な成績評価を実施する。

この度、当部門会議において、各学部へ依頼する内容がまとまりましたので、各学部長へご依頼頂きますようお願いいたします。

各学部への依頼事項

1 学部における教育目標の整備（→学部長へ）

*各学部には、それぞれの学部理念があり、その理念を実現するために、教育的観点において「教育目標」（学生が到達すべき目標）が設定されていると思われます。こうした理念と教育目標との関係をご理解頂き、各学部における教育目標の再確認をお願いします。

2 学部内の課程または学科における教育目標の整備（→課程代表または学科長へ）

*各学部の教育目標に照らし、課程または学科における「教育目標」（学生が到達すべき目標）の整備をお願いします。

3 課程または学科内のコースにおける教育目標の整備（→コース代表へ）

*各課程または学科の教育目標に照らし、学生が所属するコースの「教育目標」（学生が到達すべき目標）の整備をお願いします。

4 学科またはコースごとの「成績評価基準のガイドライン」の作成（→学科長またはコース代表へ）

*以下を参考に「成績評価基準のガイドライン」の作成をお願いいたします。

*成績評価基準のガイドラインとは？

→ 授業科担当者はシラバス作成時に当該科目の到達目標をもとに成績評価の方法・観点や成績評価基準等を明確にすることになりますが、その際によりどころとなる学科またはコース構成員共通の指針です。

→ 具体的には、到達目標に対応した成績評価方法・観点として、レスポンスカードやレポート、試験などをどのように用いるか、また、成績評価の基準として、何がどれくらいできれば優や良などになるのか、などについて明示されている必要があります。

5 学科またはコース単位でのFD活動の実施（→学科長またはコース代表へ）

*同じ問題意識を共有する学科またはコースの教員間で、授業をより良くするための様々な工夫や実践例について意見交換等を行い、学科またはコース全体の教育レベルの向上に取り組んで下さい。

*** *** ***

※ 絶対評価と相対評価

学生を評価する際に絶対評価か相対評価かということがよく取り上げられます。センターでもこの問題を議論した結果、重要なのは、あらかじめ設定された到達目標に照らし、その達成度を評価することだということになりました。この考え方は絶対評価だといえますが、基準が到達度という尺度であらかじめ明示できること、その到達目標は学生の学力等の実状を反映できること、などの利点があります。

依頼項目の解説と具体例

2006/07/06

大学教育総合センター

教育評価・改善部門

* 教育目標

全学共通教育教養科目の理念と教育目標に照らし、上位の教育目標達成を目指した各分科会の教育目標を設定します。この教育目標では、「育成すべき人材像」ではなく、育成すべき人材が持ちあわせている能力に焦点をあてて設定することが望まれます。

具体例（現在の「人間と文化」分科会の教育目標）：

「人間と文化」は、人間と文化との関係を主題とする教養科目¹です。すなわち、これは人文科学における各学問分野の観点から、各種の文化がそれぞれ人間にとってどのような意味や機能（はたらき）をもっているかという問題を主題として扱う科目です。

この科目では、学生の皆さんが人間と文化との関係についての課題や、文化との関係における人間観をめぐる課題にふれるとともに、あわせて人文科学における多くの学問分野に特有の「ものの見方・考え方」にもふれることを通じて、教養科目全体としての教育目標の達成を目指します。

（履修の手引きより）

*1：「人間と文化」は、教養科目の授業科目区分です。これまでは「授業科目区分」＝「分科会」でしたが、今後は「授業科目区分」と「分科会」が一致しないこともあるので、その点を注意して「分科会の教育目標」を設定してください。

* 各授業科目の位置づけの明確化

各分科会の授業科目の位置づけを明示した一覧表、もしくは、位置づけを可視化した図を作成します。例えば、教養科目であれば、学問分野ごとのグルーピング、外国語科目ならば、難易度別の配置図などが考えられます。

**** 以下は、シラバス作成時に参照するガイドライン項目です。

* 授業の目的

分科会の教育目標に照らし、教員としてこの授業が目指すもの、この授業を履修する学生に望むことなどを記述するための項目です。

具体例：

分科会の教育目標に沿い、授業では具体的な課題（「人間と文化との関係についての課題」、「文化との関係における人間観をめぐる課題」など）を扱うこと、また、その具体的な課題の扱いを通して学問分野特有の「ものの見方・考え方」を示すことが共通の理解となる。

各授業科目の授業の目的には、該当授業科目で、どのような課題を扱い、そして、どのような学問分野特有の「ものの見方・考え方」を学生に身につけてもらうことを目指すのかを明記することとする。

なお、同一授業科目の場合には、特に「ものの見方・考え方」の観点に関わる目的については、担当者間で合議し、できるだけ同じものとなることが望ましい。授業実施者によって扱う具体的に課題に違いがある可能性があるが、その場合も、担当者同士で共通理解を持つようにする必要がある。

* 到達目標

上記の「授業の目的」に対応づけ、学生からの視点で、この授業を履修し学習することで何ができるようになるのか、どのような能力が身に付くのか（もしくは、何ができるように学習をすればいいのか、どのような能力が身に付くように学習すればいいのか）を具体的に設定するための項目です。

この到達目標に対応させて後述の「成績評価の方法と基準」を設定するには、できるだけ客観的測定が可能な形に具体化して記述する必要があります。例えば、「○×を理解する」という到達目標を設定した場合、学生が「○×を理解した」ことをどのようにして確認するのかが困難です。そこで、「○×を説明できる」「○×と△◇の類似点と相違点を指摘できる」など、「学生が何をできるようになればいいのか」を「学生の行動」として具体化します。これにより、例えば「○×を説明できる」という到達目標であれば、期末テスト、レポート等において「○×を説明せよ」という問題を設定し、実際に説明できるできないを評価基準とすることができます。と同時に、学生自身も、自分の到達状況を自分自身で確認することができます。

この到達目標では、「可」（単位を出す、出さないの境目）となるための「最低限の到達点」だけではなく、「良」になるには「最低限」ここまで、「優」となるには「最低限」ここまで到達して欲しいという期待的な内容を盛り込んでください。また、複数の到達目標を組み合わせて判断される場合も想定されます。この場合には、成績評価として判断に使う到達目標をすべて明記してください。

具体例：

本分科会の教育目標等に照らし合わせると、本分科会の授業科目の到達目標には、大きく2つ観点が考えられる。1つは概念や専門用語等、具体的な知識の習得のであり、もう1つは、それらを通して習得されるその学問特有の「ものの見方・考え方」である。到達目標設定時には、この2つに配慮し、特に「ものの見方・考え方」として、具体的にどのような力を身につけることを学生に望むのかを明記する。

なお、同一授業科目の場合には、特に「ものの見方・考え方」の観点に関わる目標については、担当者間で合議し、できるだけ同じものとなることが望ましい。具体的な知識等は授業実施者によって扱う内容が変わる可能性があるが、その場合も、担当者同士で共通理解を持つようにする必要がある。

* 成績評価の方法と基準

評価方法とは、学生がこの授業を受講することで身につけたものを測定するための測定方法に該当します。レスポンスカード、iカード、小テスト、課題、期末テスト、期末レポートなどが該当します。

成績評価基準では、それぞれの評価観点、成績評価方法で測定した学習成果に対してどのような基準で成績をつけるか（点数に換算するか）を明確に設計します。例えば、期末にレポートを課すのであれば、そのレポートに対してどのような基準で点数をつけるのかを明記します。具体的には、「適切な問題が設定されている」「設定した問題の背景を説明している」「設定した（問題に対してどのような課題が存在しているのかを指摘できる）」「その解決策について、既存の学説等がどのように述べているのかを挙げるができる」「既存の意見を踏まえた上で、自分はどのように考えるのかを述べるができる」など、到達目標に達するまでの経過点をいくつか提示し、これが達成されていたら〇点、などと採点基準を明確に記述します。

複数の評価方法、観点で測定した結果を総合的に判定する場合でも、それぞれの測定結果をどのような基準で判定し、それをどのように総合的に判断するのかを、出来る限り明確にしてください。

ここを明確にすることで、15回の授業を通して何を学生に伝えたいのか、何を身につけて欲しいのかが、教える側にとっても明確になります。また、中期目標・計画で求められているのもこの点ですし、今後の「社会（企業・保護者・学生など）への説明責任」に応えることにもつながります。

具体例：

本分科会では、以下に示した範囲内で成績評価基準を作成する。本分科会の教育目標に照らし、できるだけ学問分野特有の「ものの見方・考え方」を測定する「レポート」を評価方法に加える方針をとることとする。

- ・ 到達目標に対応した基準を設定する。特に、およそどのようなことができるようになれば（どのような到達目標に到達すれば）「可」「良」「優」なのかを明記すること。
- ・ 成績評価の方法を示す。平常点（レスポンスカード、授業中の発言等）、小テスト、レポート、期末テストなど。
- ・ 複数の方法で評価する場合には、それぞれの方法でどのような基準で判定し、およそどのぐらいの割合で集計するのかを明示する。
- ・ 出席点は採用しない。
- ・ 平常点は、授業への貢献度（レスポンスカードの提出、授業中の発言等）を測った結果とし、その割合は全体の30%以内にとどめる。
- ・ 「ものの見方・考え方」を確認するため、レポート（小論文）を課す。その場合、全体に占める割合は30%を超えるようにする。

**** 以下は、今後の要望項目です。

* FD 活動

具体的には以下のような活動が想定されます。

- ・ 成績評価結果の分布を確認し、成績評価結果分布が極端な場合には到達目標の見直しを行う。
- ・ 相互授業参観などの相互研鑽を行う。
- ・ 学生アンケートの結果を活用する。
- ・ 各種評価等（認証評価、JABEE等）の対応に必要な資料作成を行う。

科目名 文化記号論Ⅰ		担当教員名 後藤 尚人	
重複科目名		セト科目名【担当教員名:時間割コード】	
年度 2006	開講学期 前期	単位数 2	時間割コード 4186
開講情報			
曜日 水	時間 7-8	時間割コード 4186	【凡例】 ○:(表示中の)科目 □:(表示中の科目と)同時に履修すべき科目:セト科目
1			
2			
3			
4			
主な対象学生			
学部・大学院・他 人文社会科学部	学科・課程・専攻科 国際文化課程	コース・サブコース・科・選修 文化システム	学年 1,2,3
科目の情報			
科目の種類 他学部開講科目	ESDとの関連 いわた大学単位互換科目 履修上の条件 公開授業講座		
特になし			
担当教員情報			
氏名(フリガナ) 後藤 尚人(ゴトノト)	所属 岩手大学人文社会科学部	オフィスワー 木曜日のお昼休み時間に来て下さい。	
研究室 人社-1-305	プロフィール http://genesis.hss.iwate-u.ac.jp/niigoto/		
他の担当教員			
キーワード 記号,象徴,暗号,フシユール,パース,バルト			
授業の目的 フシユールとパースに代表される記号論の諸概念と思想を理解し、記号論の概要を隣接諸科学との関係において把握すると共に、代社会における《記号》の役割と重要性を認識する。			
到達目標 記号論の基礎的な概念を説明できる。 フシユールとパースの思想について比較し、共通点と相違が説明できる。 フシユール系とパース系の記号論の系譜についてその広がりをも説明できる。 隣接諸科学との比較において現代社会における《記号》の役割を説明できる。			

授業の概要 科目名は文化記号論であるが、記号論一般について概要を講義する。とりわけフシユールとパースの記号論を基に、それぞれの系譜として連なるヨーロッパ系と大陸系の記号論の輪郭を明らかにしたい。			
授業の形式 原則として講義 (PowerPoint によるプレゼンテーション方式) 受講生とのディスカッション等も取り入れたい。			
教室外学習 基礎文献ならびに参考文献を読み込んで下さい。 また、記号論的発想・手法で身の回りの対象について分析を試みると、どれだけ記号論が消化できているかが分かります。			
成績評価の方法と基準			
評価方法	割合	評価観点	
レスポンスカード	20%	関心・意欲	知識・理解
授業への貢献度	20%	技能・表現	思考・判断
学期末レポート	60%		
評価の基準(具体的に)			
【レスポンスカード】の評価基準 (約20点) *指示どおりの内容が書かれている。 *正しい日本語で書かれている。 → ここまでで10~15点 *オリジナルな観点に基づいた指摘や独創的な見解が述べられている。 → 加算5~10点			
【授業への貢献度】の評価基準 (約20点) *授業中に質問をしたり、積極的に自分の意見を述べる。 → ここまでで10~15点 *さらにオリジナルな観点や見解に基づいた指摘をしたり、独創的な意見を述べる。 → 加算5~10点			
【学期末レポート】 (約60点) *課せられたテーマについて書かれている。 正しい日本語で書かれている。 → ここまでで20~30点 *課せられてテーマの領域についての学問的成果を踏まえている。 → 加算10~20点 *オリジナルな観点に基づいた指摘や独創的な見解が述べられている。 → 加算10~20点			
特記事項 平常点は考慮しますが、出席点はありません。			
履修における留意点 文化システムコース以外の、他コース・他課程の学生の受講も歓迎します。			
教科書 教科書は特に指定しません。 授業で必要な教材については、そのつど配布します。			
参考文献/教材 関連文献については教室で指示しますが、以下は必読の書： *フェルディナン・ド・フシユール、『フシユール一般言語学講義』校注』（トウリオ・デ・マウロ編）、而立書房、1976 *チャールズ・サンダース・パース、『パース著作集2：記号学』、内田種臣編訳、勁草書房、1986			

科目名		担当教員名	
情報教育法Ⅰ		江本 恵	
重複科目名		セット科目名【担当教員名:時間割コード】	
情報教育法Ⅰ, 情報教育法Ⅰ			
年度	開講学期	単位数	時間割コード
2006	前期	2	3211
開講情報			
曜日	時間	時間割コード	[凡例]
○ 1 木	3・4	3211	○:(表示中の)科目
2			□:(表示中の科目と)同時に履修すべき科目:セット科目
3			
4			
主な対象学生			
学部・大学院・他	学科・課程・専攻科	コース・サブコース・科・選修	学年
教育学部			1, 2, 3, 4
教育学研究科			マスター
科目の情報			
科目の種別	ESDとの関連		
他学部開講科目	いわず5大学単位互換科目	公開授業講座	
履修上の条件			
担当教員情報			
氏名(フリガナ)	江本 恵(エトリエ)	オフィスワー	木曜日:12:20~12:50
所属	岩手大学教育学センター		
研究室	学生センター2階		
プロフィール	他の担当教員		
キーワード			
高等学校教科「情報」、教科教育法、教職科目			
授業の目的			
本講義では、主に普通教科「情報」に焦点を当て、高等学校の学習指導要領の総則を理解し、学校の教育課程をより良く編成するための方法や留意点を認識し、修得することにも、教育課程全体の中で、普通教科「情報」を必修で実施することの意義・役割を認識し、教育目標を達成する上で必要な授業設計、教材開発、教育方法、学習評価等に関する知識、技能、考え方を修得することを目的としている。			
到達目標			
本講義では、日常生活において直面する課題について、情報を活用しながら合理的に問題解決を行う時の判断の根拠となる「情報的な見方・考え方」を身につけ、さらにそれを指導するための授業設計方法を習得することが目標である。そのための到達目標として、「情報」の授業を評価する。			
<ul style="list-style-type: none"> ・「情報的な見方・考え方」の習得を目的とした「情報」の授業を設計し、実施できる。 ・上記に基づいて、必要な教材を作成できる。 ・上記を用いて、授業を実施できる。 ・授業実施後の指摘に従い、学習指導案および教材をより適したものに改善できる。 			

授業の概要	
本講義では、履修者全員が、自作教材を用いて模擬授業を実施することを到達目標としています。この目標達成のため、まず最初は、普通教科「情報」の授業イメージを形成する目的で、私が実施する模擬授業を(高校生になつたつもりで)受けてもらいます。そして、この「模擬授業」をモデル授業、モデル教材として、授業展開や教材開発の具体的なポイントを解説します。その後、実際に授業展開や教材の開発の実習を行います。	
授業の形式	
講義+実習	
教室外学習	
授業中に課題を出します。授業時間内にできなかったものは、時間外に仕上げて、期限内に提出してください。課題の提出は、アイアシスタントの個人ポータルサイトから行ってください。	
成績評価の方法と基準	
評価方法	割合
小課題(授業中もしくは宿題等の課題)	30%
模擬授業の準備・実施	50%
期末レポート	20%
評価の基準(具体的に)	
基本的に、「模擬授業を実施できる」ことが、この科目の最低ライン(可)である。また、模擬授業を実施し、さらにその教材をより授業の趣旨にあったものに修正できれば、「優」となる配点となっている。	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 積極的に授業に参加し、課題に取り組んでいる。期限内に課題を提出している。→20点 2. 提出された課題が、授業の内容をふまえて十分に考えられたものである。→ここまでできれば30点 3. モデルとして提示した授業、教材の意図を認識し、その意図を再現できる授業、教材を作成した。→30点 4. モデルとして提示した授業、教材をもとに、それをさらに自分の意図を盛り込んで、工夫、改良した授業を設計した。→ここまでできれば50点 5. 期末レポート(模擬授業の学習指導案、教材等の修正)の評価基準(約20点) <ol style="list-style-type: none"> 1. 何からの修正を行い、提出している。→10点 2. 改善の内容がこちらの指摘に沿っており、より授業の意図に沿った授業設計、教材開発がされている。→ここまでできれば20点 	
特記事項	
模擬授業を実施しない場合には「不可」になります。何らかの事情で欠席した場合には、申し出てください。	
履修における留意点	
<ul style="list-style-type: none"> ・免許取得希望者は、この後、「情報教育法2」を履修すること。 ・本講義では、実際にコンピュータやネットワークを利用してながら授業を進める。表計算ソフトウェア等のコンピュータの利用環境について自分で整え、基本操作等に習熟しておくこと。 	
教科書	
なし	
参考文献/教材	
『高等学校学習指導要領解説・情報編』 文部省 開隆堂 2000年	

詳細計画 各回または週の具体的な授業内容、目標など

回	到達目標	授業内容	備考
1	<ul style="list-style-type: none"> 授業の目的、目標などについての説明を聞く。 授業の実施形態や評価方法、基準等について（テスト無し、毎回の課題が評価対象など）の説明を聞く。 教室のパソコンが使えることを確認する。 マスコミなどイメーでなくても、学習指導要領を納得する。 教科「情報」の学習目標・内容について、示されたものが正しいか間違っているかを判断できる。 	<p>オリエンテーション (授業の概要の説明、パソコンの基本操作の確認、各種の実施)</p> <p>学習指導要領について解説する。</p>	
2	<ul style="list-style-type: none"> 「情報B」の最初の単元の導入実習を体験する。 問題解決の場面において、情報技術を活用することと効果的な場合があることを体験する。 情報技術が得意なことと、逆に人間でなければできないこととを列挙することができる。 	<p>情報Bの(1)アの導入授業を体験する。</p>	
3	<ul style="list-style-type: none"> 情報教育の到達目標が「情報」を身につけることと、上記の到達目標を達成するために、教材に様々な工夫がされていることとを説明できる。 	<p>前回体験した授業「合宿先での見方」の解説を行う。</p>	
4	<ul style="list-style-type: none"> 「情報B」の特徴として、単体のパソコンを用いた「問題解決」「情報A」「情報C」の比較を行うことができることとを説明できる。 「情報B」では、最終的に「情報技術」を用いることができるようになることとを説明できる。 「情報C」では、最終的に「情報技術」を用いることができるようになることとを説明できる。 	<p>前回体験した授業「合宿先での見方」の解説を行う。</p>	
5	<ul style="list-style-type: none"> 高校教諭として、年間を通して授業をするなど、様々な課題があることを体験する。 授業に使う時間数はそれほど多くないこととを説明する。 計画的に授業をこなすこととを体験する。 	<p>年間指導計画の考え方を解説し、算させてみる。</p>	
6	<ul style="list-style-type: none"> 限られた時間数を、各単元の中でどのように振り分けるのかを体験する。 「情報B」の場合には、全時間の1/3を実際に用いることができる。 各単元で用いることができる。 	<p>指導計画の考え方を解説し、実際に作成させる。</p>	
7	<ul style="list-style-type: none"> 説明された学習指導案の書き方に沿って、指導案を作成することができる。 	<p>学習指導案の作成の仕方について解説し、実際に作成させる。</p>	

回	到達目標	授業内容	備考
9	<ul style="list-style-type: none"> 「情報B」では、題材に応じて具体的な「見方・考え方」を指導することが重要であることとを説明できる。 これらの開発の中で、様々な形で使われていくことを自分で整理し、納得する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「情報B」の学習目標の考え方を解説する。 数値、文字、画像、音のデジタル化を行う際に、「見方・考え方」が用いられることを調べる。 一覧表を作成し、まとめる。 	この回だけで終わらないので、授業時間外に十分に準備しておくこと。
10	<ul style="list-style-type: none"> 授業の到達目標として、「見方・考え方」に沿ったものを挙げられる。 導入実習の題材として適切なものを発想する。 わからないことがあれば、その場で質問し、解決する。 模擬授業の学習指導案を作成し、必要ないことを準備する。 わからないことがあれば、その場で質問し、解決できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 模擬授業の学習指導案の作成(実習)。 	この回だけで終わらないので、授業時間外に十分に準備しておくこと。
11	<ul style="list-style-type: none"> 用意してきた授業を実施できる。 他の学生が実施した点について、(感想ではなく)よい点、悪い点、意見を述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 模擬授業の実施 	この回だけで終わらないので、授業時間外に十分に準備しておくこと。
12	<ul style="list-style-type: none"> 用意してきた授業を実施できる。 他の学生が実施した点について、(感想ではなく)よい点、悪い点、意見を述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 模擬授業の実施 	
13	<ul style="list-style-type: none"> 用意してきた授業を実施できる。 他の学生が実施した点について、(感想ではなく)よい点、悪い点、意見を述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 模擬授業の実施 	
14	<ul style="list-style-type: none"> 用意してきた授業を実施できる。 他の学生が実施した点について、(感想ではなく)よい点、悪い点、意見を述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 模擬授業の実施 	
15	<ul style="list-style-type: none"> (予備日) 	<ul style="list-style-type: none"> (予備日) 	

全学共通教育科目 学生による授業アンケート

教育評価・改善部門 江本理恵

大学教育センターが発足した平成16年から、全学共通教育に関する授業アンケートは大学教育総合センターの教育評価・改善部門が担当することとなりました。また、それに伴い、この学生による授業アンケートに基づいて優秀授業を選出し、表彰しています。

大学における授業アンケートを実施している大学は、国公私立大学の約71%（大学における教育内容等の改革状況について、文部科学省、2007）に上りますが、実施したアンケートの活用方法については、どの大学においても試行錯誤を続けているのが現状だと考えられます。

本学においても、

- * 授業アンケートに基づく優秀授業の選出、表彰
- * 優秀授業のビデオ撮影・Web上での公開
- * 優秀授業の公開（授業公開を含）

などの取り組みを行っていますが、万全とはとうてい言えません。特に、授業アンケートの結果にあまり良くない項目がある、などの授業実施上の教員の悩みに応える対応策は、現時点では0に近い状況です。もちろん、センターに相談にきていただければ解決策を一緒に考えられるのですが、なかなかそのような時間もとれないでしょう。教育評価・改善部門としては、先生方の「困っていること」「悩んでいること」に応えられる方策の検討は続けなければなりません。限られた予算、人員では難しい面も多いのですが、e-Learningシステムを活用するなど、何らかの方策を実現させたいと思います。

岩手大学のアンケートの特徴は、「手作り」で行われているところです。多くの大学では業者に委託し、コストをかけて実施しているところを、アンケート用紙の作成、集計等、すべて学内で行っています。手間はかかりますが、コストは削減できますし、何よりもアンケート項目の自由度の高さが魅力です。

「アンケート用紙」を使って学期末に行うアンケートには、学生自身に自分の学習について振り返らせる効果がある、と言われていています。授業中に行う授業アンケートであるかぎり、学生に対する「学習効果」が必要です。そこで、アンケート項目にも少しずつ学習を振り返らせる項目を入れるなどの改善を行っています。自由記述欄に書かれる教員への誹謗・中傷とも思われる文章を減らすために、「自由に」ではなく「理由」を書かせる方向に変更を加えたりもしています。

目標は「教員が元気になる授業アンケート」です。まだまだ目標達成にはほど遠い状態ですが、今後もより良い授業アンケートの実施に努力したいと思います。

掲載一覧

- * 平成 16 年度後期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育科目優秀授業一覧
- * 平成 17 年度前期 授業アンケート用紙
- * 平成 17 年度前期 授業アンケート 授業科目区分別平均評点・学生の学習状況について
- * 平成 17 年度後期 授業アンケート用紙
- * 平成 17 年度後期 授業アンケート 授業科目区分別平均評点・学生の学習状況について
- * 平成 17 年度 前期・後期 授業アンケート実施率
- * 平成 17 年度 授業アンケート結果個人集計表例
- * 平成 17 年度 優秀授業選出基準
- * 平成 17 年度前期・後期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育科目優秀授業一覧
- * 平成 18 年度前期 授業アンケート用紙
- * 平成 18 年度前期 授業アンケート 授業科目区分別平均評点・学生の学習状況について
- * 平成 18 年度後期 授業アンケート用紙
- * 平成 18 年度後期 授業アンケート 授業科目区分別平均一覧
- * 平成 18 年度 前期・後期 授業アンケート実施率
- * 平成 18 年度 授業アンケート結果個人集計表例
- * 平成 18 年度 優秀授業選出基準
- * 平成 18 年度前期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育科目優秀授業一覧

平成16年度後期 学生による授業アンケートに基づく 全学共通教育科目優秀授業一覧

【人間と文化分科会】

倫理学の世界 小林 睦
 適応の理解 佐藤 正恵
 欧米の文学 長野 俊一

【人間と社会分科会】

憲法 内田 浩
 社会的人間論 塚本 善弘

【人間と自然分科会】

自然と数理 飯田 雅人
 生命のしくみ 牧 陽之助

【総合科目分科会】

現代職業選択論 田口 典男

【環境教育科目分科会】

農業・生命と環境 青井 俊樹

【外国語科目分科会】

英語 B Ahdar, Elvis
 英語 B Blair, Benjamin Reed
 英語 B Ishikawa, Peggy Marri
 英語 A Hall, James
 英語 B Ahdar, Elvis
 英語 B Blair, Benjamin Reed
 英語 B Ishikawa, Peggy Marri
 英語 B Hopson, Nathan
 英語 B Short, Kevin Anthony

【外国語科目分科会】

初級フランス語（発展）加藤 隆
 中級ロシア語 長野 俊一
 初級中国語（発展）吉野 寧恵
 中級韓国語 楊 政亜

【健康・スポーツ科目分科会】

バドミントン 吉田 実
 サッカー 佐々木 博之

【情報科目分科会】

情報基礎 今井 潤



平成17年7月19日 全学共通教育優秀授業表彰式にて

(平成17年度 前期 共通)

きみたちの声を授業に反映させませんか！?

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について回答してもらうことを通じて、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っています。ご協力をお願いします。

なお、このアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク (○, ⊙など) を、鉛筆で黒く塗りつぶして (●) ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

(2) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶしてください。

- ① 人文社会科学部
② 教育学部
③ 工学部
④ 農学部
(A) 平成17年度入学
(B) 平成16年度入学
(C) 平成15年度入学
(D) それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- (A) 必修科目だから
(B) 単位がとりやすそうだったから
(C) 自分の専門と違う分野だから
(D) 先輩などからすすめられたから
(E) 他にやりたい科目がなかったから
(F) シラバスを読んで興味を持ったから
(G) 友達が選択するから
(H) 自分の専門に関係が深そうだから
(I) 他の授業で人数制限を受けたから
(J) その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数 (1) 0回 (2) 1回 (3) 2回 (4) 3回以上
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか (1) 読んだ
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか (1) 理解できた (2) たいたい理解できた (3) あまり理解できなかった (4) 理解できなかった
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか? (1) 1時間以下 (2) 1~2時間 (3) 2~3時間 (4) 3~4時間 (5) 4時間以上
e. レスポンスカードに疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか? (1) 書き込んだ (2) そこそこ書き込んだ (3) あまり書きなかった (4) 書かなかった (5) 機会がなかった
f. あなたがレスポンスカードに書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか? (1) そう思う (2) すこし思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない (5) 機会がなかった
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか? (1) そう思う (2) すこし思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない

裏面に続く

(平成17年度 前期 共通)

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。

番号(1~4)を必ずマーク(●)してください。

- ① そう思う
② すこし思う
③ あまりそう思わない
④ まったくそう思わない

- a. 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明したと思いますか? (1) (2) (3) (4)
b. 授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものだったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明したと思いますか? (1) (2) (3) (4)
d. 教員が授業中に行った説明や指示はわかりやすいものでしたか? (1) (2) (3) (4)
e. 板書、ビデオ、プロジェクター等は、見やすかったですか? (1) (2) (3) (4)
f. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか? (1) (2) (3) (4)
g. 教員は、今後の授業内容や進み方について、わかりやすく説明していましたか? (1) (2) (3) (4)
h. 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示していましたか? (1) (2) (3) (4)
i. 教員は、毎回の授業中で、その回で学ぶべきポイントを示していましたか? (1) (2) (3) (4)
j. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか? (1) (2) (3) (4)
k. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
l. 教員は、レスポンスカードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
m. 授業開始時間・終了時間も守られていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
n. 授業はよく準備されていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
o. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? (1) (2) (3) (4)
p. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫して、問題を解決する機会があったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
q. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか? (1) (2) (3) (4)
r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つめることの大切さに気づく機会があったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
s. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか? (1) (2) (3) (4)
t. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? (1) (2) (3) (4)
u. 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか? (1) (2) (3) (4)

E この授業に関して、疑問に思ったこと、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、学習を振り返って感じたことなど、今感じていることを自由に記述してください。

記述欄

ご協力ありがとうございました

きみたちの声を授業に反映させませんか！?

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について回答してもらうことを通じて、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っています。ご協力をお願いします。なお、このアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク (○, ⊙など) を、鉛筆で黒く塗りつぶして (●) ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

(2) 所属学部・入年度について、該当するマークを塗りつぶしてして下さい。

- (1) 人文社会科学部
- (2) 教育学部
- (3) 工学部
- (4) 農学部
- (A) 平成17年度入学
- (B) 平成16年度入学
- (C) 平成15年度入学
- (D) それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- (A) 必修科目だから
- (B) 単位がとりやすそうだったから
- (C) 自分の専門と違う分野だから
- (D) 先輩などからすすめられたから
- (E) 他にどの科目もなかったから
- (F) シラバスを読んで興味を持ったから
- (G) 友達が選択するから
- (H) 自分の専門に関係が深そうだから
- (I) 他の授業で人数制限を受けたから
- (J) その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数 (1) 0回 (2) 1回 (3) 2回 (4) 3回以上
- b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか (1) 読んだ (2) 読まなかった
- c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか (1) 理解できた (2) たいたい理解できた (3) あまり理解できなかった (4) 理解できなかった
- d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか? (1) 1時間以下 (2) 1~2時間 (3) 2~3時間 (4) 3~4時間 (5) 4時間以上
- e. レスポンスカードに疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか? (1) 書き込んだ (2) そこそこ書き込んだ (3) あまり書かなかった (4) 書かなかった (5) 機会がなかった
- f. あなたがレスポンスカードに書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
- g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか? (1) そう思う (2) すこそう思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない (5) 機会がなかった
- h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
- i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか? (1) そう思う (2) すこそう思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない

裏面に続く

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号を塗りつぶして下さい。

番号 (①~④) を鉛筆で黒く塗りつぶして (●) ください。

- ① そう思う
- ② すこそう思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ まったくそう思わない

- a. 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明していましたか? (1) (2) (3) (4)
- b. 授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものだったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していましたか? (1) (2) (3) (4)
- d. 教員の説明や指示はわかりやすいものだったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- e. 教員が、板書、プロジェクター等で提示した文字や図などは、見やすかったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- f. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか? (1) (2) (3) (4)
- g. 教員は、今後の授業内容や進み方についてわかりやすく説明していましたか? (1) (2) (3) (4)
- h. 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすい指示を出していましたか? (1) (2) (3) (4)
- i. 教員は、毎回の授業中で、その回で学ぶべきポイントを示していましたか? (1) (2) (3) (4)
- j. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか? (1) (2) (3) (4)
- k. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- l. 教員は、レスポンスカードやテスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- m. 授業開始時間・終了時間も守られていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- n. 授業はよく準備されていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- o. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? (1) (2) (3) (4)
- p. この授業及びその学習で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- q. この授業及びその学習で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- r. 結果として、この授業を履修してよかったと思いますか? (1) (2) (3) (4)

E 外国語の履修についての希望を調べます。以下の項目について、該当する番号を塗りつぶしてください。

- a. 外国語を履修する場合、1カ国語(8単位)か2カ国語(各4単位)か、どちらを希望しますか? (1) 1カ国語 (2) 2カ国語
- b. 外国語を2カ国語を履修するのであれば、何語と何語を履修しますか? (JIS配列) (1) ドイツ語 (2) フランス語 (3) ロシア語 (4) 英語 (5) 韓国語 (6) 中国語 (2つ選択)
- c. 外国語の履修が1カ国語だけだったら、何語を履修しますか? (JIS配列) (1) ドイツ語 (2) フランス語 (3) ロシア語 (4) 英語 (5) 韓国語 (6) 中国語 (1つ選択)

F この授業に関して、疑問に思ったこと、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、学習を振り返って感じたことなど、今感じていることを自由に記述してください。

(平成17年度 前期 健康・スポーツ)

きみたちの声を授業に反映させませんか！?

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について評価してもらうことを通して、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っています。ご協力をお願いします。なお、このアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク (○、△など) を、鉛筆で黒く塗りつぶして (●) ください。

- A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。 (2) 履修したスポーツの種目名を記入してください。 (3) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

B この種目を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- A 楽しそうな種目だったから B 経験のない種目だったから C あまり動かなくても好きな種目だったから D 他にやりたい種目がなかったから E 先輩などからすすめられたから F 友達が選択するから G 他の種目で人数制限を受けたから H その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数は何回ですか? b. あなたが履修した種目は第一希望のものでしたか? c. あなたは、体を動かすことが好きな方だと思いますか? d. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? e. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか? f. 1回の授業に対し、平均してどのくらい、予習・復習などをしましたか? g. 体を動かすことの大切さについて、授業中に解説があったと思いますか? h. この授業における自分自身の学習状況は、満足できるものだと思いますか?

(平成17年度 前期 健康・スポーツ)

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。

該当する番号 (○~④) を鉛筆で塗りつぶして (●) してください。

- ① そう思う ② まあそう思う ③ あまりそう思わない ④ 全くそう思わない

- a. 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明していたと思いますか? b. 授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものでしたか? c. 成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明がありましたか? d. 安全に運動を行うための指導(準備運動、道具の使い方など)があったと思いますか? e. 教員の技能に関する指導はわかりやすかったですか? f. 教員は、今後の授業の計画や進め方について、わかりやすく説明していたと思いますか? g. 教員は、授業時間外にやるべきことを、わかりやすく説明していたと思いますか? h. 教員は、毎回、学生が学ぶべきポイントを示していましたか? i. 学生が授業に参加しやすくなるための働きかけがありましたか? j. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業中に対応をされていましたか? k. 授業開始時刻、終了時刻は守られていたと思いますか? l. 授業の準備はよくされていたと思いますか? m. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? n. この授業で学んだことは、あなたにとって役に立ちそうだと思いますか? o. この授業で学んだ種目を、もつとさらに続けたいと思いますか? p. 結果として、この種目を履修してよかったですか?

F この授業に関して、疑問点・印象に残った点・授業で改善すべき点・自らの学習を振り返って感じたこと・これからの自分の学習展望など、今感じていることを自由に記述してください。

記述欄

ご協力ありがとうございます

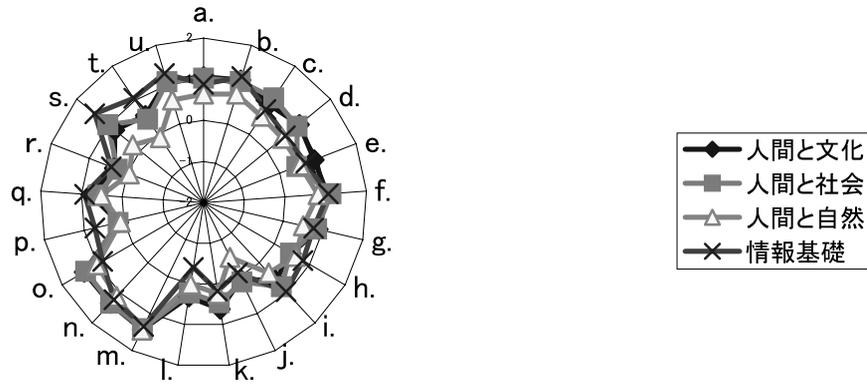
裏面に続く

参考:分科会別平均評点 :平成17年度前期

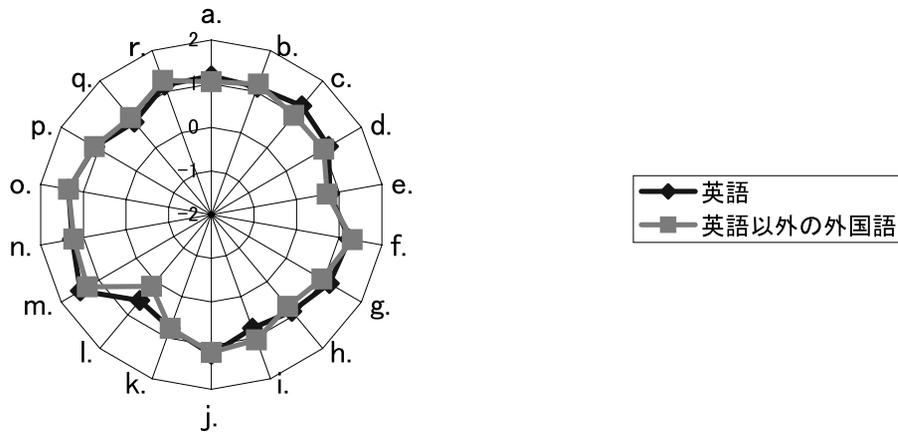
大学教育センター
教育評価・改善部門

参考までに、今回のアンケート集計結果より算出されたそれぞれの授業科目区分における「各項目の評点の平均」を以下に示します。

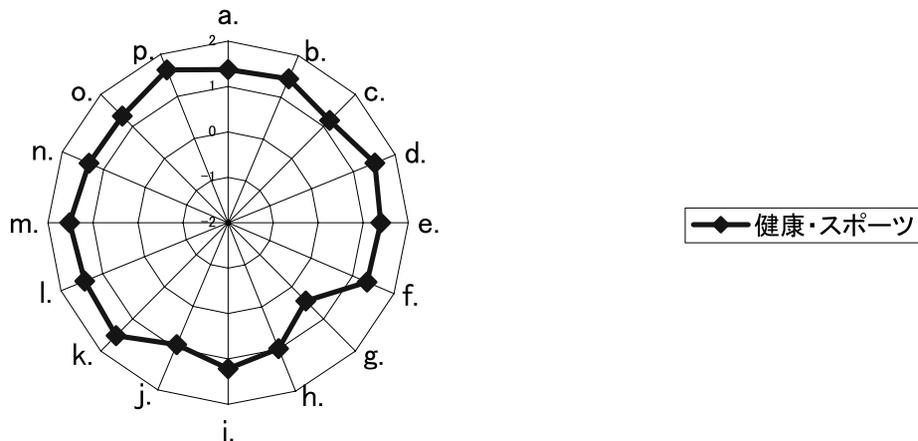
■授業科目区分:人間と文化, 人間と社会, 人間と自然, 情報科目



■授業科目区分:外国語科目(英語, 英語以外の外国語)



■授業科目区分:健康・スポーツ科目



参考：学生の学習状況について：平成17年度前期

大学教育センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介します。以下、これは、授業科目区分「人間と文化」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	94
単位がとりやすそうだったから	560
自分の専門分野と連つ分野だから	281
先輩などからすすめられたから	371
他にとりたい科目がなかったから	330
シラバスを読んで興味をもったから	1133
友達が選択するから	269
自分の専門に関係が深そうだから	194
他の授業で人数制限を受けたから	33
その他	81

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

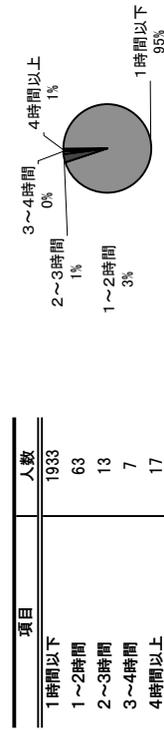
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	1667
読まない	309

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？



d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？



参考：学生の学習状況について

大学教育センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況について、いくつかのデータを紹介します。以下、これは、授業科目区分「人間と社会」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

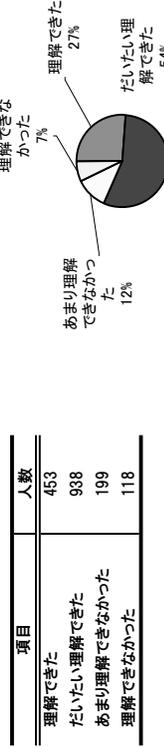
動機	選択した人数
必修科目だから	252
単位がとりやすそうだったから	453
自分の専門分野と連つ分野だから	264
先輩などからすすめられたから	150
他にとりたい科目がなかったから	320
シラバスを読んで興味をもったから	884
友達が選択するから	254
自分の専門に関係が深そうだから	197
他の授業で人数制限を受けたから	30
その他	90

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

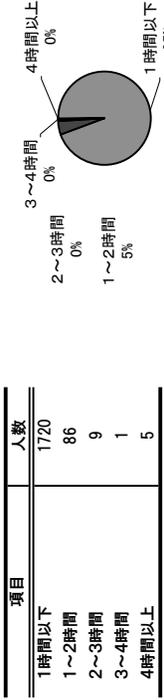
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	1485
読まない	290

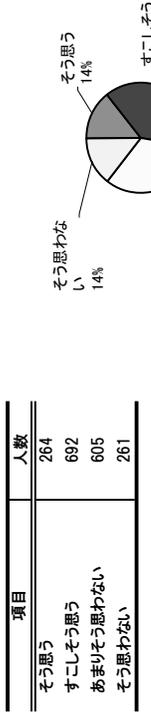
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？



d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？



参考：学生の学習状況について

大学教育センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況について、いくつかのデータを紹介します。以下、これは、授業科目区分「人間と自然」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	79
単位がとりやすそうだったから	289
自分の専門分野と連つ分野だから	89
先輩などからすすめられたから	176
他にとりたい科目がなかったから	239
シラバスを読んで興味をもったから	602
友達が選択するから	135
自分の専門に関係が深そうだから	102
他の授業で人数制限を受けたから	21
その他	43

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

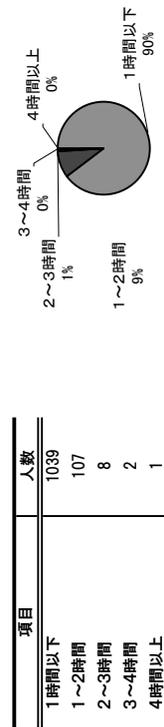
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	985
読まない	151

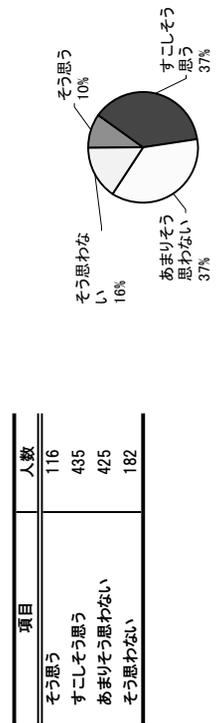
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？



d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか？



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？



参考：学生の学習状況について

大学教育センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況について、いくつかのデータを紹介します。以下、これは、授業科目区分「外国語科目(英語)」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	2244
単位がとりやすそうだったから	64
自分の専門分野と連つ分野だから	34
先輩などからすすめられたから	9
他にとりたい科目がなかったから	62
シラバスを読んで興味をもったから	80
友達が選択するから	23
自分の専門に関係が深そうだから	139
他の授業で人数制限を受けたから	9
その他	160

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

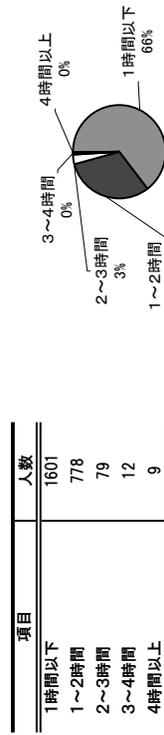
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	1550
読まない	891

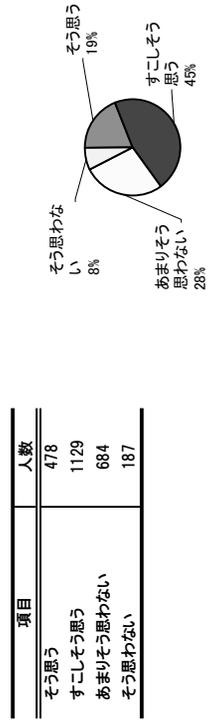
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？



d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか？



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？



参考：学生の学習状況について

大学教育センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況について、いくつかのデータを紹介します。
以下、これは、授業科目区分「外国語科目(英語以外)」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

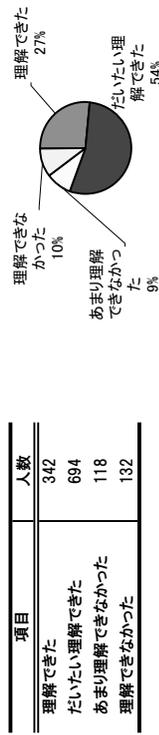
動機	選択した人数
必修科目だから	1051
単位がとりやすそうだったから	86
自分の専門分野と連つ分野だから	34
先輩などからすすめられたから	101
他にとりたい科目がなかったから	88
シラバスを読んで興味をもったから	283
友達が選択するから	37
自分の専門に関係が深そうだから	144
他の授業で人数制限を受けたから	51
その他	168

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

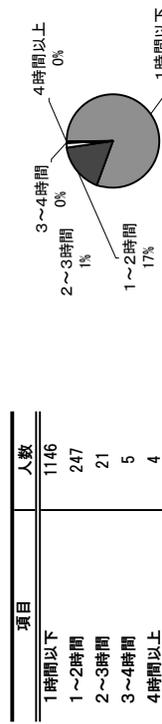
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	968
読まない	432

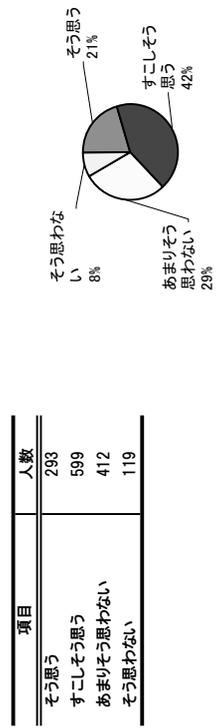
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？



d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？



参考：学生の学習状況について

大学教育センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況について、いくつかのデータを紹介します。
以下、これは、授業科目区分「情報科目」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

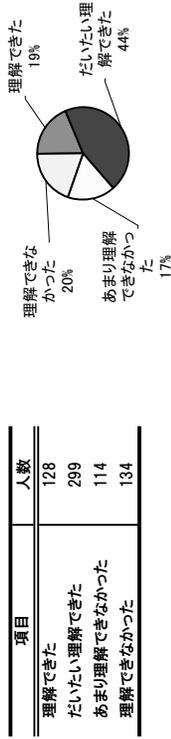
動機	選択した人数
必修科目だから	809
単位がとりやすそうだったから	28
自分の専門分野と連つ分野だから	6
先輩などからすすめられたから	5
他にとりたい科目がなかったから	3
シラバスを読んで興味をもったから	19
友達が選択するから	7
自分の専門に関係が深そうだから	26
他の授業で人数制限を受けたから	0
その他	9

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

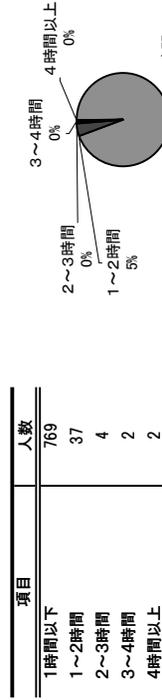
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	410
読まない	391

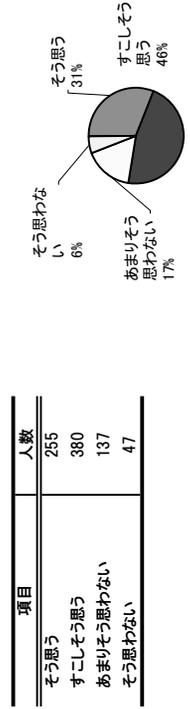
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？



d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？



きみたちの声を授業に反映させませんか！?

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について回答してもらい、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っています。ご協力をお願いします。なお、このアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク(○, ⊙など)を、鉛筆で黒く塗りつぶして(●)ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

(2) 所属学部・学年年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

- ① 人文社会科学部 (A) 平成17年度入学
- ② 教育学部 (B) 平成16年度入学
- ③ 工学部 (C) 平成15年度入学
- ④ 農学部 (D) それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- A 必修科目だから
- B 単位がとりやすそうだったから
- C 自分の専門と違う分野だから
- D 先輩などからすすめられたから
- E 他にどりたい科目がなかったから
- F シラバスを読んで興味を持ったから
- G 友達が選択するから
- H 自分の専門に関係が深そうだから
- I 他の授業で人数制限を受けたから
- J その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数 (1) 0回 (2) 1回 (3) 2回 (4) 3回以上
- b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか (1) 読んだ (2) 読まなかった
- c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか (1) 理解できた (2) だいたい理解できた (3) あまり理解できなかった (4) 理解できなかった
- d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか? (1) 1時間以下 (2) 1~2時間 (3) 2~3時間 (4) 3~4時間 (5) 4時間以上
- e. レスポンスカードに疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか? (1) 書き込んだ (2) そこそこ書き込んだ (3) あまり書きなかった (4) 書かなかった (5) 機会がなかった
- f. あなたがレスポンスカードに書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
- g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか? (1) そう思う (2) すこし思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない (5) 機会がなかった
- h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
- i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか? (1) そう思う (2) すこし思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない

裏面に続く

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。

番号(1~4)を必ずマーク(●)してください。

- ① そう思う
- ② すこし思う
- ③ あまりそう思わない
- ④ まったくそう思わない

- a. 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明したと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- b. 授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものだったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明したと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- d. 教員が授業中に行った説明や指示はわかりやすいものでしたか? (1) (2) (3) (4)
- e. 板書、ビデオ、プロジェクト等は、見やすかったですか? (1) (2) (3) (4)
- f. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか? (1) (2) (3) (4)
- g. 教員は、今後の授業内容や進み方について、わかりやすく説明していましたか? (1) (2) (3) (4)
- h. 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示していましたか? (1) (2) (3) (4)
- i. 教員は、毎回の授業中で、その回で学ぶべきポイントを示していましたか? (1) (2) (3) (4)
- j. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか? (1) (2) (3) (4)
- k. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- l. 教員は、レスポンスカードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- m. 授業開始時間・終了時間も守られていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- n. 授業はよく準備されていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- o. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? (1) (2) (3) (4)
- p. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫して、問題を解決する機会があったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- q. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか? (1) (2) (3) (4)
- r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つめることの大切さに気づく機会があったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- s. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- t. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- u. 結果として、この授業を履修してよかったですか? (1) (2) (3) (4)

E この授業に関して、疑問に思ったこと、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、学習を振り返って感じたことなど、今感じていることを自由に記述してください。

ご協力ありがとうございました

(平成17年度 後期 外国語)

きみたちの声を授業に反映させませんか！?

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について回答してもらうことを通じて、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っています。ご協力をお願いします。なお、このアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク (○, ⊙など) を、鉛筆で黒く塗りつぶして (●) ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

(2) 所属学部・入年度について、該当するマークを塗りつぶして下さい。

- 所属学部: 人文社会科学部, 教育学部, 工学部, 農学部
入年度: 平成17年度入学, 平成16年度入学, 平成15年度入学, それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- 動機: 必修科目だから, シラバスを読んで興味を持ったから, 単位がとりやすそうだったから, 友達が選択するから, 自分の専門と違う分野だから, 自分の専門に關係が深そうだから, 先の授業で人数制限を受けたから, 先輩などからすすめられたから, 他にとりたい科目がなかったから, その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- 事項: あなたがこの授業を休んだ回数, この科目を履修する前にシラバスを読みましたか, シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか, 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか, レスポンスカードに疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか, あなたがレスポンスカードに書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか, 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか, あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか, この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか

(平成17年度 後期 外国語)

- 回答: ① そう思う, ② すこし思う, ③ あまりそう思わない, ④ まったくそう思わない

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号を塗りつぶして下さい。

番号 (①~④) を鉛筆で黒く塗りつぶして (●) ください。

- 質問: ① 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明していませんか? ② 授業の内容は、授業の目標達成に役立っているものだったと思いますか? ③ 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していませんか? ④ 教員の説明や指示はわかりやすいものだったと思いますか? ⑤ 教員が、板書、プロジェクト等で提示した文字や図などは、見やすかったと思いますか? ⑥ 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか? ⑦ 教員は、今後の授業内容や進み方についてわかりやすく説明していませんか? ⑧ 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすい指示を出していませんか? ⑨ 教員は、毎回の授業中で、その回で学ぶべきポイントを示していませんか? ⑩ 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか? ⑪ 教員は、学生の疑問点や意図をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか? ⑫ 教員は、レスポンスカードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか? ⑬ 授業開始時間、終了時間も守られていたと思いますか? ⑭ 授業はよく準備されていたと思いますか? ⑮ 授業に対する教員の熱意を感じましたか? ⑯ この授業及びその学習で学んだことは、あなたにとつて、今後役に立ちそうだと思いますか? ⑰ この授業及びその学習で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? ⑱ 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか?

E 外国語の履修についての希望を調べます。以下の項目について、該当する番号を塗りつぶしてください。

- 希望: ① 外国語を履修する場合、1カ国語(8単位)か2カ国語(各4単位)か、どちらを希望しますか? ② 外国語を2カ国語を履修するのであれば、何語と何語を履修しますか? (JIS配列) ③ ドイツ語 ④ フランス語 ⑤ ロシア語 ⑥ 英語 ⑦ 韓国語 ⑧ 中国語 (2つ選択) ⑨ 外国語の履修が1カ国語だけだったら、何語を履修しますか? (JIS配列) ⑩ ドイツ語 ⑪ フランス語 ⑫ ロシア語 ⑬ 英語 ⑭ 韓国語 ⑮ 中国語 (1つ選択)

F この授業に関して、疑問に思ったこと、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、学習を振り返って感じたことなど、今感じていることを自由に記述してください。

記述欄 (ダッシュ線内)

ご協力ありがとうございました

きみたちの声を授業に反映させませんか！?

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について評価してもらうことを通じて、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っています。ご協力をお願いします。なお、このアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク(○、◎など)を、鉛筆で黒く塗りつぶして(●)ください。

- A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。 (2) 履修したスポーツの種目名を記入してください。 (3) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

B この種目を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- A 楽しそうな種目だったから B 経験のない種目だったから C あまり動かなくても好きな種目だったから D 他にやりたい種目がなかったから E 先輩などからすすめられたから F 友達が選択するから G 他の種目で人数制限を受けたから H その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数は何回ですか? (1) 0回 (2) 1回 (3) 2回 (4) 3回以上 b. あなたが履修した種目は第一希望のものでしたか? (1) はい (2) いいえ c. あなたは、体を動かすことが好きな方だと思いますか? (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない d. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? (1) 読んだ (2) 読まなかった e. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか? (1) 理解できた (2) 少し理解できた (3) あまり理解できなかった f. 1回の授業に対し、平均してどのぐらい、予習・復習などをしましたか? (1) 1時間以下 (2) 1~2時間 (3) 2~3時間 (4) 3~4時間 (5) 4時間以上 g. 体を動かすことの大切さについて、授業中に解説があったと思いますか? (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) 全くそう思わない h. この授業における自分自身の学習状況は、満足できるものだと思いますか? (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) 全くそう思わない

裏面に続く

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。

該当する番号(○~◎)を鉛筆で塗りつぶして(●)してください。

- ① そう思う ② まあそう思う ③ あまりそう思わない ④ 全くそう思わない

- a. 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明していたと思いますか? b. 授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものでしたか? c. 成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明がありましたか? d. 安全に運動を行うための指導(準備運動、道具の使い方など)があったと思いますか? e. 教員の技能に関する指導はわかりやすかったですか? f. 教員は、今後の授業の計画や進め方について、わかりやすく説明していたと思いますか? g. 教員は、授業時間外にやるべきことを、わかりやすく説明していたと思いますか? h. 教員は、毎回、学生が学ぶべきポイントを示していましたか? i. 学生が授業に参加しやすくなるための働きかけがありましたか? j. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業中に対応をいたしましたか? k. 授業開始時刻、終了時刻は守られていたと思いますか? l. 授業の準備はよくされていたと思いますか? m. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? n. この授業で学んだことは、あなたにとって役に立ちそうだと思いますか? o. この授業で学んだ種目を、もつとさらに続けたいと思いますか? p. 結果として、この種目を履修してよかったですか?

F この授業に関して、疑問点・印象に残った点・授業で改善すべき点・自らの学習を振り返って感じたこと・これからの自分の学習展望など、今感じていることを自由に記述してください。

記述欄

ご協力ありがとうございます

(平成17年度 後期 オムニバス)

きみたちの声を授業に反映させませんか！

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について回答してもらい、そのアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク (○, ⊙など) を、鉛筆で黒く塗りつぶして (●) ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

(2) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

- 所属学部: 人文社会科学部, 教育学部, 工学部, 農学部
入学年度: 平成17年度入学, 平成16年度入学, 平成15年度入学, それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- 動機: 必修科目だから, 単位がとりやすそうだったから, 自分が専門と違う分野だから, 先輩などからすすめられたから, シラバスを読んだから, 友達が選択するから, 自分の専門に関係が深そうだから, 他の授業で人数制限を受けたから, その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- 事項: あなたがこの授業を休んだ回数, この科目を履修する前にシラバスを読みましたか, シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか, 平均して1回の授業に対してどのぐらいの予習・復習をしましたか, レスポンスカードに疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか, あなたがレスポンスカードに書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか, 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか, あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか, この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか

(平成17年度 後期 オムニバス)

D この授業に全般に関する質問です。下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。

- 回答段階: ① そう思う, ② すこしそう思う, ③ あまりそう思わない, ④ まったくそう思わない

- 質問: a. この授業全体の目標について、説明があったと思いますか? b. 授業の内容は、授業全体の目標達成に役に立つものだったと思いますか? c. この授業の成績評価方法や基準などについて、説明があったと思いますか? d. 各回の担当教員は、自分の授業において学べきポイントを示していましたか? e. この授業では、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示がされましたか? f. 各回の担当教員は、前後の授業内容との関連性や今後の進み方について、わかりやすく説明していましたか? g. 授業全体として、共通のテーマがあったと思いますか? h. 今回の授業で、復教の担当教員からの講義を受けられたことはよかったですか? i. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫して、問題を解決する機会がありましたか? j. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか? k. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけたことの大切さに気づく機会があったと思いますか? l. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか? m. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? n. 結果として、この授業を履修してよかったですか?

E それぞれの担当教員が行った授業に関する質問です。各回(各担当教員)の授業の中で、特に印象に残ったことなどがあれば、できるだけ具体的に記述してください。

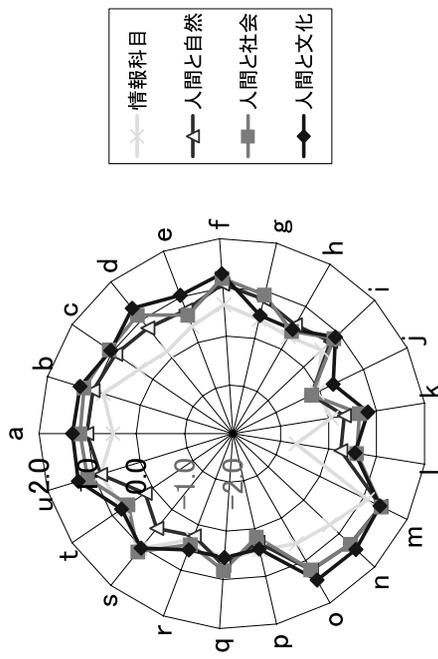
3つの空欄ボックス: テーマまたは担当教員名: _____

参考：分科会別平均評点：平成17年度後期

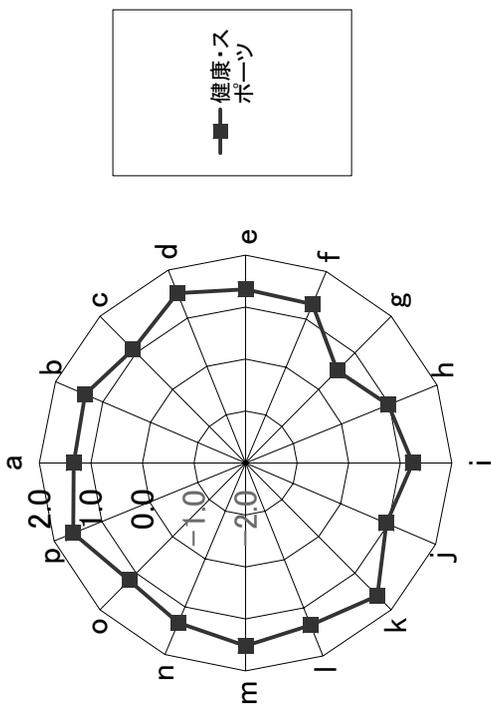
(H17後期)
 大学教育総合センター
 教育評価・改善部門

参考までに、今回のアンケート集計結果より算出されたそれぞれの授業科目区分における「各項目の評点の平均」を以下に示します。

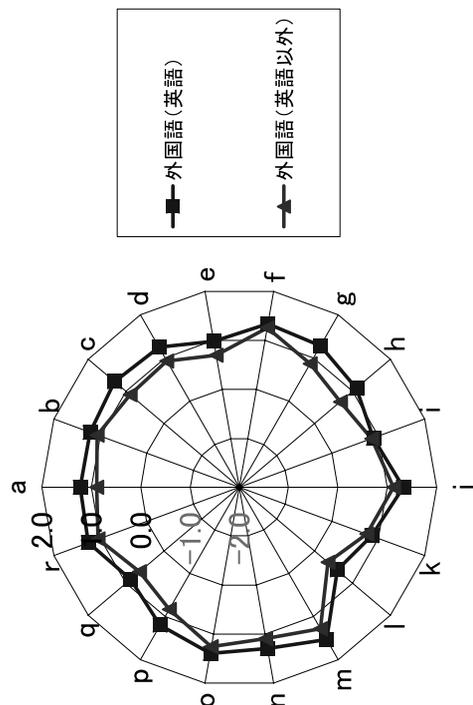
■授業科目区分：人間と文化、人間と社会、人間と自然、情報科目



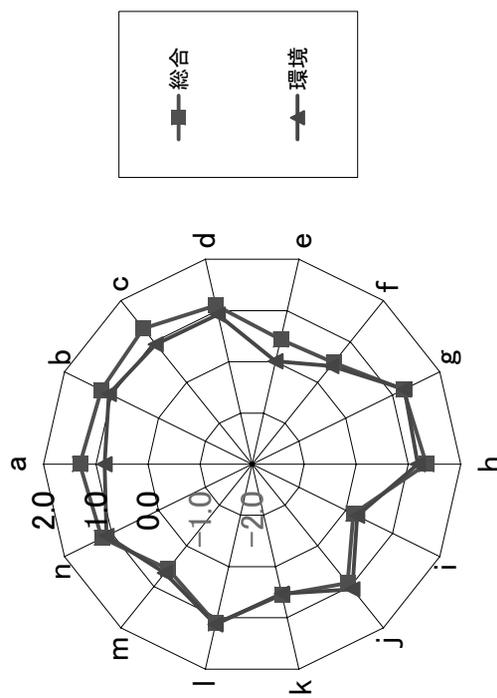
■授業科目区分：健康・スポーツ科目



■授業科目区分：外国語科目(英語, 英語以外の外国語)



■授業科目区分：総合科目・環境教育科目



参考：学生の学習状況について：平成17年度後期

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。
以下、これは、授業科目区分「人間と文化」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	58
単位がとりやすそうだったから	378
自分の専門分野と違う分野だから	199
先輩などからすすめられたから	125
他にやりたい科目がなかったから	193
シラバスを読んで興味をもったから	806
友達が選択するから	153
自分の専門に関係が深そうだから	80
他の授業で人数制限を受けたから	8
その他	35

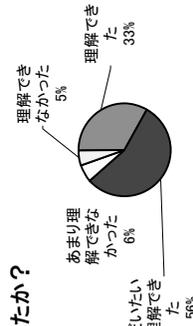
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	1126
読まない	175

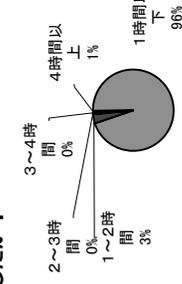
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	420
だいたい理解できた	704
あまり理解できなかった	78
理解できなかった	67



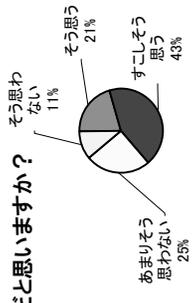
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	1266
1～2時間	45
2～3時間	5
3～4時間	5
4時間以上	10



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	276
すこし思う	566
あまりそう思わない	338
そう思わない	147



参考：学生の学習状況について

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。
以下、これは、授業科目区分「人間と社会」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	181
単位がとりやすそうだったから	374
自分の専門分野と違う分野だから	195
先輩などからすすめられたから	73
他にやりたい科目がなかったから	293
シラバスを読んで興味をもったから	811
友達が選択するから	213
自分の専門に関係が深そうだから	110
他の授業で人数制限を受けたから	12
その他	42

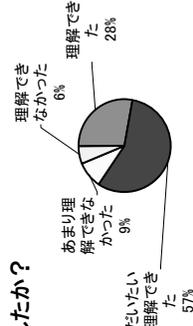
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	1300
読まない	214

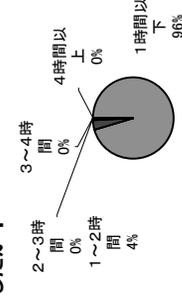
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	411
だいたい理解できた	827
あまり理解できなかった	137
理解できなかった	89



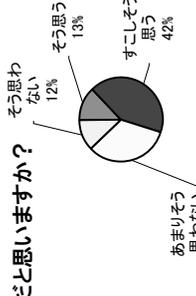
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	1471
1～2時間	60
2～3時間	6
3～4時間	0
4時間以上	1



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	200
すこし思う	641
あまりそう思わない	507
そう思わない	188



参考：学生の学習状況について

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。

以下、これは、授業科目区分「人間と自然」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	69
単位がとりやすそうだったから	297
自分の専門分野と違う分野だから	71
先輩などからすすめられたから	114
他にやりたい科目がなかったから	179
シラバスを読んで興味をもったから	536
友達が選択するから	114
自分の専門に関係が深そうだから	56
他の授業で人数制限を受けたから	2
その他	30

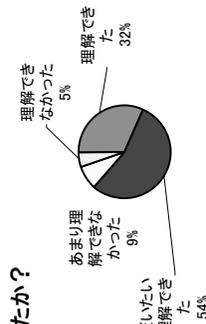
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	880
読まない	106

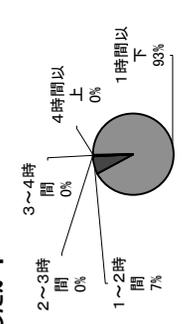
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	307
だいたい理解できた	528
あまり理解できなかった	85
理解できなかった	48



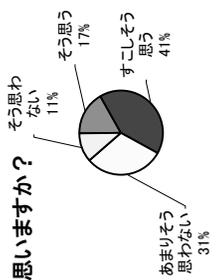
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	919
1～2時間	72
2～3時間	1
3～4時間	2
4時間以上	3



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	169
すこし思う	408
あまりそう思わない	308
そう思わない	114



参考：学生の学習状況について

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。

以下、これは、授業科目区分「総合科目」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	37
単位がとりやすそうだったから	213
自分の専門分野と違う分野だから	49
先輩などからすすめられたから	54
他にやりたい科目がなかったから	58
シラバスを読んで興味をもったから	256
友達が選択するから	86
自分の専門に関係が深そうだから	31
他の授業で人数制限を受けたから	4
その他	15

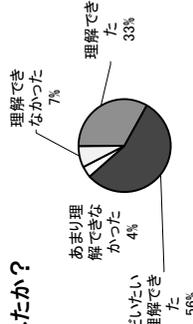
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	363
読まない	103

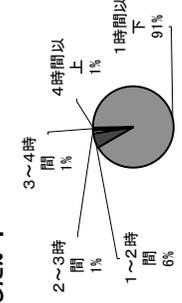
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	147
だいたい理解できた	246
あまり理解できなかった	18
理解できなかった	33



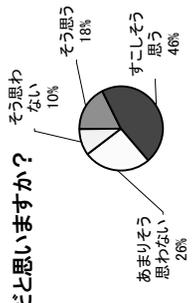
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	449
1～2時間	28
2～3時間	5
3～4時間	3
4時間以上	3



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	87
すこし思う	221
あまりそう思わない	129
そう思わない	50



参考：学生の学習状況について

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。

以下、これは、授業科目区分「環境教育科目」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	670
単位がとりやすそうだったから	96
自分の専門分野と違う分野だから	43
先輩などからすすめられたから	63
他にやりたい科目がなかったから	42
シラバスを読んで興味をもったから	316
友達が選択するから	62
自分の専門に関係が深そうだから	106
他の授業で人数制限を受けたから	12
その他	9

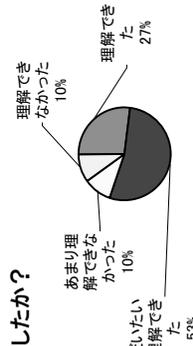
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	701
読まない	201

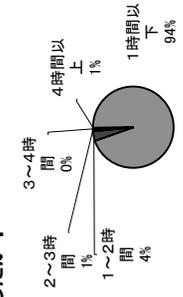
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	236
だいたい理解できた	464
あまり理解できなかった	87
理解できなかった	87



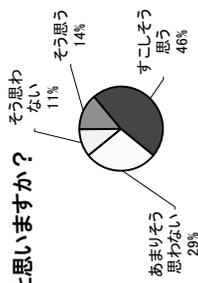
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	886
1～2時間	34
2～3時間	6
3～4時間	3
4時間以上	5



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	132
すこし思う	434
あまりそう思わない	268
そう思わない	101



参考：学生の学習状況について

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。

以下、これは、授業科目区分「外国語(英語)」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	2140
単位がとりやすそうだったから	41
自分の専門分野と違う分野だから	21
先輩などからすすめられたから	2
他にやりたい科目がなかったから	33
シラバスを読んで興味をもったから	53
友達が選択するから	15
自分の専門に関係が深そうだから	59
他の授業で人数制限を受けたから	4
その他	63

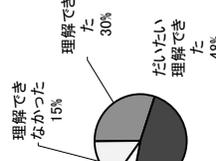
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	1340
読まない	850

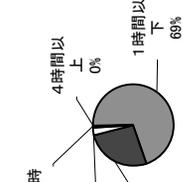
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	560
だいたい理解できた	892
あまり理解できなかった	139
理解できなかった	278



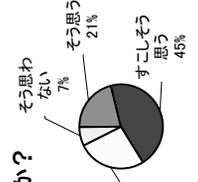
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	1550
1～2時間	592
2～3時間	68
3～4時間	15
4時間以上	5



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	474
すこし思う	993
あまりそう思わない	602
そう思わない	161



参考：学生の学習状況について

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。

以下、これは、授業科目区分「外国語(英語以外)」に属する授業科目の結果を集計したものです

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	1064
単位がとりやすそうだったから	121
自分の専門分野と違う分野だから	32
先輩などからすすめられたから	59
他にやりたい科目がなかったから	79
シラバスを読んで興味をもったから	249
友達が選択するから	73
自分の専門に関係が深そうだから	76
他の授業で人数制限を受けたから	53
その他	69

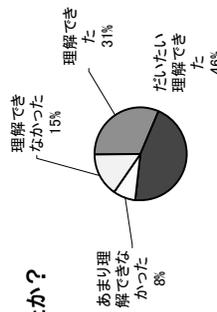
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	918
読まない	441

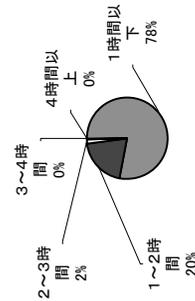
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	395
だいたい理解できた	569
あまり理解できなかった	102
理解できなかった	192



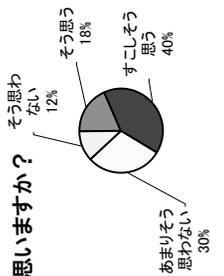
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	1080
1～2時間	280
2～3時間	23
3～4時間	2
4時間以上	3



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	256
すこし思う	551
あまりそう思わない	413
そう思わない	165



参考：学生の学習状況について

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。

以下、これは、授業科目区分「情報科目」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数
必修科目だから	235
単位がとりやすそうだったから	2
自分の専門分野と違う分野だから	2
先輩などからすすめられたから	0
他にやりたい科目がなかったから	2
シラバスを読んで興味をもったから	3
友達が選択するから	4
自分の専門に関係が深そうだから	7
他の授業で人数制限を受けたから	0
その他	0

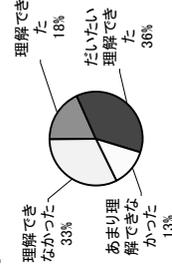
◆設問Cの項目b, c, d, jについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数
読んだ	104
読まない	122

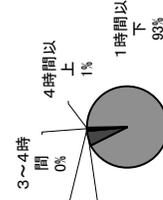
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数
理解できた	38
だいたい理解できた	74
あまり理解できなかった	27
理解できなかった	67



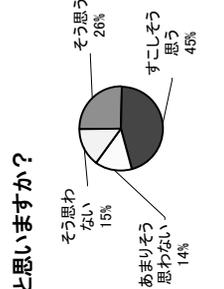
d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数
1時間以下	216
1～2時間	14
2～3時間	1
3～4時間	0
4時間以上	2



i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数
そう思う	60
すこし思う	106
あまりそう思わない	34
そう思わない	35



平成 17 年度前期 全学共通教育授業科目

学生による授業アンケート 実施率

授業科目区分	対象科目数	実施科目数	実施率 (%)	回答者数合計 (人)
人間と文化	24	24	100	2011
人間と社会	27	27	100	1902
人間と自然	16	16	100	1089
情報	17	17	100	821
外国語 (英語)	66	66	100	2347
外国語 (英語以外)	49	47	95.9	1378
健康・スポーツ	40	40	100	1135
合計	239	237	99.2	10683

平成 17 年度前期 全学共通教育授業科目

学生による授業アンケート 実施率

授業科目区分	対象科目数	実施科目数	実施率 (%)	回答者数合計 (人)
人間と文化	24	23	95.8	1336
人間と社会	18	18	100	1600
人間と自然	18	18	100	1005
情報	5	5	100	236
外国語 (英語)	66	64	97.0	2238
外国語 (英語以外)	53	48	90.6	1389
総合	5	5	100	491
環境教育	8	8	100	938
健康・スポーツ	36	36	100	951
合計	233	225	96.6	10184

全学共通教育授業アンケート 個人集計別

(平成17年度 後期 外国語:英語)

大学教育センター

授業コード	時間割コード
担当教員	教員名 先生
科目名	科目名
受講者数	32 名
回収枚数	25 枚

□の中の数字は回答者数です。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照) □

(2) 所属学部・入年度について、該当するマークを塗りつぶして下さい。

0	人文社会科学部	23	平成17年度入学
25	教育学部	0	平成16年度入学
0	工学部	0	平成15年度入学
0	農学部	0	それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

25	必修科目だから	0	シラバスを読んで興味を持ったから
0	単位がとりやすそうだったから	0	友達が選択するから
0	自分の専門と連う分野だから	1	自分の専門に関係が深そうだから
0	先輩などからすすめられたから	1	他の授業で人数制限を受けたから
0	他にとりたい科目がなかったから	0	その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数 0回 1回 2回 3回以上

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? 読んだ 読まなかった

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか? 理解できた あまり理解できなかった 理解できなかった

d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか? 1時間以下 1~2時間 2~3時間 3~4時間以上 4時間以上

e. レスポンスカードに疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか? 書き込んだ そここそ書き込んだ あまり書かなかった 機会がなかった

f. あなたがレスポンスカードに書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか? ほとんどない ときどきあった ほぼ毎回あった 機会がなかった

g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか? そう思う すこし思う あまりそう思わない そう思わない 機会がなかった

h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか? ほとんどない ときどきあった ほぼ毎回あった 機会がなかった

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか? そう思う すこし思う あまりそう思わない そう思わない

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。

番号(1~4)を必ずマーク(●)してください。

- a. 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明していましたか? 1.0 1.5 0
- b. 授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものだったと思いますか? 1.2 1.4 0
- c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していましたか? 0.8 3 0
- d. 教員の説明や指示はわかりやすいものだったと思いますか? 0.8 10 1
- e. 教員が、板書、プロジェクター等で提示した文字や図などは、見やすかったと思いますか? -0.2 7 1
- f. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか? 1.3 11 0
- g. 教員は、今後の授業内容や進み方についてわかりやすく説明していましたか? 1.1 16 0
- h. 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすい指示を出していましたか? 1.1 14 0
- i. 教員は、毎回の授業中で、その回で学ぶべきポイントを示していましたか? 1.0 12 0
- j. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか? 1.7 4 1
- k. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか? 1.4 12 0
- l. 教員は、レスポンスカードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか? 0.0 11 3
- m. 授業開始時間・終了時間も守られていたと思いますか? 1.5 10 0
- n. 授業はよく準備されていたと思いますか? 1.2 15 0
- o. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? 1.1 16 0
- p. この授業及びその学習で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうですか? 1.0 13 0
- q. この授業及びその学習で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? 0.5 14 0
- r. 結果として、この授業を履修してよかったですか? 0.6 8 0

平均

0.9

1.0

1.0

1.0

1.0

1.0

1.0

1.0

1.0

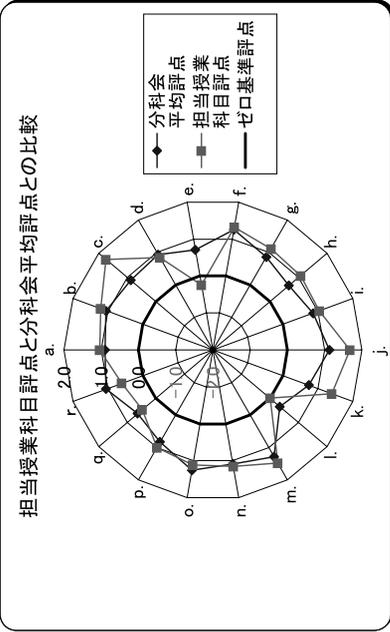
1.0

1.0

1.0

1.0

1.0



設問Dの各項目について、以下の表のように評価点を定め、数値的な評価を踏みました。左のグラフは、その結果を示したものです。

- ① そう思う(2点)
- ② すこし思う(1点)
- ③ あまりそう思わない(-1点)
- ④ まったくそう思わない(-2点)

表:設問Dの各項目の評価

E 外国語の履修についての希望を調べます。以下の項目について、該当する番号を塗りつぶしてください。

a. 外国語を履修する場合、1か国語(8単位)から2か国語(各4単位)か、どちらを希望しますか?

10	1か国語	15	2か国語
----	------	----	------

b. 外国語を履修する場合、1か国語(8単位)から何語を履修しますか? (JIS配列)

2	ドイツ語	20	フランス語	0	ロシア語	22	英語
---	------	----	-------	---	------	----	----

c. 外国語の履修が1か国語だけだったら、何語を履修しますか? (JIS配列)

0	ドイツ語	4	フランス語	0	ロシア語	20	英語
---	------	---	-------	---	------	----	----

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

優秀授業選出方針 (平成17年度 前期・後期)

大学教育センター
教育評価・改善部門

■ 優秀授業選出方針

- 1: アンケート実施授業科目を対象として、授業科目区分ごとに「優秀授業」を選出します。
- 2: 履修人数の少ない授業科目については対象から外します。17年度は、授業科目区分ごとにアンケート回答者数を平均し、その平均の30%未満の回答者からしか回答を得ていない授業科目については、対象から外します。
(検討課題: 「回答者数が少ない授業」についての扱い)
- 3: 履修申告人数に比べて、アンケート回答者(回収枚数)が少ない授業科目については、対象から外します。17年度は、回答者数が履修申告人数の70%以下になっている授業科目を、対象から外します。
- 4: 設問Dの各項目について、評点を定め、平均値を算出します。評点を選択肢の「そう思う」を2点、「まあそう思う」を1点、あまりそう思わないを-1点、全くそう思わないを-2点としました。これを、各項目について、(「そう思う」と回答した人数×2+「まあそう思う」と回答した人数×1+「あまりそう思わない」と回答した人数×-1+「全くそう思わない」と回答した人数×-2)÷(「そう思う」と回答した人数+「まあそう思う」と回答した人数+「あまりそう思わない」と回答した人数+「全くそう思わない」と回答した人数)という式にあてはめ、点数を計算します。
- 5: 設問Dの項目a、b、c、d、g、h、i、k、m、n、o、uの平均値を合計※1します。

ここでいくつかの項目を集計よりはずしましたが、例えば、「手段」に関する項目については、授業(先生)によって「使う・使わない」が変わるので、17年度は「選出」基準からは除外しました。これらの項目は、選出基準の集計には使われませんが、たとえば、説明をわかりやすくするために「黒板に板書する」という「手段」を用いた方であれば、eの項目の結果によって、学生の反応(板書したことは学生に伝わっていたか)を確認することができます。

※1: これに該当するのは、人間と自然・人間と文化・人間と社会・情報科目の区分に属する授業科目です。外国語科目(英語・英語以外の外国語)区分に属する授業科目では、項目a、b、c、d、g、h、i、k、m、n、o、rの合計、健康・スポーツ科目区分に属する授業科目では、項目a、b、c、d、e、f、g、h、j、k、l、m、pの合計になります。

6:5 で算出した値に基づき、授業科目区分毎に授業科目を上位から並べます。

7: 各授業科目区分での優秀授業対象科目 (アンケートを実施している、回答者数が規定を満たしている、回収率が70%以上) の20%程度が「候補」として選出されることを目安とします。20%程度を目安 (少なくとも15%以上、多くても25%以下) として「上位群」を判定し、それらの科目を「候補」として選出します。

(検討課題 : 「授業科目区分ごと」ではない選出方法、たとえば「授業の形式」ごとのものなど。)

8:1 ~ 7の結果。「候補」として抽出された授業科目が平成17年度の「優秀授業科目」候補科目となります。その後、教育評価・改善部門会議にて審議が行われ、「優秀授業科目」が決定します。

集計除外項目

e: 板書やビデオ、プロジェクターは、「わかりやすい解説」を行うための「手段」であったり、もしくは教室の「環境」であったりするので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

f: 教科書や参考書、配布資料は、「わかりやすい解説」を行うための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

j: 「働きかけ (発言を促すなど)」は、学生とのコミュニケーション (学生の疑問点や意向をくみ上げ、双方向性のある授業を実現する) のための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(健康・スポーツ科目 :i)

l: 「レスポンスカード」「小テスト」は学生の意見のくみ取りやわからないところを確認する (双方向性のある授業の実現) ための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

p: 問題解決活動を授業中もしくは授業時間外学習 (自習) で行ったかどうかについての項目です。今後、「問題解決活動」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

q: 教養教育の目標の1つでもある、常識・通念を問い直すことができたかどうかについての項目です。今後、これらの目標を達成することも目指すべき授業の1つですが、授業の題材などにもよるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

r: 課題探求活動を授業中もしくは授業時間外学習 (自習) で行ったかについての項目です。今後、「課題探求」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

s: 授業科目によっては、必ずしも「学生が役に立つと思う授業」= 「いい授業」ではないので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(外国語科目 :p)(健康・スポーツ科目 :n)

t: その授業科目で扱う題材や履修学生の所属学部などによって今後に対する意識も変わってくるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(外国語科目 :q)(健康・スポーツ科目 :o)

平成 17 年度前期 学生による授業アンケートに基づく 全学共通教育科目優秀授業一覧

【人間と文化】

倫理学の世界	小林 睦
欧米の文学	長野 俊一
哲学の世界	開 龍美
適応の理解	早坂 浩志

【人間と社会】

現代社会の社会学	塚本 善弘
経済のしくみ	笹尾 俊明
市民生活と法	

CLEARY WILLIAM BERNARD

現代社会と経済	田口 典男
---------	-------

【人間と自然】

生命のしくみ	牧 陽之助
物質の世界	吉澤 正人

【外国語科目（英語）】

英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	AHDAR ELVIS
中級英語	AHDAR ELVIS
英語 B	AHDAR ELVIS
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	BEHLING DANIELLE
英語 A	松林 城弘
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 A	寒河江 正行
英語 B	PEDERSEN KAREN
英語 B	松林 城弘
英語 B	ISHIKAWA PEGGY MARRI

【外国語科目（英語以外の外国語）】

初級フランス語（入門）	加藤 隆
初級フランス語（入門）	加藤 隆
初級中国語（入門・発展）	中安 美恵子
初級中国語（入門）	吉野 寧恵
中級韓国語	楊 政亜
初級ロシア語（入門・発展）	長野 俊一
上級日本語 A	松岡 洋子

【健康・スポーツ科目】

体力	佐々木 優次
サッカー	佐々木 博之
ソフトボール	大賀 圭造
バレー	小笠原 義文
バドミントン	大久保 香織
ゴルフ	石井 旨岡
テニス	吉田 実

【情報科目】

情報基礎	柳田 久弥
情報基礎	五味 壮平
情報基礎	中西 貴裕



平成17年度後期 学生による授業アンケートに基づく 全学共通教育科目優秀授業一覧

【人間と文化】

欧米の文学 長 野 俊 一
 適応の理解 佐 藤 正 恵
 心の科学 阿久津 洋 巳
 心の科学 松 岡 和 生

【人間と社会】

社会的人間論 塚 本 善 弘
 憲法 内 田 浩
 対人関係の心理学 堀 毛 一 也

【人間と自然】

生命のしくみ 牧 陽之助
 自然と法則 八 木 一 正

【総合科目】

現代職業選択論 田 口 典 男

【環境教育科目】

「環境」を考える 吉 田 勝 一
 「環境」を考える 牧 陽之助

【外国語科目(英語)】

英語 B BLAIR BENJAMIN REED
 英語 B SHORT KEVIN ANTHONY
 英語 B SHORT KEVIN ANTHONY
 英語 B ISHIKAWA PEGGY MARRIE
 英語 A 工 藤 裕 子
 英語 B BLAIR BENJAMIN REED
 英語 B AHDAR ELVIS
 英語 B AHDAR ELVIS
 英語 B AHDAR ELVIS
 英語 B BLAIR BENJAMIN REED
 英語 A 長 野 と も 子

【外国語科目(英語以外の外国語)】

中級フランス語 横 井 雅 明
 初級中国語(発展) 吉 野 寧 恵
 初級韓国語(発展) 崔 在 繕
 中級ロシア語 笹 尾 道 子
 初級フランス語(発展) 加 藤 祐 子
 初級フランス語(発展) 加 藤 隆
 初級フランス語(発展) 加 藤 隆
 中級韓国語 楊 政 亜
 初級ドイツ語(発展) 能 登 恵 一

【健康・スポーツ】

トレーニング 澤 村 省 逸
 体カづくり 大 賀 圭 造
 ラケットスポーツ 吉 田 実
 ゴルフ 石 井 旨 岡
 体カづくり 佐 々 木 優 次
 ニュースポーツ 小 笠 原 義 文
 サッカー 佐 々 木 博 之
 バレーボール 伊 藤 斉 訓
 バドミントン 大 久 保 香 織
 バドミントン 大 久 保 香 織

【情報科目】

情報基礎 塚 野 弘 明



(平成18年度 前期 共通)

きみたちの声を授業に反映させませんか！

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育総合センター

この調査は、みなさんにこの授業を振り返っていただき、学習状況や授業内容等について回答してもらうことを通じて、今後の授業やカリキュラム等の改善に役立たせるために行っているものです。ご協力をお願いします。該当する項目のマーク(○, △など)を、鉛筆で黒く塗りつぶして(●)ください。

- A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)
(2) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。
A 平成18年度入学
B 平成17年度入学
C 平成16年度入学
D それ以前

- B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。
A 必修科目だから
B 単位がとりやすいから
C 自分の専門と違う分野だから
D 先輩などからすすめられたから
E 他にやりたい科目がなかったから
F シラバスを読んだ興味を持ったから
G 友達が選択するから
H 自分の専門に関係が深そうだから
I 他の授業で人数制限を受けたから
J その他(具体的に:)

- C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。
a. あなたがこの授業を休んだ回数
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか
c. シラバスを読んで、書いてあることが理解できましたか
d. 平均して1回の授業についてどのぐらい予習・復習をしましたか
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか
h. あなたの提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか
i. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか

裏面に続く

(平成18年度 前期 共通)

D この授業に関し、下記の事項の回答として、①~④の中から最もあてはまると思うものを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

① そう思う ② すこし思う ③ あまりそう思わない ④ まったくそう思わない

- a. 教員は、授業の目的や目標についてわかりやすく説明したいと思いますか
b. 授業の内容は、授業の目的、目標の達成に役に立つものだと思いますか
c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明したと思いますか
d. 授業の進行は、おおよそシラバスに沿ったものだったと思いますか
e. 教員が授業中に行った説明や指示はわかりやすいものでしたか
f. 板書、ヒデオ、プロジェクター等は、見やすかったですか
g. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか
h. 教員は、今後の授業内容や進み方について、わかりやすく説明していましたか
i. 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示していましたか
j. 教員は、毎回の授業で、その回の学ぶべきポイントを示していましたか
k. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか
l. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか
m. 教員は、レスポンスカード、カードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか
n. 授業開始時間・終了時間も守られていたと思いますか
o. 授業はよく準備されていたと思いますか
p. 授業に対する教員の熱意を感じましたか
q. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫して、問題を解決する機会がありましたか
r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか
s. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけたことの大切さに気づく機会があったと思いますか
t. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか
u. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか

E 結果として、この授業を履修してよかったですか? 最もあてはまると思う番号をマーク(●)し、その理由を下記に書いてください。

① ② ③ ④

F この授業に関して、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、不満に思ったこと、学習を振り返り思ったことなど、理由とともに書いてください。

① ② ③ ④

ご協力ありがとうございました

きみたちの声を授業に反映させませんか！？

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育学総合センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について回答してもらうことを通じて、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っていきます。ご協力をお願いします。該当する項目のマーク(○, ◎など)を、鉛筆で黒く塗りつぶして(●)ください。

- A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)
(2) 所属学部・入年度について、該当するマークを塗りつぶしてして下さい。
(3) 平成18年度入学
(4) 平成17年度入学
(5) 平成16年度入学
(6) それ以前

- B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。
(7) シラバスを読んで興味を持ったから
(8) 友達が選択するから
(9) 自分の専門と違う分野だから
(10) 他の授業で人数制限を受けたから
(11) その他(具体的に:)

- C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。
(12) あなたがこの授業を休んだ回数
(13) この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?
(14) シラバスを読んで、書いてあることが理解できましたか?
(15) 平均して1回の授業についてどのぐらい予習・復習をしましたか?
(16) レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?
(17) あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?
(18) 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?
(19) あなたの提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?
(20) この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか?

裏面に続く

D この授業に関し、下記の事項の回答として、①~④の中から最もあてはまるところを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

① そう思う ② すこし思う ③ あまりそう思わない ④ まったくそう思わない

- a. 教員は、授業の目的や目標についてわかりやすく説明していましたか?
b. 授業の内容は、授業の目的、目標の達成に役に立つものだったと思いますか?
c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していましたか?
d. 授業の進行は、おおよそシラバスに沿ったものだったと思いますか?
d. 教員の説明や指示はわかりやすいものだったと思いますか?
e. 教員が、板書、プロジェクター等で提示した文字や図などは、見やすかったと思いますか?
f. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか?
g. 教員は、今後の授業内容や進み方についてわかりやすく説明していましたか?
h. 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすい指示を出していましたか?
i. 教員は、毎回の授業中で、その回で学ぶべきポイントを示していましたか?
j. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか?
k. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか?
l. 教員は、レスポンスカード、カードやテスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか?
m. 授業開始時間、終了時間も守られていたと思いますか?
n. 授業はよく準備されていたと思いますか?
o. 授業に対する教員の熱意を感じましたか?
p. この授業及びその学習で学んだことを、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか?
q. この授業及びその学習で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか?
r. 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか?

E 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか?最もあてはまるところを番号をマーク(●)し、その理由を下記に書いてください。

F 外国語の履修についての希望を調べます。以下の項目について、該当する番号を塗りつぶしてください。

- a. 外国語を1年次に前期に週4回、後期に週4回(計8単位)履修するとして、履修パターンが以下の4つの場合、どれを選びますか?
(21) 前後期とも英語(週4回)
(22) 前期英語(週4回)+後期英語以外の1つの外国語(週4回)
(23) 前後期とも英語以外の1つの外国語(週4回)
(24) 前期英語以外の1つの外国語(週4回)+後期英語(週4回)
b. 設問aの②、③、④を選択した人のみ → 英語以外の外国語を1か国語選ぶとすれば、何語を履修しますか?
(25) ドイツ語
(26) フランス語
(27) ロシア語
(28) 中国語
(29) 韓国語

G この授業に関して、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、不満に思ったこと、学習を振り返って思ったことなど、理由とともに書いてください。

ご協力ありがとうございます

(平成18年度 前期 健康・スポーツ)

きみたちの声を授業に反映させませんか！

--- 全学共通教育授業アンケート ---

岩手大学教育総合センター

この調査は、みなさんにこの授業の学習を振り返っていただき、学習状況や授業について評価してもらうことを通じて、授業やカリキュラム等の改善に生かすために行っています。ご協力をお願いします。なお、このアンケートの回答があなたに対する成績評価に反映されることは全くありませんので、率直な回答をお願い致します。

該当する項目のマーク（○、△など）を、鉛筆で黒く塗りつぶして（●）ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。

(2) 履修したスポーツの種目名を記入してください。

(3) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

- 所属学部: 人文社会科学部, 教育学部, 工学部, 農学部
入学年度: 平成18年度入学, 平成17年度入学, 平成16年度入学, それ以前

B この種目を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- 動機: 楽しそうな種目だったから, 経験のない種目だったから, あまり動かなくてもすみそうな種目だったから, 他にやりたい種目がなかったから, 先輩などからすすめられたから, 友達が選択するから, 他の種目で人数制限を受けたから, その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- あなたがこの授業を休んだ回数は何回ですか? (1) 0回 (2) 1回 (3) 2回 (4) 3回以上
あなたが履修した種目は第一希望のものでしたか? (1) はい (2) いいえ
あなたが体を動かすことが好きかどうか? (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない
この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? (1) 読んだ (2) 読まなかった
シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか? (1) 理解できた (2) 少し理解できた (3) あまり理解できなかった
1回の授業に対し、平均してどのくらい、予習・復習などをしましたか? (1) 1時間以下 (2) 1~2時間 (3) 2~3時間 (4) 3~4時間 (5) 4時間以上
体を動かすことの大切さについて、授業中に解説があったと思いますか? (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) 全くそう思わない
この授業における自分自身の学習状況は、満足できるものだと思いますか? (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) 全くそう思わない

裏面に続く

(平成18年度 前期 健康・スポーツ)

D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。

該当する番号 (1~4) を鉛筆で塗りつぶして (●) してください。

- 1 そう思う
2 まあそう思う
3 あまりそう思わない
4 全くそう思わない

- 教員は、授業の目標についてわかりやすく説明していたと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものでしたか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
成績評価の方法や基準などについて、わかりやすい説明がありましたか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
授業の進行は、おおよそシラバスに沿ったものだったと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
安全に運動を行うための指導(準備運動、道具の使い方など)があったと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
教員の技能に関する指導はわかりやすかったですか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
教員は、今後の授業の計画や進め方について、わかりやすく説明していたと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
教員は、授業時間外にやるべきことを、わかりやすく説明していたと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
教員は、毎回、学生が学ぶべきポイントを示していましたか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
学生が授業に参加しやすくなるための働きかけはありましたか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業中に対応をしていましたか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
授業開始時刻・終了時刻は守られていたと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
授業の準備はよくされていたと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
授業に対する教員の熱意を感じましたか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
この授業で学んだことは、あなたにとって役に立ちそうだと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4
この授業で学んだ科目を、もっとさらに続けたいと思いますか? (1) 2 (2) 3 (3) 4

E 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか? 右側の番号をマークし、その理由を下記に書いてください。

理由記入欄

F この授業に関して、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、不満に思ったこと、学習を振り返って思ったことなど、理由とともに書いてください。

感想記入欄

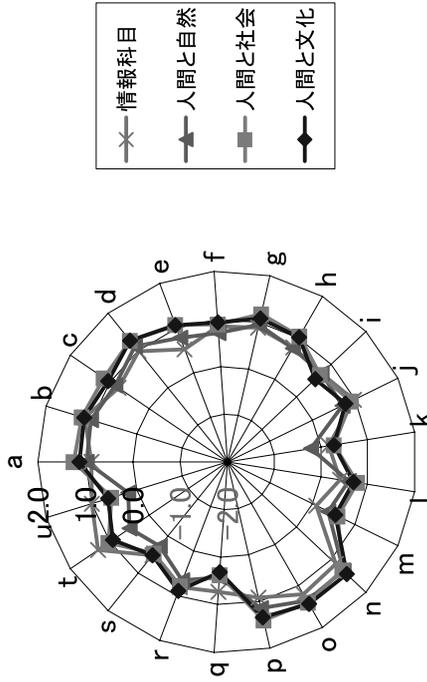
ご協力ありがとうございます

参考:授業科目区分別平均評点 :平成18年度前期

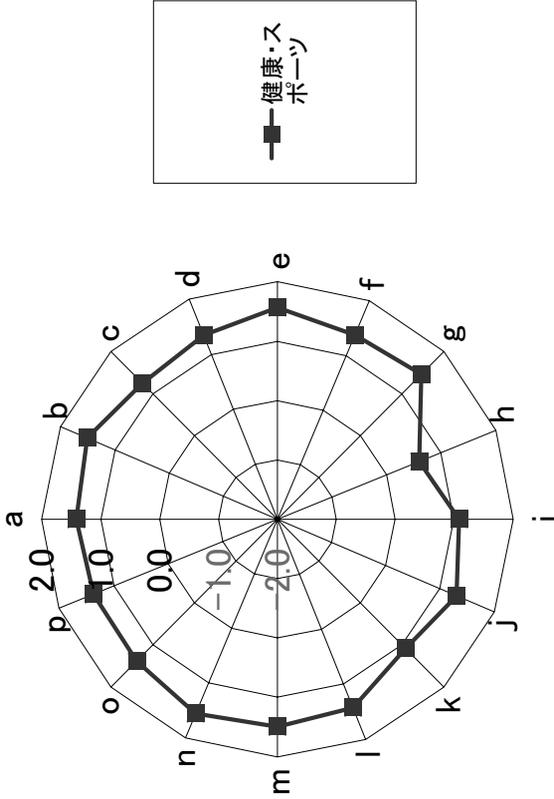
大学教育総合センター
教育評価・改善部門

参考までに、今回のアンケート集計結果(H18前期)より算出されたそれぞれの授業科目区分における「項目D」の各設問の評点の平均値」を以下に示します。

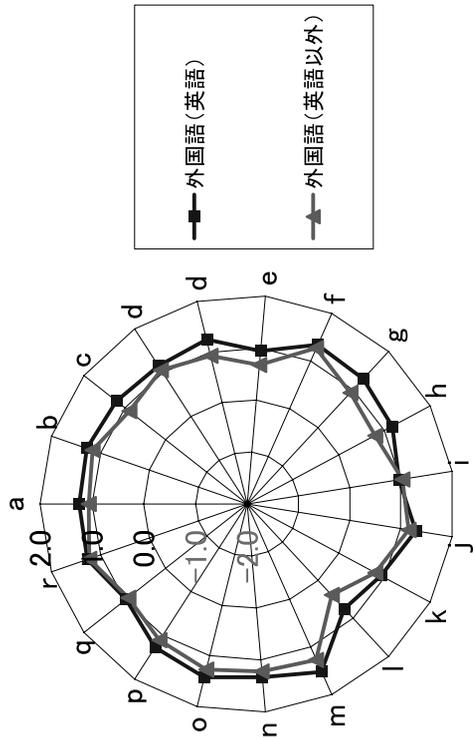
■授業科目区分:人間と文化,人間と社会,人間と自然,情報科目



■授業科目区分:健康・スポーツ科目



■授業科目区分:外国語科目(英語,英語以外の外国語)



参考：学生の学習状況について：平成18年度前期

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。以下、これは、授業科目区分「人間と文化」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数	(割合)
必修科目だから	70	2.4%
単位がとりやすそうだったから	479	16.3%
自分の専門分野と連う分野だから	172	5.9%
先輩などからすすめられたから	374	12.7%
他にとりたい科目がなかったから	252	8.6%
シラバスを読んで興味をもったから	1114	37.9%
友達が選択するから	196	6.7%
自分の専門に関係が深そうだから	172	5.9%
他の授業で人数制限を受けたから	48	1.6%
その他	63	2.1%

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数	(割合)
読んだ	1648	83.7%
読まない	322	16.3%

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数	(割合)
理解できた	621	32.7%
だいたい理解できた	996	52.5%
あまり理解できなかった	161	8.5%
理解できなかった	120	6.3%

d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数	(割合)
1時間以下	1851	92.4%
1～2時間	99	4.9%
2～3時間	20	1.0%
3～4時間	11	0.5%
4時間以上	23	1.1%

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数	(割合)
そう思う	408	20.4%
すこし思う	874	43.7%
あまりそう思わない	511	25.5%
そう思わない	209	10.4%

参考：学生の学習状況について：平成18年度前期

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。以下、これは、授業科目区分「人間と社会」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数	(割合)
必修科目だから	234	8.5%
単位がとりやすそうだったから	470	17.1%
自分の専門分野と連う分野だから	198	7.2%
先輩などからすすめられたから	217	7.9%
他にとりたい科目がなかったから	309	11.2%
シラバスを読んで興味をもったから	847	30.8%
友達が選択するから	191	6.9%
自分の専門に関係が深そうだから	167	6.1%
他の授業で人数制限を受けたから	42	1.5%
その他	77	2.8%

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数	(割合)
読んだ	1559	83.9%
読まない	299	16.1%

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数	(割合)
理解できた	560	31.3%
だいたい理解できた	976	54.6%
あまり理解できなかった	161	9.0%
理解できなかった	91	5.1%

d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数	(割合)
1時間以下	1756	93.1%
1～2時間	110	5.8%
2～3時間	10	0.5%
3～4時間	2	0.1%
4時間以上	9	0.5%

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数	(割合)
そう思う	341	18.1%
すこし思う	753	39.9%
あまりそう思わない	582	30.8%
そう思わない	213	11.3%

参考：学生の学習状況について：平成18年度前期

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。
以下、これは、授業科目区分「人間と自然」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数	(割合)
必修科目だから	234	8.5%
単位がとりやすそうだったから	470	17.1%
自分の専門分野と連う分野だから	198	7.2%
先輩などからすすめられたから	217	7.9%
他にとりたい科目がなかったから	309	11.2%
シラバスを読んで興味をもったから	847	30.8%
友達を選択するから	191	6.9%
自分の専門に関係が深そうだから	167	6.1%
他の授業で人数制限を受けたから	42	1.5%
その他	77	2.8%

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数	(割合)
読んだ	1559	83.9%
読まない	299	16.1%

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数	(割合)
理解できた	560	31.3%
だいたい理解できた	976	54.6%
あまり理解できなかった	161	9.0%
理解できなかった	91	5.1%

d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数	(割合)
1時間以下	1756	93.1%
1～2時間	110	5.8%
2～3時間	10	0.5%
3～4時間	2	0.1%
4時間以上	9	0.5%

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数	(割合)
そう思う	341	18.1%
すこし思う	753	39.9%
あまりそう思わない	582	30.8%
そう思わない	213	11.3%

参考：学生の学習状況について：平成18年度前期

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。
以下、これは、授業科目区分「英語」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数	(割合)
必修科目だから	2186	87.3%
単位がとりやすそうだったから	43	1.7%
自分の専門分野と連う分野だから	12	0.5%
先輩などからすすめられたから	9	0.4%
他にとりたい科目がなかったから	19	0.8%
シラバスを読んで興味をもったから	66	2.6%
友達を選択するから	7	0.3%
自分の専門に関係が深そうだから	84	3.4%
他の授業で人数制限を受けたから	7	0.3%
その他	71	2.8%

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数	(割合)
読んだ	1505	65.4%
読まない	795	34.6%

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数	(割合)
理解できた	606	29.5%
だいたい理解できた	944	46.0%
あまり理解できなかった	192	9.4%
理解できなかった	309	15.1%

d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数	(割合)
1時間以下	1370	58.8%
1～2時間	828	35.6%
2～3時間	105	4.5%
3～4時間	22	0.9%
4時間以上	4	0.2%

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数	(割合)
そう思う	587	25.1%
すこし思う	1104	47.3%
あまりそう思わない	504	21.6%
そう思わない	139	6.0%

参考：学生の学習状況について：平成18年度前期

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。
以下、これは、授業科目区分「英語以外の外国語」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数	(割合)
必修科目だから	1018	47.5%
単位がとりやすそうだったから	70	3.3%
自分の専門分野と連う分野だから	32	1.5%
先輩などからすすめられたから	72	3.4%
他にとりたい科目がなかったから	90	4.2%
シラバスを読んで興味をもったから	253	11.8%
友達が選択するから	381	17.8%
自分の専門に関係が深そうだから	112	5.2%
他の授業で人数制限を要けたから	27	1.3%
その他	88	4.1%

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数	(割合)
読んだ	915	67.6%
読まない	439	32.4%

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数	(割合)
理解できた	383	30.8%
だいたい理解できた	602	48.4%
あまり理解できなかった	116	9.3%
理解できなかった	143	11.5%

d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数	(割合)
1時間以下	1043	75.7%
1～2時間	309	22.4%
2～3時間	20	1.5%
3～4時間	1	0.1%
4時間以上	4	0.3%

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数	(割合)
そう思う	346	25.1%
すこし思う	631	45.9%
あまりそう思わない	304	22.1%
そう思わない	95	6.9%

参考：学生の学習状況について：平成18年度前期

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

今回のアンケート集計結果より、学生の学習状況についての集計データを紹介いたします。
以下、これは、授業科目区分「情報科目」に属する授業科目の結果を集計したものです。

◆設問B:この授業を選択した動機について

動機	選択した人数	(割合)
必修科目だから	803	90.6%
単位がとりやすそうだったから	15	1.7%
自分の専門分野と連う分野だから	5	0.6%
先輩などからすすめられたから	7	0.8%
他にとりたい科目がなかったから	4	0.5%
シラバスを読んで興味をもったから	17	1.9%
友達が選択するから	3	0.3%
自分の専門に関係が深そうだから	26	2.9%
他の授業で人数制限を要けたから	1	0.1%
その他	5	0.6%

◆設問Cの項目b, c, d, iiについての集計結果

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？

項目	人数	(割合)
読んだ	399	49.3%
読まない	410	50.7%

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか？

項目	人数	(割合)
理解できた	156	22.9%
だいたい理解できた	292	42.9%
あまり理解できなかった	86	12.6%
理解できなかった	146	21.5%

d. 平均して1回の授業に対してどのぐらい予習・復習をしましたか？

項目	人数	(割合)
1時間以下	765	93.8%
1～2時間	42	5.1%
2～3時間	5	0.6%
3～4時間	1	0.1%
4時間以上	3	0.4%

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか？

項目	人数	(割合)
そう思う	220	26.9%
すこし思う	402	49.1%
あまりそう思わない	143	17.5%
そう思わない	53	6.5%

全学共通教育科目 授業アンケート

岩手大学教育総合センター

この調査は、みなさんにこの授業を振り返っていただき、学習状況や授業内容等について回答してもらうことを通じて、今後の授業やカリキュラム等の改善に役立たせるために行っているものです。ご協力をお願いします。
 該当する項目のマーク(○、△など)を、鉛筆で黒く塗りつぶして(●)ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

(2) 所属学部・入年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

- ① 人文社会科学部 (A) 平成18年度入学
- ② 教育学部 (B) 平成17年度入学
- ③ 工学部 (C) 平成16年度入学
- ④ 農学部 (D) それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- (A) 必修科目だから (F) シラバスを読んで興味を持ったから
- (B) 単位がとりやすいから (G) 友達を選択するから
- (C) 自分の専門と違う分野だから (H) 自分の専門に関係が深そうだから
- (D) 先輩などからすすめられたから (I) 他の授業で人数制限を受けたから
- (E) 他にやりたい科目がなかったから (J) その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数 (1) 0回 (2) 1回 (3) 2回 (4) 3回以上
- b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? (1) 読んだ (2) 読まなかった
- c. シラバスを読んで、書いてあることが理解できましたか? (1) 理解できた (2) たいがい理解できた (3) あまり理解できなかった (4) 理解できなかった
- d. 平均して1回の授業についてどのぐらい予習・復習をしましたか? (1) 1時間以下 (2) 1～2時間 (3) 2～3時間 (4) 3～4時間 (5) 4時間以上
- e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか? (1) 書き込んだ (2) そこそこ書き込んだ (3) あまり書きなかった (4) 書かなかった (5) 機会がなかった
- f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
- g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか? (1) そう思う (2) すこし思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない (5) 機会がなかった
- h. あなたの提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか? (1) ほとんどない (2) ときどきあった (3) ほぼ毎回あった (4) 機会がなかった
- i. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか? (1) そう思う (2) すこし思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない

D この授業に関し、下記の事項の回答として、①～④の中から最もあてはまると思うものを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

- ① そう思う (1) ② すこし思う (2) ③ あまりそう思わない (3) ④ まったくそう思わない (4)

- a. 教員は、授業の目的や目標についてわかりやすく説明していたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- b. 授業の内容は、授業の達成に役に立つものだったと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- d. 授業の進行は、おおよそシラバスに沿ったものだったと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- e. 教員が授業中に行った説明や指示はわかりやすいものだったと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- f. 板書、ビデオ、プロジェクター等は、見やすかったですか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- g. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- h. 教員は、その日以降の授業内容や進み方について、わかりやすく説明していたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- i. 教員は、授業時間以外に行う学習(学習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示していたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- j. 教員は、毎回の授業で、その回の学ぶべきポイントを示していましたか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- k. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- l. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- m. 教員は、レスポンスカード、カードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- n. 授業開始時間・終了時間も守られていたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- o. 授業はよく準備されていたと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- p. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- q. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫して、問題を解決する機会があったと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- s. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけることの大切さに気づく機会があったと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- t. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)
- u. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? (1) ② (2) ③ (3) ④ (4)

E 結果として、この授業を履修してよかったですか? 最もあてはまると思う番号をマーク(●)し、その理由を下記に書いてください。

F この授業の学習を振り返って思ったことを理由とともに書いてください。

ご協力ありがとうございます

全学共通教育科目 授業アンケート

岩手大学教育総合センター

この調査は、みなさんにこの授業を振り返っていただき、学習状況や授業内容等について回答してもらうことを通して、今後の授業やカリキュラム等の改善に役立たせるために行っているものです。ご協力をお願いします。
該当する項目のマーク(○、△など)を、鉛筆で黒く塗りつぶして(●)ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

(2) 所属学部・入年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

- ① 人文社会科学部 (A) 平成18年度入学
- ② 教育学部 (B) 平成17年度入学
- ③ 工学部 (C) 平成16年度入学
- ④ 農学部 (D) それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- (A) 必修科目だから
- (B) 単位がとりやすいから
- (C) 自分の専門と違う分野だから
- (D) 先輩などからすすめられたから
- (E) 他にやりたい科目がなかったから
- (F) シラバスを読んだ興味を持ったから
- (G) 友達が選択するから
- (H) 自分の専門に関係が深そうだから
- (I) 他の授業で人数制限を受けたから
- (J) その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数 ① 0回 ② 1回 ③ 2回 ④ 3回以上
- b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? ① 読んだ ② 読まなかった
- c. シラバスを読んで、書いてあることが理解できましたか? ① 理解できた ② だいたい理解できた ③ あまり理解できなかった ④ 理解できなかった
- d. 平均して1回の授業についてどのぐらい予習・復習をしましたか? ① 1時間以下 ② 1~2時間 ③ 2~3時間 ④ 3~4時間 ⑤ 4時間以上
- e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか? ① 書き込んだ ② そこを書き込んだ ③ あまり書かなかった ④ 書かなかった ⑤ 機会がなかった
- f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか? ① ほとんどない ② ときどきあった ③ ほぼ毎回あった ④ 機会がなかった
- g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか? ① そう思う ② すこし思う ③ あまりそう思わない ④ そう思わない ⑤ 機会がなかった
- h. あなたの提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか? ① ほとんどない ② ときどきあった ③ ほぼ毎回あった ④ 機会がなかった
- i. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか? ① そう思う ② すこし思う ③ あまりそう思わない ④ そう思わない

D この授業に関し、下記の事項の回答として、①~④の中から最もあてはまるところを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

- ① そう思う ② すこし思う ③ あまりそう思わない ④ まったくそう思わない

- a. 教員は、授業の目的や目標についてわかりやすく説明していたと思いますか? ① ② ③ ④
- b. 授業の内容は、授業の目的、目標の達成に役に立ったと思いますか? ① ② ③ ④
- c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していたと思いますか? ① ② ③ ④
- d. 授業の進行は、おおよそシラバスに沿ったものだったと思いますか? ① ② ③ ④
- e. 教員が授業中に行った説明や指示はわかりやすいものだったと思いますか? ① ② ③ ④
- f. 板書、ビデオ、プロジェクター等は、見やすかったですか? ① ② ③ ④
- g. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか? ① ② ③ ④
- h. 教員は、その日以降の授業内容や進み方について、わかりやすく説明していたと思いますか? ① ② ③ ④
- i. 教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示していたと思いますか? ① ② ③ ④
- j. 教員は、毎回の授業で、その回の学ぶべきポイントを示していましたか? ① ② ③ ④
- k. 教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか? ① ② ③ ④
- l. 教員は、学生の疑問点や着向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか? ① ② ③ ④
- m. 教員は、レスポンスカード、カードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか? ① ② ③ ④
- n. 授業開始時間、終了時間も守られていたと思いますか? ① ② ③ ④
- o. 授業はよく準備されていたと思いますか? ① ② ③ ④
- p. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? ① ② ③ ④
- q. この授業及びその学習で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか? ① ② ③ ④
- r. この授業及びその学習で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか? ① ② ③ ④

E 結果として、この授業を履修しよかったですか? 最もあてはまるところを番号をマーク(●)し、その理由を下記に書いてください。

F 外国語の履修について、該当する番号を塗りつぶしてください。

- a. 外国語を1年次に前期・後期・後期(計8単位)履修するとして、履修パターンが以下の4つの場合、どれを選びますか? ① 前後期とも英語(週4回) ② 前期英語(週4回)+後期英語以外の1つの外国語(週4回) ③ 前後期とも英語以外の1つの外国語(週4回) ④ 前期英語以外の1つの外国語(週4回)+後期英語(週4回)
- b. 設問aで②、③、④を選んだ人のみ → 英語以外の外国語を1か国語選ぶとすれば、何語を履修しますか? ① ドイツ語 ② フランス語 ③ ロシア語 ④ 中国語 ⑤ 韓国語

G この授業の学習を振り返って思ったことを理由とともに書いてください。

ご協力ありがとうございます

全学共通教育科目 授業アンケート

岩手大学教育総合センター

この調査は、みなさんにこの授業を振り返っていただき、学習状況や授業内容等について回答してもらうことを通して、今後の授業やカリキュラム等の改善に役立させるために行っているものです。ご協力をお願いします。
該当する項目のマーク(○, ◎, △)を、**縦書きで黒く塗りつぶして(●)**ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。

(2) 履修したスポーツの種類名を記入してください。

(3) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶしてしてください。

- (A) 人文社会科学部
- (B) 教育学部
- (C) 工学部
- (D) 農学部
- (E) 平成18年度入学
- (F) 平成17年度入学
- (G) 平成16年度入学
- (H) それ以前

B この種目を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- (A) 楽しそうな種目だと思ったから
- (B) 経験のない種目だったから
- (C) あまり動かなくてもすみそうな種目だったから
- (D) 他にと切ない種目がなかったから
- (E) 先輩などからすすめられたから
- (F) 友達が選択するから
- (G) 他の種目で人数制限を受けたから
- (H) その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数は何回ですか? (1) 0回 (2) 1回 (3) 2回 (4) 3回以上
- b. あなたが履修した種目は第一希望のものでしたか? (1) はい (2) いいえ
- c. あなたは、体を動かすことが好きな方だと思いますか?
 (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない
- d. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? (1) 読んだ (2) 読まなかった
- e. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?
 (1) 理解できた (2) 少し理解できた (3) あまり理解できなかった
- f. 1回の授業に対し、平均してどのぐらい、予習・復習などをしましたか?
 (1) 1時間以下 (2) 1~2時間 (3) 2~3時間 (4) 3~4時間 (5) 4時間以上
- g. 体を動かすことの大切さについて、授業中に解説があったと思いますか?
 (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) 全くそう思わない
- h. この授業における自分自身の学習状況は、満足できるものだと思いますか?
 (1) そう思う (2) 少し思う (3) あまりそう思わない (4) 全くそう思わない

裏面に続く

D この授業に関し、下記の事項の回答として、①~④の中から最もあてはまると思うものを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

- (1) そう思う (2) すこし思う (3) あまりそう思わない (4) まったくそう思わない
- a. 教員は、授業の目的や目標についてわかりやすく説明していたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- b. 授業の内容は、授業の目的、目標の達成に役に立つものだったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- d. 授業の進行は、おおよそシラバスに沿ったものだったと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- e. 安全に運動を行うための指導(準備運動、道具の使い方など)がありますか? (1) (2) (3) (4)
- f. 教員の技能に関する指導はわかりやすかったですか? (1) (2) (3) (4)
- g. 教員は、その日以降の授業の計画や進め方について、わかりやすく説明していたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- h. 教員は、授業時間外にやるべきことを、わかりやすく説明していたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- i. 教員は、毎回、学生が学ぶべきポイントを示していましたか? (1) (2) (3) (4)
- j. 学生が授業に参加しやすいようになるための働きかけがありましたか? (1) (2) (3) (4)
- k. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業中に対応していましたか? (1) (2) (3) (4)
- l. 授業開始時間、終了時間は守られていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- m. 授業はよく準備されていたと思いますか? (1) (2) (3) (4)
- n. 授業に対する教員の熱意を感じましたか? (1) (2) (3) (4)
- o. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうですか? (1) (2) (3) (4)
- p. この授業で学んだ種目を、もっとさらに続けたいと思いますか? (1) (2) (3) (4)

E 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか? 最もあてはまると思う番号をマーク(●)し、その理由を下記に書いてください。

F この授業の学習を振り返って思ったことを理由とともに書いてください。

ご協力ありがとうございました

(平成18年度 後期 オムニバス)

全学共通教育科目 授業アンケート

岩手大学教育総合センター

この調査は、みなさんにこの授業を振り返っていただき、学習状況や授業内容等について回答してもらうことを通じて、今後の授業やカリキュラム等の改善に役立たせるために行っているものです。ご協力をお願いします。該当する項目のマーク(○, △, ●)を、鉛筆で黒く塗りつぶして(●)ください。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照)

- 1 人文社会科学部
2 教育学部
3 工学部
4 農学部
A 平成18年度入学
B 平成17年度入学
C 平成16年度入学
D それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

- A 必修科目だから
B 単位がとりやすいから
C 自分の専門と違う分野だから
D 先輩などからすすめられたから
E 他にやりたい科目がなかったから
F シラバスを読んで興味を持ったから
G 友達を選択するから
H 自分の専門に関係が深そうだから
I 他の授業で人数制限を受けたから
J その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

- a. あなたがこの授業を休んだ回数
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?
c. シラバスを読んで、書いてあることが理解できましたか?
d. 平均して1回の授業についてどのぐらい予習・復習をしましたか?
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?
h. あなたの提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?
i. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか?

(平成18年度 後期 オムニバス)

D この授業に全般に関する質問です。下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

1 そう思う 2 すこし思う 3 あまりそう思わない 4 まったくそう思わない

- a. この授業全体に対する目的や目標について、説明があったと思いますか?
b. 授業の内容は、授業全体の目的、目標の達成に役に立つものだったと思いますか?
c. この授業の成績評価の方法や基準などについて、説明があったと思いますか?
d. 授業の進行は、およそシラバスに沿ったものだったと思いますか?
e. 各回の担当教員は、自分の授業において学ぶべきポイントを示していましたか?
f. この授業では、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指し示がされていたと思いますか?
g. 各回の担当教員は、前後の授業内容との関連性や今後の進み方について、わかりやすく説明していたと思いますか?
h. 授業全体として、共通のテーマがあったと思いますか?
i. 今回、複数の担当教員からの講義を受けられたことはよかったですか?
j. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫して、問題を解決する機会があったと思いますか?
k. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか?
l. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけたことの大切さに気づく機会があったと思いますか?
m. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか?
n. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか?

E 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか? 最もあてはまると思う番号をマーク(●)し、その理由を下記に書いてください。

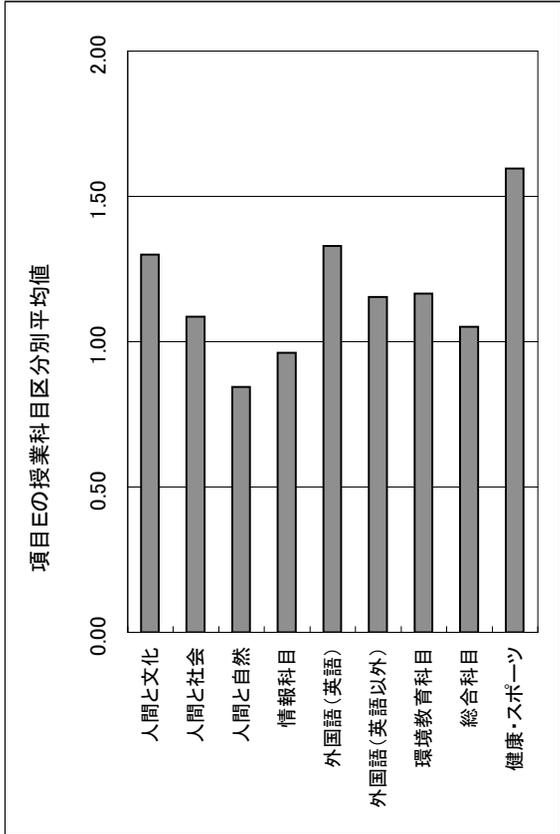
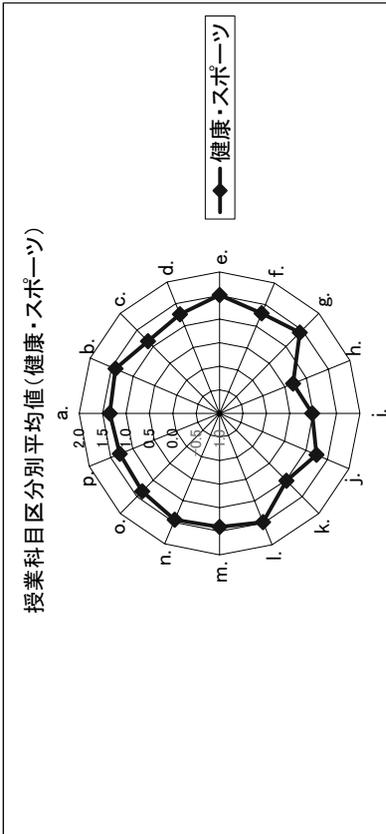
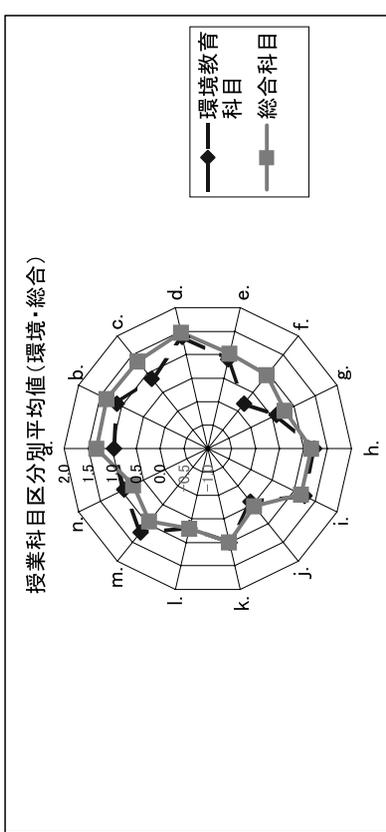
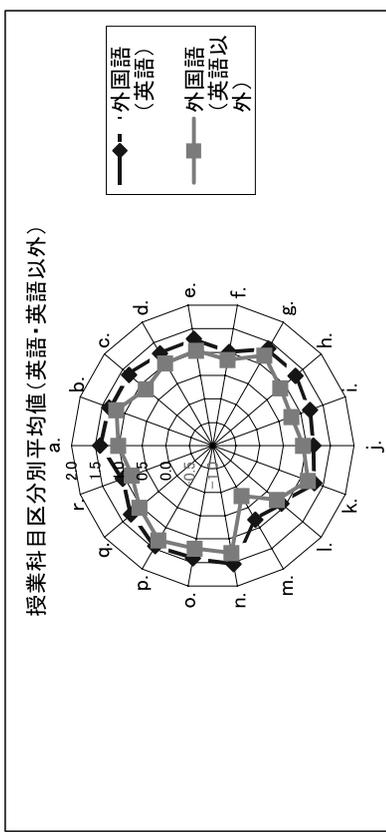
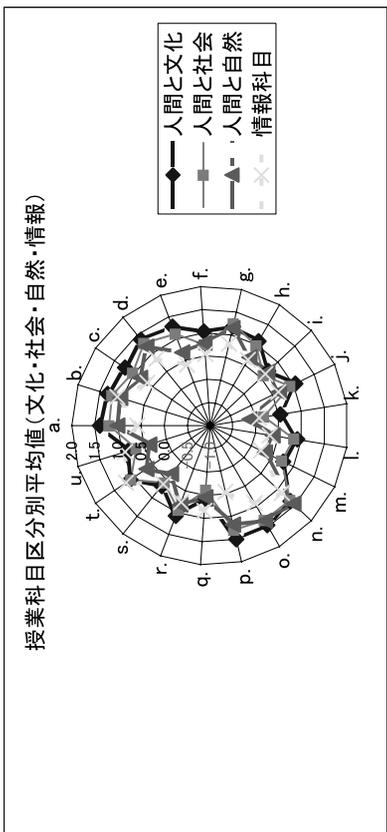
Blank box for writing reasons for choosing E.

F それぞれの担当教員が行った授業に関する質問です。各回(各担当教員)の授業の中で、特に印象に残ったことなどがあれば、できるだけ具体的に書いてください。

Three blank boxes for writing specific impressions of individual lecturers.

授業科目区分別項目D、項目Eの平均値

平成18年度 後期実施分



(平成18年度 後期 共通)

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 人間と文化

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	54	4%	シラバスを読んで興味を持ったから	200	13%
単位がとりやすそうだったから	407	27%	友達が選択するから	148	10%
自分の専門と違う分野だから	181	12%	自分の専門と違う分野だから	74	5%
先輩などからすすめられたから	150	10%	他の授業で人数制限を受けたから	33	2%
他にとりたい科目がなかったから	200	13%	その他(具体的に:)	37	2%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	658	45%	1回	310	21%	2回	245	17%
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?	読んだ	1276	89%	読まなかった	164	11%			
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	547	39%	だいたい理解できた	709	51%	あまり理解できなかった	76	5%
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	1時間以下	1365	94%	1~2時間	56	4%	2~3時間	10	1%
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?	書き込んだ	545	38%	そこそ書き込んだ	383	27%	あまり書かなかった	196	14%
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	ほとんどない	220	15%	ときどきあった	390	27%	ほぼ毎回あった	342	24%
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?	機会がなかった	487	34%	機会がなかった	237	16%	機会がなかった	412	33%
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	ほとんどない	157	11%	ときどきあった	286	20%	ほぼ毎回あった	143	10%
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	382	26%	すこし思う	660	45%	あまりそう思わない	321	22%
	そう思わない	89	6%						

(平成18年度 後期 共通)

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 人間と社会

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	164	12%	シラバスを読んで興味を持ったから	188	15%
単位がとりやすそうだったから	283	22%	友達が選択するから	126	10%
自分の専門と違う分野だから	137	10%	自分の専門に関係が深そうだから	96	7%
先輩などからすすめられたから	62	5%	他の授業で人数制限を受けたから	16	1%
他にとりたい科目がなかったから	198	15%	その他(具体的に:)	35	3%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	562	44%	1回	271	21%	2回	221	17%
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?	読んだ	1099	87%	読まなかった	170	13%			
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	419	34%	だいたい理解できた	676	55%	あまり理解できなかった	60	5%
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	1時間以下	1183	92%	1~2時間	88	7%	2~3時間	7	1%
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?	書き込んだ	301	24%	そこそ書き込んだ	343	27%	あまり書かなかった	279	22%
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	ほとんどない	204	16%	ときどきあった	367	29%	ほぼ毎回あった	283	22%
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?	機会がなかった	412	33%	機会がなかった	85	7%	機会がなかった	466	36%
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	ほとんどない	235	18%	ときどきあった	204	16%	ほぼ毎回あった	152	12%
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	223	17%	すこし思う	608	47%	あまりそう思わない	342	27%
	そう思わない	108	8%						

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 人間と自然

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	45	4%	シラバスを読んで興味を持ったから	142	14%
単位がとりやすそうだったから	268	27%	友達が選択するから	101	10%
自分の専門と違う分野だから	81	8%	自分の専門と関係が深そうだから	58	6%
先輩などからすすめられたから	135	13%	他の授業で人数制限を受けたから	5	0%
他にとりたい科目がなかったから	142	14%	その他(具体的に:)	25	2%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	46%	1回	188	19%	2回	166	17%	
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?	読んだ	887	90%	読まなかった	99	10%			
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	354	37%	だいたい理解できた	517	53%	あまり理解できなかった	56	6%
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	1時間以下	878	88%	1~2時間	107	11%	2~3時間	9	1%
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?	書き込んだ	218	22%	そこまで書き込んだ	175	18%	あまり書かなかった	174	18%
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	書かなかった	125	13%	機会がなかった	302	30%	ほぼ毎回あった	173	18%
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り返したと思えますか?	ほとんどない	138	14%	ときどきあった	178	18%	あまりそう思わない	161	16%
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	機会がなかった	497	50%	ほとんどない	206	21%	ときどきあった	189	19%
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	181	18%	すこし思う	429	43%	あまりそう思わない	293	29%
	そう思わない	91	9%						

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 総合科目

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	21	3%	シラバスを読んで興味を持ったから	73	10%
単位がとりやすそうだったから	131	17%	友達が選択するから	156	20%
自分の専門と違う分野だから	173	23%	自分の専門と関係が深そうだから	56	7%
先輩などからすすめられたから	47	6%	他の授業で人数制限を受けたから	25	3%
他にとりたい科目がなかったから	73	10%	その他(具体的に:)	9	1%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	46%	1回	138	26%	2回	89	17%	
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?	読んだ	339	76%	読まなかった	105	24%			
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	202	41%	だいたい理解できた	233	47%	あまり理解できなかった	14	3%
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	1時間以下	492	92%	1~2時間	27	5%	2~3時間	12	2%
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?	書き込んだ	251	47%	そこまで書き込んだ	200	37%	あまり書かなかった	60	11%
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	書かなかった	16	3%	機会がなかった	10	2%	ほぼ毎回あった	38	7%
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り返したと思えますか?	そう思う	134	25%	すこし思う	189	35%	あまりそう思わない	78	15%
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	そう思わない	33	6%	機会がなかった	103	19%	ほとんどない	49	9%
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	136	25%	すこし思う	253	47%	あまりそう思わない	108	20%
	そう思わない	39	7%						

全学共通教育科目 授業アンケート 環境教育科目
授業科目区分集計別

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	601	43%	シラバスを読んで興味を持ったから	40	3%
単位がとりやすそうだったから	340	24%	友達が選択するから	151	11%
自分の専門と違う分野だから	59	4%	自分の専門に関係が深そうだから	67	5%
先輩などからすすめられたから	39	3%	他の授業で人数制限を受けたから	49	3%
他にとりたい科目がなかったから	40	3%	その他(具体的に:)	15	1%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	53%	1回	162	19%	2回	82	10%	
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?	3回以上	61	7%	読んだ	596	81%	読まなかった	139	19%
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	271	34%	だいたい理解できた	413	52%	あまり理解できなかった	49	6%
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	1時間以下	800	95%	1~2時間	39	5%	2~3時間	2	0%
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?	3~4時間	3	0%	4時間以上	2	0%	書き込んだ	489	58%
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	書き込んだ	489	58%	そこそ書き込んだ	263	31%	あまり書かなかった	54	6%
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?	書かなかった	22	3%	機会がなかった	13	2%	ほぼ毎回あった	26	3%
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	ほとんどない	331	39%	ときどきあった	175	21%	あまりそう思わない	72	9%
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	機会がなかった	307	37%	機会がなかった	419	50%	機会がなかった	15	2%
	満足できるものだと思います	125	15%	すこし思う	200	24%	あまりそう思わない	162	19%
	満足できるものだと思います	26	3%	機会がなかった	419	50%	あまりそう思わない	162	19%
	満足できるものだと思います	201	24%	ときどきあった	84	10%	あまりそう思わない	162	19%
	満足できるものだと思います	541	64%	機会がなかった	465	55%	あまりそう思わない	162	19%
	満足できるものだと思います	161	19%	すこし思う	465	55%	あまりそう思わない	162	19%
	満足できるものだと思います	53	6%	すこし思う	465	55%	あまりそう思わない	162	19%

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 外国語科目 (英語)

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	2182	92%	シラバスを読んで興味を持ったから	11	0%
単位がとりやすそうだったから	44	2%	友達が選択するから	11	0%
自分の専門と違う分野だから	13	1%	自分の専門に関係が深そうだから	51	2%
先輩などからすすめられたから	5	0%	他の授業で人数制限を受けたから	4	0%
他にとりたい科目がなかったから	11	0%	その他(具体的に:)	43	2%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	1129	50%	1回	494	22%	2回	380	17%
b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか?	3回以上	274	12%	読んだ	1372	61%	読まなかった	883	39%
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	637	33%	だいたい理解できた	819	43%	あまり理解できなかった	150	8%
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	1時間以下	1469	65%	1~2時間	712	31%	2~3時間	74	3%
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?	3~4時間	13	1%	4時間以上	8	0%	書き込んだ	338	15%
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	書かなかった	244	11%	機会がなかった	1188	52%	あまり書かなかった	230	10%
g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?	ほとんどない	112	5%	ときどきあった	248	11%	ほぼ毎回あった	463	21%
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	機会がなかった	1429	63%	機会がなかった	643	28%	機会がなかった	307	14%
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	502	22%	すこし思う	712	31%	あまりそう思わない	307	14%
	そう思う	110	5%	機会がなかった	643	28%	あまりそう思わない	307	14%
	そう思う	183	8%	ときどきあった	352	16%	あまりそう思わない	441	19%
	そう思う	930	41%	ときどきあった	352	16%	あまりそう思わない	441	19%
	そう思う	638	28%	すこし思う	1068	47%	あまりそう思わない	441	19%
	そう思う	125	6%	すこし思う	1068	47%	あまりそう思わない	441	19%

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 外国語科目 (英語以外)

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	969	66%	シラバスを読んで興味を持ったから	67	5%
単位がとりやすそうだったから	108	7%	友達が選択するから	67	5%
自分の専門と連う分野だから	15	1%	自分の専門に関係が深そうだから	49	3%
先輩などからすすめられたから	50	3%	他の授業で人数制限を受けたから	19	1%
他にとりたい科目がなかったから	67	5%	その他(具体的に:)	52	4%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	529	43%	1回	284	23%	2回	184	15%									
b. この科目を履修する前にシラバスを讀みましたか?	3回以上	240	19%	読んだ	820	67%	読まなかった	409	33%									
c. シラバスを讀んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	380	34%	だいたい理解できた	498	45%	あまり理解できなかった	70	6%									
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	理解できなかった	162	15%	1時間以下	972	78%	1~2時間	247	20%	2~3時間	14	1%	3~4時間	4	0%	4時間以上	2	0%
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に質問点や疑問、感想などを積極的に書き込みましたか?	書き込んだ	80	7%	そこそ書き込んだ	89	7%	あまり書かなかった	109	9%									
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	書かなかった	97	8%	機会がなかった	853	69%	ほぼ毎回あった	124	10%									
g. 提出物(宿題、レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?	ほとんどない	42	3%	ときどきあった	101	8%	あまりそう思わない	181	15%									
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	機会がなかった	961	78%	機会がなかった	482	39%	ほぼ毎回あった	278	22%									
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	163	13%	すこし思う	317	26%	あまりそう思わない	349	28%									
	そう思わない	98	8%	機会がなかった	534	43%	あまりそう思わない	8										
	ほとんどない	69	6%	ときどきあった	177	14%												
	機会がなかった	714	58%															
	そう思う	256	21%	すこし思う	534	43%	あまりそう思わない	8										
	そう思わない	98	8%															

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 健康・スポーツ科目

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

楽しそうな科目だと思ったから	726	66%	先輩などからすすめられたから	8	1%
経験のないx単位がとりやすそうだったから	114	10%	友達が選択するから	8	1%
あまり動なくてもすみそうな科目だったから	56	5%	他の科目で人数制限を受けたから	74	7%
他にとりたい科目がなかったから	88	8%	その他(具体的に:)	28	3%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	610	66%	1回	194	21%	2回	78	8%
b. あなたが履修した科目は第一希望のものでしたか?	3回以上	41	4%	はい	800	89%	いいえ	103	11%
c. あなたは、体を動かすことが好きな方だと思いますか?	そう思う	546	59%	少し思う	220	24%	あまりそう思わない	123	13%
d. この科目を履修する前にシラバスを讀みましたか?	そう思わない	34	4%	読んだ	427	48%	読まなかった	469	52%
e. シラバスを讀んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	340	45%	だいたい理解できた	189	25%	あまり理解できなかった	231	30%
f. 1回の授業に対し、平均してどのくらい予習・復習などをしましたか?	1時間以下	900	98%	1~2時間	7	1%	2~3時間	5	1%
g. 体を動かすことの大切さについて、授業中に解説があったと思いますか?	3~4時間	2	0%	4時間以上	7	1%			
h. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	427	46%	すこし思う	332	36%	あまりそう思わない	126	14%
	そう思わない	38	4%						
	全くそう思わない	14	2%						

(平成18年度 後期 共通)

全学共通教育科目 授業アンケート
授業科目区分集計別 情報科目

岩手大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

必修科目だから	153	93%	シラバスを読んで興味を持ったから	0	0%
単位がとりやすそうだったから	1	1%	友達が選択するから	2	1%
自分の専門と連う分野だから	1	1%	自分の専門に関係が深そうだから	5	3%
先輩などからすすめられたから	1	1%	他の授業で人数制限を受けたから	0	0%
他にとりたい科目がなかったから	0	0%	その他(具体的に:)	1	1%

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数	0回	88	56%	1回	25	16%	2回	21	13%
	3回以上	22	14%						
b. この科目を履修する前にシラバスを眺めましたか?	読んだ	69	45%	読まなかった	85	55%			
c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか?	理解できた	39	31%	だいたい理解できた	44	35%	あまり理解できなかった	9	7%
	理解できなかった	33	26%						
d. 平均して1回の授業に対してどのくらい予習・復習をしましたか?	1時間以下	142	91%	1~2時間	12	8%	2~3時間	2	1%
	3~4時間	0	0%	4時間以上	0	0%			
e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか?	書き込んだ	12	8%	そこそこ書き込んだ	27	17%	あまり書かなかった	18	11%
	書かなかった	27	17%	機会がなかった	73	46%			
f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか?	ほとんどない	20	13%	ときどきあった	23	15%	ほぼ毎回あった	18	12%
	機会がなかった	94	61%						
g. 提出物(宿題、レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか?	そう思う	62	40%	すこし思う	61	39%	あまりそう思わない	11	7%
	そう思わない	8	5%	機会がなかった	14	9%			
h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか?	ほとんどない	27	17%	ときどきあった	45	29%	ほぼ毎回あった	54	34%
	機会がなかった	31	20%						
i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか?	そう思う	39	25%	すこし思う	68	43%	あまりそう思わない	31	20%
	そう思わない	19	12%						

平成 18 年度前期 全学共通教育授業科目

学生による授業アンケート 実施率

授業科目区分	対象科目数	実施科目数	実施率 (%)	回答者数合計 (人)
人間と文化	24	24	100	2011
人間と社会	27	26	96.3	1902
人間と自然	16	16	100	1089
情報	17	17	100	821
外国語 (英語)	66	66	100	2347
外国語 (英語以外)	55	54	98.2	1507
健康・スポーツ	40	40	100	1135
合計	245	243	99.2	10812

平成 18 年度後期 全学共通教育授業科目

学生による授業アンケート 実施率

授業科目区分	対象科目数	実施科目数	実施率 (%)	回答者数合計 (人)
人間と文化	25	23	92.0	1529
人間と社会	19	18	94.7	1287
人間と自然	17	16	94.1	943
情報	5	4	80	157
外国語 (英語)	65	65	100	2281
外国語 (英語以外)	48	44	91.7	1227
総合	6	6	100	537
環境教育	8	8	100	855
健康・スポーツ	33	33	100	925
合計	226	217	96	9741

D この授業に関し、下記の事項の回答として、①～④の中から最もあてはまると思うものを1つ選んで、番号をマークしてください。

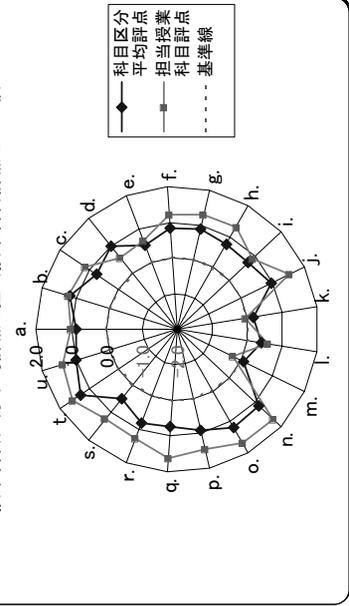
- ① そう思う ② すこし思う ③ あまりそう思わない ④ まったくそう思わない

科目区分 平均評価	担当授業 科目評価	①	②	③	④
0.9	1.0	16	12	8	0
1.2	1.3	17	15	4	0
0.8	1.1	14	17	3	1
1.0	0.6	9	16	9	2
0.5	0.7	10	16	8	2
0.8	1.2	18	13	5	0
0.9	1.3	18	14	1	2
0.8	1.3	17	16	3	0
0.7	0.9	15	12	9	0
1.0	1.5	21	14	1	0
0.2	-0.1	8	8	14	6
0.4	0.6	13	10	11	2
0.1	-0.3	8	6	13	9
1.1	1.7	26	8	1	0
1.2	1.7	26	8	1	0
0.9	1.5	16	19	0	0
0.7	1.6	22	13	0	0
0.8	1.3	21	9	4	1
0.5	1.2	20	9	6	0
1.3	1.6	24	9	2	0
1.0	1.4	19	14	1	1
平均	0.8	1.1	(名)	(名)	(名)

E 結果として、この授業を履修してよかったですか？

1.2	1.6	24	10	1	0
(名)	(名)	(名)	(名)	(名)	(名)

授業科目区分平均評価と担当授業科目評価との比較



設問Dの各項目について、以下の表のように評価を定め、数値的な評価を試みました。左のグラフは、その結果を示したものです。

- ① そう思う(2点)
② すこし思う(1点)
③ あまりそう思わない(-1点)
④ まったくそう思わない(-2点)

表:設問Dの各項目の評価

(平成18年度 前期 共通)

全学共通教育授業アンケート

個人集計別

大学教育総合センター

授業コード	時間割コード	
担当教員	教員名	先生
科目名	科目名	
受講者数	32	名
回収枚数	36	枚
		□の中の数字は回答者数です。

A (1) この授業科目のコード番号を記入して下さい。(黒板参照) □

(2) 所属学部・入学年度について、該当するマークを塗りつぶして下さい。

0	人文社会科学部	24	平成18年度入学
35	教育学部	0	平成17年度入学
0	工学部	0	平成16年度入学
0	農学部	0	それ以前

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

36	必修科目だから	1	シラバスを読んで興味を持ったから
0	単位がとりやすそうだったから	0	友達が選択するから
0	自分の専門と違う分野だから	0	自分の専門に關係が深そうだから
0	先輩などからすすめられたから	0	他の授業で人数制限を受けたから
0	他にやりたい科目がなかったから	0	その他(具体的に:)

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数 0回 1回 2回 3回以上

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか? 読んだ 読まなかった

c. シラバスを読んで、書いてあることについて理解できましたか? 理解できた たいがい理解できた あまり理解できなかった 理解できなかった

d. 平均して1回の授業に対してどのくらい学習・後置をしましたか? 1時間以下 1～2時間 2～3時間 3～4時間 4時間以上

e. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に疑問点や質問、感想などを積極的に書き込みましたか? 書き込んだ そこそこ書き込んだ 書かなかった 機会がなかった

f. あなたがレスポンスカード(カード、電子メール等も含む)に書いたことに対して、教員より何らかの反応はありましたか? ほとんどない ときどきあった ほぼ毎回あった 機会がなかった

g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組んだと思いますか? そう思う すこし思う あまりそう思わない 機会がなかった

h. あなたが提出した提出物に対して、教員より何らかの反応はありましたか? ほとんどない ときどきあった ほぼ毎回あった 機会がなかった

i. この授業におけるあなたの学習状況は、満足できるものだと思いますか? そう思う すこし思う あまりそう思わない そう思わない

優秀授業選出方針（平成18年度）

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

■優秀授業選出方針

- 1: アンケート実施授業科目を対象として、授業科目区分ごとに「優秀授業」を決定します。
- 2: 履修人数の少ない授業科目については対象から外します。平成18年度は、各授業科目区分ごとの回答者数を平均し、明らかに回答者数が少ない授業(30%未満)については、対象から除外します。
(今後の検討課題: ここで落ちる「回答者数が少ない授業」についての扱い)
- 3: 履修申告人数に比べて、アンケート回答者(回収枚数)が少ない授業科目については、対象から外します。平成18年度は、回答者数が履修申告人数の70%以下になっている授業科目を、優秀授業選定の対象から外します。
(今後の検討課題: ここで落ちる「回収率の低い授業」についての扱い)
- 4: 各授業科目区分での優秀授業対象科目(アンケートを実施している、回答者数が規定を満たしている、回収率が70%以上)の20%程度が選出されることを目安とし、少なくとも15%以上、多くても25%以下とします。
- 5: 設問Dの各項目について、評点を定め、平均値を算出します。平成18年度は、選択肢の「そう思う」を2点、「まあそう思う」を1点、あまりそう思わないを-1点、全くそう思わないを-2点と評点を決めました。これを、各項目について、(「そう思う」と回答した人数 \times 2+「まあそう思う」と回答した人数 \times 1+「あまりそう思わない」と回答した人数 \times -1+「全くそう思わない」と回答した人数 \times -2) \div (「そう思う」と回答した人数+「まあそう思う」と回答した人数+「あまりそう思わない」と回答した人数+「全くそう思わない」と回答した人数)という式にあてはめ、点数を計算します。
- 6: 設問Dの項目a、b、c、e、h、i、j、l、n、o、pの平均値をさらに平均 \times 1します。
- 7: 設問Eについても、5の方法で評点を定め、平均値を算出します。
- 8: 6で出した値と7で出した値とを合計します。
- 9: 8で算出した値について、上位から並べ、実施授業科目数の15%~25%の範囲を目安として「上位群」を判定し、それらの科目を抽出します。

10:1~9で抽出された授業科目を「優秀授業科目」候補科目とします。その後、自由記述項目等を加味して、教育評価・改善部門会議での審議の結果、「優秀授業科目」が決定します。

※1:これに該当するのは、人間と自然・人間と文化・人間と社会・情報科目の区分に属する授業科目です。外国語科目(英語・英語以外の外国語)区分に属する授業科目では、項目a、b、c、e、h、i、j、l、n、o、pの合計、総合・環境教育科目区分に属する授業科目では、項目a、b、c、e、f、g、h、iの合計、健康・スポーツ科目区分に属する授業科目では、項目a、b、c、e、f、g、h、i、k、l、m、nの合計になります。

集計除外項目

- d: この項目は今年度から新規に導入された項目なので、今回は参考情報の1つとして扱いました(来年度より集計項目となる予定です)。
- f: 板書やビデオ、プロジェクターは、「わかりやすい解説」を行うための「手段」であったり、もしくは教室の「環境」であったりするので、今回は参考情報の1つとして扱いました。
- g: 教科書や参考書、配布資料は、「わかりやすい解説」を行うための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。
- k: 「働きかけ(発言を促すなど)」は、学生とのコミュニケーション(学生の疑問点や意向をくみ上げ、双方向性のある授業を実現する)のための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(健康・スポーツ科目:j)
- m: 「レスポンスカード」「小テスト」は学生の意見のくみ取りやわからないところを確認する(双方向性のある授業の実現)のための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。
- q: 問題解決活動を授業中もしくは授業時間外学習(自習)で行ったかどうかについての項目です。今後、「問題解決活動」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(総合・環境教育科目:j)
- r: 教養教育の目標の1つでもある、常識・通念を問い直すことができたかどうかについての項目です。今後、これらの目標を達成することも目指すべき授業の1つですが、授業の題材などにもよるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(総合・環境教育科目:k)
- s: 課題探求活動を授業中もしくは授業時間外学習(自習)で行ったかについての項目です。今後、「課題探求」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(総合・環境教育科目:l)
- t: 授業科目によっては、必ずしも「学生が役に立つと思う授業」=「いい授業」ではないので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(外国語科目:q)(総合・環境教育科目:m)(健康・スポーツ科目:o)
- u: その授業科目で扱う題材や履修学生の所属学部などによって今後に対する意識も変わってくるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。(外国語科目:r)(総合・環境教育科目:n)(健康・スポーツ科目:p)

平成 18 年度前期 学生による授業アンケートに基づく 全学共通教育科目優秀授業一覧

【人間と文化】

倫理学の世界 小林 睦
欧米の文学 長野 俊一
適応の理解 早坂 浩志

【人間と社会】

現代社会と経済 田口 典男
憲法 宮本 ともみ
現代社会の社会学 塚本 善弘
経済のしくみ 杭田 俊之

【人間と自然】

物質の世界 吉澤 正人

【外国語科目 (英語)】

中級英語 小林 葉子
英語 B Lowell Sayers
英語 B Blair Benjamin Reed
英語 B Blair Benjamin Reed
英語 B Ryan Thomas Miller
英語 A 寒河江 正行
英語 B Lowell Sayers
英語 B Ishikawa Peggy Marrie
中級英語 Ogawa Erik Nikolai
英語 B Sean P. Marsula
英語 A 三浦 勲夫
英語 B Ryan Thomas Miller
英語 A 伊東 栄志郎

【外国語科目 (英語以外)】

上級日本語 A 松岡 洋子
初級フランス語 (入門) 加藤 祐子
初級中国語 (入門) 中安 美恵子
初級フランス語 (入門) 加藤 祐子
初級フランス語 (入門) 加藤 隆
初級中国語 (入門) 崔 華月
初級中国語 (入門) 劉 文静
初級ドイツ語 (入門) 大友 展也
初級フランス語 (入門) 加藤 隆

【健康・スポーツ】

ゴルフ 石井 旨岡
体カトレーニング 佐々木 優次
バレーボール 小笠原 義文
ソフトボール 佐々木 優次
サッカー 大賀 圭造
体カトレーニング 佐々木 優次
バドミントン 武田 正司

【情報科目】

情報基礎 中西 貴裕
情報基礎 五味 壮平
情報基礎 福永 良浩



平成 18 年 12 月 1 日
平成 18 年度前期優秀授業表彰状授与式にて

FD 合宿研修会

教育評価・改善部門 江本理恵

平成 12 年度に全学共通教育運営委員会が主催してはじまった岩手大学の FD 合宿研修会は、平成 13 年度に FD 委員会に引き継がれ、さらに、平成 16 年度より大学教育センター（平成 18 年に大学教育総合センターに改組）に引き継がれて実施されてきました。「4、5 年ですべての教員が参加すること」を目標にかかっていた合宿研修会は、平成 18 年度の合宿研修会にて 1 つの区切りを迎えた、と考えることができます。

私が大学教員として着任し、最初に驚いたことが「学部間の垣根が高い」ことです。しかし、大学を取り巻く状況が刻々と厳しい方向に変化している今、「岩手大学のすべての教員が」これからの岩手大学のあり方を考え、そして、研究教育活動に取り組まなければ生き残れないでしょう。この FD 合宿研修会がその「機会」とならないかと考えています。

もちろん、個々の課題についての議論は学内で何度も会議を開催して、時間をかけ、十分に行う必要があるでしょう。しかし、その議論を行える土壌があるか、というと、それ自身も危ういのではないかと。そう考えると、まずは、対等な議論を行える土壌を作ることが大切であり、この FD 合宿研修会はその土壌作りを担えるのではないかと、そのように考えています。

平成 17 年、平成 18 年の FD 合宿研修会を振り返ってみると、「学部の垣根を越えて大学について議論する」、「(研究ではなく)大学の教育について考えてみる」という点では一定の評価を得ることができたと考えられます。合宿研修会のプログラムが上記を目標とした設計になっているので、目標達成には十分効果があった、わけですが、その反面、本来の FD で要求されている具体的な授業改善等の内容は扱っていません。これは、今後の大きな検討課題です。

平成 17 年度、18 年度の FD 合宿研修会報告書は別冊として刊行予定（平成 17 年度は刊行済）です。したがって、この報告書では、この 2 年間における FD 合宿研修会のプログラムの概要をご紹介します。

ファカルティ・ディベロップメント合宿研修会概要

平成17年度ファカルティ・ディベロップメント合宿研修会実施要項

1. 目的

大学の理念・目標や授業内容・方法について教員の共通理解を深めるとともに、教員相互の意思疎通を図ること、さらに、学生が求める大学教育とは何か、学生の学習意欲を喚起する授業とは何か等、教育の質の充実を図り教員自身の教育者としての責任を自覚することを目的とする。

2. 内容

テーマ：高等教育機関としての岩手大学を考える

プログラムⅠ「高等教育機関として岩手大学に求められているニーズと課題」

プログラムⅡ「今後、岩手大学としてどのような教育の取組を行えばよいか」

プログラムⅢ「今後の全学共通教育（教養教育）の理念について

：E S D（国連・持続可能な開発のための教育の10年）」

プログラムⅣ「今後の岩手大学の教育的取組について」

プログラムⅤ「授業支援システム（CMS）を活用した授業体験」

3. 参加予定者：約40名

4. 日時：平成17年9月1日（木）・2日（金）

5. 場所：独立行政法人国立青年の家 国立岩手山青年の家

〒020-0173

岩手県岩手郡滝沢村滝沢字後292

電話：019-688-4221

ファックス：019-688-5047

6. 主催：岩手大学大学教育センター 教育評価・改善部門

2005年度 岩手大学 FD合宿研修会 日程表

期間:2005年9月1日～9月2日

場所:独立行政法人国立青年の家 国立岩手山青年の家

■1日目

- 9:30 集合
岩手大学学生センター棟入り口にて受付
- 9:50 出発(バス) 国立岩手山青年の家
到着後記念撮影
第3研修室に荷物を置き,第2研修室に移動
- 11:00 開会 2階 第2研修室
学長より挨拶
～11:40 青年の家についてのオリエンテーション
- 11:40～12:10 研修についてのオリエンテーション
終了後,各自,荷物を部屋へ
- 12:30～13:30 昼食 レストラン「ポローニア」
- 13:30～15:30 プログラムⅠ 2階 第2研修室
- 15:30～15:50 休憩
- 15:50～17:50 プログラムⅡ 2階 第2研修室
- 18:00 夕食 レストラン「ポローニア」
～19:30 入浴等(入浴は22:00まで)
- 19:30～20:50 プログラムⅢ 2階 第2研修室
休憩
- 21:00～ 懇親会 3階和室
- 22:30 消灯

■2日目

- 7:00 起床
～7:40 掃除Ⅰ
- 7:40 朝食 レストラン「ポローニア」
～8:40 各自,荷物を第3研修室へ
- 8:40～10:30 プログラムⅣ 2階 第2研修室
プログラムⅤ 2階 パソコン研修室
※プログラムⅣ・Ⅴは並行実施(各50分ずつ)
- 10:40～11:40 研修会総括
閉会
- 11:40～11:50 掃除Ⅱ
- 12:00 研修棟玄関ホール集合 移動(バス)
大学到着後解散

留意事項

- * 研修会期間中の途中参加及び離脱は禁止します。
- * 研修会期間中は,個人の呼称は,「〇〇さん」とします。
- * 貴重品は各自で管理してください。
研修棟1階ロビーと談話室にコインロッカー(要100円玉・返却タイプ)があります。ご利用ください。
- * 宿泊棟には,他の団体(青少年等)も宿泊している可能性があります。
深夜・早朝はお静かに過ごしてください。
- * 1日目の入浴は,夕食後,22:00までの時間帯でご利用ください。
- * 喫煙は,研修棟2Fの喫煙所にてお願いいたします。
- * 掃除Ⅰでは,宿泊した部屋およびA棟1階の廊下,階段,洗面所,トイレ,談話室,中央階段(1F～3F),事務室前階段(1F～3F),1Fロビーを分担して掃除してください。
- * 掃除Ⅱでは,第2研修室,第3研修室,パソコン研修室,廊下を分担して掃除してください。

2005年度 岩手大学 FD合宿研修会 参加者名簿

名前	ふりがな	所属		班	部屋	下足箱	備考
菊地 良夫	きくちよしお	人文社会科学部	国際文化	H	A-101	131	第2部門兼務教員
砂山 稔	すなやまみのる	人文社会科学部	国際文化	G		132	第2部門兼務教員
遠藤 教昭	えんどうのりあき	人文社会科学部	人間科学	A	A-103	133	
佐藤 正恵	さとうまさえ	人文社会科学部	人間科学	D	B-216	134	
小島 聡子	こじまさこ	人文社会科学部	国際文化	E	B-216	135	
山本 昭彦	やまもとあきひこ	人文社会科学部	国際文化	B	A-105	137	
吉田 夏彦	よしだなつひこ	人文社会科学部	法学・経済	F	A-106	138	*掃除 I (管理棟)
井上 博夫	いのうえひろお	人文社会科学部	法学・経済	C	A-107	139	
石川 洋一郎	いしかわよういちろう	人文社会科学部	環境科学	G	A-108	140	*掃除 I (管理棟)
宇佐美 公生	うさみこうせい	教育学部	社会科教育	E	A-101	141	第2部門兼務教員
上濱 龍也	かみはまたつや	教育学部	保健体育	F	A-101	142	第2部門兼務教員
澤村 省逸	さわむらしょういつ	教育学部	保健体育	H	A-103	143	*掃除 I (管理棟)
田中 稔	たなかみのる	教育学部	技術教育	G	A-104	144	
HALL James meriwether	ホールジェームズ メリウェザー	教育学部	英語教育	E	A-106	145	
松葉口 玲子	まつばぐちれいこ	教育学部	家政教育	B	B-216	146	
阿久津 洋巳	あくつひろみ	教育学部	学校教育	F	A-105	147	
宮崎 眞	みやざきまこと	教育学部	障害児教育	A	A-107	148	
山本 裕之	やまもとひろゆき	教育学部	音楽教育	D	A-108	149	
菊地 洋一	きくちよういち	教育学部	理科教育	C	A-109	150	
西谷 泰昭	にしにたやすあき	工学部	情報システム工学科	A	A-102	151	第2部門兼務教員
野村 直之	のむらなおゆき	工学部	福祉システム工学科	B	A-102	152	第2部門兼務教員
南 一郎	みなみいちろう	工学部	応用化学科	B	A-103	153	
松川 倫明	まつかわみちあき	工学部	材料物性工学科	D	A-104	154	
高木 浩一	たかきこういち	工学部	電気電子工学科	C	A-105	155	*掃除 I (管理棟)
北野 三千雄	きたのみちお	工学部	機械工学科	A	A-106	156	
佐藤 淳	さとうあつし	工学部	機械工学科	F	A-107	157	
大河原 正文	おおかわらまさふみ	工学部	建設環境工学科	C	A-108	158	
山本 英和	やまもとひでかず	工学部	建設環境工学科	H	A-109	159	
厚井 裕司	こういゆうじ	工学部	情報システム工学科	E	A-110	160	
新貝 鈿蔵	しんがいにゅうざう	工学部	福祉システム工学科	G	A-110	161	
高橋 壽太郎	たかはしじゅたろう	農学部	農業生命科学科	D	A-102	162	第2部門兼務教員
壽松木 章	すずきあきら	農学部	農業生命科学科	F	A-103	163	
立石 貴浩	たていしかひろ	農学部	農業生命科学科	H	A-109	164	
岡田 幸助	おかだこうすけ	農学部	獣医学科	H	A-104	165	
原澤 亮	はらさわりょう	農学部	獣医学科	G	A-105	166	
鈴木 忠彦	すずきただひこ	農学部	獣医学科	B	A-106	167	
木崎 景一郎	きざきけいいちろう	農学部	獣医学科	C	A-107	168	*掃除 I (管理棟)
青木 美樹子	あおきみきこ	農学部	獣医学科	A	B-216	169	
星野 次汪	ほしのつぐひろ	農学部	寒冷フィールドサイエンス教育研究センター	E	A-108	170	
澤口 勇雄	さわぐちいさお	農学部	寒冷フィールドサイエンス教育研究センター	D	A-109	171	
山本 信次	やまもとしんじ	農学部	寒冷フィールドサイエンス教育研究センター	A	A-110	172	

スタッフ

玉 真之介	たましんのすけ	大学教育センター	センター長		B-102	121	
岡田 仁	おかだひとし	大学教育センター	副センター長		B-102	122	
中村 一基	なかむらかずもと	大学教育センター	第2部門部門長		A-101	123	
後藤 尚人	ごうなおと	大学教育センター	第1部門		B-102	124	
石川 明彦	いしかわあきひこ	大学教育センター	第2部門		B-102	125	*掃除 I (管理棟)
江本 理恵	えもとりえ	大学教育センター	第2部門		B-215	126	
畑中 文穂	はたなかあやお	学務部			B-103	127	
大内 正	おおうちただし	学務部			B-103	128	
南野 稔徳	みなみのとしのり	学務部			B-103	129	
常川 里美	つねかわさとみ	学務部			B-215	130	

オリエンテーション

今回の FD 合宿研修会は、本学への参画意識を高め、本学の「教育」について考えるための 4 つのプログラムと、ICT を活用した授業方法の可能性を考えるための 1 つのプログラムから構成されています。

1 日目の 2 つのプログラム (I , II) と 2 日目の 1 つのプログラム (IV) は、グループ作業を中心に組まれており、参加者は、学生主体型授業を体験することになります。2 日目のプログラム (V) は、e-Learning の 1 つである授業管理支援システム (CMS) を体験し、それを各自の授業で活用する方法を考えます。

※旅費のお渡しについて

FD 合宿終了後、3 週間後ぐらいに生協より連絡があります。その後、生協の窓口でお受け取りください。

1. プログラムの基本構成

1.1. プログラム I・II

このプログラムでは、ワークショップ形式で、班単位での議論→全体での発表→全体討論という一連の授業を体験します。以下に沿って活動してください。

- ・参加者によってプログラムを運営します。
- ・班 (8 班) 単位で活動します。
- ・プログラム I・II において、各班から全体の司会者、記録係を 1 名ずつ出します。記録係は、発表開始後 3 分で 1 鈴、4 分で 2 鈴、5 分で 3 鈴をならします。司会者は、5 分以内に必ず発表を終了させるようにしてください。
- ・各班の活動についても司会者、記録係において、記録を作成します。役割は班のメンバーで分担してください。
- ・各プログラムは 120 分です。以下の基本構成からなります。
 1. 作業内容の説明 10 分
 2. 班による討論・作業 50 分
 3. 発表 各班の発表時間 5 分 (発表・交代含) × 8 班 40 分
 4. 全体討論 20 分
- ・全体および各班の記録係は、全体および各班での議論の内容を記録としてまとめ、各プログラム終了後に提出してください。この記録は、参加者全員に配布され、一部は FD 合宿報告書に掲載されます。
- ・全体討論では、特定の一人のみが発言を続けることがないように、司会者は場を運営してください。
- ・すべて時間厳守をお願いします。つまり、必ず時間キッチリに終了させるよう、早く終わることないように、運営してください。
- ・参加者による相互評価を行います。各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表と質疑応答に対して点数をつけてください。3 段階評価で、各個人は 7 点を持ち点とします。

1.2. プログラムⅢ

このプログラムでは、今後の岩手大学の教育の理念や目的について、全体で考え、討論します。まず、玉センター長から、今後の岩手大学の教育の理念と目的、そしてその旗印となるESDについての話題提供があります。その後、全体で討議に入ります。

また、このプログラムの後、和室に場所を移動して、自由討議 & 懇親会に入ります。これからの「岩手大学」の教育について、自由に討議してください。

1.3. プログラムⅣ

このプログラムでは、プログラムⅠ～Ⅲまでの結果に基づき、岩手大学の教育を今後どのようにしていけばよいのかについて、班の中で1つの結論を出し、具体的な提案書として作成してください。この提案書は、プログラム終了後に提出します。ここで提出された提案書は、後日、参加者に配布するとともに、FD合宿研修会の報告書等に掲載します。

1.4. プログラムⅤ

大学教育センターでは、「大学教育センターにおける組織的授業改善と教室外学習支援システムの構築」プロジェクトの一貫として、「全学統一拡張Webシラバス」システムの構築に取り組んでいます。このプログラムでは、このシステムのうち、「教室外学習支援」の部分である「授業支援システム(CMS)」を実際に体験し、今後の授業において、このCMSの活用の仕方について考えてもらいます。今回、残念ながら構築中のシステムは使用できませんが、似たようなCMSのシステムを試用します。



平成17年度 FD合宿研修会 報告

平成17年9月14日
 大学教育センター
 教育評価・改善部門

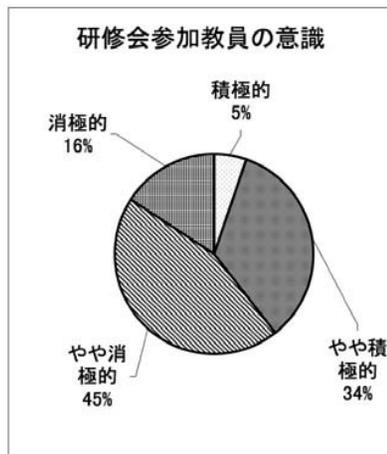
大学教育センター教育評価・改善部門では、平成17年9月1日、2日に、1泊2日でFD合宿研修会を開催しました。各学部より41名の参加教員があり、事故もなく無事終了することができました。

今回の合宿研修会では、本学への参画意識を高め、本学の「教育」について考えるための4つのプログラムとICTを活用した授業方法の可能性を考えるための1つのプログラムで構成しました。そのうち、3つのプログラムでは、参加教員を8班に分け、班単位での活動を行い、最終的に「提案書」をご提出いただきました。

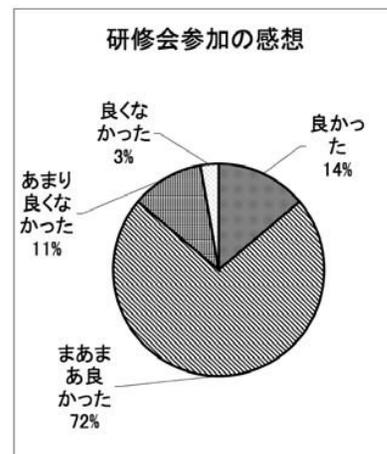
参加者によるアンケートを集計しましたので、ご報告します。

■アンケート結果

【1】 今回の研修課について、どのような意識で参加されましたか？

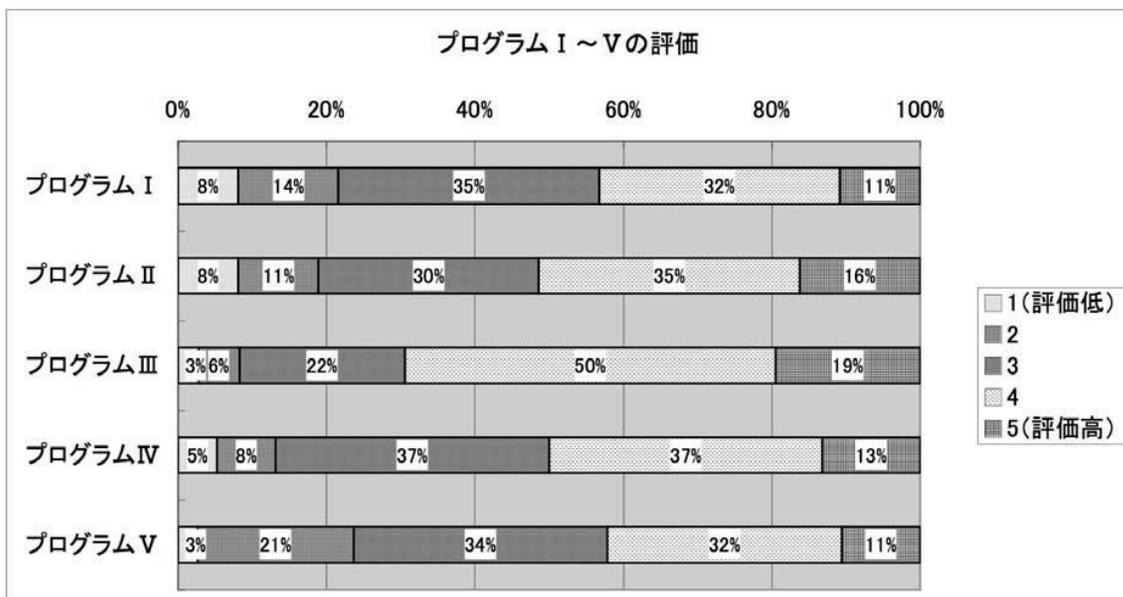


【2】 結果的に、今回の研修会に参加してよかったと思いますか？



【3】 今回の研修会の各プログラムについて、5段階で評価してください。

- プログラムⅠ：「高等教育機関として岩手大学に求められているニーズと課題」
- プログラムⅡ：「今後、岩手大学としてどのような教育の取組を行えばよいか」
- プログラムⅢ：「今後の全学共通教育の理念について：ESD」
- プログラムⅣ：「今後の岩手大学の教育的取組について：提案書の作成」
- プログラムⅤ：「授業支援システム（CMS）を活用した授業体験」





ファカルティ・ディベロップメント 合宿研修会実施要項

平成 18 年度ファカルティ・ディベロップメント合宿研修会実施要項

1. 目的

大学の理念・目標や授業内容・方法について教員の共通理解を深めるとともに、教員相互の意思疎通を図ること、さらに、学生が求める大学教育とは何か、学生の学習意欲を喚起する授業とは何か等、教育の質の充実を図り教員自身の教育者としての責任を自覚することを目的とする。

2. 内容

テーマ：大学教育の組織化と総合化を考える

プログラムⅠ「高等教育機関として岩手大学に求められているニーズと課題」

プログラムⅡ「解決に向けてどのような取組を行えばよいか」

自由討議「全学共通教育改革実施案について」

プログラムⅢ「全学共通教育の充実はどう取り組むか」

プログラムⅣ「大学院教育の充実はどう取り組むか」

3. 参加予定者：約 40 名

4. 日時：平成 18 年 8 月 31 日（木）・9 月 1 日（金）

5. 場所：自然休養村 なかやま荘

（株）松尾ふるさと振興公社

〒028-7302

岩手県八幡平市松尾寄木 2-512

TEL:0195-78-3132 FAX:0195-78-3380

6. 主催：岩手大学大学教育総合センター 教育評価・改善部門

平成18年度FD合宿研修会参加者名簿

氏名	ふりがな	学 部	学科・課程	備 考
小林 睦	こばやしむつみ	人文社会科学部	人間科学課程	兼務教員（全学共通教育企画・実施部門） 兼務教員（教育評価・改善部門）
西崎 滋	にしぎきしげる	人文社会科学部	環境科学課程	兼務教員（全学共通教育企画・実施部門）
砂山 稔	すなやまみのる	人文社会科学部	国際文化課程	兼務教員（教育評価・改善部門）
山内 茂雄	やまうちしげお	人文社会科学部	環境科学課程	兼務教員（専門教育関係連絡調整部門）
五味 壮平	ごみそうへい	人文社会科学部	人間科学課程	広報委員
江原 勝行	えはらかつゆき	人文社会科学部	法学・経済課程	広報委員
小林 葉子	こばやしようこ	人文社会科学部	国際文化課程	総合的FD委員
海妻 径子	かいづまけいこ	人文社会科学部	国際文化課程	総合的FD委員，教務委員
齋藤 博次	さいとうひろつぐ	人文社会科学部	国際文化課程	兼務教員（全学共通教育企画・実施部門）
堀毛 一也	ほりけかずや	人文社会科学部	人間科学課程	兼務教員（就職支援部門）
金田 啓子	かねだけいこ	教育学部	国語教育	入試委員，就職委員，広報委員， 地域連携特別委員
土谷 信高	つちやのぶたか	教育学部	理科教育	教育実習委員会委員
黒川 國児	くろかわくにじ	教育学部	保健体育	兼務教員（全学共通教育企画・実施部門）
辻野 哲司	つじのてつじ	教育学部	技術教育	兼務教員（入試部門）
長澤 由喜子	ながさわゆきこ	教育学部	家政教育	代議員会，点検評価委員会， 地域連携特別委員会，改革委員会
大河原 清	おおかわらきよし	教育学部	附属教育実践 総合センター	兼務教員（就職支援部門）
上濱 龍也	かみはまたつや	教育学部	保健体育	兼務教員（教育評価・改善部門）
名古屋 恒彦	なごやつねひこ	教育学部	障害児教育	兼務教員（教育評価・改善部門）
佐藤 拓己	さとうたくみ	工学部	福祉システム工学科	兼務教員（全学共通教育企画・実施部門）
恒川 佳隆	つねかわよしあき	工学部	電気電子工学科	兼務教員（教育評価・改善部門）
小川 智	おがわさとし	工学部	応用化学科	兼務教員（教育評価・改善部門）
成田 榮一	なりたえいいち	工学部	フロンティア材料 機能工学専攻	兼務教員（専門教育関係連絡調整部門）
山口 明	やまぐちあきら	工学部	材料物性工学科	兼務教員（入試部門）

氏名	ふりがな	学部	学科・課程	備考
一ノ瀬 充行	いちのせみつゆき	工学部	福祉システム工学科	兼務教員（学生生活支援部門）
西谷 泰昭	にしたにやすあき	工学部	情報システム工学科	兼務教員（就職支援部門）
門磨 義浩	かどまよしひろ	工学部	フロンティア材料 機能工学専攻	
黒田 榮喜	くろだえいき	農学部	農業生命科学科	学生生活支援部門会議委員
河合 成直	かわいしげなお	農学部	農業生命科学科	兼務教員（専門教育関係連絡調整部門）
築城 幹典	ついきみきのり	農学部	農業生命科学科	兼務教員（教育評価・改善部門）
木村 賢一	きむらけんいち	農学部	農業生命科学科	就職委員
國崎 貴嗣	くにさきたかし	農学部	農林環境科学科	戦略企画・評価室委員 自然エネルギー利用温室運営委員
津田 修治	つだしゅうじ	農学部	獣医学科	全学保健委員会委員 自然エネルギー利用温室運営委員
山岸 則夫	やまぎしのお	農学部	獣医学科	兼務教員（入試部門）
佐川 了	さかわさとる	農学部	附属寒冷フィールド* サイエンス教育研究センター	教育研究圃場運営委員 附属寒冷フィールド*サイエンス教育研究センター運営委員
永野 拓矢	ながのたくや	大学教育総合 センター	入試部門	入試部門専任教員
山崎 憲治	やまざきけんじ	大学教育総合 センター	全学共通教育企画・ 実施部門	全学共通教育企画・実施部門専任教員 専門教育連絡調整部門（併任）
福永 良浩	ふくながよしひろ	大学教育総合 センター	教育評価・改善部門	教育評価・改善部門専任教員
古井 修子	ふるいしゅうこ	学務部	学務課長	全学共通教育企画・実施部門会議委員 教育評価・改善部門会議委員
菊地 壮	きくちつよし	学務部	学生支援課長	学生生活支援部門会議委員
後藤 周悦	ごとうしゅうえつ	学務部	就職支援課	就職支援部門会議委員

スタッフ

玉 真之介	たましんのすけ	大学教育総合 センター	センター長	入試部門長，専門教育連絡調整部門長 学生生活支援部門長，就職支援部門長
岡田 仁	おかだひとし	大学教育総合 センター	副センター長	全学共通教育企画・実施部門長
後藤 尚人	ごとうなおと	大学教育総合 センター		教育評価・改善部門長
江本 理恵	えもとりえ	大学教育総合 センター	教育評価・改善部門	教育評価・改善部門専任教員
大内 正	おおうちただし	学務部	学務課副課長	
松森 洋子	まつもりようこ	学務部	学務課	
小林 路	こばやしみつる	学務部	学務課	

平成18年（2006年）度 岩手大学 FD合宿研修会 スケジュール

■1日目（8/31）

8:30	集合・出発 到着後記念撮影 ※荷物はホールへ（貴重品は各自管理すること）	学生センター棟前 友好都市交流促進センター前
10:00	開会 ・開会の挨拶 ・研修に関するオリエンテーション	集いホール
10:30～11:30	講演 ・大学教育総合センターの展望と課題	集いホール
11:30～12:30	昼食・休憩 ※昼食後、荷物を各自の部屋へ	レストランなかやま
12:30～14:20	プログラムⅠ ・高等教育機関として岩手大学に 求められているニーズと課題	集いホール 他
14:30～16:20	プログラムⅡ ・解決に向けてどのような取組を行えばよいか	集いホール 他
16:30～17:00	「提案書」の作成（プログラムⅠ・Ⅱ）	集いホール 他
17:00～17:20	オリエンテーション	集いホール
17:20～18:30	休憩・入浴	
18:30～19:40	夕食	会議場
19:50～21:20	自由討議 ・全学共通教育改革実施案について	集いホール
21:30～	懇親会	大広間
22:30	消灯	

■2日目（9/1）

6:30	起床	
7:00～7:40	朝食 ※荷物はホールへ（貴重品は各自管理すること）	レストランなかやま
7:40～9:10	プログラムⅢ ・全学共通教育の充実はどう取り組むか	集いホール 他
9:20～10:50	プログラムⅣ ・大学院教育の充実はどう取り組むか	集いホール 他
11:00～11:20	「提案書」の作成（プログラムⅢ・Ⅳ）	集いホール 他
11:20～12:00	研修会総括	集いホール
12:20	集合	友好都市交流促進センター前
13:30	大学到着後 解散	学生センター棟前

オリエンテーション

今回のFD合宿研修会は、本学への参画意識を高め、本学の「教育」について、「入り口(入試)」から「出口(就職)」までを含めて総合的に考えるための2つのプログラムと、「全学共通教育(関連して学士課程教育)」の充実、それに伴う「大学院教育」の充実を考えるための2つのプログラム、さらに、それに関連した講演、自由討議から構成されています。

プログラムの基本構成

■プログラムⅠ～Ⅳ

このプログラムでは、「班単位での議論」→「全体での発表」→「全体討論」という一連の構成で行います。以下に沿って活動してください。

- 参加者によってプログラムを運営します。
- 各プログラムはすべて「時間厳守」をお願いします。時間が延びることがないように、また、早く終わるすぎることがないように、時間きっちりに終わるように運営してください。
- 班単位で活動します。
- プログラムⅠ・Ⅱは110分です。以下の構成からなります。
 1. 作業内容の説明 5分
 2. 班単位での討論・作業 50分
 3. 発表 各班の発表時間5分(交代含)×8班 40分
 4. 全体討論 15分
- プログラムⅢ・Ⅳは90分です。以下の構成からなります。
 1. 作業内容の説明 5分
 2. 班単位での討論・作業 50分
 3. 発表 各班の発表時間5分(交代含)×5班 25分
 4. 全体討論 10分
- プログラムⅠ・Ⅱの班と、プログラムⅢ・Ⅳの班の2種類の班があります。
- 各プログラムにおける「班単位での議論」において、「司会者」「記録係」「発表者」を決めて活動します。「司会者」は、時間内に議論がまとまるように場を仕切ってください。「記録係」は、各班での討議の記録を作成してください。「発表者」は、「発表用」のシート(OHCが使用できます)を作成し、全体での発表を行ってください。
- 各プログラムにおける「全体での発表」及び「全体討論」の際の「司会者」「記録係」を各班から出します。司会者は「全体での発表」及び「全体討論」の司会を行います。記録係は「全体討論」の記録を作成します。
- 司会者は5分以内に必ず発表を終了させるようにしてください。記録係は、各班の発表開始後4分で1鈴、5分で2鈴をならします。

- 「全体討論」の司会者は、特定の人のみが発言を続けることがないように、場を運営してください。
- 全体及び各班の記録係は、全体及び各班での議論の内容を記録としてまとめ、各プログラム終了後に提出してください。この記録は、班に1通配布され、一部は「FD合宿研修会報告書」に掲載されます。
- プログラムⅠ・Ⅱ、プログラムⅢ・Ⅳ終了後に、議論の結果をまとめた「提案書」を作成します。この「提案書」は、時間終了後、提出してください。これは参加者全員に配布され、一部は「FD合宿研修会報告書」に掲載されます。
- 参加者による相互評価を行います。各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表と討論内容について点数をつけてください。3段階評価で、各個人はプログラムⅠ・Ⅱではそれぞれ「7点」、プログラムⅢ・Ⅳではそれぞれ「4点」の持ち点とします。

■自由討議

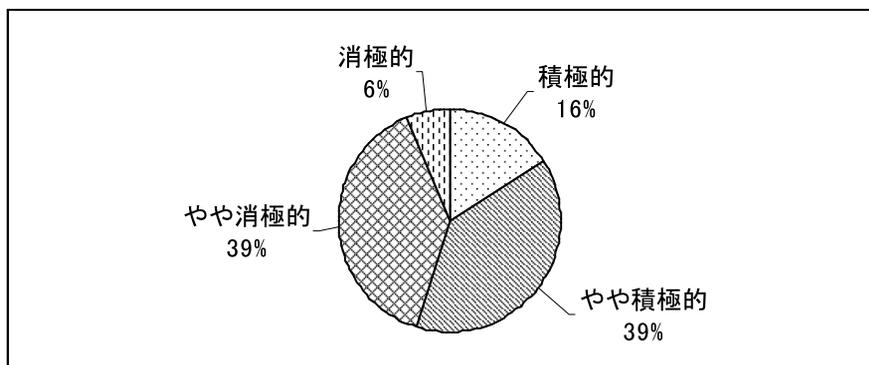
「自由討議」では、平成19年度からの「全学共通教育改革実施案」について、センター長による話題提供の後、意見交換を行います。

強制ではありませんが、ぜひ、ご参加ください。

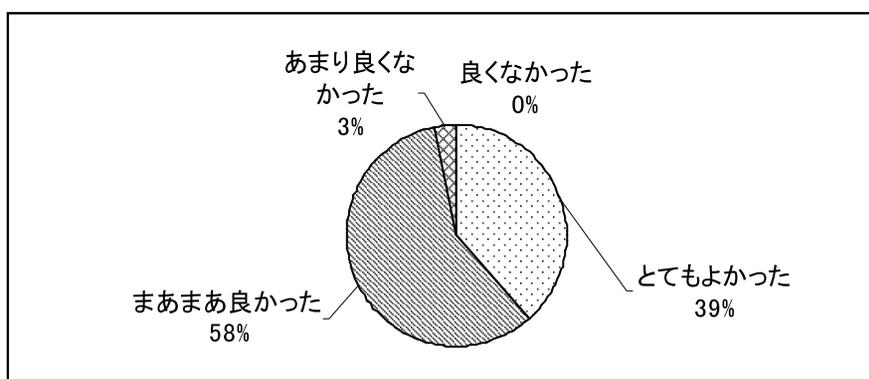


平成18年度
岩手大学FD合宿研修会 参加者アンケート集計結果

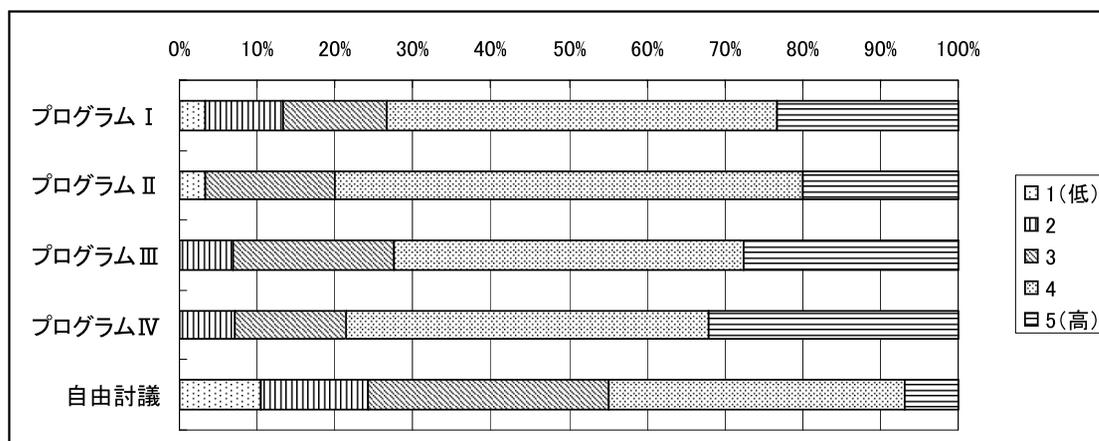
■ 今回の研修会について、どのような意識で参加されましたか？



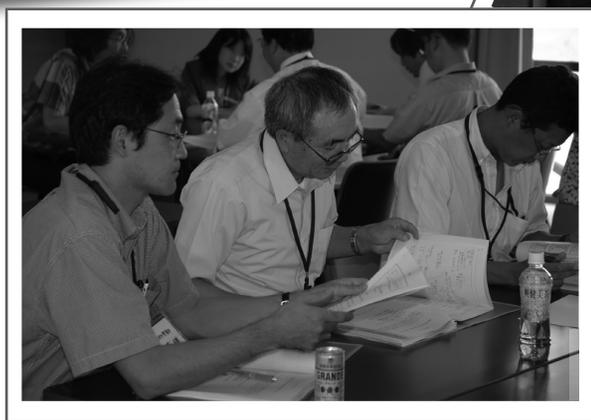
■ 結果的に、今回の研修会に参加して良かったと思いますか？



■ 今回の研修会の各プログラムについて、5段階で評価し、○で囲んでください。



※自由記述等の結果は「平成18年度FD合宿研修会報告書」にてご紹介予定です。



全学共通教育授業科目授業公開

教育評価・改善部門 江本理恵

岩手大学では、前期、後期それぞれの1週間、全学共通教育科目のすべての授業を一般に公開する「授業公開」に取り組んでいます。これは、全学共通教育科目の授業を本学の教職員、学生の保護者及び一般市民に参観していただく試みです。この授業公開を通して、保護者、市民の方々に大学の授業に対する理解をいただくとともに、貴重なご意見をいただく機会とし、全学共通教育科目の授業改善を進めていくことを目的としています。また、本学教職員間での相互授業参観、相互研鑽の機会になることも目的としています。

平成18年度より保護者を対象とした「授業モニター」という試みに取り組み始めました。平成18年度は、前期5名、後期3名の保護者にモニターになっていただき、単に「公開」していた頃よりも、より詳細な意見を保護者からいただくことができるようになり、より授業改善に役立つ企画になったと考えられます。

今後の課題として、以下の2点を挙げることができます。

- (1) 参観者（教職員、保護者、市民ともに）を増やすこと
- (2) 授業モニターを増やすこと

特に、現在、教員同士の相互参観がほとんど行われておりません。全学共通教育は「枠」単位で開講されているため、他の先生の授業時間には自分も授業があることが多く、なかなか「相互参観」は難しいのが実状です。しかし、相互研修型FDの観点からは、この授業公開が相互参観、相互研鑽のきっかけとなるよう、今後の企画を考える必要があります。

以下、平成17年度、18年度の授業モニターや他の参観者の方々からいただいた意見等について掲載します。

平成17年度前期

平成17年6月6日（月）～6月9日（金）

平成17年度後期

平成17年11月7日（月）～11月11日（金）

平成18年度前期

平成18年5月29日（月）～6月2日（金）

◇モニター1月3・4 教養科目（人間と社会）

・PCとスクリーンの利用が安易に選択されていないか。講師はPCのものをそのまま流せば良くて楽だが、室内

が暗くなり、眠気を誘い、スクリーンもコントラストをとれず見にくい。見ることだけに注意が向きやすい。講義の内容は講師のお家芸だけに聞きやすくわかりやすい。学生にも良く理解できたと思われる。欲を言えば、一方的講義だけでなく、せつかくのクイズ形式なのだから、学生にもっと口を開かせて活発にしたいような感じも受けた。なお、ノートを筆記する目的には眠気さましの効用もありますので、適宜に活用したいものでしょうか。

・授業を公開するという姿勢に、大学の前向きな意欲を感じました。

◇モニター 1月7・8 共通基礎科目(外国語(英語以外))

・受けた印象ですが、講師は黒板に話しかけ、生徒の方は見ていない感じでした。発音(日本語の講義)もメリハリがなく、語尾の「ですね」「ね」ばかりが大きく聞こえました。語学は口からではないかと思えますので、もっと発声練習をしてもよろしいかと思いました。講師の声の大きさは十分で、教室全体に響き渡るようでしたし、練習問題を一人一人に指名で回答させる方法もとても有効と感じました。

・夏の暑いのは仕方ありませんね、暑いのをがまんして勉強するのも勉強のうちなのでしょうね。生徒にクーラーは必要ないと思います。

◇モニター 2月3・4 共通基礎科目(情報科目)

・普段からパソコンを使って多くの情報を得ている。その情報を得るために、個人で調べるのには限界があり、「手間・時間の節約」という点からみても、情報技術の活用は、いまや必須であるといえる。わかりやすい授業でした。機会があれば、また受けてみたい。

◇モニター 2月5・6 共通基礎科目(外国語(英語以外))

・ドイツ語は大学時代に履修して以来で、文法もすっかり忘れていました。1年生向きの授業だったので、少しずつ思い出しながら、楽しく受けることができました。(時々、だじゃれが飛び出し、飽きなく受けられました)

・授業内容の進展具合や担当の先生がわからなかったのが、早めにわかると選択しやすいのではと思いました。(事前に聞けば教えてくださるのでしょうが)

◇一般 月1・2 教養科目(人間と文化)/月3・4 教養科目(人間と文化)

・今までの流れがわからなかったのが(当然のこと)最初少々とまどいましたが、おおよそわかる内容でした。継続して聴くことができれば、もっと中身がわかって充実した時間になるだろうなと思いました。

・希望の講義が休講で残念でした。事前にお知らせくだされば(受付で)無駄足に成らなかったのに。

◇モニター 2火3・4 教養科目(人間と文化)

・始めに良いレポートの書き方についての注意があった。わかりやすく、簡潔にまとまりのある文章を書くのは大切なことだと思った。(でも難しい)。その後、「性同一性障害」のビデオで、実際の事例からその障害者の家族の心情や対応の仕方を知った。今まで自分の知らない世界だったので興味深く見たけれど、「自分がその立場だったら」と考えさせられた。

・授業は視覚から入った方が印象深く残るのかなと思った。

◇モニター 3火3・4 教養科目(人間と社会)

・この科目は興味があったので、楽しく聞くことができました。教科書がなくても、ビデオ等でわかりやすく解説してくれました。

◇モニター 3火5・6 教養科目(人間と文化)

・5・6時間目は、最初、別の授業にいったのですが、さっぱりわからず15分ぐらいで出てきてしまいました。次に入った教室では、日本の女性の運動家の話ができて、良くわかるように解説してくれたのでよかったです。

・授業の内容があらかじめわかるともっと入りやすくなると思います。学生が静かに講義を受けているのを見てびっくりしました。また、機会があったら参加してみたいです。もっとたくさんの人に受けてもらいたいと思います。

◇一般 火3・4 教養科目(人間と社会)

・20数年ぶりに大学の授業に出ました。年をとった分、当時よりも講義内容に納得できたように感じました。大学の設備も昔とは比べものにならないほどよくなっていますし、現役の学生さんの私語もなく、とても聞きやすい授業だったと思います。ビデオを最後に見せていただきましたが、続きもぜひ見たかったです。

・国立大学であっても、今は授業中の私語がひどいとうわさに何度もきいていましたが、ここ岩手大学ではそのようなことがほとんどないらしく、気持ちよく授業を聞くことができました。いつまでもそうであってほしいです

ね。

◇一般 火 3・4 教養科目 (人間と社会)

- ・公開講座を受講したのは今回が初めてでしたが、大変に興味深い内容でした。若い現役学生の頃だったらピンとこなかったかもしれないことでも、今、年齢を重ねて経験値が増えたことによりすんなりと入ってくるような気がします。講義終盤の「グロリアと3人のセラピスト」のVTRは続きが気になります。様々に立場や方法を異にする専門家達が、どのような手法で対象に向かうのか、さらに見てみたい興味をそそられました。
- ・総合大学に足を踏み入れたのははじめてですが、多様性にふれることができうれしく思います。設備もすばらしく、伝統に基づく誇りも感じられる大学だと思いました。

◇一般 水 1・2 教養科目 (人間と文化)

- ・興味ある歴史と思想の授業でした。このまま継続して聴講できればいいなあと思いました。大学生はいいですね。うらやましい限りです。

◇モニター 1 水 3・4 共通基礎科目 (外国語 (英語))

- ・英語の授業を、時に日本語も交えながら英語で行うのは、生徒の好みの問題はあろうけれども、良いと感じました。
- ・どの授業にも、生徒の出席率が良いのには驚きました。

◇モニター 1 水 5・6 共通基礎科目 (健康・スポーツ)

- ・生徒が楽しそうに生き生きと運動している姿を見て、何故かホッとしました。

◇一般 (教職員) 水 9・10 共通基礎科目 (外国語 (英語以外))

- ・1クラスの人数が思っていたよりもかなり多いので、会話を十分に習得させるには困難であると感じた。文法の説明にはあまり問題がないと思われた。会話については、二人がペアになり、少ない時間でお話をさせるように工夫がなされていた。また、テキストを使用すると同時に、プリントも配布されていて、応用問題に対応できるようにしていた。適宜、黒板を使用して文法と発音についての説明はかなり効果があると思われた。人数が多く、広い教室では、マイクロフォンがあれば、少し効果があると思った。
- ・多人数が対象の講義に対して、いろいろ工夫がされており、わかりやすい講義であった。韓国人の教師であるために、さすがに発音の教え方は全く問題ない。また、日本語もできるバイリンガルの教師なので、はじめてその言葉を習う学生にとってはかなり学びやすいものと思われる。授業を参観させていただき、誠にありがとうございました。

◇モニター 4 木 1・2 教養科目 (人間と自然) / 木 3・4 教養科目 (人間と文化) / 木 3・4 教養科目 (人間と自然)

- ・一方通行の授業は学生の受け止め方が少し気になりました。本当に聞いているのかなあと思う人たちがいて。教科書を連発されると、教科書だけ読んでわかればいいのかあ。学生と話しながら、反応を受け止めながら進められるのは、その場にいる実感があって、充実しているのだろうなあと思いました。

◇モニター 5 木 3・4 教養科目 (人間と文化)

- ・受け身だけの授業ではなく、話すという動きがある授業は大変興味深いもので、自分も参加してしまいました。学生になった気分でした。子育て支援グループのリーダーをしているのですが、母親同士のコミュニケーションをとる手段として「グループでの話をする」きょうの授業は使えそうです。
- ・「新人類」という言葉がありましたが、日本人としての良いところを残しながら、新しい人類になって欲しいと思いました。

◇一般 木 3・4 共通基礎科目 (外国語 (英語以外))

- ・民間でのグループレッスンと違って、やはり大学の講義は本当に有意義でした。このような機会を作っていただき、ありがとうございました。聴講生を希望したいのですが、必要書類の中の成績表は絶対必要でしょうか、再考お願いしたいです。
- ・中国語検定試験について。県内では、検定試験を委託されている学校等がなく、中国語学習者は仙台までいかなければなりません。岩大で受験できるように配慮していただければ大変ありがたいのですが、いかがでしょうか。10名の受験者がいあれば会場となれるということです。

◇一般 木 3・4 教養科目 (人間と文化)

- ・中身の濃い授業でした。久しぶりに「うーん」と考える時間でした。
- ・時として学生の「いびき」や「私語」に驚かされました。「もったいない!!」と思う次第です。

平成 18 年度後期

平成 18 年 10 月 23 日 (月) ~ 10 月 27 日 (金)

◇モニター 1 月 3・4 人間と文化

- ・今日の授業では、中世とルネッサンスの時代の違いについて勉強した。絵画の技法の違いには、その時代背景が反映されていることがわかり、楽しい授業でした。「課題」として「五感のうちで最も重要な感覚は何か、順位をつけてその理由を書く」と出されたが、ふだん考えたことがないので苦労した。
- ・音楽 CD をもっと聞きたかった。

◇モニター 2 月 7・8 外国語 (英語以外) / 月 9・10 総合科目

- ・基本的に立派なきちんとした授業になっていると感じた。生徒の授業に向かう姿勢も立派で頼もしい。ただ、成績に関して、どんな組織にも存在する下位者への対応はどうなっているのかなと思いました。

◇一般 火 3・4 人間と文化

- ・先生ご自身のエピソードも交えながらの講義内容であり、大変興味深く聞くことができました。プリントも見やすいものでした。

◇モニター 1 木 3・4 環境教育科目

- ・「私たちの生活と環境ホルモンについて」環境ホルモンの人体への影響については、以前から興味があり、自分なりに勉強してきたので、講義の内容は理解できた。ふだんから、化学調味料、合成洗剤は使用しないようにしている。ごみ問題についても、分別したりペットボトルはできるだけ買わないようにしている。
- ・教室が寒かった!

◇一般 金 3・4 外国語 (英語以外) / 外国語 (英語以外)

- ・教室に入りづらい雰囲気がある。公開授業への参加者を迎え入れる体制をさらに考えてもらいたい。
- ・参観した授業の学生は集中して講義を受けていたと思われる。
- ・フロア全体が思っていたより静かであった。
- ・学生の成績表を父母にも送付してもらいたい。(希望するものにたいして)
- ・仙台から参観にきました。

講演会・講習会・研究会の実施

教育評価・改善部門 江本理恵

教育評価・改善部門では、FD 活動の一環として、講演会・講習会・研究会等の企画・運営を行いました。

平成 17 年度には中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」についてセンター専任教員が分担して説明を行う「我が国の高等教育の将来像」を読み解く」という研究会を行いました。

平成 18 年度には、学外から小田先生、土持先生、小松川先生をお招きしての講演会、研究会を行いました。学内では、アイアシスタント関連の説明会、講習会の他、ワードやエクセルなどの使い方を学ぶための IT・FD 講習会を行いました。

山形大学の小田先生は、「FD の鬼」として全国的にも有名な方です。アメリカの真似ではなく、日々の教育現場をベースとして実践した FD の取り組みは、今後の日本の FD のあり方を考える上で非常に示唆に富むものでした。

弘前大学の土持先生は、アメリカ在学期間が長く、アメリカの高等教育事情に非常に詳しい方です。また、日本の高等教育全般についての著書も多く、高等教育研究の第一人者です。今回は、アメリカの制度を導入したものの日本では形骸化していると言われている「単位制度」について考えるための研究会を設定しました。

千歳科学技術大学の小松川先生は、大学教員はもちろんのこと、地元の高校教員も巻き込んだ e-Learning 教材の開発とその運用とで全国的にも高い評価を受けている方です。今回は、岩手大学でも対策が必要とされている理系(数学、物理、化学等)の基礎教育において、e-Learning 教材を利用した授業実践についてご報告をいただきました。e-Learning を中心に据えた高大連携のあり方や、授業の中に e-Learning を取り入れたブレンディング型の授業実施方法等については、岩手大学でも取り入れたいところです。

しかしながら、授業や会議、学生の指導等で教員の空き時間がほとんどない今の状況では、参加したくても参加できない、参加しようと思える余裕のない教員がほとんどです。今年度の講演会、研究会等も十分な参加者があったとは言えない状況でした。また、昨今増えている精神的な疾患や発達障害を持つ学生への対応方法などの研修も必要でしょう。

教育評価・改善部門では、設置基準の改定による「FD の義務化」を念頭におき、岩手大学の大学教員研修のあり方について、今後検討を進めたいと思います。

研究会

平成 18 年 1 月 11 日 (水)

「我が国の高等教育の将来像 (中央教育審議会答申)」を読み解く

大学教育センター専任教員

FD 講演会

平成 18 年 7 月 14 日 (金)

「FD の開発と実践 : 山形大学編」

山形大学高等教育研究企画センター 教授・学長補佐 小田隆治

FD 研究会

平成 18 年 9 月 11 日 (月)

「単位制度について考える」

弘前大学 21 世紀教育センター 教授 土持ゲーリー法一

FD 研究会

平成 18 年 12 月 18 日 (月)

「理系基礎教育の実践と e-Learning の活用 ~千歳科学技術大学の事例から」

千歳科学技術大学光科学部 助教授 小松川浩

IT・FD 講習会

担当 : 教育評価・改善部門 福永良浩

平成 18 年 4 月 26 日 (水)・11 月 24 日 (金)

「授業に役立つパワーポイントの使い方」

平成 18 年 5 月 24 日 (水)・12 月 20 日 (水)

「授業に役立つ動的なパワーポイントの使い方」

平成 18 年 6 月 29 日 (木)・平成 19 年 1 月 31 日 (水)

「授業に役立つパワーポイント教材の各機能」

平成 18 年 7 月 25 日 (水)・平成 19 年 2 月

「ワードを活用したポスターの作成」

平成 18 年 8 月 29 日 (木)・平成 19 年 3 月

「エクセルを活用したデータ集計」

東北地区 大学教育支援施設等交流会議

教育評価・改善部門 江本理恵

大学教育総合センターでは、東北地区の他大学の教育視線施設(大学教育センター等)関係者と情報交換、意見交換等を行える場を設けることを目的として、「大学教育支援施設等交流会議(仮称)」の立ち上げを呼びかけました。平成17年7月14、15日に岩手大学にて行われた設立準備懇談会には、東北地区の国公立大学より参加があり、参加各大学より会議の設立について合意が得られました。

平成18年度大学教育支援施設等交流会議(仮称)出席者名簿

2006/07/10現在

整理番号	大学名	出席者	備考
1	弘前大学	21世紀教育センター 教授 土持ゲ-リ-法一	
2	東北大学	高等教育開発推進センター 教授 関内 隆	
3	東北大学	教育・学生支援部教務課長 梅津 哲雄	
4	東北大学	教育・学生支援部キャリア支援事務室長 嶺岸 幸子	14日のみ
5	秋田大学	教育推進総合センター 講師 細川 和仁	
6	山形大学	高等教育研究企画センター 企画マネジメント部門長 小田 隆治	
7	山形大学	高等教育研究企画センター 学外連携推進部門長 中村 三春	
8	山形大学	学務部教務課長 黒沼 毅	
9	福島大学	総合教育研究センター長 熊田 喜宣	14日のみ
10	福島大学	教育担当副学長 森田 道雄	15日のみ
11	岩手県立大学	教育・学生支援本部 教授 大塚 剋佳	14日のみ
12	国際教養大学	総務企画課企画室長 吉崎 誠	
13	宮城大学	看護学部 教授 長澤 晴夫	15日のみ
14	岩手大学	大学教育総合センター長・理事(学務担当)・副学長 玉 真之介	
15	岩手大学	大学教育総合副センター長 全学共通教育企画・実施部門長 岡田 仁	
16	岩手大学	大学教育総合センター 教育評価・改善部門長 後藤 尚人	
17	岩手大学	大学教育総合センター 教授 山崎 憲治	
18	岩手大学	大学教育総合センター 助教授 永野 拓矢	
19	岩手大学	大学教育総合センター 講師 江本 理恵	
20	岩手大学	大学教育総合センター 講師 福永 良浩	
21	岩手大学	学務部長 畑中 文穂	
22	岩手大学	学務部学務課長 古井 修子	
23	岩手大学	学務部学生支援課長 菊地 壮	
24	岩手大学	学務部就職支援課長 後藤 周悦	
25	岩手大学	学務部入試課長 土井 正人	
26	岩手大学	学務部学務課主査(副課長) 大内 正	
27	岩手大学	学務部学務課全学共通教育グループ主査 松森 洋子	

集会の趣旨と今後についての私見

岩手大学大学教育総合センター長
玉真之介

お忙しい中で、私どもの唐突なご連絡にお集まりいただき、まことにありがとうございます。今回の集まりを呼びかけました責任者として、その趣旨と今後について私見を述べさせていただきます。

さて、18歳人口の激減やグローバル化、矢継ぎ早の中教審答申など大学を取り巻く環境は厳しさを増しています。その中で、大学間の競争関係も激しくなっていますが、それは大学に2つ反省を迫っていると思われまます。1つは、よく言われるように、これまでの大学がともすれば教員中心であり、学部バラバラであったということ、もう1つは、競争するだけでよいのか、協力し合う関係の構築にもっと積極的でなくてよいのか、ということです。

大学はいま、改めて人材養成という本来の責務に立ち返って、学生を中心に置き大学の理念に基づいた大学づくりに取り組まなくては、社会から退場を迫られてしまいます。

この課題の舵取りを担っているのが各大学の大学教育支援施設であると思います。ただしそれは、各大学で歴史も浅く、その使命から学内の教員や学部から良く思われぬことも多いのではないのでしょうか。だからこそ、大学を越えて情報を交換し、互いの優れた取組を学び合うことで、学内からのプレッシャーに対して、実績で応えていく必要があると思われまます。

学生の学びを支援するという最も基本的なところで、良い意味で競い合うと共に協力し合う関係は、学生が最大の受益者であるという意味で各大学を強くすることに貢献すると思われまます。

東北地域は、これまで必ずしも大学改革の発信地ではありませんでした。のんびりした、奥ゆかしい東北らしさは、この競争の時代には不利なのかもしれません。しかも、東北大学を除くと東北地域の大学はいずれも全国的に見れば決して競争力の強い大学とは言えまません。だからこそ、むしろ、協力・協調という側面で東北地域の特色を明確にし、全国へ発信していく道もあるように考えています。

大学教育支援施設は、定型化された学部とは違って、各大学の取組が実に多様で、情報交換と協力関係によって互いに多くを学ぶことができる組織です。

今後、合意できる大学の間で、まずは情報交換と交流を第1義として、緩やかで対等平等な会として活動をはじめるのは、いかがでしょうか。連絡等の事務的な役割は、とりあえず岩手大学で受け持つことはできます。

その点の了解が得られたならば、会の名称と各大学1名の運営委員の選出が次の審議事項になると考えています。

以上



專門教育關係 連絡調整部門

平成17年度 専門教育関係連絡調整部門会議

	氏名	所属
センター長	玉 真之介	大学教育センター
部門長	岡田 仁	全学共通教育企画・実施部門
専任教員(併)(～10月)	後藤 尚人	全学共通教育企画・実施部門
専任教員(10月～)	山崎 憲治	全学共通教育企画・実地部門
各学部教務委員会選出・兼務教員	吉村 泰樹	人文社会科学部
	押切 源一	教育学部
	渡邊 孝志	工学部
	黒田 榮喜	農学部
(オブザーバー)	江本 理恵	大学教育センター
	中村 一基	大学教育センター
	石川 明彦	大学教育センター

平成18年度 専門教育関係連絡調整部門会議

	氏名	所属
センター長	玉 真之介	大学教育総合センター
専任教員	山崎 憲治	全学共通教育企画・実施部門
各学部教務委員会選出・兼務教員	山内 茂雄	人文社会科学部
	菅野 文夫	教育学部
	成田 榮一	工学部
	河合 成直	農学部
学務課長	古井 修子	学務部

平成 17・18 年度 活動報告

部門長 玉 真之介

<平成 17 年度>

平成 17 年度の専門教育関係連絡調整部門は、まず「学士課程教育に関する考え方のメモ」に基づいて、専門教育の重心を修士課程に置いて、学士課程においては全学共通教育を充実させる方向について審議した。ただし、学部間で認識の開きが大きく、十分な議論はできなかった。

それに代わって各学部から強く出されたのは、半期 22 単位の履修上限を緩和するという要望だった。この要望は、単位制度の実質化を求められている動きと逆行する側面があることから、直ちに具体化することにはならなかった。

その他にこの部門で検討すべき課題として提起されたのは、「秀」の導入によるきめ細かい成績評価、厳格な成績評価のためのガイドライン作り、国際交流科目の各学部での単位認定、重複・類似科目の洗い出しと調整などの課題である。

ただし、平成 17 年度は部門会議を 2 回開催するにとどまったため、これらの課題は、すべて翌年度へ課題として持ち越しとなった。

<平成 18 年度>

平成 18 年度の専門教育関係連絡調整部門は、昨年度の反省に立って部門会議を月 1 回のペースで定例化し、引き継いだ課題に積極的に取り組んだ。

まず、学内の教員からも学生からも見直しの要望が強い 22 単位履修上限については、まず単位制度の基本的な考え方と現実の学習時間との間にギャップがあるという実態認識を確認した。それを踏まえて、上限単位を 24 単位へ増やした方が学生の学習時間は増加するとの考えに基づき、来年度アイアシスタントの本格稼働を基礎に単位の実質化への努力を継続することを条件として、24 単位へ緩和することを決定した。

次に、「秀」の導入については、「優」が全学共通教育、専門教育共に約 50% にもなっている現状を改善するために、きめ細かな成績評価と学生の学習意欲の増進を改正理由として、平成 19 年度入学生から適用することを決めた。

国際交流科目の単位認定は、英語の授業を増やすという中期計画に資するもとして、各学部を検討を依頼し、すでに実施していた人文社会科学部以外の学部でも自由単位として認定することが決定された。

最後に、厳格な成績評価のためのガイドラインについては、教育評価・改善部門で作成した指針について審議を行い、各学部でその指針に基づいて検討を進めることとなった。

今年度、これといった結論が出せなかったのが、重複・類似科目の洗い出しと調整である。工学部、農学部の間、類似科目があることまでは確認されたが、それ以降については今後の検討として持ち越された。

以上、引き継いだ課題に加えて、平成 18 年度後期に部門の重要な審議事項となったのは、専門基礎教育の担当体制についてである。平成 12 年度より基礎教育は専門教育として区分変更され、人文社会科学部から 4 人の定員が工学部、農学部へ移った。ただし、農学部へ行った定員はそのまま工学部の福祉システム工学科の新設支援に回され、工学部へ行った定員も福祉システムの専門教育担当教員となったため、大学全体として専門基礎の担当者が 4 名減少した。

その分は、工学部、農学部が学部の教員の中から担当者を出すことになったが、工学部ではかつての学生定員増に伴う一般教育定員との兼ね合いで担当自体に異論があり、4 名の定員移動についても学部内で周知されていないことから、とりわけ専門基礎の担当をめぐって以前から不満が表明されていた。

このため、部門会議では、岩手大学の創設にまで遡って、一般教育の担当教員数の推移を調べ、人文社会科学部の創設を始め改組等によりその定員がどのように推移したかを文書にまとめた。その内容について部門として確認し、公表することとした。

それとは別に、来年度の数学の実施体制について応急に対応策を決定し、これまでの経緯を踏まえた専門基礎教育の充実方策は、来年度に検討することとした。

平成18年5月10日

成績評価への「秀」の導入について（提案）

提案内容

平成19年入学生より現行の「優」「良」「可」「不可」の4段階成績評価に「秀」を加え、「秀」(100～90)、「優」(89～80)、「良」(79～70)、「可」(69～60)、「不可」(59～0)の5段階成績評価とする。

提案理由

1. きめ細かい成績評価

本学の成績評価は、平成10年の大学審議会答申に対応するワーキンググループでの審議・答申により、平成12年度教育評議会において、現行の4段階評価が定められた。それまでは、同じ4段階評価でも各学部において基準が異なり、例えば、教育学部、農学部の「優」は、100～85点であったが、この時に100～80点に統一された。その結果、例えば、教育学部は、すべて15点幅であった刻みが、「優」のみが20点幅で、「良」「可」は10点幅という刻みとなった。

今回は、この「優」を「良」「可」と同じく10点幅として、その上にやはり10点幅の「秀」を置き、5段階のよりきめ細かい成績評価を行うための改正である。

2. 学生に対する学習意欲の刺激

100点に近い「優」と80点に近い「優」では、同じ「優」でも、かなりの差がある。現行では、その差が学生に伝えられないため、優秀な成績を修めた学生の達成感を満足させる上で、改善の余地がある。学生により良い成績を目指す意欲を醸成する上でも、「秀」の導入は効果が期待できる。

3. 成績優秀者のよりきめ細かい判定

現在、修得単位の9割が「優」の学生は成績優秀者として履修登録単位の上限が28単位まで緩和される。現行の22単位上限設定については、別途見直しを予定しているが、その際も成績優秀者のよりきめ細かい判定が見直しの条件を拡大する。例えば、成績優秀者をAランク、Bランクに分け、Aランクは30単位まで、Bランクは26単位までのような案が考案できる。この意味からも、「秀」の導入が有効である。

4. 北東北三大学単位互換への対応

弘前大学では、すでに平成19年度から「秀」の導入を決定しており、秋田大学でも話題となっている。全国の動向から考えても、秋田大学の導入も時間の問題であり、北東北

三大学でスムーズな単位互換を行う上でも、「秀」の導入が必要である。

5. GPAへの準備

特に関東以西の大学では、すでに「秀」やA+などを導入した大学が多数派である。北海道大学、東北大学もすでに導入している。これらの動きは、グレードポイントアベレージ（GPA）制度の導入を見越しての動きであり、本学においても中期計画にその検討が書き込まれ、大学教育総合センター教育評価・改善部門で、調査検討を開始している。「秀」の導入は、直ちにGPAの導入を意味するものではないが、将来のGPA導入への準備として必要な措置である。

今後のスケジュール

平成18年度第2回の大学教育総合センター運営委員会（4月27日開催）において、「秀」を導入する方向で、専門教育関係連絡調整部門にその検討が委ねられた。

今後は、専門教育関係連絡調整部門において、各学部の教務関係委員会での意見を持ち寄って検討を行い、了承が得られれば、全学共通教育企画・実施部門の了承を得た上で運営委員会に提案し、平成19年度からの実施を決定する。

平成19年度には、全学共通教育の改革が予定され、それに合わせて学務情報システムも新たなシステムの構築が計画されている。したがって、新システムの構築に合わせて「秀」の導入を図ることが最も得策である。そのためにも、新システムの仕様を定める8月までには、運営委員会で決定できるように審議を進める。

履修科目登録上限単位の見直しについて

大学教育総合センター長 玉真之介

1. 専門教育関係連絡調整部門における審議経過

- 5月10日：平成18年度第1回部門会議において議題2として審議し、資料2「22単位キャップ制導入に関する資料」に基づき、平成12年2月の教育協議会で設置された「岩手大学教育改善検討ワーキンググループ」による報告書において提案され、平成13年2月開催の教育協議会で「単位制度」の実質化を図ることを理由として、履修科目登録上限単位が設定されたことを確認した上で意見交換を行った。
- 6月14日：第2回部門会議において議題3として審議し、資料3「履修科目登録単位の上限設定の影響」に基づき、上限設定により卒業時の修得単位数が4～5単位減少していることを確認した上で意見交換を行った。
- 7月12日：第3回部門会議において議題2として審議し、意見交換の結果、教室外学習を充実させる方策と合わせて上限単位を緩和する方向で検討することとした。
- 9月13日：第4回部門会議において議題1として審議し、単位制度の実質化に努力しつつ、新しく導入されるアイアシスタントの教室外学習の活用等を踏まえて、上限単位を現行の22単位から24単位に緩和させる部門長提案について意見交換を行い、各学部を持ち帰って検討の後、次回に決定することとした。
- 10月20日：第5回部門会議において議題1として審議し、資料1「キャップ制の考え方」、並びに各学部からの報告を受けて意見交換を行った結果、単位制度の本来のあり方と現実には相当の乖離があることを踏まえて、改めて単位制度の趣旨を学生のみならず教員にも周知徹底すること、並びにアイアシスタントを活用して教室外学習を充実させることを条件に、上限単位を24単位に緩和する提案を了承した。なお、規則の改正は次回の部門会議で行うこととした。
- 11月17日：第6回部門会議において議題1として審議し、資料1「岩手大学における授業科目の履修登録単位数の上限に関する規則の一部を改正する規則（案）について」に基づいて、平成19年度より新入生、在学生両方について履修登録単位数の上限を24単位とすることを部門会議として了承し、運営委員会に諮ることとした。

2. 履修登録可能単位数を24単位とする理由

履修科目登録上限単位数は、単位制度の実質化を図るための手段として導入されたものであり、何よりも実質化の努力を最優先に検討すべきである。ただし、単位制度の本来のあり方と現実には相当の開きがあることから、学生からの登録単位を増やしたいという要望並びに教員からの学生指導の観点からの要望を考慮して、上限単位数を24単位に引き上げる。その際、学生はもちろん教員に対しても改めて単位制度の考え方を周知徹底するとともに、来年度から本格稼働するアイアシスタントを活用して教室外学習の充実に努めることも並行して行うこととする。

成績評価基準のガイドライン作成について

学務担当 玉真之介

1. 中期目標・中期計画及び18年度年度計画（＊）

I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 教育に関する目標

（1）教育の成果に関する目標

①学士課程においては、教育目標を実現すべく転換教育、教養教育、基礎教育及び専門教育にカテゴライズして、本学のいずれの学部学生にも必要な教養的基盤と基礎学力を備えさせる。さらに、学士課程における学習到達度を達成させるための厳格な成績評価に基づいて、学部毎の目標に沿った人材養成を目指す。

（2）教育内容等に関する目標

4) 成績評価に関する基本方針

学習活動全てにわたっての多様な評価を基に成績評価を行う。特に教室外での学習の評価にも重きを置く。

1 教育に関する目標を達成するための措置

（1）教育の成果に関する目標を達成するための措置

3) 教育の成果・効果の検証に関する具体的方策

①ユニバーサル化に対応して学力を保証するため、全ての授業科目について、成績評価基準（レベル）を明示するとともに、厳正な成績評価に基づくレベル制（4年一貫教育の下での学習到達度）を実施し、授業の進行に応じた学生の学習到達度を把握できるシステムを導入する。

（2）教育内容等に関する目標を達成するための措置

3) 授業形態、学習指導法等に関する具体的方策

①FDシステムを充実させ教育方法の継続的改善を図る。

②履修目的・目標に見合ったシラバスを作成する。

③教室外の学習をも重視した学習指導を実施する。

4) 適切な成績評価等の実施に関する具体的方策

①大学教育センターを中心に厳格な成績評価のための方法及び教室外学習の評価方法を構築する。

②教育目標の徹底とそれに基づいた履修目標による成績評価基準を作成し、成績評価の一貫性を実現する。

*** 18年度年度計画**

教育目標の徹底とそれに基づいた履修目標による成績評価のガイドラインを作成し、成績評価の一貫性を実現する。

③授業科目区分毎の成績評価結果のバランスに配慮した成績評価基準を作成し、適切かつ有効な成績評価を実施する。

*** 18年度年度計画**

授業区分毎の成績評価結果のバランスに配慮した成績評価のガイドラインを作成し、適切かつ有効な成績評価を実施する。

2. 背景と経過

2-1 1956年（昭和31年）省令「大学設置基準」

「1 授業科目を履修した者に対しては試験の上単位を与える。」

→実態として、成績評価がほとんど教員個人々の自由に任されていた。その下で多くの教員が再生産され、それが大学教育であるという誤解が一般化した。

2-2 1998年（平成10年）大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性輝く大学－」

2) 教育方法等の改善－責任ある授業運営と厳格な成績評価の実施－

①授業の設計と教員の教育責任：

授業の事前学習等の指示の徹底、教員の教育責任の徹底による責任ある授業運営

②成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施：

「大学の社会的責任として、学生の卒業時における質の確保を図るため、教員は学生に対してあらかじめ各授業における学習目標や目標達成のための授業の方法および計画とともに、成績評価基準を明示した上で、厳格な成績評価を実施すべきである。」

2-3 2000年（平成12年）2月、教育協議会に「岩手大学教育改善検討ワーキンググループ」設置（首藤文榮委員長、委員7名）

→2000年（平成12年）6月22日に「岩手大学における基本方針について」を答申

2) 教育方法等の改善－責任ある授業運営と厳格な成績評価の実施－

①授業の設計と教員の教育責任

単位制度は、履修の手引きにも明記されている通り、45時間の学習をもって1単位とする制度である。通常の講義科目においては、15時間の授業に対して、30時間の学外学習が課せられている。この単位制度を踏まえて責任ある授業運営をするために、教室内の授業だけでなく、教室外の準備学習・復習を含めたシラバスを作り、教室外学習の指導を徹底する必要がある。大学としてシラバスのスタイルを統一すべきである。

②成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施

教育の改善を図るためには、授業の方法及び計画とともに、成績評価基準を明示する必要がある。全学共通教育については、教育協議会でシラバスの様式を考え、評価欄に評価基準を明確に記入するようにする。大学として評価基準を作る必要があるが、とりあえず全学共通教育について分科会単位で検討する。成績評価を正確かつ公平に行うためには、教員の意思統一が欠かせない。また、前項及び本項に関するFDは、実効を期待できるであろう。評価法の一つとして、グレートポイントアベレージ（GPA）制度についても検討すべきである。さらに、成績不良者へのケアなどについては、別に対応策を考慮しなければならない。

また、通年制評価が、現在なお一部の科目で行われているが、半期ごとの単位数の上限設定や秋季入学などを想定すると、半期毎の評価システムとすべきである。

3. 成績評価基準についての基本的考え方（専門教育を中心に）

3-1 教育課程（教育プログラム）の教育目標と授業科目の関係

→学部・学科（課程）の教育目標（育成すべき人材が身につけるべき能力等）があって、個々の授業科目がその一端を担っているという理解を徹底する。

→授業を担当する各教員は、学部・学科（課程）の教育目標を十分に踏まえて授業計画を立案し、「授業の目的」にそれが反映されるように努める。

3-2 到達目標の設定

→教員が何を教えるかではなく、学生がこの授業でどのような能力等を身につけることができるかという観点からシラバスを作成する。

→授業を通じて身につけることができる能力等（何々ができるようになる）を到達目標としてできる限り具体的（複数）に明示する。

3-3 成績評価の基準

→中期目標の「成績評価の基本方針」に基づき、学期末の試験のみでなく学生の授業への出席状況、宿題への対応状況、レポート等、多様な成績評価の方法を取り入れるように努める。

→到達目標と成績評価の方法との関連がなるべくわかるように努める。

→アイアシスタントの「成績評価の方法と基準」に成績評価の方法（レスポンスカード、レポート、中間テスト、期末テスト etc）と評価割合、評価観点（関心・意欲・態度、知識・理解、技能・表現、思考・判断）を記入して、どのような観点を重視して評価するか明示する。

→成績評価は、原則として「絶対評価」とする。

3-4 成績評価基準のガイドライン

→成績評価の基準は、各授業科目の特性や目的等によって違うことは当然であるが、各授業科目は相互に関連し合っていることから、学科（課程）、コースなどで共通認識が作られる必要がある。

→各授業科目は学科（課程）の教育目標を達成するためにカリキュラムとして組み立てられているという観点から、学科（課程）ないしコース等の適切な授業区分で、成績評価の方法や基準について申し合わせたものが「成績評価基準のガイドライン」となる。

→その内容としては、例えば、「期末試験だけではなく2つ以上の評価方法を用いる」、「単純な出席は評価対象としない」、「期末試験の評価割合は最大6割までとする」、「秀・優の割合は50%を超えない」等、様々な項目が考えられる。

→学科（課程）ないしコースで合意できる大枠としての指針であり、各授業科目の特性や目的等に応じた裁量の余地は十分に保証される必要がある。

→講義科目など合意できるところでまとめ、ゼミや卒業研究の成績評価等、検討に時間を要するものは逐次つけ加えていくことでも構わない。

3-5 持続的なFD活動

→学科（課程）ないしコースで、ガイドラインに盛り込む内容やその改善について継続的に話し合うことがFD活動となる。

→学科（課程）ないしコースで、成績評価の結果について話し合い、極端に秀・優が多い科目や極端に不可が多い科目について、到達目標の設定をはじめとして原因や理由を組織的に検討する必要がある。

→今後は、学生による授業評価アンケートも活用して、授業改善に関して組織的な取組を行う必要がある。

以上

平成 19 年 3 月 15 日

一般（共通）教育等担当教員数の推移について（案）

大学教育総合センター
専門教育関係連絡調整部門

趣旨

○大学教育総合センター専門教育関係連絡調整部門では、専門基礎教育担当者の 3 月での定年退職を受けて、来年度の実施について調整を行った。その際、工学部教務委員長からセンター長宛てに「専門基礎教育科目の教育分担と実施について（工学部関係）」（平成 18 年 11 月 2 日）が提出された。

○この文書で工学部は、「基礎教育の充実を図る必要性は、当然のこと」だが、それは「大学の教員組織（教員配置）の問題と密接に関係」しているので、「教員配置数の推移を検証」し、「それに基づいて専門基礎教育の分担責任を再確認」する必要があるとしている。その参考資料として、「岩手大学発足（昭和 24 年度）以降の工学部関連における一般（共通）教育担当（供出）教官状況調べ」（平成 12 年 8 月 31 日）、「岩手大学人文社会科学部設置（昭和 52 年度）及び整備等に伴う教官定員状況調べ」（平成 13 年 6 月 15 日）、「人文社会科学部教員定員の推移」（平成 15 年 7 月 17 日）も提供された。

○それに先だち、センター長から人文社会科学部長宛に「専門基礎科目に関する人文社会科学部の基本的考え方」等を平成 18 年 10 月 31 日付で問い合わせ、それに対する回答が 11 月 7 日付で寄せられた。それには経過資料が添付されていた。

○以下では、工学部からの要請に応じて、本学発足以来の一般（共通）教育等担当教員数の推移をまとめ、必要と思われるコメントを行う。それにより、本学の専門基礎教育が危機的状況にあること、全学的な責任分担体制の再確認と再構築が必要なことが明らかとなった。

1. 発足時の一般教育等担当教員

○昭和 24 年（1949）6 月 1 日に岩手大学は、学芸学部、工学部、農学部の 3 学部で発足した。その際の教員数について、『岩手大学一般教育三十年史』（p47）には関文香・元教養部長の以下の文が引用されている。

「岩手大学の場合は当時の定員は、農専 58 名、工専 52 名、師範 74 名、青年師範 20 名、計 204 名であったが、申請する時には 252 名とし、その内訳は、一般教養 48 名、農学部 80 名、工学部 54 名、学芸学部 70 名であった。

しかし認可になった定員は 206 名で内訳は、一般教養 44 名、農学部 60 名、工学部 44 名、学芸学部 52 名となっていた。」。

ちなみに、関氏は岩手大学発足時に盛岡工業専門学校から一般教育等担当として学芸部に配置換えとなり、その後一般教育等部主事、教養部長を歴任した。

○発足時の「一般教養に関する教育」（以下、「一般教育」を略）は、学芸学部の実施するものとなり、関氏を含め工専から4名、農専から3名の教員が学芸学部へ配置換えとなった（『岩手大学五十年史』p83）。

○学芸学部が実施する一般教育に対して、工学部・農学部が授業、建物利用、予算など専門課程との区別を明確にすることを求めた結果、昭和29年（1954）2月25日の評議会で教養課程を一般教育部として独立的に運営する決定がなされた（同p92）。

○独立的運営に当たり上記評議会で決定された一般教育部の定員は、**人文系列8名、社会系列5名、自然系列12名、外国語8名、体育3名、計36名**であった（p43）。先の関元教養部長の記述に根拠があるとすると、一般教育部は8名不足であった。

○なお、この時点での入学定員は、学芸学部385名（210名は2年課程）、工学部120名、農学部180名、合計685名であった（『五十年史』p1008）。

2. 工学部の学生定員増による増員

○昭和33年（1958）工学部機械工学科（5名）、電気工学科（5名）、金属工学科（10名）の学生定員増により1名、昭和34年（1959）応用化学科新設により2名、昭和36年（1961）・昭和37年（1962）電気工学科学生定員20名増により2名、昭和38年（1963）機械工学第二学科新設により2名、**合計7名（教授5名、助教授2名）**が一般教育部の担当教員として増員となった（『五十年史』p96）。

○これにより、教養部設置直前の昭和39年（1964）時点における一般教育等担当教員の定員は、**人文系列8名、社会系列6名、自然系列14名、外国語12名、体育3名の43名**となった（同）。この際、教授1名をめぐって物理学と数学の間で調整がつかず、それぞれ0.5人として、1名を全学から借用する樋口盛一学長（工学部出身）裁定となった（同）。

○この時点での学生定員は、学芸学部285名（2年制課程を減らし4年制課程中心に学生定員を変更）、工学部250名、農学部180名、合計715名であった（同p1008）。

3. 学芸学部の教育学部への改組と教養部の独立

○昭和38年（1963）、中央教育審議会答申「大学教育の改善について」で教養部の設置が認められ、すでにその実態を持っていた岩手大学は、文部省の助言もあり、一般教育部をそのまま教養部として独立させる準備が進められた（同pp99-101）。

○しかし同じ時期、教育職員養成審議会から出された「教員養成制度の改善について」（昭和37年）という建議を発端として、文部省は昭和40年（1965）に学芸学部の名称を教育学

部に改めることや、課程・学科目に配置する教員数を省令で定めることとした（『岩手大学教育学部百年史』pp812-4）。

○この結果、岩手大学では、学芸学部教育学部への改組と教養部の独立が同時に概算要求されることとなった。その時、学芸学部（森嘉兵衛学部長）は、一般教育部教員も学芸学部の教員であること、「専門が弱体化するような条件で教養部の独立は認められない」の2点を主張し、教養部配置教員を28名とし、他はすべて教育学部とする案を強く主張した（『三十年史』pp45-7）。

○関主事をはじめ一般教育部教授部会は強く反発したが、独立を優先してその後に定員増に努力するという樋口盛一学長の提案を受け入れ、①教育学部に籍を置く助手2名を定員増まで一般教育等担当者とする、②数学・物理調整のため全学から借用した1名を継続する、の2点を条件に昭和41年(1966)2月13日の評議会で教養部定員を28名とする決定がなされた(同)。

○この結果、教養部定員は、**人文系列4名、社会系列5名、自然系列7名、外国語11名、体育1名、合計28名**となった（『五十年史』pp99-100）。独立が果たされたとはいえ、一般教育部の43名体制と比べて一般教育の弱体化は明らかであった。特に、自然系列は13名体制から8名（全学借用1を含む）体制へと4割減となった(同)。

○このため、昭和41年(1966)4月4日の評議会は教養部提出の「教養部発足に当たり特に確認していただきたいこと」3項目を了承した。「1. **不足定員については、全学で今後の充実をして行くよう配慮する。** 2. 授業は、学部、教養部相互に兼担し、或いは非常勤講師等により支障がないように配慮する。 3. 予算措置については、少なくとも従来通りの運営が出来るように全学的配慮をする。」

○これを受け、教育学部の教員が教養部兼担として、一般教育の授業を担当することで教員数の不足を補うこととなった。

4. 教養部独立後の配置教員数の推移

○「全学で今後の充実」と言っても、それを担保する手だてではなく、高度経済成長と共に急成長した工学部を中心に、各学部の学生定員増だけが教養部の配置教員増に寄与するものだった（『三十年史』p53）。

○教養部発足の昭和41年(1966)電子工学科新設に伴う2名、翌昭和42年(1967)教育学部養護学校教員養成課程新設、農学部農業機械学科新設に伴う2名、昭和43年(1968)農学部・工学部臨時増募に伴う2名、昭和48年(1973)土木工学科新設に伴う1名、昭和50年(1975)情報工学科新設に伴う2名、昭和51年教育学部小学校教員養成課程学生増による2名の計11名が教養部時代の増員である(同p158、p300)。

○ただし、昭和46年(1971)には定員削減により1名減となっており、昭和51年(1976)時点の定員数は38名で、未だ一般教育部当時の43名を回復していなかった(同)。

○この時点での入学定員は、教育学部350名、工学部360名、農学部210名、合計920名であった。学生数の増加に伴い、クラスサイズが拡大し、学外非常勤講師数も増加して30名を超えるようになった(同)。

5. 人文社会科学部の創設と一般教育等担当教員数

○昭和52年(1977)の人文社会科学部創設により、教養部定員38名に加えて新たに54名の教員が純増となり、教員定員92名、学生定員200名の新学部が生まれた。

○この新学部は、将来計画委員会等における全学的な議論を通じて「専門教育と一般教育との一体化」を創設理念に掲げ、その具体化として新学部所属の教員すべてが専門教育、一般教育の両方を担当することとなった。その結果、教養部が残る他大学のように、一般教育等担当者数は数字として明確には現れなくなった。このことが、平成12年度(2000)改組以来、工学部から「教員配置」が問題として提起される背景である。

○それに関して工学部提出の参考資料は、工学部増設による一般教育等担当教員を12名(一般教育部時代7名、教養部時代5名)とし、それらが教養部から移行した38名の一部として人文社会科学部92名に含まれるものとしている。

○この理解は、発足時の36名に、工学部増設12名、農学部増設2名、教育学部増設3名が加わって53名が人文社会科学部へ移行したのであれば、何ら問題はないが、実際には教養部から移行した担当者数は38名であって、発足時を2名上回るにすぎなかった。

○その理由は、昭和41年(1965)2月13日の評議会決定により教養部定員が一般教育部の43名から28名に15名も削減されたからである。3つの専門学部の集合であった当時の岩手大学に、一般教育の重要性を主張してその教員確保を断固主張する部局は無かった。その結果、工学部の増設で折角増えた一般教育等担当教員も大幅に減らされた。

○その意味で、工学部増設による一般教育等担当教員数の問題は歴史的な経緯を踏まえて捉える必要があり、工学部と人文社会科学部との2部局間だけの問題として捉えることは適切とは言えない。

○人文社会科学部の創設により、教養科目は17科目から26科目へ増え、新たに総合科目が6科目新設され、外国語・保健体育科目も大幅に充実した。これは、教養部にだけ一般教育を委ねていた他大学には見られない本学の重要な特質である。

○戦後の大学教育は一般教育と専門教育を建前では両輪としてスタートしたが、一般教育を担う組織は無かった。本学は学芸学部一般教育部を作ったが、部局以下の弱体なもので、教養部の発足時には専門重視・教養軽視という傾向が見られた。教養部の独立は一步前進であったが、そもそも定員配置が少ないだけでなく学部より低い位置づけでしかなかった。人文社会科学部の創設は、一般教育を担う組織が専門学部と対等の学部として作られたことを意味しており、この岩手大学にとっての意義は、全学的に確認する必要がある。

6. 人文社会科学部創設後の定員数の推移（専門基礎担当を中心に）

○昭和 52 年に旧教養部から人文社会科学部へ移行した 38 名の内、自然系教員は**数学 4 名、物理 3 名、化学 3 名、生物 2 名、合計 12 名**であった。

○人文社会科学部の創設に伴う 54 名の教員増により数学、物理、化学、生物にそれぞれ 1 名が配置され、設置された基礎自然科学講座教員は、**数学 5 名、物理 4 名、化学 4 名、生物 3 名、合計 16 名**の体制となった。

○昭和 54 年、工学部資源化学科設置に伴い、人文社会科学部に一般教育等担当として 2 名が増員となり、その内の 1 名が化学に配置された。また、平成 3 年の工学部改組による学生定員増（30 名）で、3 名が人文社会科学部に増員となり、その内の 2 名が数学と物理に各 1 名配置された。要するに、工学部増設によって 5 名が人文社会科学部に配置され、その内の 3 名が基礎自然科学に配置されたことになる。

○この結果、平成 12 年改組直前における**基礎自然科学教員は、数学 6 名、物理 5 名、化学 5 名、生物 3 名の 19 人体制**となった。なお、この間に臨時増募による教員数の増減があるが、それは臨時的なものであり、この結果に影響していない。また、昭和 61 年(1986)に定員削減により人文社会科学部の教員数は 1 名減となったが、基礎自然科学には影響していない。

○この間、平成 3 年（1991）の大学設置基準大綱化により、一般教育と専門教育との区分が廃止された結果、教養部を廃止して教員を専門学部に分属させ、学士課程を 4 年一貫教育として実施する大学が相次いだ。本学でも、平成 3 年(1991)に一般教育を「**全学共通教育**」（以下、「**共通教育**」と略）と名称を改め、翌年には教養課程の教育を検討するための「**教養課程運営特別委員会**」を設置した。

○大綱化を踏まえて人文社会科学部では、平成 5 年(1993)に「**環境情報科学コース**」が開設された。また、学部の学生定員 15 名増に伴い教員 3 名（内、1 名助手）が増員となって科学論講座に配置された。この結果、人文社会科学部は学生定員 215 名、教員定員 98 名となった。

○教養部時代の名残として、人文社会科学部創設後も続いてきた移籍制度（学生が入学時

には人文社会科学部籍になり、2年次以降に自分の学部へと移籍する)の問題が「二重籍問題」として、平成9年(1997)設置の教育協議会で議論されたが、その解消は平成12年度改組に持ち越された。

7. 平成12年度全学改革による教員移動

○平成9年(1997)の教員養成募集定員5千人減という政府方針がきっかけとなり、改革委員会(委員長、海妻矩彦学長)において全学改革が検討され、平成12年度概算要求に伴う「教官定員移動」が平成10年9月の案で決着を見た。この全学改革は、①全学共通教育の全学実施体制、②教育学部の改組・募集定員純減並びに工学部(30名)、人文社会科学部(10名)への学生定員移動、③人文社会科学部の課程制への移行と環境科学課程の設置、④工学部の福祉システム学科の設置、⑤農学部の学科改組などを内容としていた。

○この改革に伴い人文社会科学部は、①教育学部の学生定員60名純減による3名純減、②工学部の福祉システム学科(定員40名)設置に伴う2名の移動、③「専門基礎教育」の共通教育から専門教育への変更に伴う工学部・農学部へ各2名の移動を行った(合計9名減)。④保健体育教員の教育学部への3名移動。⑤環境科学課程(定員30名)新設に伴う入学定員10名増に対応した教員1名増と教育学部から1名移動があった。

○この結果、人文社会科学部の教員定員は、98名－9名－3名＋2名により88名となった。この内、農学部への2名は、農学部が「全学的見地に立って」工学部の新学科設置に2名を移動させることとセットとなっていた(農学部は実質プラマイゼロ)。換言すると、専門基礎教育の専門教育への変更に伴う4名の移動は実質工学部へ移動したと見ることもできる。自然系(基礎自然科学と科学論)にはこの4名に純減3名の内の1名、さらに環境科学課程立ち上げに伴う文系環境教員のための1名減が割り当てられ、合計6名の定員減が決まった(基礎自然科学5名、科学論1名)。

○ただし、この6名の減員・移動は、定年退職の不補充という方法によるため、定員と現員が乖離した状態が長期間続くこととなった。すなわち、4名の定員移動はH12に終わっているが、現員の削減はH15に1名(化学)、H16に2名(化学、物理)、H18に1名(生物)、H19に1名(数学)、H20に1名(科学論)と8年間かけて行われ、ここでようやく定員と一致する。そこでの基礎自然系の総数は、数学(5名)、物理(4名)、化学(3名)、生物(2名)の14名体制である。

○その間の専門基礎教育は、現員が引き続き教育を担当するものとして、定年退職で現員が減るたびに翌年度の担当者やコマ数を調整するという合意で進められた。H15の化学、H16の化学と物理、H18の生物は、その都度、人文社会科学部と工学部・農学部の間で調整されたが、H16の物理については、人文社会科学部と工学部との間の調整がつかず、非常勤講師で手当された。

○平成12年度改組は専門基礎教育について言うと、①工学部が主張するように、歴史的経緯を踏まえた教員配置と移動についての全学的な理解と合意が不十分であったこと、②定員と現員が乖離する期間についての基本方針とその後の体制が明確にされなかったこと、③専門教育と位置づけられても主たる担当者が人文社会科学部所属という関係から実施責任が曖昧となったこと、など重大な問題を作り出すこととなった。

8. 法人化後の人員変化と今後の専門基礎教育

○法人化の段階で、人文社会科学部では第10次定員削減の2名及び全学供出2名、合計4名の削減が必要となり、その内の1名が講座ローテーションにより基礎自然講座に割り当てられた。さらに、平成17年度になって5%削減対応として学部4のうちの1名が基礎自然系への割り当てとなり、この結果、H21に2名(数学、物理)を定年退職時点で削減することになった。それに伴い法人化第1期終了時点での基礎自然系総数は、**数学(4名)、物理(3名)、化学(3名)、生物(2名)の12名体制**となることが決定した。

○この12名は、本学発足時の一般教育部の自然系教員数と同数である。当時の学生定員は現在のほぼ半分であった(685名、内2年課程210名)ことから見ても、専門基礎教育を人文社会科学部の基礎自然系教員だけに期待することは、そもそも無理である。それ以前に、平成12年度全学改組で4名の専門基礎教育担当定員が農学部・工学部へ移動している。

○以上から導かれる結論は、現状の専門基礎教育が危機に瀕しているということである。現員が減るたびに調整を行ってきたが、担当者の減少によりその実施体制は限界に近づいている。それに加えて、平成18年度(2006)から新学習指導要領で教育を受けた学生が入学し、基礎学力の不足や理科選択による未履修により、新たな対応を専門基礎教育に迫っている。的確な対応がなされない時には、特に工学部・農学部において、授業についていけない学生の増加、休学・退学の増加、専門教育のレベルダウン、大学院進学者の減少などが強く危惧される。

○専門基礎教育の実施責任は、教育学部・工学部・農学部にあるが、大学の中期目標には、学士課程を「専門教育中心のシステムから教養教育を中心とし専門分野の基礎教育を充実させるシステムへの移行を図る。」と書かれている。その意味で、切実かつ喫緊の課題となっている工学部と農学部のみならず、専門基礎教育の充実は全学的な課題である。

○全学共通教育に関する全教員参加の分科会組織、教員養成の全学組織としての教員養成機構、教員の一元的所属組織の学系などの全学的な体制整備に呼応して、専門基礎教育についても全学的実施体制が早急に検討される必要がある。そのためには、議論を大学教育総合センター専門教育関係連絡調整部門にとどめるのではなく、教育推進本部が中心となって、岩手大学の教育改革の一部分と位置づけて全学的な議論を行う必要がある。

一般(共通)教育等担当教員数の推移 (総括表)

一般教育部時代

年度	人文	社会	自然	外国語	保体	合計	学生数	学生増
1954	8	5	12	8	3	36	680	
1958						37	615	工学・機械ほか 20
1959						39	655	工学・応化新設 40
1962						41	675	工学・電気 20
1963	8	6	14	12	3	43	715	工学・機械新設 40

備考：この時点での自然系列の担当者数内訳

(数学4 物理4 化学4 生物2 家政1 合計15 内借用1)

教養部時代

年度	人文	社会	自然	外国語	保体	合計	学生数	増減理由
1966	4	5	7	11	1	28		
1966						30	750	工学・電子 30
1967						32	800	教育・養護 20、農学・農機 30
1968						34	835	農学 15・工学 20 (臨時増募)
1969						34	820	工学・資源 20 (臨増振替)
1971						33	820	定員削減で1名減
1973						34	840	工学・土木 20
1975						36	880	工学・情報新設 40
1976			12			38	920	教育・小学校 40

備考：この時点での自然系列の担当者数内訳

(数学4 物理3 化学3 生物2 計12)

人文社会科学部時代

	人社	自然系	数学	物理	化学	生物	教育学部	工学部	農学部
1977		16	5	4	4	3			
1982		19	6	5	5	3			
1999	98	19	6	5	5	3	103	147	118
2000	88	14(19)	5(6)	4(5)	3(5)	2(3)	97	156	117
2003		14(18)	5(6)	4(5)	3(4)	2(3)			
2004		14(16)	5(6)	4	3	2(3)			
2006		14(15)	5(6)	4	3	2			
2007		14	5	4	3	2			
2009	81	12	4	3	3	2	90	147	113

(注) カッコ内は現員数



學生生活支援部門

平成18年度 学生生活支援部門会議

	氏名	所属
部門長	玉 真之介	大学教育総合センター
兼務教員 (学部学生委員会選出)	菊池 孝美	人文社会科学部
	武田 京子	教育学部
	一ノ瀬 充行	工学部
	東 淳樹	農学部
学部選出委員	河田 裕樹	人文社会科学部
	菊地 悟	教育学部
	堺 茂樹	工学部
	黒田 榮喜	農学部
学生支援課長	菊地 壮	学務部

平成 18 年度 活動報告

部門長 玉 真之介

平成 17 年度まで全学学生委員会が扱ってきた学生生活支援の課題は、平成 18 年度から大学教育総合センターの学生生活支援部門に引き継がれることとなった。その際、学生委員会が各学部選出委員 4 名という大所帯だったのを、各学部の兼務教員 1 名と各学部選出教員 1 名にスリム化した。学生支援課長も委員となり、部門長は当面の間、センター長が兼務することとなった。

全学学生委員会の所管の事項はすべてこの部門に引き継がれたが、新しく期待されたのは兼務教員による企画力の向上と他の部門、とりわけ正課教育との連携強化である。

部門が最初に取り組んだのは、授業料免除基準の見直しである。法人化と同時に、なるべく多くの学生に授業料免除を行う趣旨から、免除基準を半額免除基準とし、免除対象者を増やした。それが法人化 2 年目から申請者の激増となり、適格者であっても予算の制限から免除できない事態となった。このため、授業料免除基準を全額免除基準へ戻した上で、免除額としては半額免除を基本とするという新しい方式へ規則の改正を行った。

レッツびぎんプロジェクトは例年通り実施し、11 件の応募から 9 件を選定した。今年度は、最終活動報告を新入生に聞かせるにはどうすれば良いか検討し、優秀な活動 2 件に入学式のオリエンテーションの場で報告させることを決めた。

がんちゃん奨学資金は、貸与希望者が急増した。平成 17 年度の 1 件から平成 18 年度は 22 件となった。

クラス担任と保健管理センター・カウンセラーとの懇談会は、昨年を引き続いて実施された。また、クラス担任の仕事を明確化し、全学統一的行うための『クラス担任教員ハンドブック』の作成を行った。

1 年間の活動を通じて、部門の課題も明確となってきた。まず、学生寮の改修について法人化後の新しい条件の下でプランを立てる必要がある。学生の不祥事について、全学統一な懲戒の基準を定める必要もある。課外活動の現状について調査し、顧問教員に対する手引きの作成や評価も検討する必要がある。バイク・自転車の駐輪場を整備し、マナーを徹底することも急がれる。

これらを来年度の課題として続き、さらに機動的に活動を行うことが課題である。

平成18年度 「Let`S びぎん プロジェクト」採択一覧

No.	区分	プロジェクト名	概要	要
1	II	明日の地球を岩手の子供達とともに考える ～エネルギー・環境科学を楽しく学ぶ教材の開発と実践～	就学前の年代から中学生までの年代を対象とし、楽しみながらエネルギーや環境を科学的に理解することができる教材を開発し、公民館等に於いて理科教室、工作教室を開催し、明日の岩手・地球を担う子供達が、岩手、日本、地球の明日の環境についてともに考える機会を作る。 大学の機材や材料を利用すると市販品にはない味のある地域に結びついた教材を作り出せる。大学の資産を代利用して、地球温暖化や、自転車発電機、燃料電池やバイオマスが学べるような教材を作り、イベントなどを通して子供達に楽しく学んでもらえる場を作り出すことを目的とする。	
2	II	レッツビギン・オリエンテーリングプロジェクト	一昨年より我々は高松の池周辺を舞台に地域再発見を狙いとしたオリエンテーリング大会を開催している。今回はオリエンテーリングをスポーツとして純粋に楽しんでもらうことを目標として、小学生とその保護者を対象とした大会を高松の池周辺で、地域の住民を対象とした大会を県営運動公園で、岩手大学祭の来場者を対象に大学構内において大会を開催する。これらを通じてこのスポーツの特性を理解してもらい、地域におけるレクリエーション活動の一つとしてオリエンテーリングを活用してもらうことを目的とする。	
3	II	友部正人 ポエトリーリーディング	現役で活躍している詩人の朗読会を農学部附属農業教育資料館で開催し、普段接する機会のない学生や一般の方に提供する。 これにより、学生や一般の方に貴重な歴史的遺産である農業教育資料館に触れてもらうとともに、岩手大学の歴史を知っていただく。 また、学生が主体となった活動を知ってもらい、多くの学生が大学のことを自ら考えよい大学とするための企画を立ち上げ実行するきっかけとなることを目的とする。	
4	I・II	いけいけ プロジェクト	このプロジェクトは里地里山の2次的自然環境保全のために、地元農家や地方自治体などと連携しながらため池・上水路・小区画水田の保全活動を行おうというものである。 活動対象地区である「いさわ南部地区」では大規模な圃場整備事業が開始されたが、生態系保全ならびに農村景観保全のために残された農業施設(ため池等)の管理問題が浮上している。残された施設は工事によって本来の機能を失ったこともあり、維持管理を誰が行うかが大きな問題となっている。 私たちは、この地区の調査に関わる中でこの問題を知り、計画的に残された施設の維持管理に自ら計画的に関わることによって本地区の自然生態系や景観保全に貢献したいと考えるようになった。 また、私たちの活動は地元農家の維持管理労力を少しでも軽減することが当面のねらいではあるが、将来的には農村の自然生態系や景観保全のために、非農家も交えた維持管理の仕組みを作っていくモデルにもなりうると考えている。	

No.	区分	プロジェクト名	概要
5	II	猫の手プロジェクト2006	盛岡で生活するようになり、日々の生活や昨年度の活動を通して、私たちは盛岡の潜在的な資源が活かされていない・知られていないことに問題意識を抱いていた。これまでの活動で得られた経験や多くの意見をそのままにはいけなそうと思ひこの企画を立ち上げた。 企画の目的とするところは、盛岡地域の潜在的資源(魅力)を住民や学生に理解してもらひ、各々が自分の暮らす街である盛岡に関心を持ち、盛岡に対する意識を高め、まちづくりへの関心・参加へのきっかけとなること。 また、盛岡だけでなく岩手大学についても知ってもらひ、大学と地域住民との間に深いつながりを形成すること。 以上の2つを当企画の目的として活動する。
6	III	キノコパワー2006	Honda 4 ストロークエンジンを使用したマシン(三輪車)を製作し、「大会の完走・燃費の向上」を目標として、9月30日から10月1日に開催される「第26回本田宗一郎杯 Honda エコノパワー燃費競技全国大会」へ参加する。燃費記録を出すことを目指す。
7	III	第1回 全国宮沢賢治学生大会	この大会を学生が主体となり開催し全国に発信していくものにする。これを通じて宮沢賢治に関心を持つ人を増やし、一人でも多くの人と賢治の魅力を語り合う。学内だけではなく、賢治に興味のある周辺地域の方々を巻き込み、全国も視野に入れた形で大会を進行していくことにより、様々な賢治の姿を共に学び合い、交流し合う。 学内の学生については、後輩として賢治を知り、岩手大学を卒業後、賢治について問われた際に、この大会を通して知ったり学んだりしたことを参考にして説明できるようにする。 賢治を研究をしている学生だけではなく、賢治についてあまり知らない学生も含んだうえで学部横断的に大会を行い、この大会自体、またそこで知った賢治の知識や興味・関心を「学生間のコミュニケーション」や「地域との繋がり」の架け橋にする。
8	I	自然たんけん隊 ～岩手の不思議発見!! ～	理科は私たちの身近で起こっている現象・事物等を学ぶ学問である。しかしながら近年OECDやIEAの調査で日本の科学的リテラシーが高水準である一方、生徒児童の理科に対する意欲等の水準が低いこと、つまり生徒児童の「理科離れ」が今日問題になっている。 以上のことから岩手県の豊かな自然を教材とし、物理・化学・生物・地学の各方面から自然に対するアプローチをすることで、理科という学問に興味を持ってもらおうと共に、理科に必要な不可欠な「探求心」を児童生徒自身に持ってもらひ、身近な岩手の自然にふれあうきっかけ作りの場を作ろうと考え、岩手県の自然環境に関する実習会を行ないたい。

No.	区分	プロジェクト名	概要	要
9	I	リユースの輪を確かなものに	<p>私たちが以前から行ってきたリユース活動によって、岩手大学内の学生はもとより、学外にも飛び出し、地域住民の環境問題に対する意識を高める。</p> <p>資源の有効利用の促進として、繰り返し物を使うという意味である「リユース」へのきっかけを作り、不要品を持つ人とそれを必要とする人との架け橋の役割を私たちが果たす。長期継続することによってより、更なる結果を残していくと考える。</p> <p>「リユース(Reuse)」とは再使用のことで、一度使ったものをすぐにゴミにするのではなく、もう一度使うことで資源を有効利用すること。リユースに対し「リサイクル」という言葉があり、これはいったん原料に戻してまた使用することである。これに対し、私たちが行う「リユース」はそのままの形で繰り返し使用することなので、リサイクルに比べかなりエネルギー消費を抑え、また廃棄物を削減することになり、非常に環境に優しいと言える。</p>	

カテゴリーⅠ：学内外の環境改善に関するテーマ、 カテゴリーⅡ：地域を対象としたテーマ、
 カテゴリーⅢ：その他のテーマ

岩手大学学生表彰被表彰候補者推薦名簿

個人

平成17年12月12日表彰

番号	候補者		表彰区分	推薦者	推薦理由
	氏名	所属			
1	畠山 英一	平成17年度入学 工学研究科 機械工学専攻	表彰規則 第2条第4号 (人命救助)	学務部長 畑中 文穂	・平成18年10月4日の22時30分すぎに盛岡市上田3丁目14-32の民家が全焼した火災において、偶然現場近くにおいて火災を発見、119番通報すると共に、逃げ遅れた家人の救出活動に当たった。
2	花田 賢介	平成17年度入学 工学研究科 機械工学専攻	表彰規則 第2条第4号 (人命救助)	学務部長 畑中 文穂	・平成18年10月4日の22時30分すぎに盛岡市上田3丁目14-32の民家が全焼した火災において、偶然現場近くにおいて火災を発見、119番通報すると共に、逃げ遅れた家人の救出活動に当たった。
3	野中 寿美恵	平成18年度入学 工学研究科 機械工学専攻	表彰規則 第2条第4号 (人命救助)	学務部長 畑中 文穂	・平成18年10月4日の22時30分すぎに盛岡市上田3丁目14-32の民家が全焼した火災において、偶然現場近くにおいて火災を発見、119番通報すると共に、逃げ遅れた家人の救出活動に当たった。

個人

平成18年3月19日表彰

番号	候補者		表彰区分	推薦者	推薦理由
	氏名	所属			
1	村上 貴宣	平成16年度入学 連合農学研究科 生物資源科学専攻	表彰規則 第2条第1号 (研究活動)	連合農学研究科 橋本 勝	・在籍中の3年間で、学会発表21件と7報の論文、1編の学会誌記事 ・2004年に第1回日本農芸化学会東北支部学生奨励賞受賞
2	石黒 貴寛	平成16年度入学 連合農学研究科 生物資源科学専攻	表彰規則 第2条第1号 (研究活動)	連合農学研究科 小野 伴 忠	・2004年Food science and technology research誌論文受賞 ・2007年日本農芸化学会東北支部若手奨励賞受賞
3	野中 寿美恵	平成16年度入学 (博士課程3年次) 連合農学研究科 生物生産科学専攻	表彰規則 第2条第1号 (研究活動)	連合農学研究科 橋爪 力	・2007年度日本畜産学会奨励賞受賞 (昭和39年本学畜産学科設立以来初の受賞)

平成18年3月19日表彰

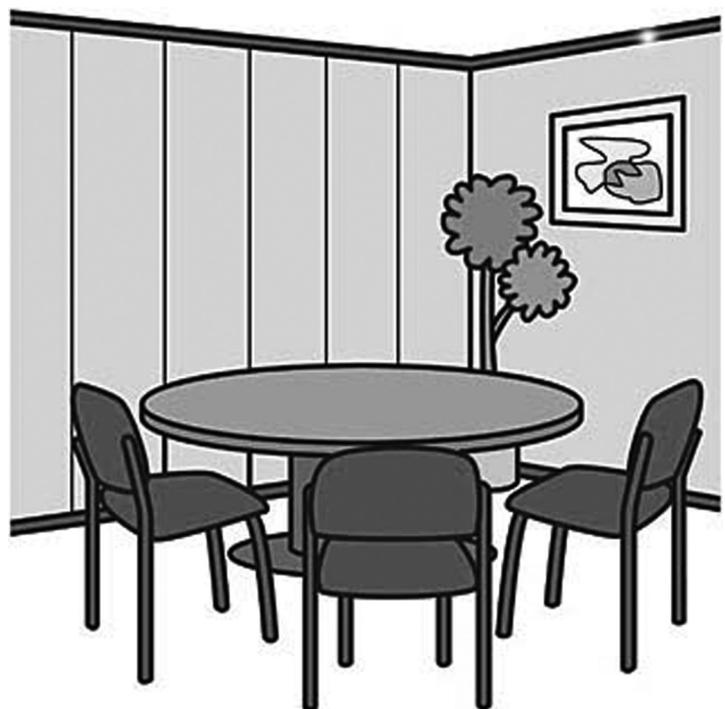
個人

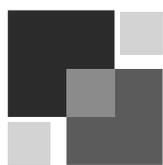
番号	候補者		表彰区分	推薦者	推薦理由
	氏名	所属			
4	在原 泉	平成16年度入学 教育学研究科 教科教育専攻	表彰規則 第2条第1号 (研究活動)	教育学部長 星野 勝利	・平成18年12月開催の「第18回日本声楽コンクール」5位 入賞
5	松崎 義孝	平成18年度入学 工学研究科 建設環境工学専攻	表彰規則 第2条第1号 (研究活動)	建設環境工学科学科長 工学部教授 海田 輝之	・平成18年8月 国際水理学会の国際シンポジウムで学生論文賞受賞
6	及川 絵里	平成18年度入学 工学研究科 応用化学専攻	表彰規則 第2条第1号 (研究活動)	工学部教授 森 誠之	・平成18年10月 第3回アジアトリブ'06金沢でBest Poster Presentation賞受賞
7	角山 美穂	平成18年度入学 教育学部 生涯教育課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	陸上競技部顧問 教育学部助教授 清水 茂幸	・平成18年9月9日～10日 第1回日本学生陸上競技チャンピオンシップ大会 女子走幅跳 第8位入賞
8	熊谷 成悟	平成17年度入学 教育学部 生涯教育課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	陸上競技部顧問 教育学部助教授 清水 茂幸	・平成18年9月9日～10日 第1回日本学生陸上競技チャンピオンシップ大会 男子200m 第5位入賞
9	佐々木 彩野	平成18年度入学 教育学部 学校教育教員養成課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	陸上競技部顧問 教育学部助教授 清水 茂幸	・平成18年9月9日～10日 第1回日本学生陸上競技チャンピオンシップ大会 女子砲丸投 第4位入賞
10	國分 優佳	平成18年度入学 教育学部 生涯教育課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	陸上競技部顧問 教育学部助教授 清水 茂幸	・平成18年9月9日～10日 第1回日本学生陸上競技チャンピオンシップ大会 女子100mハードル 第8位入賞
11	渡邊 慎也	平成17年度入学 教育学部 生涯教育課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	陸上競技部顧問 教育学部助教授 清水 茂幸	・平成18年9月9日～10日 第1回日本学生陸上競技チャンピオンシップ大会 男子10000m競歩 第8位入賞

平成18年3月19日表彰

個人

番号	候補者		表彰区分	推薦者	推薦理由
	氏名	所属			
12	舟山 萌美	平成18年度入学 教育学部 生涯教育課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	陸上競技部顧問 教育学部助教 清水 茂 幸	・平成18年9月9日～10日 第1回日本学生陸上競技チャンピオンシップ大会 女子400mハードル 第5位入賞
13	加賀 雄大	平成16年度入学 人文社会科学部 法学・経済課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	競技舞踏部顧問 工学部教授 成田 栄 一	・平成18年12月10日 第51回全日本学生競技ダンス選手権大会 第6位(モダンの部クイックステップ種目)
14	寺島 陽子	平成16年度入学 人文社会科学部 法学・経済課程	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	競技舞踏部顧問 工学部教授 成田 栄 一	・平成18年12月10日 第51回全日本学生競技ダンス選手権大会 第6位(モダンの部クイックステップ種目)
15	狩野 亮	平成16年度入学 工学部 福祉システム工学科	表彰規則 第2条第2号 (課外活動)	競技スキ一部顧問 工学部教授 藤田 尚 毅	・平成19年1月13日～14日 第15回全日本チエアスキーチャンピオンシップin志賀で 回転座位とスパー大回転座位の二種目で優勝
16	竹重 友視	平成17年度入学 工学研究科 応用化学専攻	表彰規則 第2条第3号 (社会活動)	工学部教授 成田 栄 一	・平成18年11月30日 善行青少年として内閣府特命担当大臣表彰を受賞





就職支援部門

平成18年度 就職支援部門会議

	氏 名	所 属
部門長	玉 真之介	大学教育総合センター
各学部就職委員会選出・兼務教員	堀毛 一也	人文社会科学部
	大河原 清	教育学部
	西谷 泰昭	工学部
	木村 伸男	農学部
就職支援課長	後藤 周悦	学務部

平成 18 年度 活動報告

部門長 玉 真之介

平成 17 年度まで全学就職委員会で扱ってきた就職支援の課題は、平成 18 年度から大学教育総合センターの就職支援部門に引き継がれることとなった。その際、部門のメンバーは各学部 2 名であった全学就職委員会を各学部 1 名の兼務教員にスリム化した。メンバーには就職支援課長が加わり、部門長は当面の間、センター長が兼務することとなった。

この他、定例の部門会議には、ジョブカフェいわてのカウンセラー中村謙一さんと入試部門の永野専任教員がオブザーバーとして加わり、特に永野教員は受験生への就職情報の提供の観点から様々な発言があり、部門間の連携という課題の一端が果たされた。

部門会議では、今年度実施する企業訪問に向けて、統一アンケートの質問項目について検討を行った。

各種の就職ガイダンスは前年度を参考としつつ継続して実施すると共に、新しいキャリア科目として、中村謙一さんに OB・OG による講義も織り込んだ「キャリアを考える」を開講していただいた。

夏からは兼務教員並びに学部の就職委員会の委員に就職支援課職員とペアで企業訪問をお願いし、最終的に 147 社の訪問を実施した。そこで集まったアンケートを集計した結果、本学の卒業生は「積極性(意欲、行動力)」「コミュニケーション力(表現力、説得力)」が他の能力と比較して企業による評価が低いことが明らかとなった。

これらのデータは教育部門で検討し、評価を高めるための意識的な取組へとつなげていく必要がある。

今年度も 2 月 28 日から 3 月 2 日までの 3 日間、中央食堂を会場に企業合同説明会を実施した。午前・午後の入れ替えで 353 社がブースを構えて学生との面談に応じた。今年度はこの実施について部門会議で検討を行い、企業から参加費を徴収すると共に業務を生協にアウトソーシングして大幅な合理化を図った。結果は、参加した企業も概ね好評であった。

企業による求人状況が大きく変化していることから、来年度は、開催時期を 9 月、12 月、2 月の 3 回とすることも決定した。

来年度の現代 GP に向けて県立大学や岩手県と協議を行い、「地元定着のための産学官連携のキャリア支援」で申請することを部門会議で決定した。採択されるかどうかはわからないが、それにかかわらず来年度から県立大学と協働してアイーナを会場にキャリア教育を充実することとなった。

就職支援課の活動報告(17, 18年度)

(就職支援課)
(19. 4. 23作成)

区 分	訪 問 先	企業訪問		備 考	
		17年度	18年度		
企業訪問	盛岡市	29	26	本学のPRを行うと共に、訪問先企業の理解を深め、企業側と相互協力関係を築くことにより学生の就職先を確保することを目的として、5年前から就職担当教職員による企業訪問を始めた。学生の根強い地元志向を考慮し、17, 18年度も東北6県の企業を訪問し、併せてアンケート調査も行った。	
	県央(花巻・北上)	11	13		
	県南(水沢・一関)	13	13		
	沿岸(大船渡・釜石)	12			
	仙台市	47	46		
	青森市		11		
	八戸市	12	13		
	秋田市	10	10		
	郡山市	5	5		
	福島市	5	5		
	山形市	5	5		
	計	149	147		
	学内企業 合同説明会	参加企業数	324		353
(実施日)		(18.3.1~3)	(19.2.28~3.2)		
求人情報公開システムへの登録企業件数		4,400	5,600	※2	
「岩手大学就職応援ブック」作成配付 (学部3年次、M1年次)		○	○	※3	
「ジョブカフェ岩大スポット」開設		○	○	※4	
「キャリアを考える」講座開講			○	※5	
「就職ガイダンス」		47	40	※6	
「公務員試験対策講座」の充実		○ 合格150、内定36	○ 合格259、内定76	※7	
「教員採用セミナー」の充実		○合格45	○合格41 他学部も受講可	※8	
就職率(%)	学 部	人文社会科学部	89.2	93.4	18年度の就職率は過去最高
		教育学部	70	91.2	
		工学部	95.7	98.1	
		農学部	97.1	95.3	
		計	87.5	94.8	
	大 学 院	人文社会科学	90.9	91.7	
		教育学	96	80	
		工学(前期)	97.8	100	
		工学(後期)	81.8	90.5	
		農学	94.4	95.7	
		連合農学	100	100	
		計	96.5	96.4	
職 員 数	〈※〉は、キャリア・アドバイザーで内数		5 (1)	5 (1)	
	〈〉は、フルタイム非常勤職員で内数				
	〈 〉は、パートで内数				

※1 「学内合同企業説明会」

平成18年度開催の「学内合同企業説明会」は、2月28日～3月2日の3日間、学内の学生食堂ホールに於いて353社の企業と、延べ2,760人の学生の参加で行われた。同説明会は、5回目を数え、就職率向上に貢献している事業の1つで毎年3月上旬にブース形式で開催しており、企業・業界研究として採用担当者と直接面談し体験する貴重な就職活動となっている。同説明会は、企業の要望により毎年規模を拡大して実施してきた。なお、18年度は同説明会に関する業務の一部を岩大生協に委託し、その費用は参加企業からの協賛金を充てて実施した。

なお、19年度は、同説明会を更に発展させ、3回（「夏季合説」「冬季合説」「春季合説」）実施する予定である。

※2 「求人情報」公開システム

『「求人情報」公開システム』は、地域、業種別等の条件設定により、効率的に検索するシステム。

学生に好評で就職率向上に大きく寄与している。訪問先企業の選定や「学内合同企業セミナー」の企業冊子の作成などにも同システムを活用しており、同システムへのデータベース企業数は5千社を超え年々充実してきている。また、「学生の進路・就職システム」の活用により、きめ細かな個別の就職指導・支援も可能となっている。

※3 「岩大就職応援ブック」

平成17年度から、学部3年次、大学院1年次学生全員に、マナー、身だしなみ、企業へのアプローチ法、試験に臨む心構えなど就職活動をする上での必要事項が網羅された「岩大就職応援ブック」を配布しており就活学生には強い味方となっている。平成18年度には、更にグレードアップした「応援ブック」を作成配布し、その活用成果を期待している。

※4 「ジョブカフェ岩手大学スポット」

平成17年5月、学生の就職活動を支援する目的で「ジョブカフェ岩手大学スポット」を「就職支援課」隣室に開設し、「ジョブカフェいわて」の派遣カウンセラーによる定期的な就職相談（毎週火・木の12時～15時）を開始した。

開設1周年を迎え、年間サイクルでの相談傾向など利用状況についてデータ分析を行い、相談事業の推進・発展を期し事業を展開している。（1年目の相談日数92日、利用者数211名）

なお、平成19年4月から、専任の「キャリアカウンセラー」を配置し、常時、就職相談が可能な体制を整え、更なる充実発展を期している。

○主な相談内容

- (1) 適性職種・業種の選択方法等
- (2) エントリーシート・履歴書の書き方等
- (3) 面接の受け方、模擬面接実施等
- (4) その他就職に関する事項

※5 「キャリアを考える」講座

平成18年度前期に「ジョブカフェいわて」と連携して職業意識を涵養しキャリアビジョンを描ける学生を育てることを目的に「キャリアを考える」と題した講座（2,3年次学生を対象）を授業形式で14回開催した。この中に各界で活躍する本学OB・OGを講師とした講座も開設し、「キャリア」を単なる職業ではなく「生き方」として捉え、自らの人生について考え、就職への準備とすることを狙いとしている。

※6 就職ガイダンス 47件、40件

1. 全学部対象の「一般企業関係」就職ガイダンス……………（31件、30件）

17,18年度の全学部対象の「一般企業関係」就職ガイダンスは31件、30件実施しており、「面接対策」に重点を置いた内容のガイダンスとなっている。また、この中に「ジョブカフェいわて」との連携協力によるガイダンスも7件、5件含まれている。

- (1) 全学部対象の「一般企業関係」就職ガイダンス……………18件、18件

- ・「低学年からのキャリア教育用就職ガイダンス」……………2件、2件
- ・「主に学部3年次学生、大学院1年次学生対象のガイダンス」…10件、10件
- ・「少人数対応ガイダンス」……………6件、6件

- (2) 各学部主催のガイダンス……………13件、12件

2. 全学対象の「公務員関係」就職ガイダンス……………（16件、10件）

全学部対象の「公務員関係」就職ガイダンスとして、各機関の採用説明会を中心としたガイダンスを16件、10件実施した。

※7 「公務員試験対策講座」

厳しい競争率で狭き門と化している公務員試験対策として、平成14年度から3年次学生を対象（平成16年度からは2年次学生も対象）に国家公務員や地方公務員の合格目指し、有料で「学内公務員試験対策講座」を実施。6月上旬～翌年の3月中旬までは金・土曜日を主体に、また、夏期・冬期休業期間中は月～土曜日まで1日2～4コマを開設し実施した。平成17年度 6月上旬～翌年の7月下旬（試験直前）年間270コマを実施。（受講者257名）

（18年度受験＝1次合格者259名、内定76名）

平成18年度 5月下旬～翌年の7月下旬（試験直前）年間282コマを実施。（受講者225名）

（18年度の受講料：行政職コース265,000円、技術職コース95,000円）

（2年次9名、3年次209名、4年次5名、院1年次2名、計225名）

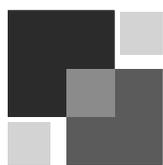
（行政職112名、技術職104名、数的経原9名、計225名）

（人社67名、教育31名、工63名、農64名、計225名）

（19年度受験＝1次合格者 名、内定 名）

※8 教員採用セミナーの実施

1. 「教職教養」(6科目、41コマ(1コマ=90分))
教育学部教員が講師となり、12月～7月上旬に実施。
＜科目名＞教育原理、教育心理、教育法規、教育基本法、日本教育史、西洋教育史
2. 「小論文講座」(44コマ)
教育学部国語科教員が講師となり、個別指導を行う。
3. 「小学校全科(教授行動論特殊講義)」(14コマ)
教育学部附属小学校現職教員を講師とし、前期に講義として行う。
4. 「面接講座」(6回)
学外講師と教育学部教員が講師となり、実施。
6月～9月上旬の土曜日(8:30～12:30)及び平日(17:15～19:30)実施。
＜内容＞個人面接、集団面接、集団討論、模擬授業
5. ピアノ弾き歌い実技特訓(6回)
教育学部音楽科教員が講師となって12月～5月に実施。
6. 体育実技講座(8回+2回)
教育学部体育科教員が講師となり、体操・球技・陸上運動ほかを5月から実施、7月にはこれらに水泳をプラスして実施。更に学外講師による「ダンス(表現運動)」を小学校教員受験者全員に対し2回実施。
時事通信社の教員採用模試を12月～6月の間に実施。
(教育後援会から、受験生に受験料の一部を補助)



プロジェクト

- 放送大学活用研究プロジェクト
- アイアシスタント
- 入学前教育／プレ・アイアシスタント

岩手大学と放送大学との間における 単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト

教育評価・改善部門部門長 後藤尚人

岩手大学と放送大学は、平成 17 年度より、以下の目的と研究課題をメインテーマとした「単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト」（放送大学活用研究プロジェクト）に取り組むこととした。

【目的】

岩手大学において放送大学が開設する特定の授業科目を教育課程に取り入れ、その教育効果等を検証することにより、放送大学をより有効に活用するための在り方や改善点を明らかにし、放送大学と岩手大学との間の有効な単位互換モデルを構築する。

【研究課題】

- (1) 放送大学のどのような科目を利用することが有効か。
 - ・語学科目、教養的科目、専門科目等別での検証
 - ・学問分野別の検証
 - ・放送授業の場合の教育効果の検証
 - ・受講者規模、非常勤講師の採用との関係を踏まえた効率性の検証
- (2) より教育効果の高い利用法はどのようなものか。
 - ・学生個人で視聴するのではなく、集団で視聴する方法の効果
 - ・放送の一方通行性を補う教育サポートの在り方
 - ・生涯学習の観点から自律型学習を導入する意義
- (3) より利用しやすい教育システムとするため、どのような改善が必要か。
 - ・両大学の教務スケジュールの調整
 - ・岩手大学のニーズに応じた放送大学からのサービスの提供

平成 17 年度 単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト：実施科目一覧

【平成 17 年度実施分】

科目分類 科目名 (岩手大学)	科目分類 科目名 (放送大学)	メディア	人数	学期	利用形態	受講場所 時間	活用目的	活用理由 & 方法	課 題
共通基礎科目 「初級韓国語」	共通科目 「韓国語 I (02)」 「韓国語 II (02)」	テレビ ラジオ	35 × 2	前期	科目履修生	岩手大学 LL 教室 同一時間	担当者不足 の解消	* 担当者不足により 1 クラスしか開講されて いないため、TA によるクラスを別途開講。	※ 団体の受講料 ※ 受け入れ態勢 ※ TA の確保
教養科目 「心の科学」	共通科目 「心理学初歩 (02)」	テレビ	(428)	前期	コンテンツ の利用	岩手大学 大教室 2 室 同一時間	巨大クラス の解消	* 履修者超過クラスで全員が教室に入り きらず教育環境が良くないため、2 室の教 室でコンテンツを流し、テレビ会議シス テムで質問等を受けつける。	※ コンテンツ使用料 ※ 双方向テレビ会 議システム ※ TA の確保
教養科目 「一」 (自由選択)	共通科目 「現代社会と 著作権 (02)」	テレビ	13	前期	科目履修生	放送大学 随時	カリキュラ ムの充実	* 知的財産関係科目充実のために、放送 大学の科目を指定する。	※ 団体の受講料 ※ 受け入れ態勢
専門科目 「生活空間論」 「建築文化論」	専門科目 「住計画論 (02)」	テレビ	20	後期	科目履修生	放送大学 随時	担当者不足 の解消	* 教育学部の生涯教育課程と芸術文化課 程で非常勤講師が担当している科目を、 放送大学の科目にかえる。	※ 団体の受講料 ※ 受け入れ態勢
専門科目 「分子生物学」	専門科目 「分子生物学 (05)」	テレビ	(120)	前期	コンテンツ の利用	岩手大学 農学部	教育効果 の検証	* 農学部農業生命科学科の学科共通科目 に放送大学の教材を加味し、教育効果を 検証する。	※ コンテンツ使用料
専門科目 「細胞生物学」	専門科目 「細胞生物学 (03)」	テレビ	5	後期	科目履修生	放送大学 随時	教育効果 の検証	* 農学部農業生命科学科の学科共通科目 を 2 分割 (岩手大学クラス・放送大学ク ラス) し、放送大学クラスの授業効果を 検証する。	※ 団体の受講料 ※ 受け入れ態勢
専門科目 「アグリビジ ネス論」	専門科目 「アグリビジ ネス (02)」	ラジオ	24	後期	科目履修生	放送大学 随時	担当者不足 の解消	* 農学部農林環境科学科の講座科目で担 当者が不足しているため、放送大学の科 目を指定する。	※ 団体の受講料 ※ 受け入れ態勢

平成 17 年度 プロジェクト科目の成績状況集計表：放送大学科目履修生分

【試験結果 (当該学期実施分)】

学期	科目名	申込 者数	受験 者数	非受験者数	合格 者数	合格率 (受験者中)	不合格 者数	評 価 (内 訳)					
								Ⓐ: 90 以上	A: 89~80	B: 79~70	C: 69~60	D: 59~50	E: 49~0
第 1 学期	現代社会と著作権 (02)	13	13	0	11	84.6%	2			6	5	2	
	韓国語 I (02)	35	33	辞退 2 名	28	84.8%	5	4	12	2	10	3	2
	韓国語 II (02)	35	33	辞退 2 名	19	57.6%	14	5	3	2	9	9	5
第 2 学期	住計画論 (02)	21	20	未受験 1 名	20	100.0%	0	10	4	2	4		
	細胞生物学 (03)	5	5	0	5	100.0%	0	5					
	アグリビジネス (02)	24	20	レポート 未提出 2 名 未受験 2 名	20	100.0%	0	4	8	6	2		
	合 計	133	124	-----	103	83.1%	21	28	27	18	30	14	7

【再試験結果 (次学期実施分)】

学期	科目名	申込 者数	受験 者数	非受験者数	合格 者数	合格率 (受験者中)	不合格 者数	評 価 (内 訳)					
								Ⓐ: 90 以上	A: 89~80	B: 79~70	C: 69~60	D: 59~50	E: 49~0
第 1 学期	現代社会と著作権 (02)	2	2	0	2	100.0%	0		2				
	韓国語 I (02)	5	5	0	5	100.0%	0	2	2		1		
	韓国語 II (02)	14	14	0	8	57.1%	6		1	5	2	4	2
	合 計	21	21	-----	15	71.4%	6	2	5	5	3	4	2

教育面における主な問題点・課題

平成17年度のプロジェクト実施から明らかになった教育面における主な問題点・課題は以下のとおりである。

- 1 教材の質について
- 2 学習センターでの教材利用について
- 3 外国語の単位数について
- 4 コンテンツ利用について
- 5 ラジオ教材科目について
- 6 集団受講と補助教員等の配置について

1 教材の質について

受講者のアンケート等によれば、放送大学の開講科目のうち、オムニバス方式（複数教員担当による授業）の授業については、担当者間の教授（プレゼンテーション）能力に差があり、ビデオのでき具合が均一ではなく、中には退屈な授業があるとのこと。放送大学の授業は一流の教授陣が担当しているはずなので、ただ文書を読み上げるだけでなく、メディアの特性を活かした見せるための授業作り等に更なる工夫が必要だと思われる。

2 学習センターでの教材利用について

本プロジェクトにおいては、同一科目の科目履修生は、岩手大学の科目開講時間に合わせて、同一時間に集団で受講するという形態（集団受講）をとった。そのため基本的に週1回の受講（ビデオ等の視聴）であったが、指定された授業時間以外に教材の視聴を望む学生もいることから、同時に複数の学生が教材の視聴を申し出るという状況をも想定し、岩手学習センターにおけるビデオ&ラジオ教材のセット数は、現状の数より多く配置されたい。

3 外国語の単位数について

すでに取り決められていた岩手大学と放送大学との単位互換制度では、岩手大学の外国語科目1科目（1単位）を放送大学の外国語科目1科目（2単位）とみなすことになっており、岩手大学で週2回開講される「初級韓国語」に対応させるため、前期に週2回の開講で放送大学の「韓国語Ⅰ」および「韓国語Ⅱ」を消化した。

内容面からすれば、週2回を通して「韓国語Ⅰ」を学期の前半に学習し、後半に「韓国語Ⅱ」を学習できればよかったが、「韓国語Ⅱ」の中間レポートを学期の中ほどで提出しなければならないため、「韓国語Ⅰ」を終えないうちに「韓国語Ⅱ」を始めざるを得なくなり、内容（外国語のレベル）面から学生にとってはかなりハードなスケジュール

ルとなった。

4 コンテンツ利用について

前期の2科目で通常の授業に放送大学のビデオを補助教材として取り入れた授業を行なった。通常の授業が補強されると思われたが、当初予想に反し、ビデオ内容が授業にマッチしていないなどの不満が受講生から寄せられた。

教員が準備している授業内容と放送大学のビデオコンテンツがほぼ同じであれば問題は生じないと思われるが、両者の内容にズレが生じていると、ビデオ内容に教員が自分の授業を合わせることになりがちで、放送大学のビデオ中心の授業になってしまうようである。

コンテンツ利用の授業においては、教員が講義内容をビデオに合わせるのではなく、教員主体の授業の中に放送大学のビデオ教材が効果的に組み込まれるよう十分準備しなければならない。

5 ラジオ教材科目について

ラジオ教材の科目については、聴取する内容が教科書とほぼ同一であるため、ラジオをただ聴くだけでは受講生に「教科書を読むのとかわらない」といった不満が生じ、集団受講の形態になじまない側面がある。ラジオ教材の科目を集団受講する場合には、以下に示す補助教員等を配置して、集団受講のメリット（他の受講生との意見交換など）を引き出す等の努力が必要であろう。

6 集団受講と補助教員等の配置について

受講者が同一時間帯に放送大学学習センターでクラスごとに受講する場合、ビデオやラジオを個々の受講生が個人の興味や必要に合わせて繰り返し視聴できないというデメリットが生じる。

その際、ビデオ等を授業時間に1回だけ視聴するのではなく、必要に応じて部分的に繰り返す等、受講生の要望を聞き、それに応じて授業時間を有効に活用することのできる世話役の存在が重要となる。

一方、集団受講は、個人で受講する場合とは異なり、他者との意見交換やディスカッションがその場でできるというメリットがある。そうしたメリットを活かすには、受講生の立場とは異なる、クラスをリードできる能力を有した補助教員等の配置が望まれる。

岩手大学と放送大学との間における単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト

平成 18 年度 実施報告書

岩手大学と放送大学は、昨年度に引き続き「単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト」として、岩手大学における教育環境の問題点を、放送大学岩手学習センターを活用することでどの程度解消できるのか、また、そのためには何が課題となるのかを検証するため、平成 18 年度に以下の 6 科目（科目表記は「岩手大学科目名 / 放送大学科目名」）を開講し、全ての科目について科目履修生として本学の学生に受講してもらった。

- * 「初級韓国語（入門） / 韓国語 I ('06)」(テレビ) [前期：共通基礎科目：39名]
- * 「文化論特講 I / 芸術・文化・社会 ('06)」(テレビ) [前期：専門科目：41名]
- * 「初級韓国語（発展） / 韓国語 II ('06)」(ラジオ) [後期：共通基礎科目：39名]
- * 「著作権法概論 / 著作権法概論 ('06)」(ラジオ) [後期：教養科目：10名]
- * 「文化論特講 II / マスメディア論 ('06)」(ラジオ) [後期：専門科目：4名]
- * 「建築文化論 / 建築意匠論 ('04)」(テレビ) [後期：専門科目：1名]

その結果、履修手続や外国語の単位設定等について、昨年度からの課題が解消された部分や、引き続き問題点として明確になった事項などがあった。以下項目別にまとめる。

問題点や課題など

履修申告時期について

- * 岩手大学では 9 月末の成績発表を基に 10 月初めに履修申告を行なっているが、放送大学の科目登録は 8 月上旬となっている。そのため、学生は前期の履修結果が分からないだけでなく、後期の授業時間割も未確定な状況で後期の履修申告をすることになり、履修者が集りにくい。早急に放送大学側の履修システムの変更をお願いしたい。

学習センターでの教材利用について

- * 複数の受講者が自由時間に岩手学習センターで教材の視聴ができるように、ビデオ&ラジオ教材の配置セット数の増加が望まれる。

外国語の単位数について

- * 外国語に関する岩手大学と放送大学との単位互換制度を平成 18 年度から改定し、放送大学の外国語 1 科目 2 単位を、岩手大学の外国語 1 科目 1 単位を週 2 回開講することで同等と見なしたことにより、昨年度のような半期で「韓国語 I」及び「韓国語 II」を消化するという強

行スケジュールが解消され、適切な開講形態となり、学生の評判も良くなった。

コンテンツ利用について

- * 昨年度「教員が講義内容をビデオに合わせるのではなく、教員主体の授業の中に放送大学のビデオ教材が効果的に組み込まれるよう十分準備しなければならない」という課題が残っていたが、本年度はコンテンツ利用科目を設定しなかったため、課題の検証及び対応はできなかった。

ラジオ科目について

- * ラジオ教材の科目については、聴取する内容が教科書とほぼ同一であるため、あえてテープを聞く必然性がないという学生からの指摘がある反面、教科書にはないインタビューや対談を盛り込むなどの配慮がなされている科目もある（マスメディア論）ことが分かった。引き続きこうした配慮をとりわけラジオ科目についてはお願いしたい。

補助教員等の配置について

- * 受講者がクラス単位で定められた曜日・時間に受講する場合、ビデオやラジオを毎回繰り返し視聴できるわけではないというデメリットが生ずるが、個人で受講する場合とは異なり、他の受講生との意見交換やディスカッションができるというメリットがある。そうしたメリットを活かすためにも、クラスをリードできる補助教員等の配置は必要だと考える。

※ 平成 18 年度開講分に関しては、受講生へのアンケート等を踏まえ、冊子体の「報告書」を別途作成する予定です。

*** *** ***

19 年度開講予定：10 科目：受講者数は予定人数：200（科目履修生）+ 20（コンテンツ利用）

- * 「初級韓国語（入門）/ 韓国語 I ('06)」(テレビ) [前期：共通基礎科目：20 名：科目履修生]
- * 「人類の歴史と地球の現在 / 人類の歴史・地球の現在 ('07)」(テレビ)
[前期：教養科目：30 名：科目履修生]
- * 「高年次課題特別講義 I / 岐路に立つ大学 ('04)」(テレビ)
[前期集中：教養科目：20 名：コンテンツ利用]
- * 「文化論特講Ⅲ / 芸術・文化・社会 ('06)」(テレビ) [前期：専門科目：30 名：科目履修生]
- * 「文化記号論Ⅲ / 現代思想の地平 ('05)」(ラジオ) [前期：専門科目：15 名：科目履修生]
- * 「初級韓国語（発展）/ 韓国語 II ('06)」(ラジオ) [後期：共通基礎科目：20 名：科目履修生]
- * 「数理のひろがり / 数学再入門 ('07)」(テレビ) [後期：教養科目：25 名：科目履修生]
- * 「著作権法概論 / 著作権法概論 ('06)」(ラジオ) [後期：教養科目：15 名：科目履修生]

岩手大学&放送大学岩手学習センター：放送大学活用研究プロジェクト

岩手大学における教育環境の問題点が放送大学岩手学習センターを活用することでどの程度解消できるのか、また、そのためには何が課題となるのかを検証するため、平成18年度に以下の科目をそれぞれの形態で開講する。

【平成18年度実施分】

科目分類 科目名 【岩手大学】	科目分類 科目名 【放送大学】	メディア	受講者数	学期	利用形態	受講曜日 時間 (随時可)	受講場所	活用目的	活用理由 & 方法	補助教員等
共通基礎科目 「初級韓国語」 入門	共通科目 「韓国語入門Ⅰ」 (06)	テレビ	40	前期	科目履修生	月9・10 & 水9・10	岩手大学 LL教室	担当者不足 の解消	*担当者不足により1クラスしか 開講されていないため、TAによる クラスを別途開講。	ネイティブTA (河京希)
共通基礎科目 「初級韓国語」 発展	共通科目 「韓国語入門Ⅱ」 (06)	ラジオ	40	後期	科目履修生	月9・10 & 水9・10	岩手大学 LL教室	担当者不足 の解消	*担当者不足により1クラスしか 開講されていないため、TAによる クラスを別途開講。	ネイティブTA (河京希)
教養科目 「著作権法概論」 (人間と社会)	専門科目 「著作権法概論」 (06)	ラジオ	50	後期	科目履修生	水9・10	放送大学 岩手学習 センター	カリキュラ ムの充実	*知的財産関係科目充実のために、 放送大学の科目を指定する。	放送大学 (客員教授) 岩手大学 (法学系教員)
専門科目 「文化論特講Ⅰ」	専門科目 「芸術・文化・社会」 (06)	テレビ	25	前期	科目履修生	火7・8	放送大学 岩手学習 センター	カリキュラ ムの充実	*人文社会科学部での文化論関連 科目の充実を図る。	放送大学 (客員教授)
専門科目 「文化論特講Ⅱ」	専門科目 「マスメディア論」 (06)	ラジオ	25	後期	科目履修生	金3・4	放送大学 岩手学習 センター	カリキュラ ムの充実	*人文社会科学部で不足している 分野の科目を補う。	岩手大学 後藤 尚人
専門科目 「建築文化論」	専門科目 「建築意匠論」 (04)	テレビ	20	後期	科目履修生	水7・8	放送大学 岩手学習 センター	担当者不足 の解消	*教育学部の芸術文化課程で非常 勤講師が担当している科目を、放 送大学の科目にかえる。	放送大学 (客員教授)

平成18年度プロジェクト科目の成績状況集計表

○ 試験結果(当該期実施)

学期	放送大学科目名	岩手大学科目名	申込者数	試験 受験者数	試験 未受験者数	合格者数	合格率 (受験者中)	不合格者数	評価(内訳)					
									OA:90以上	A:80~89	B:70~79	C:60~69	D:50~59	E:0~49
第1 学期	芸術・文化・社会	文化論特講Ⅰ (人文社会科学部専門科目)	41	40	レポート未提出1名	33	82.5%	7	4	15	11	3	5	2
	韓国語入門Ⅰ	初級韓国語(入門) (全学共通教育科目)	39	38	レポート未提出1名	34	89.5%	4	20	6	3	5	3	1
第2 学期	韓国語入門Ⅱ	初級韓国語(発展) (全学共通教育科目)	39	37	レポート未提出1名 未受験1名	29	78.4%	8	12	5	9	3	5	3
	著作権法概論	著作権法概論 (全学共通教育科目)	10	9	辞退1名	9	100.0%	0	4	1	2	2		
	マスメディア論	文化論特講Ⅱ (人文社会科学部専門科目)	4	4		4	100.0%	0		1	3			
	建築意匠論	建築文化論 (教育学部専門科目)	1	1		1	100.0%	0	1					
	合計		134	129	-----	110	85.3%	19	41	28	28	13	13	6

○ 再試験結果(次学期実施)

学期	放送大学科目名	岩手大学科目名	再試験 対象者数	試験 受験者数	試験 未受験者数	合格者数	合格率 (受験者中)	不合格者数	評価(内訳)					
									OA:90以上	A:80~89	B:70~79	C:60~69	D:50~59	E:0~49
前 年 度	アグリビジネス	アグリビジネス論 (農学部専門科目)	4	0	レポート未提出2名 未受験2名	0	0.0%	0						
	住計画論	建築文化論 (教育学部専門科目)	1	1		1	100.0%	0		1				
第1 学 期	芸術・文化・社会	文化論特講Ⅰ (人文社会科学部専門科目)	8	4	未受験4名	3	75.0%	1			3			1
	韓国語入門Ⅰ	初級韓国語(入門) (全学共通教育科目)	5	5		5	100.0%	0	3		1	1		
	合計		18	10	-----	9	90.0%	1	3	1	1	4	0	1

※ アグリビジネスの未受験者のうち、レポート未提出者2名は現在休学中、また未受験者2名のうち1名は前年度退学済

Iⁿ Assistant アイアシスタント

教育評価・改善部門 江本理恵

大学教育総合センターでは、「大学教育センターによる組織的授業改善と教室外学習支援システムの構築」という3年間の教育改革プロジェクトに取り組んでいます。本プロジェクトでは、この「組織的授業改善と教室外学習支援システム」として、「Iⁿ Assistant (アイアシスタント)」を開発してきました。平成19年度からの本格稼働を目指して、平成18年度は全学規模での試行を行いました。

プロジェクト名を分解して、それぞれが意味するものを整理すると以下のようになります。これは、アイアシスタントの開発にあたって、重視した点です。

- (1) 大学教育センターによる→「全学」として導入できるもの。今後のFDの基盤となるもの。
- (2) 組織的授業改善→「イベント」的ではなく「日常的に」授業改善に役立つもの。
- (3) 教室外学習支援→学生の授業時間外の予習・復習を手助けするもの。また、教員が学生に予習・復習をさせる試みを行う時の手助けになるもの。

(1) を達成するために、「アイアシスタント」はすでに学内でその存在が合意されている(しかし、各学部ごとに運営されていた)「Webシラバス」を基盤にしました。「Webシラバス」をベースとしたことで、「シラバスを入力する」という作業及び「Webシラバスを一般公開する」ということに関しては、ほぼ、合意がとれた状態で進めることができました。と同時に、シラバスの項目を統一して各種評価(認証評価やJABEEなど)に対応できるような形式とし、「授業の目的」「到達目標」「成績評価の方法と基準」などの項目を新しく定義し直しました。さらに、「重複科目*」「セット科目*」という授業実施上の新定義を取り入れ、「授業実施」という観点から授業科目の見直しを行いました。このシラバスは、履修申告時期以降は新規に登録・修正はできなくなります。

ただし、Webシラバスをベースとしたことで導入が比較的スムーズにできた反面、「(単に、今までの) Webシラバスのシステムが新しくなった(だけである)」という見方をされることも多く、下記に示すような「授業改善」のためのシステムであると認識してもらうことは、今後の大きな課題の1つです。

(2) を達成するために、「アイアシスタント」には「授業記録」機能をもたせました。この「授業記録」は、毎回の授業実施後に、授業で実施した内容を記録したり、配布したプリントの電子ファイルやプレゼンテーションの電子ファイルを登録しておくことができ

ます。これにより、当初にたてた計画（シラバス）と授業の実態（授業記録）を比較でき、実態に合わせた授業の計画、必要であればカリキュラムの改善に役立てることができ、つまり、「アイアシスタント」を積極的に活用することにより、シラバス（計画：Plan）→授業（実施：Do）→記録・見直し（評価：Check）→改善（改善：Action）という授業実施・改善に関わるPDCAサイクルが成立します。「アイアシスタント」は、「シラバス」と「授業記録」の2つを実装したことにより、日常的な授業改善につながられるシステムとなりました。また、シラバスと授業の記録（配布したプリントや実施したテストなどを含めて）の2点は、今後の各種評価（認証評価、JABEE等）対策ともなります。

（3）を達成するために、「アイアシスタント」には学習支援機能としてLMS（CMS）※の基本的な機能を盛り込みました。学習支援は授業期間中に、学生へのレポートを出題、回収したり、簡単なドリルを出題して採点したり、といった作業にかかる教員の手間を省くための機能です。これを活用していただいて、レポート等の出題回数を増やすことによって、学生の学習意欲の維持・向上、教室外学習（授業時間以外の学習）の時間を増やすことにつながることを目的としています。

平成19年度の大きな課題は、「（2）の組織的授業改善（PDCAサイクル）をどのように「日常的に」「実質的に」行わせるか」、「（3）を用いて、どう学生に学習をさせるのか、その実践事例をどう各教員に広めていくのか」、この2点です。

■プロジェクトスケジュール

2005年

- 4月下旬 仕様策定委員会 発足
- 9月上旬 仕様書完成・公示
- 10月19～24日 技術審査期間
- 10月25日 入札
- 11月 開発業者の決定→開発開始

2006年

- 3月 試行モニターの募集、説明会
- 4月中旬 試行モニターによる試行開始
- 10月1日 全学規模での試行開始

2007年

- 1月26日 シラバス入力開始
- 3月29日 シラバス入力終了

【注】

※重複科目：旧カリキュラムと新カリキュラムで名前が違う科目、複数学部をまたがって開講している科目など、1つの授業として開講されているが複数の時間割コードをもっている科目を「重複科目」と定義しました。

※セット科目：セットで履修すること（ペア履修）が要求される2つ以上の科目（例えば外国語科目）をセット科目と定義しました。

※LMS（Learning Management System）：LMS（エルエムエス）とは Learning Management System（ラーニングマネジメントシステム）の略で、学習状況を管理できるシステムを指します。

※CMS（Course Management System）：CMS（シーエムエス）とは Course Management System（コースマネジメントシステム）の略で、上記LMSと同じものを指しています。

■シラバス入力状況 (3月末)

全学共通教育科目	登録済授業数 622	開講授業数 631	登録率 98.6%
人文社会科学部 (専門教育科目)・人文社会科学研究科 (専門科目)	登録済授業数 876	開講授業数 709	登録率 80.9%
教育学部 (専門教育科目)・教育学研究科 (専門科目)	登録済授業数 1003	開講授業数 1252	登録率 80.1%
工学部 (専門教育科目)・工学研究科 (専門科目) ※平成 20 年度開講科目も含む	登録済授業数 578	開講授業数 745	登録率 77.6%
農学部 (専門教育科目)・農学研究科 (専門科目) ※平成 20 年度以降開講科目も含む	登録済授業数 800	開講授業数 872	登録率 91.7%

■学会発表等の記録

- 江本理恵, 「I¹ Assistant (アイアシスタント)」, 樹氷 ICT 教育ハンドブック (地域ネットワーク FD" 樹氷"), 2007, 10-15.
- 江本理恵, 後藤尚人, I¹ Assistant (アイアシスタント) の全学的導入と FD, 第 13 回 大学教育研究フォーラム発表論文集, 2007, 86-87. (口頭発表: 江本理恵, 後藤尚人, I¹ Assistant (アイアシスタント) の全学的導入と FD, 第 13 回 大学教育研究フォーラム, 京都大学, 2007 年 3 月 27 日)
- 江本理恵, 後藤尚人, I¹ Assistant (アイアシスタント) を基軸においた FD の試み, 日本教育工学会第 22 回全国大会講演論文集, 2006, 1029-1030. (口頭発表: 江本理恵, 後藤尚人, I¹ Assistant (アイアシスタント) を基軸においた FD の試み, 日本教育工学会第 22 回全国大会, 関西大学, 2006 年 11 月 5 日)
- 江本理恵, 「全学統一拡張 Web シラバス」システムを基軸においた FD の試み, 第 55 回東北・北海道地区大学一般教育研究会研究集録, 2005, 39-41. (口頭発表: 江本理恵, 「全学統一拡張 Web シラバス」システムを基軸においた FD の試み, 第 55 回東北・北海道地区大学一般教育研究会, 岩手県立大学, 2005 年 9 月 8 日)
- 江本理恵, 後藤尚人, 「全学統一拡張 Web シラバス」システムを基軸においた FD の試み, 日本教育工学会第 21 回全国大会講演論文集, 2005, 359-360. (口頭発表: 江本理恵, 後藤尚人, 「全学統一拡張 Web シラバス」システムを基軸においた FD の試み, 日本教育工学会第 21 回全国大会, 徳島大学, 2005 年 9 月 23 日)

■アイアシスタント説明会・講習会実施の記録

◇モニター対象 試行説明会・意見公開会

*試行説明会

平成 18 年 3 月 30 日 (木) 10:30 - 12:00

平成 18 年 5 月 12 日 (金) 17:00 - 18:30

学生センター棟 2F 会議室

*意見交換会

平成 18 年 7 月 5 日 (水) 9:00 - 10:20

平成 18 年 7 月 5 日 (水) 16:30 - 17:50

情報処理センター 2F 端末室

◇全教員対象 説明会・講習会

*アイアシスタント全般の説明会

平成 18 年 9 月 11 日 (月) 13:30 ~ 15:00 学生センター棟 G19

平成 18 年 9 月 12 日 (火) 10:30 ~ 12:00 学生センター棟 G19

平成 18 年 9 月 13 日 (水) 13:30 ~ 15:00 テクノホール

平成 18 年 9 月 15 日 (金) 10:30 ~ 12:00 農学部北講義棟 2 番講義室

*シラバス、授業記録を中心とした説明会

平成 19 年 1 月 9 日 (月) 13:30 ~ 15:00 学生センター棟 G1

平成 19 年 1 月 9 日 (水) 16:30 ~ 18:00 農学部北講義棟 2 番講義室

平成 19 年 1 月 10 日 (木) 10:30 ~ 12:00 学生センター棟 G1

平成 19 年 1 月 10 日 (火) 16:30 ~ 18:00 工学部 17 番講義室

*授業記録、学習支援機能を中心とした説明会

平成 19 年 4 月 9 日 (月) 13:00 ~ 14:30 人文社会科学部 3 号館 3F H332 講義室

平成 19 年 4 月 10 日 (火) 13:00 ~ 14:30 工学部 1 号館 1F テクノホール

*学生を対象とした説明会

平成 19 年 4 月 20 日 (金) 学生センター棟 G2 大講義室

*アイアシスタント全般の講習会

平成 18 年 7 月 24 日 (月) 16:30 ~ 18:00

平成 18 年 7 月 26 日 (水) 10:30 ~ 12:00

平成 18 年 7 月 27 日 (木) 16:30 ~ 18:00

平成 18 年 8 月 1 日 (火) 16:30 ~ 18:00

平成 18 年 8 月 4 日 (金) 10:30 ~ 12:00

すべて情報処理センター 2F 端末室

*アイアシスタント全般の講習会

平成 18 年 9 月 19 日 (火) 16:30 ~ 18:00 (教育学部 1 号館:サイバースタジオ 101)

平成 18 年 9 月 20 日 (水) 10:30 ~ 12:00 (工学部 1 号館 2F21 番講義室)

平成 18 年 9 月 20 日 (水) 13:30 ~ 15:00 (農学部北講義棟 2F 情報処理演習室)

*シラバス、授業記録を中心とした講習会

平成 19 年 1 月 18 日 (木) 13:00 ~ 15:00 情報処理センター 2F 端末室

平成 19 年 1 月 18 日 (木) 16:00 ~ 18:00 教育学部 1 号館 1F CS101 教室

平成 19 年 1 月 19 日 (金) 10:00 ~ 12:00 情報処理センター 2F 端末室

平成 19 年 1 月 19 日 (金) 13:00 ~ 15:00 工学部テクノホール 2F T21 教室

*授業記録、学習支援機能を中心とした講習会

平成 19 年 4 月 9 日 (月) 16:00 ~ 18:00 情報処理センター 2F 端末室

平成 19 年 4 月 10 日 (火) 16:00 ~ 18:00 情報処理センター 2F 端末室

◇アイアシスタントリーフレット・ガイドブックの作成

2006 年 9 月

教員用リーフレット作成

学生用リーフレット作成

2007 年 1 月

教員用リーフレット作成

シラバス入力の手引き

2007 年 3 月

教員用ガイドブック作成

学生用ガイド作成

アイアシスタント：シラバス入力の手引き

平成 19 年度版

平成 19 年 1 月 15 日
岩手大学大学教育総合センター
教育評価・改善部門

アイアシスタントのシラバス項目は、より良い教育の実施を目的とした岩手大学の中期計画・目標の達成を目指して設計されています。特に、今回は、教育目標及び成績評価に関する部分を強化しました。その 1 つが、「授業の目的」、「それに基づいた履修目標による成績評価基準を作成し」に対応する「到達目標」と、それに対応させた「成績評価方法」と「成績評価の基準」の項目です。各授業科目において、「授業の目的」と「到達目標」を明示し、これらに基づいた「成績評価方法」及び「基準」を設計、明記することで、中期計画・目標の達成を目指します。

「シラバス」には授業の内容説明書としての役割があります。学生との間の「契約書」という考え方もあります。そこで、本システムでは、履修時に示した「シラバス」を残すため、シラバス入力期間を設け、入力期間後（学生の履修申告後）は、入力、修正ができない仕組みになっています。

このアイアシスタントは、学務情報システムからの情報を取り入れています。したがって、科目名や担当教員名等、学務情報システムやその他の学内のシステムからの情報は、初期値として表示されます。

アイアシスタントのシラバスは、3 つのステップ（3 つの画面）で入力します。以下に、ステップ（画面）ごとの各項目についての解説を記します。

■シラバス各項目解説

【Step1】

科目名

担当する授業科目名が初期値として表示されています。

科目名（英文）

担当する授業科目名の英文表示が初期値として表示される予定です。現時点では「平成 20 年度より表示されます」と表示されています。

重複科目名

重複科目とは、実質的には 1 つの授業科目なのに、学務情報システム上、複数の時間割コードを持っている授業科目のことです。例えば、新カリ・旧カリでそれぞれ授業科目名が違う（ただし授業としては 1 つの授業として開講している）科目や、教職科目等で複数の学部（学科）を対象として開講している科目が該当します。重複科目名欄には、入力中のシラバスの時間割コード以外の時間割コードを持つ科目名が表示されます。新カリのシラバスを入力しているときには、ここには旧カリの科目名が重複科目名として表示されます。

重複科目の場合、My 時間割の該当箇所にはすべての重複科目名が表示されます。アイアシスタントでは、重複科目と認識された場合には、1 つの科目でシラバスを入力すれば、入力内容が他の科目にも反映されます。ただし、「主な対象学生」に関しては、該当時間割コードが対象としている学生（学部、学年等）を指定してください。

セット科目名

セット科目名とは、当該学期においてセットで履修すること（ペア履修）が要求されている 2 つ以上の科目（例えば外国語科目）があった場合、その（セットとなる）相手の科目名のことです。セット科目の場合は 1 教員 1 シラバスという設計になっています。例えば、外国語の授業で、1 人の教員が週 2 回のセットクラスを受け持っている場合、シラバスは 1 つとなります。逆に、週 2 回のセットでの履修が必要なクラスでも、それぞれの担

当教員が違えば、シラバスは2つになります。なお、セット科目名は、外国語のように同じ科目名である場合もあれば、講義と実験というように科目名が異なる場合もあります。ここも、該当する科目がある場合には初期値として表示されます。

主な対象学生（※必須入力項目）

履修の対象となる主な学生についての情報を入力します。履修対象学生の、学部、学科、課程、コース、学年、入学年度などを選択して入力してください。区分については、必修の場合のみ、「必修」を選ぶようにしてください。今回のシラバスは主な対象学生の指定は5つまでとなっています。全ての履修対象学生を指定できない場合もありますので、「主な」対象を指定してください。

履修学生の学籍番号や氏名等は、履修申告後、学務情報システムより取り込まれますので入力する必要はありません。

科目の種別 / ESD との関連 / 他学部開講科目 / いわて5大学単位互換科目 / 公開授業講座 / 高大連携科目

該当する授業科目の場合、「○」「C1」などが自動的に表示されます。この項目欄の中には、シラバス入力時期以降に表示されるものもあります。

履修上の条件

ここには、この授業を履修する上での必要条件を入力します。例えば、ある授業科目が履修済みであることを前提としている場合や、科目A、Bの両方を履修しないと資格取得や卒業の要件を満たさない場合など、その旨を入力してください。

※ 90文字以内（半角・全角を問わず）

オフィスアワー（※必須入力項目）

ここには、授業を履修している学生の質問や相談を研究室にて受ける日時を入力します。また、「事前にメールで予約してほしい」など、何か要望がある場合には、それも書いてください。非常勤講師の場合にも、「授業時間の後」、「メールで日程を相談してほしい」など、学生が質問や相談したい時にどうすればよいのかを書いてください。

※ 45文字以内（半角・全角を問わず）

公式サイト / 個人サイト

公式サイトには大学で提供している大学情報データベースの該当URLが表示されます（専任教員のみ）。自分のページを設定したい場合には、個人サイトにURLを入力します。

他の担当教員

アイアシスタントは、学務情報システムから授業科目、担当教員の情報を得ていますが、学務情報システムには、1つの授業科目に1人の担当教員（代表者）のみが登録されています。複数の担当者で1つの授業科目を担当している（オムニバス方式で実施されている科目など）場合、授業科目名は、代表者のMy時間割上のみ表示されています。代表者がこの科目を担当する教員を登録すれば、その登録された教員も、My時間割上に授業科目名が表示され、その授業科目の授業記録や学習支援などの機能を使うことができるようになります。

登録したい教員のアカウント（メールアドレスの@マークより前の部分）を入力し、[追加]ボタンをクリックしてください。名前が一覧として表示され、登録することができます。

ただし、シラバスに関しては、代表者しか入力できません。

キーワード

その授業に関するキーワードを6つまで入力できます。ここにキーワードを入力すると、科目名、担当教員名と共に、簡易検索（フリーワード）時にもヒットします。

※ 1キーワード12文字以内（半角・全角を問わず）

【Step2】

授業の目的（※必須入力項目）

大学及び学部、学科、課程、コース、分科会等の教育目標に照らし合わせて、教員としてこの授業を実施す

る目的、この授業を履修する学生に望むこと、履修することで学生にぜひ身につけてもらいたいと思う能力などを、教員の立場から示してください。

※ 250 文字以内（半角・全角を問わず）

到達目標（※必須入力項目）

上記の「授業の目的」に対応づけ、学生からの視点で、この授業を履修し学習することで何ができるようになるのか、どのような能力が身に付くのかを具体的に示してください。

この到達目標に対応させて後述の「成績評価の方法と基準」を設定するには、できるだけ客観的測定が可能な形に具体化して記述する必要があります。例えば、「〇×を理解する」という到達目標を設定した場合、学生が「〇×を理解した」のかどうかをどのように確認するのが困難です。そこで、「〇×を説明できる」「〇×と△◇の類似点と相違点を指摘できる」など、「学生が何をできるようになればいいのか」を「学生の行動」として具体化します。これにより、例えば「〇×を説明できる」という到達目標であれば、期末テスト、レポート等において「〇×を説明せよ」という問題を設定し、実際に説明できるできないを評価基準とすることができます。

この到達目標では、「可」（単位を出す、出さないの境目）となるための「最低限の到達点」だけではなく、「良」になるには「最低限」ここまで、「優」となるには「最低限」ここまで、「秀」となるには「最低限」ここまで到達して欲しいという期待的な内容を盛り込むこともできます。また、複数の到達目標を組み合わせると判断される場合も想定されます。この場合には、成績評価の判断に使う到達目標を可能な範囲内で明記してください。

※ 350 文字以内（半角・全角を問わず）

【参考】

目的

1. 実現しようとしてめざす事柄。行動のねらい。めあて。「当初の—を達成する」「—にかなう」「旅行の—」
2. 倫理学で、理性ないし意志が、行為に先だって行為を規定し、方向づけるもの。

目標

1. そこに行き着くように、またそこから外れないように目印とするもの。「島を—にして東へ進む」
2. 射撃・攻撃などの対象。まと。「砲撃の—になる」
3. 行動を進めるにあたって、実現・達成をめざす水準。「—を達成する」「月産五千台を—とする」「—額」

【用法】

目的・目標——「目的（目標）に向かって着実に進む」のように、めざすものの意では相通じて用いられる。

◇「目的」は、「目標」に比べ抽象的で長期にわたるめあてであり、内容に重点を置いて使う。「人生の目的を立身出世に置く」

◇「目標」は、めざす地点・数値・数量などに重点があり、「目標は前方三〇〇〇メートルの丘の上」「今週の売り上げ目標」のようにより具体的である。

「大辞泉」より引用

授業の概要（※必須入力項目）

15回の授業の全体像を把握できるよう、授業の概要を具体的にまとめてください。

※ 300 文字以内（半角・全角を問わず）

授業の形式（※必須入力項目）

講義形式、演習形式、実習、実験など、授業を行う形式を入力します。

※ 90 文字以内（半角・全角を問わず）

教室外学習（※必須入力項目）

「単位の実質化」の観点からは、1単位は45時間の学修と定義されています。したがって、半期2単位の授

業科目では、1コマ（90分）の講義に対して、4時間の教室外学習が必要となります（1単位の場合は1時間の教室外学習です）。残念ながら、昨今の学生はなかなか「自学自習」ができません。そこで、授業を担当する教員として、教室外学習として何を望んでいるのかを具体的に指示してください。

※ 180文字以内（半角・全角を問わず）

成績評価方法と基準（※必須入力項目）

評価方法

評価方法とは、学生がこの授業を受講することで身につけた能力を測定するための測定方法に該当します。今回は、平常点、レスポンスカード/iカード、小テスト、課題、期末テスト/レポートが予め入力されています。これらは編集可能なので、必要に応じて削除したり追加入力したりすることができます。

※ 18文字以内（半角・全角を問わず）

割合

それぞれの評価方法が、全体の評価に及ぼすおおよその割合を、百分率（%）で入力してください。

※ 3桁以内

評価観点

評価の観点として、「関心・意欲」といった情意的領域の目標にあたるもの、「技能・表現」といった精神運動的領域の目標にあたるもの、「知識・理解」、「思考・判断」といった認知的領域の目標にあたるものが考えられます。現時点では、この4つの観点が入力されていますが、これらは編集可能なので、必要に応じて削除したり追加入力したりすることができます。

具体的には、先に定めた評価方法で、どの観点の能力（学習効果）を測定するかを明らかにしていきます。この時、必ずしも、1つの評価方法に対して1つの評価観点のみを対応させる必要はありません。例えば、レスポンスカードを用いて、「関心・意欲」観점에서「講義の内容に沿った内容が十分な分量書かれている」、「知識・理解」観점에서「講義で扱った概念を正しく説明できている」など複数の観점에서学習の成果を測定することも可能です。

この方法に対して重視する観点を○、参考にする観点を「△」などを入力してください。

※ 5文字以内（半角・全角を問わず）

評価の基準（具体的に）

それぞれの成績評価方法、観점에서測定した学習成果に対してどのような基準で成績をつけるか（点数に換算するか）を明確に設計します。例えば、期末にレポートを課するのであれば、そのレポートに対してどのような基準で点数をつけるのかを明記します。具体的には、「適切な問題が設定されている」「設定した問題の背景を説明している」「設定した問題に対してどのような課題が存在しているのかを指摘できる」「その解決策について、既存の学説等がどのように述べているのかを挙げることができる」「既存の意見を踏まえた上で、自分はどのように考えるのかを述べることができる」など、到達目標に達するまでの経過点をいくつか提示し、これが達成されていたら何点、などと採点基準を明確に記述します。複数の評価方法や観점에서測定した結果を総合的に判定する場合でも、それぞれの測定結果をどのような基準で判定し、それをどのように総合的に判断するのかを、出来る限り明確にしてください。

ここを明確にすることで、15回の授業を通して何を学生に伝えたいのか、何を身につけて欲しいのかが、教える側にとっても明確になります。また、中期目標・計画で求められているのもこの点で、今後の「社会（企業・保護者・学生など）への説明責任」に応えることにもつながります。

※ 700文字以内（半角・全角を問わず）

特記事項

「出席して実験を行うことを重視します」「課外セミナーへの参加等も評価として加える」など、成績評価に関係することで、学生に伝えてきたい点があれば、入力してください。

※ 90文字以内（半角・全角を問わず）

プログラム上の位置づけ

各学部、学科、課程、コース等で提供するカリキュラムの中で、該当科目がどのような位置づけにあるのか

を記述します。

※ 200 文字以内（半角・全角を問わず）

履修における留意点

「コンピュータの操作方法については各自で復習しておくこと」「予習・復習に十分な時間が必要になります」など、「必須条件」ではないが、履修する上でぜひとも認識していて欲しい事項があれば、ここに入力します。

※ 120 文字以内（半角・全角を問わず）

教科書や参考文献の登録

指定教科書、参考文献等がある場合には、ここに指定します。以下の4つの指定ができます。

教科書：学生に購入させる教科書を指定します。

参考文献：参考文献を指定します。

貸出禁止：参考文献のうち、図書館において「貸出禁止図書」（図書館にその文献が複数冊ある場合には、そのうちの1冊を貸し出し禁止の扱いにします。）扱いにしたい本は、「貸出禁止」として指定します。

貸禁 & 専用配置：参考文献のうち、図書館において「貸出禁止 & 専用配置図書」（図書館にその文献が複数冊ある場合には、そのうちの1冊を貸し出し禁止かつ専用書架に配置する扱いにします。）扱いにしたい本は、「貸出禁止 & 専用配置図書」として指定します。

【Step3】

各回の到達目標

この回/週（以下「回」のみ表記）の授業を受けた結果、学生が何を知り、何ができるようになるのかを「学生の具体的な行動」の形で入力してください。Step2の到達目標と同じく、例えば「理解する」では、学生は、自分が本当に教員が期待するレベルで「理解した」のかどうかを確認できません。したがって、「○×について説明できる」「○×と○△の違いを指摘できる」などの具体的な形で考えてください。

大学の授業では、ある具体的な文献を読む、ある具体的な問題について議論することを通して、学生に「その学問のものの見方や考え方を伝えたい」など、必ずしも学習内容を記憶することを目標としているわけではないものも多いと思います。この回の「学習内容」を学習することを通して、教える側として何を伝えたいのか、何をわかってもらいたいのか、何を身につけて欲しいのか、これを示すのが「各回の到達目標」となります。

この各回の到達目標は、学生に対する学習の指針ともなります。つまり、授業に出席して話をきいて「わかった、理解した」と学生が思ったとしても、その「理解」は、多くの場合は表層的な、受容した（話をきいたことがある、読んだことがある）といったレベルのもので、そこで、この各回の到達目標に、学生自身が自分自身で到達したかどうか確認できるような形で記述します。これにより、学生が授業で話をきいて「わかった、理解した」と思ったとしても、その回の到達目標に「○×と○△の違いを列挙できる」と書かれていれば、自分で「列挙できるか」という確認ができるわけです。もし、それが「できなかった」場合には、学生本人が、自分は先生が期待するレベルでの「理解」はできていないのだ、もっと深く考える必要があるのだ、ということに気がつききっかけとなる、そのような可能性を持たせてください。

この「各回の到達目標」は必須入力項目ではありません。授業内容に応じて、ポイントとなる回にのみ設定するなど、柔軟に活用してください。

※ 300 文字以内（半角・全角を問わず）

授業内容（※必須入力項目）

各回（週）の授業で扱う具体的な「学習内容」を入力してください。

この授業内容は必須入力項目です。授業によっては、学生と相談の上内容を決める場合などがあるかと思えます。その場合には、例えば、「相談の上、以下の候補の中から輪読する本を決める」、「担当者が担当部分について発表する」など、現時点でわかる範囲で記入してください。毎回違う内容を入力する必要もありません。

授業にあわせて柔軟に運用してください。

※ 300 文字以内（半角・全角を問わず）

備考

各回の到達目標、授業内容以外に学生に伝えたいことがある場合には、ここに入力してください。

※ 90 文字以内（半角・全角を問わず）

その他、何か学生に伝えたいことがある場合には、ここに入力してください。

※ 300 文字以内（半角・全角を問わず）

【登録について】

シラバスの入力が終わったら、「登録」ボタンをクリックして登録してください。この時、必須項目を入力していない場合や、行数が多すぎて印刷時に 1 ページに入りきらない場合には、赤字でメッセージが表示され、登録されません。その場合、シラバスを修正して、再度「登録」ボタンをクリックしてください。

登録前に、とりあえず一時的に入力したものを保存しておきたい場合には「一時保存」ボタンをクリックしてください。「一時保存」状態では、シラバスの登録は完了していませんので、入力を完成させ、「登録」してください。

【PDF の作成】

作成したシラバスを PDF ファイルとしてダウンロードすることができます。シラバスの入力・登録が終了したら、[登録状況確認]ボタンをクリックして、シラバス閲覧画面を表示させてください。シラバス閲覧画面の右上にある [PDF] ボタンをクリックすると、シラバスの PDF ファイルが作成、ダウンロードされ、表示されます。ただし、印刷の都合上、PDF ファイルに収録されるのは Step1、Step2 の項目のみで、さらに各項目の行数に制限があります。そのため、Web 上では入力・表示されていても（制限文字数以内でも）、PDF ファイルに変換した時に、後半が表示されないことがあります。必ず確認して、行数が多い場合には、行数を減らしてください。

シラバスの印刷は、この PDF をもとに行う予定です。

※アイアシスタントは、ログイン後、一定時間（90 分）サーバとの通信がないとログアウト（自動的に接続が切断される）します。ブラウザからシラバスの各項目を入力している状態で一定時間を過ぎるとログアウトしてしまい、せっかく入力した内容が登録できずに消えてしまいます。入力時には、こまめに「一時保存」保存ボタンをクリックしてください。

※開発にあたり、様々な授業開講形態に対応できるよう調整を行いましたが、もしかすると対応できていない授業もあるかもしれません。万が一、シラバスの初期値等に不具合がある場合には、大学教育総合センター（uec@iwate-u.ac.jp）までご相談ください。

Iⁿ Assistant(アイアシスタント)は、シラバスのみならず、授業記録や電子掲示板など、受講期間を通して活用できる多様な機能を備えた学習支援システムです。

E メニュー

画面左側にあるメニューからは、それぞれのメニュー項目の一覧を表示させることができます。例えば、左メニューの「課題・レポート」をクリックすると、各担当科目で出題した「課題・レポート」の一覧が表示されます。

シラバス

「アイアシスタント」のメイン機能の1つです。学生に対して科目の情報を提供することができると同時に、教員があらかじめ科目の設計を行い、見通しを立てることができます。「授業の目標」「到達目標」「成績評価の方法と基準」など、各種評価等に対応した項目が用意されています。

シラバス入力時期になると、メニューにこの項目が表示されます。

担当科目

◆ 一覧

年度ごとの担当科目が一覧として表示されます。

◆ 学生授業記録

授業を履修している学生に授業記録をつけることができます。

学習支援

◆ iカード

Webを利用したレスポンスカードです。教員が出題したiカードに、学生がWebもしくは携帯電話から文章を入力して提出できます。学生が提出したiカードは、一覧として表示させる他、CSVファイルとしてダウンロードもできます。

◆ 課題・レポート

Webを利用して課題・レポート等を出題・回収・集計・添削できます。学生は、課題・レポートを電子ファイルとして作成し、それをWebを用いて提出できます。学生が提出した課題・レポート等は、提出状況が一覧として表示される他、ダウンロードもできます。

◆ ドリル

Webを利用した簡単なドリルを、作成・出題・採点・集計できます。学生は、Web上でそのドリルを実施でき、教員は、その結果を一覧として表示させることができます。

◆ アンケート

Webを利用したアンケートを、作成・出題・集計できます。学生は、Web上でアンケートに回答でき、教員は、集計結果を表示させることができます。

科目閲覧

◆ 検索

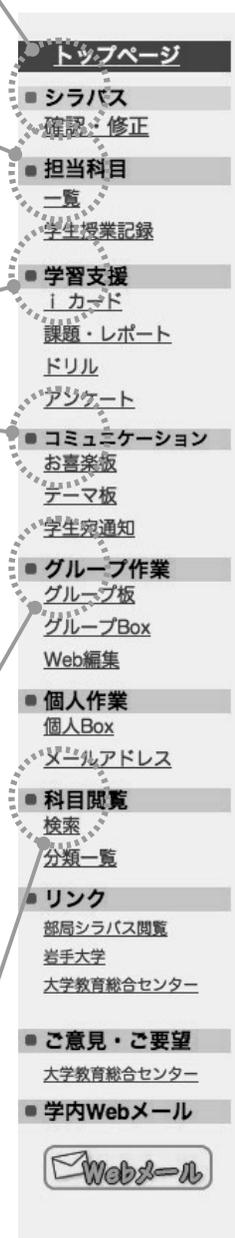
岩手大学の全授業科目を対象として検索ができます。キーワード検索、条件検索等、様々な方法で検索ができます。

◆ 分類一覧

岩手大学の全授業科目を対象として、開講の年度や学部、学科、課程、コースなどから、目的の授業の科目のシラバスを探すことができます。

扉を開くと
もっと詳しい
情報が!

メニューを
クリック!



Webメール

A ログイン



アイアシスタントにアクセスしたら、最初にログイン画面があらわれます。ログイン名のところには情報処理センターから発行されたアカウント(メールアドレスの@マークより前の部分)、パスワードには同じくそのアカウントのパスワードを入力し、[ログイン]ボタンをクリックします。

→ログインしたら...

C My時間割

担当している授業の時間割が表示されます。授業科目名、履修者の人数、教室が表示されます。さらに、学生から何らかの反応があったときには(学生がiカードを提出した、課題を提出した、アンケートに回答した、掲示板に書き込みした、など)このMy時間割にアイコンが表示されます。

履修者

履修登録をしている学生の一覧を表示させる他、CSVファイルとしてダウンロードできます。また、iカードの提出状況等、アイアシスタント上での学生の学習状況は自動集計され、一覧として表示されます。

授業記録

「アイアシスタント」のメイン機能の1つです。毎回の授業の内容や進行状況等を記録できます。授業で用いたプレゼンテーションファイル、配布したプリント等のファイルの登録もできます。

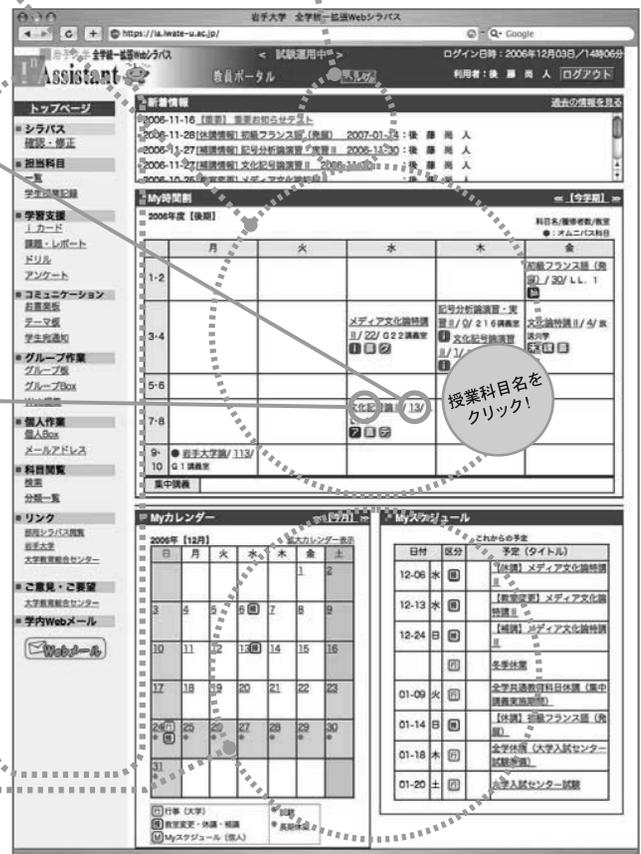
ここに記録した内容やファイル等は、履修している学生もみることができます。

扉を開くと
もっと詳しい
情報が!

便利な 個人専用の トップページ

B 新着情報

「休講情報」「補講情報」「教室変更」などを学務課を通して連絡した場合、学生の「新着情報」に表示されると同時に、教員側にも同じ内容が表示されます。その他、システムに関する連絡事項も表示されます。



授業科目名を
クリック!

D Myカレンダー・Myスケジュール

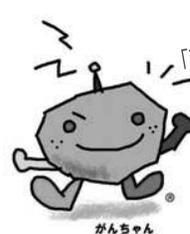
Myカレンダー

該当する月のカレンダーが表示されます。試験や休暇などの学年歴が予め登録されており、アイコンをクリックすることで詳細を見ることができます。また、日付をクリックして、自分のスケジュールを登録できます。

Myスケジュール

Myカレンダーに登録されているスケジュールが一覧表として表示されます。タイトルをクリックすると、詳細を見ることができます。

※このトップページ(簡易表示)へは、携帯電話からもアクセスできます。



「アイアシスタント」と呼んでください!

In Assistant®

Iⁿ Assistant(アイアシスタント)は、シラバスのみならず、授業記録や電子掲示板など、受講期間を通して活用できる学習支援システムです。

メニュー

画面左側にあるメニューから、それぞれのメニュー項目の一覧を表示させることができます。例えば、メニューの「課題・レポート」をクリックすると、履修している科目で出題された「課題・レポート」の一覧が表示されます。

シラバス

扉を開くと
もっと詳しい
情報が!

シラバスには、その授業を担当する教員により、授業に関する様々な情報が記述されています。例えば、担当教員がその授業を行うにあたっての目的を記した「授業の目的」、授業を受ける学生に到達してもらいたい具体的な能力を記した「到達目標」、学習した成果をどのような方法と基準で成績に反映させるかを記した「成績評価の方法と基準」、15回の授業を通して具体的にどのような内容が扱われるのかを記した「詳細計画」などがあります。

履修申告前には、必ずこのシラバスを読んで、履修する授業科目を決めるようにしましょう。

学習支援

◆iカード

Webを利用したレスポンスカードです。担当教員からiカードが出題されたら、Web上で文章を入力して提出しましょう。

◆課題・レポート

担当教員から課題・レポートが出題されたら、作成した課題・レポートの電子ファイルをWebを利用して提出できます。課題・レポートの内容、評価基準、提出期限等をよく読んで、取り組みましょう。また、課題・レポートによっては、添削結果が返却される場合もあります。

◆ドリル

担当教員からドリルが出題されたら、そのドリルにWeb上から解答できます。最大学習回数、学習制限時間、到達目標(合格ライン)が指定されていますので、(制限時間、回数の範囲内で)到達目標に達するまで、繰り返し挑戦してみましょう。

◆アンケート

担当教員がアンケートを実施したら、そのアンケートにWeb上で回答することができます。

科目閲覧

◆検索

岩手大学の全授業科目を対象に、授業科目名や担当教員名などの条件を指定して、シラバスや授業記録の検索を行うことができます。

◆分類一覧

岩手大学の全授業科目を対象に、科目の種別、学部、学科、課程、コースなどから、目的の授業のシラバスや授業記録を探すことができます。

履修申告

アイアシスタントからも履修申告ができます。履修申告ができる時期になると、メニューにこの項目が表示されます。

メニューを
クリック!

■ トップページ
■ 履修申告 履修申告
■ 履修科目 一覧 学生授業記録
■ 学習支援 iカード 課題・レポート ドリル アンケート
■ コミュニケーション お喜楽板 テーマ板
■ グループ作業 グループ板 グループBox Web編集
■ 個人作業 個人Box メールアドレス
■ 科目閲覧 検索 分類一覧
■ リンク 郵局シラバス閲覧 岩手大学 図書館(OPAC) 大学教育総合センター
■ ご意見・ご要望 大学教育総合センター
■ 学内Webメール Webメール

コミュニケーション

◆お喜楽板

教員と学生間のコミュニケーション手段として、授業科目につき1つ、電子掲示板(お喜楽板)が開設されます。授業や勉強に関する質問や相談などがあつたら、積極的に書き込んでみましょう。

◆テーマ板

授業によっては、テーマ別の掲示板が開設されることがあるかもしれません。こちらにも積極的に書き込んで議論に参加しましょう。

個人作業

◆個人Box

作業途中の電子ファイル等を登録しておくことができます。ここに登録しておけば、自宅からでも大学からでもそのファイルにアクセスできます。

◆メールアドレス

担当教員が出すメールが届くアドレスを設定できます。初期設定では、大学のアドレスが登録されています。もし、他のアドレス(携帯電話のアドレス等)も追加登録したい場合には、ここから登録してください。

ご意見・ご要望

アイアシスタントを使っている上で何か気がついたことがあれば、ご意見・ご要望コーナーから投稿してみましょう。ただし、個々の授業についての質問等は「お喜楽板」を使ってください。

A ログイン



アイアシスタントにアクセスしたら、最初にログイン画面があらわれます。ログイン名にはユーザID、パスワードにはパスワード(1年の「情報基礎」の授業等で自分で設定したもの)を入力*1し、[ログイン] ボタンをクリックします。学部の端末室(パソコン室)のパソコンを使うときのユーザー名、パスワードと同じです。

*1: ユーザIDは、学籍番号の最初の数字を学部を表すアルファベットに置き換えた8桁の英数字の文字列です。所属学科によっては、「情報基礎」の授業でパスワードを設定していません。その場合は、情報処理センターにご相談ください。

B 新着情報

履修している授業の「休講情報」「補講情報」「教室変更」や就職に関するセミナー等の情報など、様々な情報が表示されます。

C My時間割

履修している授業の時間割が表示されます。さらに、その授業科目について何らかの情報が更新された時(授業記録が更新された、iカードが出題された、誰かがお喜楽板に書き込みをした、など)には、時間割の授業科目名のところにアイコンが表われます。

→ログインしたら...

便利な個人専用のトップページ

授業記録

My時間割の授業科目名をクリックすると、「授業記録」の画面が表示されます。この画面では、担当教員が記録した毎回の授業の内容や進行状況等を閲覧することができます。教員によっては、授業で用いたプレゼンテーションファイル、配布したプリント等のファイルをダウンロードできるようにしているかもしれません。その他、授業に関する連絡事項や宿題、今後の授業の予定などが書き込まれることもあります。授業期間中は、こまめにチェックしましょう。

扉を開くともっと詳しい情報が!

授業科目名をクリック!



D Myカレンダー・Myスケジュール

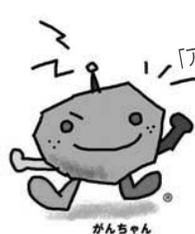
Myカレンダー

該当する月のカレンダーが表示されます。試験や休暇などの学年歴が予め登録されていて、アイコンをクリックすると詳細を見ることができます。また、日付をクリックすれば、自分のスケジュールも登録できます。

Myスケジュール

Myカレンダーに登録されているスケジュールが一覧表として表示されます。タイトルをクリックすると、詳細を見ることができます。

※このトップページ(簡易表示)へは、携帯電話からもアクセスできます。



「アイアシスタント」と呼んでください!

In Assistant®

入学前教育の実施 プレ・アイアシスタント

教育評価・改善部門 江本理恵

大学教育総合センターでは、平成 18 年度に「入学前教育」の実施と入学前教育用のポータルサイト「プレ・アイアシスタント」の開発に取り組みました。これは、平成 18 年度教育研究支援施設経費（戦略経費）事業として採択された「全入時代の「学び支援教育プログラム」開発事業」～入学前教育・リメディアル教育・転換教育の教材及び実施方法の開発～の一環として実施されたものです。

「入学前教育」とは、推薦入試や AO 入試等で早い時点で入学が決まった高校生を対象として、大学入学までの間に（大学が）行う教育のことです。英語や数学、物理などの教科に関する学習を行わせる場合と、「レポートの作成」など、大学での学習を体験させる場合の 2 通りが主に行われています。特に私立大学で盛んに行われており（ベネッセコーポレーションが 2005 年度に AO 入試を実施した大学を対象とした調査の結果、74% の大学が入学前教育を導入していた）、また、予備校などによる入学前教育の教材も数多く開発されています。

このような状況の下、岩手大学では入学前教育が必要かどうか、また、行うとすればどのような教育が効果的か、入学前教育実施にあたっての問題点は何か、教育効果はあるのか、などの検討を行うことを目的として、今回、入学前教育プログラムを開発・実施し、その評価を行いました。

※詳細については別冊子「入学前教育実施報告書」に掲載予定です。

■入学前教育の実施目的

今回実施する入学前教育の目的としては、以下のものが考えられます。

「学ぶ意欲の維持・向上」

推薦入試の場合、合格直後には大学での勉強に対する意欲が高い状態にあっても、入学までの期間が長いいため、その間に学習に対する意欲が低下する生徒も少なくありません。

大学から直接生徒へ働きかけることにより、この「意欲低下」を防ぎ、大学教員との関わりを通して、学習意欲を向上させる効果が考えられます。

「大学での学習への導入」

大学入学後、高校までの「勉強」から大学での「学習」にうまく転換できずに、大学での学習についていなくなる学生も少なくありません。そこで、「専門書を読んだレポートの作成」「ニュース・レポートの作成」等、従来の受験勉強とは違う、自分で考え、自分で表現しなければならない課題を出題し、提出されたレポー

トに添削を行って返却する、といった教育を通して、この「学びの転換」を促進させる効果が考えられます。
「未履修教科・苦手教科の補強」

合格後、入学までの期間は、未履修対策や弱点の補強に最適な時期です。英語や物理、化学などの専門教育における基礎となる教科が未履修だったり、非常に苦手だったりする場合には、この期間にじっくり補強しておく、入学後の学習でのとまどいが少なくなる効果が考えられます。

■ 「入学前教育」課題の設定

岩手県の多くの県立高校では、推薦入試合格者もセンター試験を受験する、という指導を行っています。そのため、「推薦入試の合格者に大量の CD-ROM 教材を送られると困る」などの入学前教育には批判的な意見も高校の教員からは聞かれました。一方、一般入試を受験する生徒を優先し、推薦入試の合格者に対しては何も対策をしない高校も多く、「入学前教育」としてどの程度の分量の課題を課すか、というのは、大きな検討課題となりました。

・ 必須か任意か

岩手県の県立高校の中には、一般受験の生徒と同様に推薦入試合格の生徒もセンター試験の対策や一般受験の対策をさせるところもあります。また、平成 18 年度は「未履修」問題のため高校において「補習」が予定されていたこと、この機会に短期留学をしたり、運転免許をとったりする生徒もいるだろうことなどを勘案して、課題提出については「任意」（希望者のみ）という方針をとることとしました。

・ 教科学習かレポートか

入学前教育として、教科学習（数学や英語、物理などの高校の範囲の学習）を行わせる場合と、レポートの作成などを行わせる場合とがあり、どちらを中心におくのかを検討しました。入学前教育は、未履修対策（専門を学ぶ際には「物理」が必要なのに、高校では「物理」を履修していなかった生徒に「物理」を勉強させる、など）として高い可能性を持つ教育方法だけでも、今回は「大学での学習への導入」という目的を優先させ、全学部の学生を対象として実施できる共通の課題として「読書レポート」を課題として出すことにしました。

また、「未履修教科・苦手教科の補強」のため、生徒の希望と状況に応じて、必要ならば高校までの学習の復習ができる環境を提供することを検討しました。教材を送付する、教材を送付し提出させ、それを添削して返却する、等の方法もありますが、添削する人材の確保が難しいこともあり、今回は自学自習用の e-Learning 教材を提供することを検討しました。

■ 共通課題の設定

「大学での学習への導入」という目的で、共通課題として「読書レポートの作成」を課しました。

⇒資料 2

■ プレ・アイアシスタントの開発

入学前教育実施の難しさは、対象となる生徒と顔を合わせる機会がないことです。推薦入試合格者を集めて講義を実施している大学もありますが、合格者が全国に及ぶことを考えると、あまり現実的ではありません。「学ぶ意欲の維持・向上」の目的達成のためには、対象生徒と大学との関わりを少しでも促進するための工夫が必要となります。

今回、この目的達成のために、推薦入試合格者を対象とした、「プレ・アイアシスタント」というポータルサイトを開発しました。このシステムは「共通課題」の提出機能が中心ですが、教員が登録したおすすめの本を閲覧したり、対象生徒同士で登録した「図書紹介カード」を閲覧したりすることで、大学入学後の生活への興味を高めることができるような機能も持たせました。

プレ・アイアシスタントの各機能

・ 最新情報

サイト内に何らかの更新があった場合、その更新内容が表示されます。クリックすると、その該当更新ページが表示されます。

・共通課題

共通課題の「読書レポート」用の機能です。

「ここへクリック」をクリックすると、「共通課題の取り組み方」が書かれたページが表示されます。

「課題図書一覧」は今回の「読書レポート」で課題とした図書の一覧です。タイトルをクリックすると、課題図書に関する情報が表示され、また、ここから作成した読書レポート（電子ファイルのみ）を提出することもできます。

・おすすめの本

教員が登録した「おすすめの本」についての情報を見ることができます。

・図書紹介カード

生徒は自分が読んだ本の感想等を「図書紹介カード」として登録することができます。登録された「図書紹介カード」は、対象生徒間でお互いに見ることができます。

・質問カード

岩手大学の教員に対して、生徒が質問することができます。質問に対する返信は、同じくこの質問カードを通して行われます。

・教科学習

千歳科学技術大学の小松川研究室で開発・運営されている電子学習システムへのリンクが設定されています。千歳科学技術大学との連携で、今年度はこのシステムを使わせていただきました。



プレ・アイアシスタント 学生用トップページ

■実施結果

スケジュール

平成 18 年 11 月 推薦入試合格発表後、対象者の所属する高校長への連絡（資料 1）

平成 18 年 12 月 15 日 入学手続き者に対し、入学前教育に関する情報を提供（資料 2）

平成 19 年 1 月 24 日 教科学習用 e-Learning 開始の連絡（資料 3）

平成 19 年 2 月 24 日 提出期限を連絡するためのはがきを送付：（資料 4）

名前の書かれていないレポートやどの課題図書を選んだのかが明記されていないレポート等もあったため、レポートにはタイトルをつけること、名前を書くこと、などを確認する内容を取り入れた

平成 19 年 2 月 28 日 レポート提出〆切

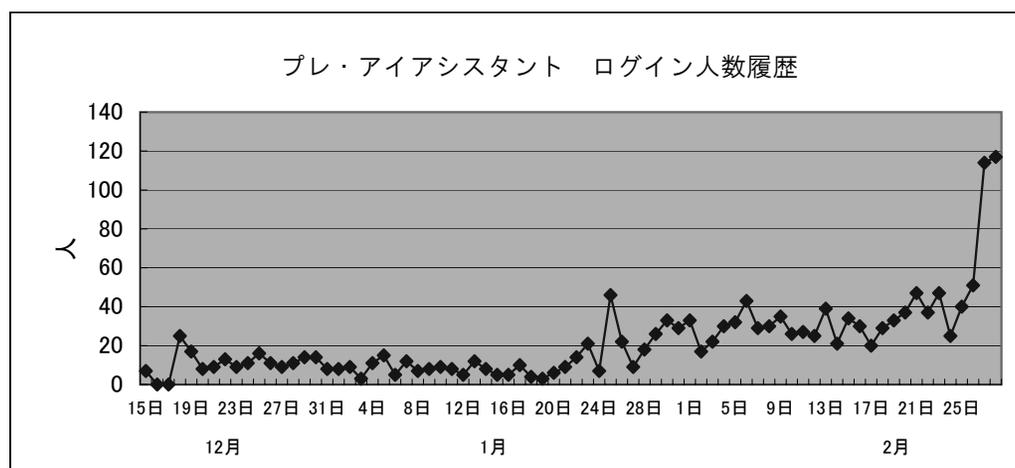
センター関係教員（玉、岡田、山崎、永野）によるレポート添削作業

平成 19 年 3 月 レポート返却発送

「読書レポート」の提出状況

人文社会科学部	31 名	(対象者:49 名、提出率 63%)
教育学部	27 名	(対象者:49 名、提出率 55%)
工学部	56 名	(対象者:109 名、提出率 51%)
農学部	22 名	(対象者:30 名、提出率 73%)
合計	136 名	(対象者:237 名、提出率 57%)

プレ・アイアシスタントの利用状況



プレ・アイアシスタントにログインした人数 175 名

(対象者 ;237 名、ログイン率 74%)

「読書レポート」提出者中、プレ・アイアシスタントにログインした人数 119 名

(対象者 ;136 名、ログイン率 88%)

「読書レポート」提出者中、プレ・アイアシスタントを用いて提出した人数 93 名

(対象者 ;136 名、提出に利用率 68%)

* 課題提出日切日の増加は当然のこととしても、それ以前でも、定期的にアクセスする学生が存在しました。これは、「TA による「図書紹介カード」の投稿」など、サイト内のこまめな更新が貢献していると考えられます。

* また、予想通り、センター試験後よりアクセス数が増えています。岩手県内の県立高校生は、センター試験終了してからこの入学前教育に取り組み始めたと考えられます。

千歳科学技術大学 e-Learning 教材の利用状況

人文社会科学部 17 名 (平均 :230 分、最大 :630 分)

教育学部 19 名 (平均 :303 分、最大 :1000 分)

工学部 47 名 (平均 :608 分、最大 :4630 分)

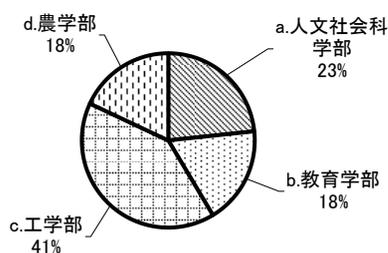
農学部 21 名 (平均 :604 分、最大 :3010 分)

合計 104 名 (平均 :490 分、最大 :4630 分)

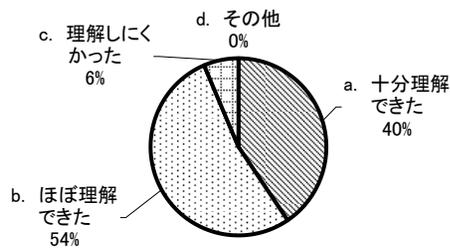
■ 「読書レポート」アンケート結果集計

読書レポート提出者 94 名分

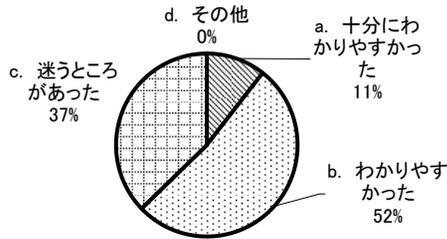
1. 入学予定学部 [a. 人文社会科学部 b. 教育学部 c. 工学部 d 農学部]



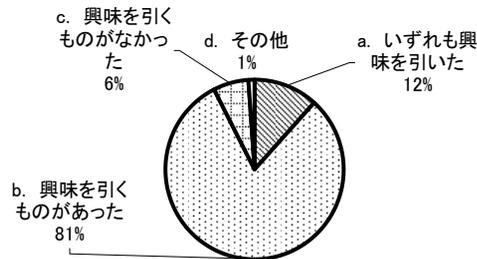
2. 「読書レポート」の目的は理解できましたか？



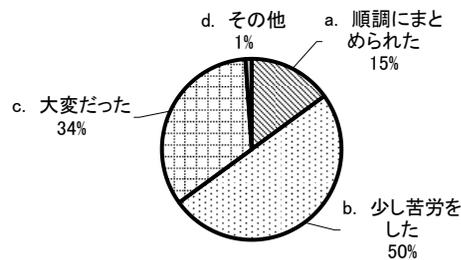
3. 「読書レポート」の作成の仕方はわかりやすかったですか？



4. 課題図書についてどう感じましたか？

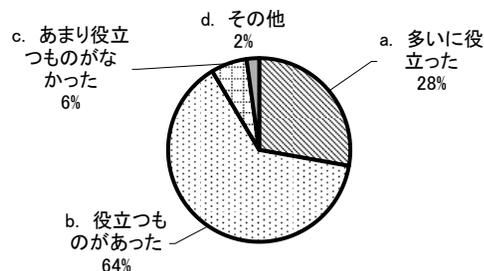


5. 「読書レポート」の作成は順調に進みましたか？



* レポートの作成そのものが初めての生徒が多かったらしく、レポートの作成は大変だった、苦勞した、という意見が多く見られました。

6. 「読書レポート」は大学の学びを知る上で役立ちましたか？



* 苦勞してレポートを作成し、提出までこぎ着けた、という経験は、生徒にとって得るものが多かったことがわかります。今回の「読書レポートの作成」という課題は、目的の1つである「大学での学習への導入」の達成に効果があったと言えるでしょう。

■ 「プレ・アイアシスタント」 アンケート集計結果

読書レポート提出者 94 名分

1. 「プレ・アイアシスタント」にログインしましたか？

a. ログインした 77 (82%) b. ログインしなかった 17 (18%)

* ログインしなかった理由の多くは、「パソコンがなかった」「パソコンがネットワークにつながっていないかった」というものでした。

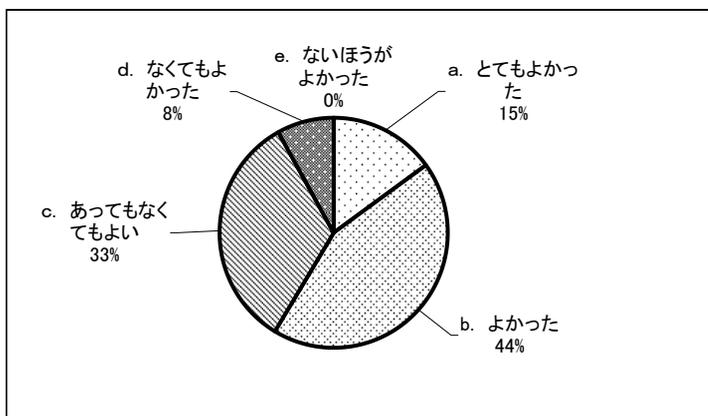
2. 「プレ・アイアシスタント」の使い方でわかりにくかったところがありますか？

a. あった 12 b. なかった 75

* 千歳科学技術大学の e-Learning システムの使い方がわかりにくかった（うまく使えなかった）という意見が多くありました。このシステムは機能が多く複雑なものなので、パソコンの性能やネットワーク速度によっては、うまく使えなかったようです。

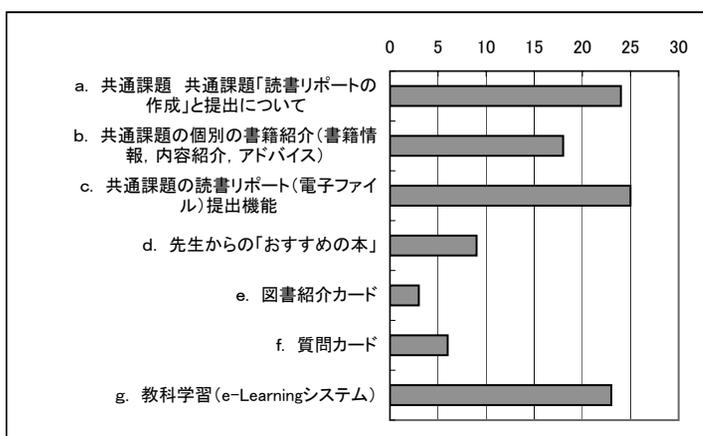
3. 入学前教育のシステムとして、「プレ・アイアシスタント」があつてよかったと思いますか？

* レポート提出者の半分以上が「よかった」と回答していることから、「プレ・アイアシスタント」は「学ぶ意欲の維持・向上」の目的達成に一定の効果があったことがわかります。



4. 「プレ・アイアシスタント」のどの仕組みがよかったですか？

* サイトを通してレポートを提出できる機能が便利という意見が多く見られました。



* 2冊ほどしか登録されていないのにも関わらず、「先生からの「おすすめの本」」を選んだ生徒がいる、ということから、生徒は大学からの情報（大学教員からの生の情報）をほしがっていることが示唆されます。

* 課題作成上の疑問点を質問できる質問カードは、限られた学生でしたがよく活用されていました。

* 教科学習に対する希望は多く、パソコンがない生徒向けのものも欲しい、という意見が見られました。

■今後の課題

平成 19 年度以降、この「入学前教育」を実施するにあたっての課題は以下の通りが考えられます。

「入学前教育」実施に関わる教員の確保

- ・サイトの管理（サイト開設の準備、質問カードへの回答、図書紹介カードの登録、おすすめの本の登録等）
- ・レポート回収・発送作業等に関わる作業
- ・レポート添削

今年度は、大学教育総合センターの 4 名の教員（玉、岡田、山崎、永野）が中心となってレポートの添削とコメントの作成を行いました。このレポート添削の教員の確保が今後の最も大きな課題です。

「課題図書」の選定方法

今年度は試行の意味もあり、センター長が課題図書を決めましたが、各学部の特徴を出した課題図書を選定する、という方法もあります。また、共通の課題図書、各学部の課題図書、と 2 種類の共通課題を出題する方法も考えられます。

出題方法

出題されたレポートの中には、タイトルを書く、小見出しをつける、名前を書く、といったレポートの基本ができていないレポートも多く見られました。このような「レポート課題」出題の際には、レポート作成における基本から指示を出す必要があるようです。アンケートからも、「書き方がわからなかったので、書き方の例が欲しかった」という意見が多く見られました。出題方法として、「例」を示すのが本当に良いのかは意見の分かれるところですが、ただ、対象生徒は「レポートを書きなさい」と言われても「レポートが何か」「どのように書くものなのか」といったことがわからないことは明らかです。おそらく他の 1 年生も同じ状況だと考えられるので、初年次の基礎ゼミナール等において、「レポートの書き方」について指導する必要があることがわかります。また、1 年生に「レポート」を出題する際には、その出題方法に工夫が必要であることも、これらの結果から示唆されます。

デジタルデバイスへの対応

家にパソコンがない、あってもネットワークにつながっていない、ネットワークが遅いなど、プレ・アイアシスタントや e-Learning 教材を活用できなかった生徒もいます。

「読書レポート」の提出者のうちの「プレ・アイアシスタント」へのログイン率をみると、「プレ・アイアシスタント」にログインすることにより、「学習意欲の維持・向上」が行われ、それが「読書レポート」の提出につながっていることが考えられます。

プレ・アイアシスタントにログインできない生徒に対する対策も今後の課題の 1 つです。

e-Learning 教材の補強

自学自習用の e-Learning 教材を活用する生徒も多く、また、「受験して入ってくる人との勉強量の差が心配です」という質問をしてきた生徒もいました。推薦入試で早く合格が決まった分だけ、その間も受験勉強している同級生との勉強量の差を心配している生徒もいるようです。このような生徒たちへ、様々な教材を提供できるようにすることも今後の課題の 1 つです。

資料1：推薦入学合格者在籍高校長への案内

平成18年11月30日

推薦入学試験合格者在籍高等学校長 殿

岩手大学理事（学務担当）・副学長
大学教育総合センター長
玉 真之介

入学前教育の実施に関するお願い

拝啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

この度は、優秀な生徒さんをご推薦いただき、誠にありがとうございました。入学された生徒さんの勉学並びに学生生活が充実したものとなるように、教職員一同、総力を挙げて取り組みたいと思います。

さて、本学では高校教育と大学教育との接続を1人1人の学生にとってスムーズなものとする観点から、「入学前教育」の有効性について検討を行ってきました。その結果、推薦入試で早期に合格が決まった入学者には、学びの意欲の維持・向上と入学準備の観点から有効性が高いと判断し、今年度から実施させていただくこととしました。

今年度は初年度でもあり、実施しますのは、以下の2つです。実施の結果は検証を行い、毎年、改善と充実を図っていきたいと考えております。

- (1) 指定された課題図書から1冊を選び、読書レポートを作成する。
- (2) 教科について学習する（今年度は英語と数学を予定しています）。

読書レポートの提出・添削、教科の学習等はインターネットを利用した e-Learning を準備いたしますので、このサイトをご活用いただくこととなります。当然、環境の整わない生徒さんには、郵送でのやりとりも予定しています。

生徒さんへの過度の負担や高校での教育に影響を及ぼすものにならないよう、十分に配慮して進めたいと思います。また、これらは入学後の教育に直接リンクするものではなく、入学者に強制するものでもありません。

以上のような「入学前教育」の趣旨をご理解いただき、その実施についてご了承いただけますようお願い申し上げます。

何かご不明な点やご意見がありましたら、遠慮無く下記までお寄せ下さい。今後も引き続き、本学へのご理解とご助言等を合わせてお願い申し上げます。

敬具

※入学前教育に関するご質問等は大学教育総合センター（下記）までお願いします。

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-34

TEL:019-621-6924 FAX:019-621-6928

岩手大学 大学教育総合センター

入学前教育担当：江本

資料2：推薦入学合格手続き時に配布

平成18年12月18日

推薦入学試験合格者のみなさんへ

岩手大学理事（学務担当）・副学長
大学教育総合センター長
玉 真之介

入学前の学習課題について

合格おめでとう。岩手大学は、みなさんの入学を心から歓迎します。

岩手大学大学教育総合センターでは、推薦入試で合格されたみなさんが学習意欲を維持して、入学後の学びにスムーズに移行できるように、入学前の学習課題を準備しました。これは、必修課題として課すものではありません。自らの意思で取り組んでいただければよいのですが、ぜひ積極的に受けとめていただきたいと願っています。

課題は、以下の2つです。

- (1) 指定された課題図書から1冊を選び、読書レポートを作成する。
- (2) 教科について学習する（e-Learning サイトにて教材を提供）。

この内、「読書レポート」は、いわゆる「読書感想文」ではありません。別紙にあるように、情報資料としての図書から適切な情報を取り出して文章にまとめるという社会人に必須の言語力を養成するためのものです。

その場合には、主体的な問題関心が重要となります。そうした問題関心は、継続的な読書によって培われます。みなさんも、自ら主体的に学ぶことが基本となる大学での学習を意識して、この読書レポートに取り組んでみてください。

何かご不明な点は、遠慮無く下記まで問い合わせてください。

敬具

※入学前教育に関するご質問等は大学教育総合センター（下記）までお願いします。

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-34

TEL:019-621-6924 FAX:019-621-6928

岩手大学 大学教育総合センター

入学前教育担当：江本

共通課題「読書レポート」の作成」と提出について

大学教育総合センター

1. 「読書レポート」の目的

図書を1つの情報資料として読み込み、そこから適切な情報を取り出して、簡潔でわかりやすい文章としてまとめる力を養うことを目的としています。この力を養うためには、問題関心を深めていくことが重要です。問題関心が深まることによって情報が持っている意味や重要性が的確に捉えられるようになります。

2. 「読書レポート」の作成の仕方

- (1) 下の課題図書の中から1冊を選び、選んだ理由をまとめる(200字程度)
- (2) 各章ごとに3つのキーワードと要約文を作る(全体で2000字程度)
- (3) 図書から得られた知識や考え方を総括的にまとめる(400字程度)
- (4) 次に読んでみたい図書名や分野、その理由をまとめる(200字程度)

3. 課題図書

① 憲法九条を世界遺産に(新書) 太田 光(著), 中沢 新一(著) 集英社(2006/8/12)

まず、宮沢賢治が話題となります。誰が作ったかが常に論議の的となってきた日本国憲法。それを日米合作だ、だからすばらしい、という太田光はやはりただ者ではない。世界遺産という発想も冗談のようでいて、心に残るものがある。「夢であり理想であり抛り所」という言葉がキーワードの1つ。戦争が世界を覆い尽くしつつある時代に生きるものとして、考えるヒントを与えてくれている。

② ロハスの思考(新書) 福岡 伸一(著) 木楽舎(2006/6/1)

ロハスとは(Lifestyles Of Health And Sustainability)の頭文字 LOHAS を取ったもので、いま環境に優しいライフスタイルとして話題の言葉になっています。著者は、分子細胞生物学の専門家で、狂牛病の原因といわれるプリオンなどに詳しい。だから、食についても重要なテーマとなっている。ただし、著者が「勉強しよう」と呼びかけるのは、生命は機械ではなく、絶え間ない流れの中の「動的な平衡状態」からなっているということだ。

③ 環境再生と日本経済—市民・企業・自治体の挑戦(新書)

三橋 規宏(著) 岩波書店(2004/12)

人の豊かさを追求してきた経済活動によって、地球環境は危機に瀕しています。経済活動と環境再生とは相容れない対立物なのか? 著者はかつて大量生産・大量消費・大量破棄の時代はそうだったが、今や環境を再生しなければ経済的な豊かさは得られない時代に入った、といいます。そのためには、発想を転換によって、ストックを活用し、環境を再生することが経済活動につながることを、多くの事例からわかりやすく述べられています。

④ 日中2000年の不理解—異なる文化「基層」を探る(新書)

王 敏(著) 朝日新聞社(2006/10)

日本と中国は、文化的にも近い東洋の国という考えほど間違ったものはない、と著者

は言う。正義を求める中国文化と敵味方を超え「自然」を求める日本文化。動物に対する態度から始まって、韓流ブームなど身近な話題を取り上げながら、いかに中国と日本でもの感じ方が異なるのかを教えてくれる。中国人でありながら、宮沢賢治に心酔した著者だからこそ、日本文化の特殊性、そして今の世界に対する可能性を語れるのだろう。

⑤梅原猛の授業 仏教（文庫）

梅原 猛（著） 朝日新聞社（2006/10）

人間に宗教は不要なのか。「不要」と考えてきた著者は、年齢を重ねて、個人の生命の中に全生物の歴史がつまっている、つまり遺伝子の中に自利と他利が含まれているという点に到達して、宗教、中でも多神論の仏教へ至ったことを告白する。この中学生を対象に行われた講義の記録は、年齢を超えて多くの人に人生の意味を考えるヒントが多数含まれている。最後のところで、著者が最も好きだという宮沢賢治が登場します。

4. 提出期限と提出方法

提出期限：平成19(2007)年2月28日

提出方法：以下の2つの方法より、都合のよい方を選択して提出してください。

■方法1:プレ・アイアシスタントを利用して提出

岩手大学が用意した入学前の生徒専用の e-Learningサイト (<http://pre-ia.iwate-u.ac.jp/>) にアクセスして、ワープロソフト（Word、一太郎等）を用いて作成したレポートを提出してください。この e-Learningサイト（プレ・アイアシスタント）には、岩手大学の教員によるレポート作成に関するアドバイスや図書の紹介などが随時掲載されています。また、入学予定の生徒同士での図書の紹介も行えるようになっています。ぜひ、積極的にアクセスし、読書レポートの作成に役立ててください。

■方法2:郵送で提出

郵送で提出する場合には、レポートを下記の宛先まで送ってください。

〒020-8550

岩手県盛岡市上田 3-18-34 岩手大学 大学教育総合センター

※「読書レポート在中」と封筒の表面に赤字で記入すること

プレ・アイアシスタントへのログイン方法

大学教育総合センター

岩手大学では、推薦入試で合格した生徒専用の e-Learning サイト「プレ・アイアシスタント」を用意しました。このサイトからは、岩手大学の教員からの読書レポート作成上のアドバイス「課題図書一覧」や、高校生の中にぜひ読んでおいてもらいたい本の紹介「おすすめの本」などの情報が提供されます。数学などの教科学習のための教材も提供されます。また、同じく推薦入試で合格した生徒同士で読んだ本を紹介する「図書紹介カード」もあります。

ぜひ、このプレ・アイアシスタントを積極的に活用して、入学式までの限られた期間を有益に過ごしてください。

■ ログイン方法

- ① インターネットに接続されたパソコンのブラウザを開いて、
<http://pre-ia.iwate-u.ac.jp>
にアクセスします。

- ② ログイン画面が表示されます。ログイン名のところにログイン ID、パスワードのところにパスワードを入力し、[ログイン] ボタンをクリックします。



ログイン ID：受験番号（例：A0001）
パスワード：（人文社会科学部の場合）
*1988 年生まれの場合
→ A988+ 誕生日の 4 桁表示
（例：1988 年 4 月 1 日生まれ → A9880401）
*1989 年生まれの場合
→ A989 + 誕生日の 4 桁表示
（例：1989 年 1 月 1 日生まれ → A9890101）

最初のアルファベット一文字は、以下の通りになります。

A:人文社会科学 B:教育学部 C:工学部 D:農学部

→アルファベットは大文字です。小文字を入力しないように注意してください。

- ③ ログイン後、わからないことがあったら、タイトルの横にある？マークをクリックしてみましょう。解説が表示されます。また、「質問カード」を使って質問することもできます。

■ プレ・アイアシスタントのログインID・パスワード

名前： *****
ログイン ID： *****
パスワード： *****

※上記に表示されている名前が自分の名前と違う場合には、大学教育総合センターまでご連絡ください。

※ログイン ID、パスワードを他の人に知られないように注意しましょう。

ごあいさつ

推薦入学試験で合格者されたみなさん、並びに保護者のみなさん。

合格おめでとうございます。入学が2ヶ月後に迫って来ました。私たち岩手大学関係者一同も、みなさんと同様に入学式の日を楽しみにしています。

今回のご案内は、岩手大学が高等学校のご理解も得ながら行うこととした入学前教育プログラム的一部分です。これは、推薦入学のみなさんが学習意欲を持続しつつスムーズに大学教育へ移行できるためのサポートとして、今年度からはじめたものです。

はじめてということもあり、まだまだ改良・改善の余地が残されておりますが、その趣旨は推薦入学のみなさんの「学び支援」であることをご理解いただければ幸いです。

本学は、「学びの銀河」というプロジェクト名で、世界や地域の人々や環境、さらには未来の世代の暮らしをも「思いやることのできる」人材育成のために、教育改革に取り組んでいます。

入学前教育プログラムのその一部分です。みなさんが自ら主体的に学ぶところから社会が求める人材として活躍する日への一歩がはじまります。ぜひ、このプログラムを活用していただきたいと思います。

入学式で会えるのを楽しみにしています。それまで健康に留意して高校生活の最後を頑張ってください。

平成19年1月25日

岩手大学理事（学務担当）・副学長
玉 真之介

教科学習用e-Learningサイトについて

平成 19 年 1 月 25 日
岩手大学 大学教育総合センター

■教科学習e-Learningサイトのシステムに必要なPC環境

岩手大学大学教育総合センターでは、これから入学されるみなさんのために、プレ・ア
イアシスタントからログインできる教科学習（数学、物理、英文法）の e-Learning サイト
を用意しました。みなさんがこれから大学で行う学問は、高校までの学習の土台の上に築
くものです。これから入学式までの間、少しずつでいいので、ぜひ、各教科についても学
習し、しっかりした土台を築いてください。

この e-Learning サイトは、千歳科学技術大学が開発しているシステムの上で稼働してい
ます。千歳科学技術大学と岩手大学との間では、現在、このシステムに関する共同実証実
験を行っています。研究開発中のシステムなので、（市販品と違って）不具合もあります
し、動作に時間がかかることもあります。（急なメンテナンス等で）システムが使えない
こともあります。この点をご理解いただきたいと思います。ただし、教材の内容に関しては
は非常によく作り込まれた良問ばかりですので、安心して取り組んでください。

教科学習用 e-Learning サイトのユーザID、パスワードはプレ・アイアシスタントのロ
グイン名、パスワードと同じです。まずは、一回、ログインしてみてください。

■ログイン・パスワードの基本ルール

ログインID：受験番号（例：A0001）

パスワード：（人文社会科学部の場合）

*1988 年生まれの場合→A988+誕生日の4桁表示

（例：1988 年 4 月 1 日生まれ → A9880401）

*1989 年生まれの場合→A989 + 誕生日の4桁表示

（例：1989 年 1 月 1 日生まれ → A9890101）

最初のアルファベットは入学予定学部により異なります。

A:人文社会科学部 B:教育学部 C:工学部 D:農学部

※ログイン、パスワードは半角英数字です。アルファベットは大文字です。ログ
インできない時には、全角（日本語入力モード）で入力していないかどうか、
アルファベットを小文字で入力していないかどうかを確認してください。

動作確認OS：

Windows2000, WindowsXP

動作確認ブラウザ：

Internet Explorer 7

Internet Explorer 6 sp1

Mozilla Firefox 2.0

必要なプラグイン：

Adobe Flash Player Plug-in ver.8.0.24.0 以上

Adobe Shockwave Plug-in ver.10.1.1.016 以上

無償版 Real Player ver.10 以上

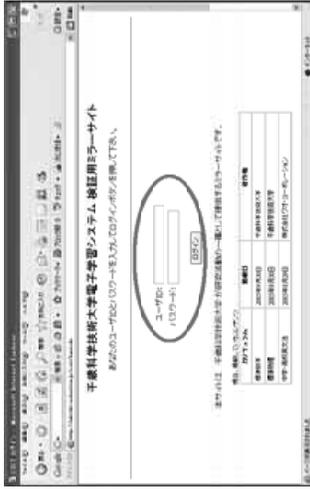
※これ以外の環境につきましては、画面が表示できない、成績が記録されないなど
の不具合が発生する可能性があります。プラグインのインストール、ならびに更
新を行ってからご利用ください。

プレ・アイアシスタント <http://pre-ia.iwate-u.ac.jp/> 教科学習用e-Learningシステム

2006年度 利用マニュアル

1. ログインしよう！

プレ・アイアシスタントのリンクをクリックすると、e-Learning システムのログイン画面が表示されます。ユーザID、パスワードに該当するものを入力し、[ログイン] ボタンをクリックしてください。



ログインすると、それぞれ個人のトップページが表示されます。まずは、メニューの「学習の進め方」「全体を通じて」をクリックして読んでみましょう。

上には各項目へのリンクがあり、演習、教科書、テスト、マイページ、課題、学習状況、CT、設定、ログアウトを選択することができます。



2. 演習問題に取り組みよう！

「演習」をクリックすると、演習のトップページが表示されます。【演習の使い方】を良く読んで取り組みましょう。

演習に取り組む時には、紙と鉛筆を用意し、必ず紙の上で問題を解いてください。このシステムはゲームではなく、あくまでも勉強のためのものです。「なんとなくこれかな？」ではなく、自力で問題を解いて、システムに採点してもらおう、というスタンスで取り組みと、学力もついてくるでしょう。



演習の問題に取り組むには、左側に表示されるカテゴリの中から自分の勉強したい項目を選択します。例えば、次の図は、高校3年生で学習する「微分法」の演習に取り組む場合を例に取り上げています。

岩手大学 大学教育総合センター
 2007年1月25日版

※本システムは、千歳科学技術大学小松川研究室で開発中の「千歳科学技術大学電子学習システム」を使用しています。千歳科学技術大学と岩手大学との間では、現在、このシステムに関する共同実証実験を行っています。

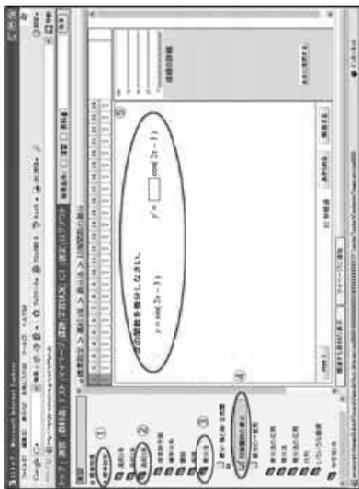
① 「標準数学」をクリックします。

② 「高校3年」をクリックします。

③ 「微分法」をクリックします。

④ 「初等関数の微分」をクリックします。

⑤ ここをマウスでクリックすると、問題が表示されます。問題が表示されるまで、多少時間がかかることがあります。そのまま待ちましょう。

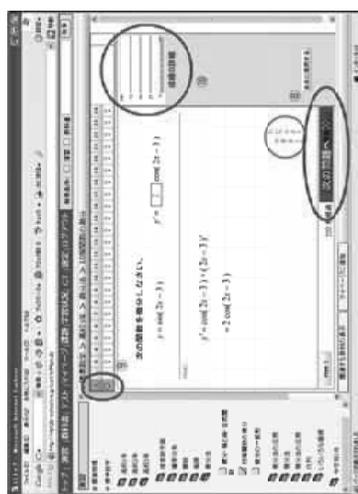


⑥ 紙と鉛筆を使って計算を行い、答えがでたら、解答入力スペース (□) に解答を入力します。□をマウスでクリックすると、入力できるようになります。また、半角英数字で入力してください。択するとところもあります。



⑦ 解答を入力したら、「解答する」ボタンをクリックしてください。

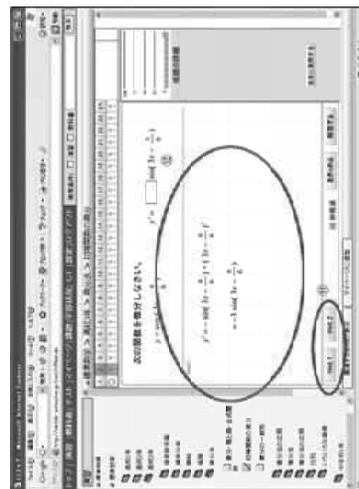
⑧ 解答があつていると、「たいへんよくできました」というメッセージとともに、解答が表示されます。その後、「次の問題へ」ボタンが表示されますので、ここをクリックして次の問題にすすみます。



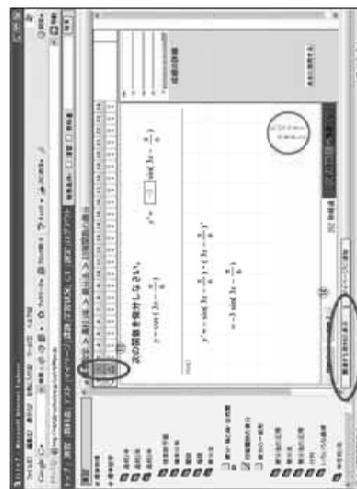
⑨ 正解すると、問題番号の下に○がつきます。

⑩ 達成度を示すグラフです。○が多いほど達成度が上がっていきます。100を目指してがんばりましょう。

⑪ 画面左下に「Hint 1」ボタンがあります。このボタンをクリックすると、画面⑫の位置にヒントが表示されます。ヒントは「Hint 1」～「Hint 3」があり、問題によってヒントの数は異なります。問題がわからない時には、「Hint 1」ボタンをクリックしてみましょう。

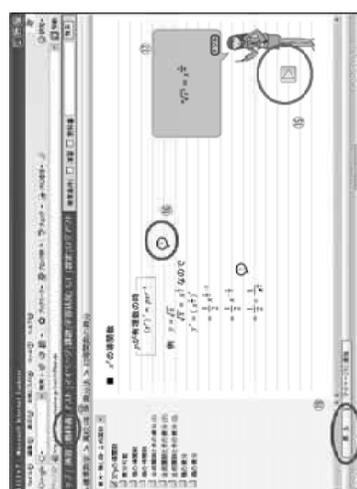


⑫ ただし、ヒントを参照して解答した場合、その解答があつていても、ここは△にしかりません。再度問題に取り組み、ヒントを見ずに正解した場合には、○になります。



⑬ ヒントを見ても問題がわからない場合には、画面左下にある「関連する教材の表示」をクリックしてみましょう。

⑭ このボタンをクリックすると、順々に解説が表示されていきます。自分のペースにあわせてゆつくりと読み進めていきましょう。特に数学や物理の場合、単に画面を眺めるだけではなく、紙と鉛筆を用意して、自分で実際に鉛筆を動かして式を確認してください。



⑮ この「？」マークが現れたら、ここをクリックしてください。すると⑯のように解説が現れます。これらもすべて、自分で実際に鉛筆を動かして確認してください。

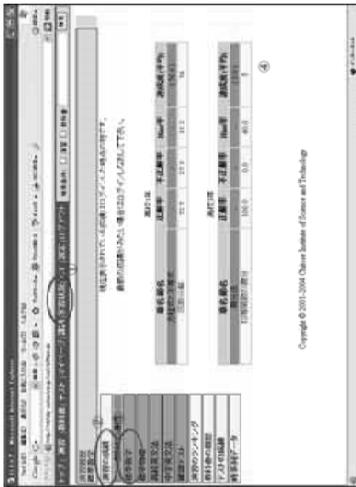
⑯ 画面上部の「教科書」をクリックしても、この教科書（教材）を提示させることができます。

⑰ 「戻る」ボタンをクリックすると、元の演習の画面に戻ります。

3. 学習状況を確認しよう！

このシステムでは、自分の学習状況を確認することができます。

- ① 上部にある「学習状況」をクリックします。
- ② 「演習の成績」をクリックします。
- ③ 「標準数学」をクリックします。
- ④ 「標準数学」の学習状況が表示されます。



同じように、「標準物理」や「高校英文法」「中学英文法」の演習に取り組んだ場合には、それぞれをクリックすることで学習状況が表示されます。

みなさんの学習状況は、岩手大学の教員が確認することができます。ぜひ、達成度 100 を目指してじっくり取り組み組んでください。

4. その他（注意事項）

- (1) トップメニューの「設定」よりパスワードの変更ができますが、基本的にパスワードの変更はしないでください。
- (2) 演習のページには、[先生への質問] ボタンがありますが、こちらにいただいた質問への回答は遅くなる可能性があります。ブレ・アイアシスタントの「質問カード」をご利用ください。これは CT の掲示板に書き込むのも同じです。できるだけ、ブレ・アイアシスタントの「質問カード」をご利用ください。
- (3) このシステムには、マニュアルで解説した機能以外にも、テスト、しおりなどの機能があります。まずは演習に取り組んで、さらに余裕があれば、これらの機能についても試してみてください。

資料 4：レポート提出日連絡のほがき

岩手大学
推薦入学試験合格者の皆様

読書レポートの 提出期限は2月28日です！

読書レポート提出前チェックリスト

- レポートの最初に入学予定学部、受験番号、名前が書いてありますか？
- レポートにタイトルはついていますか？
- 段落分けしたり、小見出しをつけたりして、読みやすいレポートになっていますか？
- 誤字、脱字、用語の間違い等はありませんか？
- 封筒（郵送する場合）に住所、名前が書いてありますか？

提出前に上記を見直してみよう！

※ブレ・アイアシスタントを利用して提出した場合は、何度でも提出のし直しができます！



岩手大学 大学教育総合センター
〒020-8550 盛岡市上田3-18-34
TEL:019-621-6924/FAX:019-621-6928
※既にご提出済みの場合はご容赦ください。

資料5：レポート返却時添付、実施アンケート

平成19年3月29日

「読書レポート」を提出したみなさんへ

岩手大学理事（学務担当）・副学長
大学教育総合センター長
玉 真之介

「読書レポート」に対するコメント送付とアンケートについて

みなさんから提出いただいた「読書レポート」は、確かに大学教育総合センターで受理しました。こちらから提起した「学習課題」をみなさんがしっかり受けとめて、主体的に取り組んでくれたことを大変にうれしく思っています。

提出された「読書レポート」は、大学教育総合センターの教員で手分けをして読了しました。大変に良く書けた「読書レポート」が多数あったというのが一致した意見です。みなさんがこの「読書レポート」を大学での学びの第一歩と位置づけて、大学でも引き続き学習を発展させてくれることを期待しています。

その一助として、提出された「読書レポート」に対するコメントをレポートと一緒に同封しました。読みやすく要領を得た文章を書くというのは、決して簡単なことではありません。また、一朝一夕に身に付くものでもありません。良い文章を書くことを心がける中で、次第にスキルが身に付いていきます。ぜひ、このコメントを役立ててください。

もう一つのお願いは、アンケートへの協力です。「読書レポート」は、今年度の新入生が最初で、完成されたものではありません。みなさんの意見を取り入れて、内容を充実させたいと考えています。同封したアンケートにぜひ答えて、提出をお願いします。

このアンケートは、郵送もしくは学生センターの②番窓口^②に提出してください。窓口^②に提出する場合は4月10日（火）・11日（水）に、郵送の場合も4月13日（金）までには投函するようにご協力をお願いします。

「読書レポート」アンケート

(趣旨)

このアンケートは、今年度はじめに実施した「読書レポート」について、入学前教育対象者からの評価を集約し、来年度に向けて改善点を見いだすためのものです。ご協力をお願いいたします。

以下の項目について、当てはまるものに○をつけ、必要ところは記述して、回答してください。

1. 入学予定学部 [a. 人文社会科学部, b. 教育学部, c. 工学部, d. 農学部]
2. 「読書レポート」の目的は理解できましたか？
 - a. 十分理解できた
 - b. ほぼ理解できた
 - c. 理解しにくかった
 - d. その他 ()
3. 「読書レポート」の作成の仕方はわかりやすかったですか？
 - a. 十分にわかりやすかった
 - b. わかりやすかった
 - c. 迷うところがあった (例)
 - d. その他 ()
4. 課題図書についてどう感じましたか？
 - a. いずれも興味を引いた
 - b. 興味を引くものがあった
 - c. 興味を引くものがなかった
 - d. その他 ()
5. 「読書レポート」の作成は順調に進みましたか？
 - a. 順調にまとめられた
 - b. 少し苦労をした
 - c. 大変だった
 - d. その他 ()
6. 「読書レポート」は大学の学びを知る上で役立ちましたか？
 - a. 多いに役立った
 - b. 役立つものがあった
 - c. あまり役立つものがなかった
 - d. その他 ()
7. 感想や改善点など、気づいた点を自由に書いてください。

裏面に続く

「ブレ・アイアシスタント」アンケート

このアンケートは、「ブレ・アイアシスタント」について、利用者の意見を集約し、来年度に向けて改善点を見いだすためのものです。以下の項目について、当てはまるものに○をつけ、また、必要ところを記述してご回答ください。

1. 「ブレ・アイアシスタント」にログインしましたか？
 - a. ログインした
 - b. ログインしなかった

「b. ログインしなかった」理由を教えてください。
2. 「ブレ・アイアシスタント」の使い方でわかりにくかったところはありますか？
 - a. あった
 - b. なかった

「a. あった」場合、具体的にどこがわかりにくかったですか？
3. 入学前教育のシステムとして、「ブレ・アイアシスタント」があっただけよかったと思いますか？
 - a. とてもよかったです
 - b. よかったです
 - c. あってもなくてもよい
 - d. なくてもよかったです
 - e. ないほうがよかったです

上記を選んだ理由を教えてください。
4. 「ブレ・アイアシスタント」のどの仕組みがよかったですか？
 - a. 共通課題 共通課題「読書レポートの作成」と提出について
 - b. 共通課題の個別の書籍紹介（書籍情報、内容紹介、アドバイス）
 - c. 共通課題の読書レポート（電子ファイル）提出機能
 - d. 先生からの「おすすめの本」
 - e. 図書紹介カード
 - f. 質問カード
 - g. 教科学習（e-Learningシステム）

上記を選んだ理由を教えてください。
5. 「ブレ・アイアシスタント」に今後欲しい機能があったら教えてください。

ご協力ありがとうございました。



岩手大学
大学教育総合センター
年次報告 2005-2006

平成 19 年 7 月 25 日 発行

●編集・発行

岩手大学 大学教育総合センター
岩手県盛岡市上田3丁目18-34

●印刷・製本

杜陵高速印刷株式会社

